



# 平等で平和な美しい社会をつくるために

—国際女性建築家会議 日本支部 UIFA JAPON 25周年記念誌—

Towards a Society with "Equality" "Peace" and "Beauty"  
 Union International des Femmes Architectes Japon 25th Anniversary Issue



2018年9月  
 UIFA JAPON



# 平等で平和な美しい社会を つくるために

—国際女性建築家会議日本支部 UIFA JAPON25 周年記念誌—

Towards a Society with "Equality" "Peace" and "Beautifulness"

—Union Internationale des Femmes Architectes Japon 25th Anniversary Issue—



# UIFA JAPON 25 周年お祝いの言葉



## Solange d'Herbez de la Tour

President of UIFA

ソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥール

UIFA 会長

As founding President of the International Union of Women Architects I would particularly like to thank the leaders and members of UIFA Japon for their faithful and valuable collaboration.

I wish a happy and prosperous long life to UIFA Japon during which it can continue to bring the flaming torch of our union worldwide.

国際女性建築家会議の創設者として、特に UIFA JAPON を指導してきた方々と会員が、誠実で有益な協力をしてくれたことに感謝したいと思います。

私は UIFA JAPON の幸せで豊かな継続を望んでおり、それは私たちの世界に広がる UIFA のトーチを燃やし続けることを可能にするでしょう。



# Greetings

## Donna Dunay

FAIA, DPACSA  
G. Truman Ward Professor of Architecture  
Chair, International Archive of Women in Architecture  
School of Architecture + Design Virginia Tech



ドナ・デュネイ

全米建築家協会名誉会員  
IAWA 委員長、ヴァージニア工科大学 GTW 教授

It is wonderful to celebrate UIFA Japon's 25th Anniversary with many important remembrances of this energetic group of women architects from across Japan!

As chair of the International Archive of Women in Architecture, I came to know UIFA Japon through Nobuko Nakahara, UIFA Japon President, an IAWA Board Advisor who was succeeded by Junko Matsukawa.

The energy of UIFA Japon brings the memories of a life time with the 12th UIFA Congress Tokyo, 1998 and Nobuko Nakahara performing the tea ceremony service for all delegates!

And more: the UIFA Japon/IAWA exhibition "Pioneering Women in Architecture" at the AIJ and UIA Congress in Tokyo, 2011; the Iwaizumi Town Exhibitions, celebrating town life after the great earthquake, now preserved in the IAWA at Virginia Tech; UIFA Japon's enthusiastic participation in the 18th UIFA Congress, 2015, hosted by the IAWA in Washington, DC and Blacksburg; it continues....

UIFA Japon is unique. UIFA Japon's creativity generating programs for colleagues and cultures at home and world wide is a remarkable accomplishment. UIFA Japon's tremendous success bringing to light the full range of the good works of women in architecture is a rare gift and model, clearly laudatory!

Congratulations to UIFA Japon!

日本全国に広がる、女性建築家の活気に満ちたグループとの大切な思い出と共に、UIFA JAPON の創立 25 周年を心からお祝いいたします。

建築における女性国際アーカイブの委員長として、私が UIFA JAPON を知ったのは、UIFA JAPON の代表であり、IAWA アドバイザーである中原暢子(後任は松川淳子)を通してでした。

UIFA JAPON の情熱により、1998 年、第 12 回 UIFA 世界大会の東京開催が実現しました。中原暢子の参加者すべてへのお茶のもてなしは、生涯忘れられない思い出です。

また、2011 年建築会館及び UIA2011 東京大会での UIFA JAPON / IAWA による「女性建築家のパイオニア」展、ヴァージニア工科大学 IAWA に現在保存された大震災後の町の暮らしを伝える「岩泉町のいま」展、2015 ワシントン DC およびブラックスバーグで開催された IAWA 主催の第 18 回 UIFA 大会へ参加された UIFA JAPON の皆様の熱意など…思い出は尽きません。

UIFA JAPON は特別な存在です。日本のみならず世界中の仲間、文化のための活動を生み出す、その高い創造性で、目覚ましい成果を収めています。

建築分野における女性の優れた業績に幅広く光をあてた UIFA JAPON の素晴らしい成功は、私たちへの稀有な贈り物、お手本であり、間違いなく称賛にあたいするものです!

UIFA JAPON おめでとうございます!



UIFA JAPON 25 周年お祝いの言葉 Greetings	UIFA 会長 ソランジュ・デルベッツ・ド・ラ・トゥール	2
お祝いの言葉 Greetings	IAWA 委員長 ドナ・デュネイ	3
発刊にあたって	UIFA JAPON 会長 (2016-2018) 稲垣弘子	11
Remarks on the Publication of the 25th Anniversary Issue		
25 周年にあたって	UIFA JAPON 名誉会長 小川信子	12
Remarks on UIFA JAPON's 25th Anniversary		
力を生かして時代の要請に応えよう—UIFA JAPON の 25 年	UIFA JAPON 相談役 松川淳子	13
Responding to the Needs of Times with Our Strength - UIFA JAPON's 25-Year History		
25 周年にあたって	UIFA JAPON 相談役 正宗量子	13
Remarks on UIFA JAPON's 25th Anniversary		
2 年間副会長を務めて—未来に繋げる場づくり—	UIFA JAPON 副会長 (2016-2018) 井出幸子	14
2 years since I Assumed the Position of Vice-President - To Create Arenas for the Future		
副会長として—女性の仕事を掘り起こす	UIFA JAPON 副会長 (2016-2018) 岩井紘子	14
Message from Vice-President - Cultivating Works for Women		

## 1 章 UIFA JAPON 前史 1 UIFA JAPON のルーツ ..... 15

### Chapter I Prehistory 1 - UIFA JAPON's Roots

【解説】 UIFA JAPON のルーツをたどる—女性建築家のパイオニアと PODOKO	中島明子	16
Tracing UIFA JAPON's Roots - Pioneering Women in Architecture and PODOKO		
PODOKO の誕生から UIFA へ	小川信子	17
日本の女性建築家のパイオニアと PODOKO	吉田あこ	18
PODOKO は育てて UIFA へ翔ぶ	白井正子	19
PODOKO と UIFA と女性建築家	白井正子	20

## 2 章 UIFA JAPON 前史 2 UIFA 設立と世界大会への参加 ..... 21

### Chapter II Prehistory 2 - Foundation of UIFA and Attendance at UIFA Congresses

【解説】 1963 年 UIFA 設立と世界大会への参加	白井正子	22
Foundation of UIFA in 1963 and Attendance at UIFA Congresses		
1963 年第 1 回 UIFA 世界大会パリ (フランス) 「第 1 回女流建築家国際会議の報告」 1 (中原暢子)		23
1963 年第 1 回 UIFA 世界大会パリ (フランス) 「第 1 回女流建築家国際会議の報告」 2 (草野智恵子)		25
1976 年第 4 回 UIFA 世界大会ラムサール (イラン) ファラ王妃の開会宣言	大高真紀子	26
1976 年第 4 回 UIFA 世界大会ラムサール (イラン) ラムサール宮殿での会議と砂漠の集落	白井正子	26
1978 年 UIFA パリ展覧会のこと	山田規矩子	27
1979 年第 5 回 UIFA 世界大会シアトル (USA) 思い出のシアトルコンGRES	(船津貴子)	28
1983 年第 6 回 UIFA 世界大会パリ (フランス) 「幼児施設と女性建築家の活動」	吉田あこ	28
1983 年第 6 回 UIFA 世界大会パリ (フランス) 「子どものための建築と環境」をテーマに	松川淳子	29
1984 年第 7 回 UIFA 世界大会ベルリン (西ドイツ) 住まいと住環境	山田規矩子	30
1988 年第 8 回 UIFA 世界大会ワシントン D.C. (USA) 充実した 4 日間	宮崎玲子	30
1988 年第 8 回 UIFA 世界大会ワシントン D.C. (USA) 記念すべきワシントン D.C. の大会	吉田洋子	31
1991 年第 9 回 UIFA 世界大会コペンハーゲン (デンマーク) アンデルセンの国で	松川淳子	31
UIFA 会長ド・ラ・トゥールさんとの出逢い	藤田淑子	32

## 3 章 UIFA JAPON の設立 ..... 33

### Chapter III Foundation of UIFA JAPON

#### 【解説】 UIFA JAPON の立ち上げ

—1992 年 6 月 13 日設立から 1993 年 6 月 12 日第 1 回総会	松川淳子	34
Start-up of UIFA JAPON - From the foundation on June 13, 1992		
to the 1st UIFA JAPON General Meeting on June 12, 1993		

「志は高く、現実から目をそらさず」—1992年UIFA JAPONの設立と第1回総会	渡邊喜代美	35
子育てと仕事の両立を模索しながら—UIFA JAPONの設立	牛山美緒	35
日韓シンポジウム（東京）—UIFA JAPONの最初の国際交流事業	中島明子	36
韓日シンポジウム（ソウル）21世紀の居住文化—女性が主役	中島明子	37
韓日交流会に参加して—河回村（ハフェマウル）行と仮面—	正宗量子	37
日韓・韓日シンポジウム 日本と韓国で開催した交流シンポジウム	渡邊喜代美	38
<b>4章 1998年第12回世界大会（日本）開催から20周年まで</b> .....	<b>39</b>	
Chapter IV Period from the 12th UIFA Congress 1998 in Japan to the UIFA JAPON 20th Anniversary		
【解説】世界の友人たちを迎えて—1998年 第12回UIFA日本大会の開催	松川淳子	40
Welcoming Many Friends from All Over the World - The 12th UIFA Congress Hosted by UIFA JAPON		
第12回UIFA世界大会（日本）実行委員として	頼あゆみ	41
石川金治氏のご尽力—UIFA日本大会開催の恩人	石川彌榮子	41
清澄庭園での涼亭茶会と大正記念館でのフェアウェルパーティ	井出幸子	42
墨田ツアー 路地と路地尊 木造密集地帯の防災と墨東奇譚の世界	小池和子	42
世田谷ツアー 環境共生住宅と次大夫堀り公園民家園	林屋雅江	43
横浜ツアー 三溪園	福井綾子	43
鎌倉・三溪園ツアー 世界の仲間と共に過ごして	板東みさ子	44
横浜市民公開シンポジウム「すまいとまちのあるべき姿を市民とともに考える」	吉田洋子	45
京都・奈良・神戸ツアー 京都・神戸	小島久實	45
「おもてなし部会」の立ち上げ	正宗量子	46
グッズチーム—風呂敷のお土産とコングレスバッグ—	河原美津子	46
2002年UIFA JAPON10周年記念@伊勢・名古屋 UIFAの先輩から学んだこと	谷村留都	48
UIFA JAPON10周年記念 伊勢神宮参拝の記	正宗量子	49
2012年UIFA JAPON20周年記念事業 ド・ラ・トゥール氏と行く東北の被災地訪問	岸本裕子	49
UIFA JAPON20周年記念事業 写真で見るド・ラ・トゥール会長と行く東北被災地訪問の旅	岩井紘子	50
UIFA JAPON20周年記念事業 お茶目で元気なソランジュ	林屋雅江	51
UIFA JAPON20周年記念事業 日刊建設工業新聞に紹介	森田美紀	52
<b>5章 UIFA JAPONの定例活動</b> .....	<b>53</b>	
Chapter V UIFA JAPON's Regular Activities		
【解説】UIFA JAPONの定例活動	小池和子	54
UIFA JAPON'S Regular Activities		
年次総会と記念講演会	小池和子	55
UIFA JAPON25周年記念講演会〈妹島和世氏〉	林屋雅江	55
海外交流の会	小池和子	56
第56回海外交流の会 2012年9月8日 雨デモ風デモハウスと講演会	林屋雅江・矢賀部雅子	57
第63回海外交流の会 2015年7月4日 ライトの落水荘とユーソニアンハウス	加部千賀子	58
「この指とまれ！」	小池和子	58
「この指とまれ！」の活動のすすめ—①『邦久庵』訪問 ②土浦亀城・信子展の紹介	正宗量子	59
「この指とまれ！」歴史遺産〈軍艦島〉公開シンポジウム&展示会にあたって 問い続ける軍艦島	加部千賀子	60
NEWSLETTER	小池和子	61
広報：NEWSLETTER、パンフレット、広報・渉外委員会	渡邊喜代美	62
広報・NEWSLETTER等	飯田とわ	62
私にとってのNEWSLETTER編集	石川和代	63
ミニニュース	小池和子	64
事業委員会—素晴らしい講師の方々との出会い	小野全子	65
UIFA JAPONと事務局との縁—25年を振り返って	小池和子	65

<b>6章</b>	<b>UIFA 世界大会への参加—UIFA JAPONとして</b> .....	<b>67</b>
	Chapter VI Participation in UIFA Congresses as UIFA JAPON	
	【解説】UIFA 世界大会への参加—UIFA JAPONとして	石川彌榮子 …… 68
	Participation in UIFA Congresses as UIFA JAPON	
	1993年第10回UIFA世界大会 ケープタウン(南アフリカ) 喜望峰のまちで	松川淳子 …… 69
	1996年第11回UIFA世界大会 ブタペスト(ハンガリー) 1998年日本大会の実現を決めて	松川淳子 …… 69
	2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア)	
	ウィーンのプロモダンな建築 フンデルトヴァッサーハウス	栗山楊子 …… 70
	2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア) 夫婦で参加した大会	柳澤佐和子 …… 70
	2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア) —ウィーン世界大会の記憶	田中美恵子 …… 71
	2004年第14回UIFA世界大会 トゥールーズ(フランス)	
	—ヨーロッパの甚大な自然災害に接して—	稲垣弘子 …… 72
	2004年第14回UIFA世界大会 トゥールーズ(フランス)	
	—歴史と大人のセンス溢れるまち	谷村留都 …… 72
	2005年ド・ラ・トゥールさんの「勲章」	松川淳子 …… 73
	2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア)	
	世界の同好者と自己存在を見つめるルーマニアの旅	御船杏里 …… 73
	2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア) 大会と『東方への旅』	井出幸子 …… 74
	2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア)	
	ルーマニアのおみやげ 「しわとりクリーム」	森田美紀 …… 75
	2010年第16回UIFA世界大会 ソウル(韓国) 湖畔の看板に記されていた言葉	矢賀部雅子 …… 75
	2010年第16回UIFA世界大会 ソウル(韓国) 参加をきっかけに	薄井温子 …… 76
	2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル) 大会に参加して	岩井紘子 …… 76
	2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル) 壮大な草原と砂漠の国	近藤真記子 …… 77
	2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル) 大会に参加して	伊藤京子 …… 77
	2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル)	
	地球温暖化における女性建築家の役割	山本佳世子 …… 78
	2015年第18回UIFA世界大会ヴァージニア(USA)	
	「ヴァージニアスタイル」のやわらかな大会	中島明子 …… 79
	2015年第18回UIFA世界大会ヴァージニア(USA)	
	ヴァージニア工科大学とルーメンハウス	正宗量子 …… 79
<b>7章</b>	<b>国際女性建築家アーカイブ IAWA</b> .....	<b>81</b>
	Chapter VII IAWA International Archive of Women in Architecture (IAWA)	
	【解説】女性建築家のパイオニアたちの資料を集めて—IAWA(国際女性建築家アーカイブ)	松川淳子 …… 82
	Precious Data about the Pioneering Women in Architecture, Collected for IAWA Donation	.....
	ミルカ・チェルネヴァ・プリズナコフさんを偲んで	松川淳子 …… 83
	IAWA30周年の展示の思い出	宮本伸子 …… 83
	IAWAにおける「だれフォト展」	松川淳子 …… 84



<b>8章 UIFA JAPON の社会貢献—災害被災地支援</b> .....	<b>85</b>
Chapter VIII UIFA JAPON's Social Contributions - Support Activities to Areas Devastated by Natural Disasters	
【解説】 UIFA JAPON の社会貢献—自然災害被災地支援	松川淳子 ..... 86
UIFA JAPON's Social Contributions - Support Activities to Areas Devastated by Natural Disasters	
UIFA JAPON の災害被災地復興支援関係 MAP 2006-2018	森田美紀 ..... 87
阪神大震災に被災して	(日高たか子) ..... 88
<b>8・1 中越地震被災地への支援</b> .....	<b>89</b>
Support Activities to the Disaster-Area of the Niigata-Chuetsu Earthquake	
【解説】 中越地震被災地への支援	宮本伸子 ..... 89
Support Activities to the Disaster-Area of the Niigata-Chuetsu Earthquake	
中越・法末集落での住宅カルテづくり—いつまでも美しい法末を目指して—	安武敦子 ..... 90
法末の初釜に参加	板東みさ子 ..... 90
プランニング・エイドによる中越地震被災地への支援	大熊喜昌 ..... 91
中越地震被災地への支援—清水茂子さんへのインタビュー—	宮本伸子 ..... 91
<b>8・2 東日本大震災被災地等での支援活動</b> .....	<b>93</b>
Support Activities in the Disaster-Areas of the Great East Japan Earthquake, etc.	
【解説】 東日本大震災被災地等での支援活動	岩井紘子 ..... 93
Support Activities in the Disaster-Areas of the Great East Japan Earthquake, etc.	
東日本大震災被災地等での支援活動のはじまり	森田美紀 ..... 95
岩手県岩泉町「どこでもカフェ」	森田美紀 ..... 95
岩泉『どこでもカフェ』が教えてくれたこと	三戸美代子 ..... 96
岩泉「だれでもフォトグラフィ」①	北本美江子 ..... 96
岩泉「だれでもフォトグラフィ」②	橋本ゆかり ..... 97
岩泉町復興記録誌『明日の岩泉へ—東日本大震災岩泉町復興の記録』（全3巻）	
作成協力	青木裕美子 ..... 98
岩泉町を訪ねて	伊藤京子 ..... 98
福島県新地町での住宅相談	川口垂稀子 ..... 99
住宅相談@福島県新地町役場	近藤万記子 ..... 99
福島県新地町での住宅相談と住宅セミナー	薄井温子 ..... 100
福島県新地町での住宅相談に思う	上田壽子 ..... 101
福島県郡山・本宮にて	藤田淑子 ..... 101
岩手県大船渡にて	阿部えみ子 ..... 102
岩手県建築士会盛岡支部女性委員会と UIFA JAPON	小山田サナエ ..... 102
埼玉県加須市での支援—避難者に手作り和菓子を	稲垣弘子 ..... 103
伊豆大島復興支援—土石流被害の大島を訪れ	稲垣弘子 ..... 103
伊豆大島復興支援—「どこでもカフェ」の記憶	田中美恵子 ..... 104
首都防災ウィークにおける「防災カフェ」	森田美紀 ..... 104
<b>8・3 熊本地震被災地への支援</b> .....	<b>105</b>
Support Activities to the Disaster-Area of the Kumamoto Earthquake	
【解説】 熊本地震被災地への支援	稲垣弘子 ..... 105
Support Activities to the Disaster-Area of the Kumamoto Earthquake	
「住まいづくり相談カフェ」	井出幸子 ..... 106
住宅相談	柏原雪子 ..... 106
熊本地震での住宅相談を軸とした建築士としての活動—様々な方々の支援を受けて—	持田美沙子 ..... 107
UIFA JAPON 復興ハウス『高齢期のコンパクトな住宅の提案集』の作成にあたって	加部千賀子 ..... 109
UIFA JAPON 復興ハウスプラン作成	福井綾子 ..... 109
UIFA JAPON 復興ハウスプラン—高齢期をいきいきと暮らす住まいの提案	板東みさ子 ..... 110

<b>9 章 女性建築家の発掘・調査研究・展示</b> .....	<b>111</b>
Chapter IX Findings, Researches & Studies, and Exhibitions of Women in Architecture	
【解説】女性建築家の発掘・調査研究・展示	中島明子 …… 112
Findings, Research & Studies, and Exhibitions of Women in Architecture	
<b>9・1 女性建築家の過去・現在・未来を探る</b> .....	<b>113</b>
Past, Current and Future of Women in Architecture	
【解説】女性建築家の過去・現在・未来を探る	中島明子 …… 113
Past, Current and Future of Women in Architecture	
『すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら—』の発行	松川淳子 …… 114
女性建築家の戦後 50 年の到達点を探って—「女性と仕事の未来館	
—仕事と家庭の両立を支援する住まい・まちづくりに向けて—」展示	松川淳子 …… 114
女性建築家のパイオニア研究（住総研助成）	
「日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者」	中島明子 …… 115
<b>9・2 IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展</b> .....	<b>116</b>
IAWA 25th Anniversary Traveling Exhibition of Women in Architecture	
【解説】IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展	中島明子 …… 116
IAWA 25th Anniversary Traveling Exhibition of Women in Architecture	
IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展 神奈川	吉田洋子 …… 117
IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展 千代田	北本美江子 …… 117
IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展 埼玉	宮本伸子 …… 118
IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展 会場図	森田美紀 …… 118
<b>9・3 「女性建築家のキャリア形成とライフスタイル」国際調査研究</b> .....	<b>121</b>
International Research Study, "Career Development and Lifestyles of Women in Architecture"	
【解説】「女性建築家のキャリア形成とライフスタイル」国際調査研究	中島明子 …… 121
International Research Study, "Career Development and Lifestyles of Woman in Architecture"	
女性の就業状況の国際比較 まだまだ低い日本	小池和子 …… 122
キャリア形成とライフスタイルについてのデータ調査を担当して	宮本伸子 …… 122
キャリア形成とライフスタイル— 20 カ国のアンケート調査から見えるもの	稲垣弘子 …… 123
<b>10 章 さまざまな分野での受賞</b> .....	<b>125</b>
Chapter X Award Winning in a Wide Variety of Fields	
【解説】UIFA JAPON 会員たちの受賞	中島明子 …… 126
Prizes Given to UIFA JAPON Members	
2010 年日本建築学会教育賞（教育業績）	小川信子 …… 127
エイボン女性大賞受賞	小林純子 …… 127
A'Design Award 金賞（イタリア）/ AR AWARD（イギリス）	佐藤由紀子 …… 128
2017 年第 29 回住生活月間功労者表彰（国土交通大臣賞）の受賞	
—UIFA JAPON の活動成果が表彰されたと理解して	松川淳子 …… 128
UIFA JAPON 災害復興見守りチーム「環境共生活動賞」の受賞	森田美紀 …… 130
岩泉町だれでもフォトグラフィアチーム	
第 12 回日本都市計画家協会「優秀まちづくり賞」を受賞	稲垣弘子 …… 130

## 11章 UIFA JAPON と共に..... 131

Chapter XI Together with UIFA JAPON

【解説】 UIFA JAPON と共に	中島明子	..... 132
Together with UIFA JAPON		
米国に暮らして—私の仕事— これまでとこれから	上野真城子	..... 133
各地からの便り 「ながさき便り」の試み	平野啓子	..... 134
各地からの便り 記憶に残る家	杉原尚子	..... 134
各地からの便り 地形からみる名古屋の歴史と展望	谷村留都	..... 135
各地からの便り 建築素材の源流を知る、見る、活かす	川口亜稀子	..... 135
各地からの便り 建築を志した原点は吉野に	上田壽子	..... 136
各地からの便り 東日本大震災から7年が経過して思うこと	清本多恵子	..... 137
私と UIFA JAPON 千人茶会から被災地支援へ	佐藤由紀子	..... 137
「私の家族・住まい・社会」～明日の住まいを考える～	(草野智恵子)	..... 138
私と UIFA JAPON 日中共同研究と UIFA JAPON	吉野泰子	..... 138
私と UIFA JAPON 復興支援活動をとおして	井元美佐代	..... 139
私と UIFA JAPON 私の仕事	中村晃子	..... 139
私と UIFA JAPON ハンガリー大会でデビュー	柏原雪子	..... 140
私と UIFA JAPON UIFA JAPON に入会して	小林淑子	..... 140
造園という視座 コミュニティと緑	須永淑子	..... 141
視座を変えて 現代美術の世界から	細井眞子	..... 141
賛助会員として 楽しかった世界大会の記憶	土田 旭	..... 142
賛助会員として サポーター(賛助会員)というより.....	平野正秀	..... 143
賛助会員として 旅の道のみ	橋本ゆかり	..... 143
賛助会員として 私見：これからの UIFA JAPON 像	吉野涼二	..... 144

## UIFA JAPON 誌上座談会—会員としての今・そしてこれから— .....145

The 25th Issue Special Talk - Now and Future as UIFA JAPON Members

定行まり子 安武敦子 大崎友記子 鈴木(佐藤)敦子 神村真由美 井関まい子 御船杏里

## 未来へ

For the Future

UIFA JAPON25 周年記念誌編集委員会一同 ... 149

## 資料編..... 151

1 UIFA JAPON の前史と 25 年 1992 ~ 2017	.....152
2 UIFA JAPON 歴代役員	..... 155
3 総会・記念講演会	..... 157
4 海外交流の会	..... 159
5 この指とまれ	..... 164
6 UIFA JAPON NEWSLETTER	..... 166
7 UIFA 世界大会開催記録	..... 176

付記) 掲載した写真の大半は UIFA JAPON 会員によるものですが、撮影者名は全て省かせていただきました。

個人名、肩書きなどは、当時のままとしています。

カッコ内の執筆者は転載記事から引用したものです。





# 発刊にあたって

Remarks on the Publication of the 25th Anniversary Issue

UIFA JAPON 会長 (2016—2018) 稲垣弘子

President, UIFA JAPON INAGAKI Hiroko



国際女性建築家会議日本支部 (UIFA JAPON) は 1963 年に創設された UIFA の支部として、1992 年に設立された。1993 年 6 月に第 1 回総会を開催し、2017 年に 25 周年を迎えた。四半世紀が過ぎ、設立当初の UIFA JAPON を知らない世代の会員が多くなる中、これまでのあゆみを記録する必要があると考え、「国際女性建築家会議日本支部 25 周年記念誌」の発行を 2017 年度総会で決めた。

グループ活動の研究会に「25 周年記念誌作成グループ」を設け、項目建てから始め、会員全員に執筆頂く事を原則に、担当者選び、原稿依頼、回収、割り付け等を記念誌作成グループで行った。原稿依頼は会員のみならず、協力してくれた外部団体の方や、遠く海外の方にまでお願いすることになった。

創設当時は女性建築家への社会的認知度もまだ低く、その数も少ない中、UIFA への熱い思いが UIFA JAPON 設立に大きな力となったことと思う。UIFA 設立から、UIFA JAPON 設立までの約 30 年間、UIFA 設立時の第 1 回世界大会から日本の女性建築家が参加し、どのように関わってきたのか、日本支部設立への経緯、日本大会開催へのエネルギー、自然災害被災地支援の契機となったトゥールーズ大会、日本で次々に起った中越地震、東日本大震災、熊本地震への被災地支援、女性建築家の発見・調査研究・展示、国際調査等々記憶から記録へ残す必要がある。また、海外交流の会、NEWSLETTER、D'AUJOURD'HUI、この指とまれ、グループ活動などの定例活動が脈々と続いてきたのも会員の努力・協力の賜物である。

また、設立当初から、会議室の提供や書類保管など引き受けてくださった株生活構造研究所のご協力無くしては歩めず感謝に絶えない。

当時は振り返り、沢山の熱い思いが湧き出ると思うが、限られた字数の中で表現してもらうことにした。古い資料を紐解き、当時の様々な思いをまとめ、執筆くださった皆さま、まとめ上げた、25 周年記念誌作成グループの皆さまに感謝すると共に、この冊子が、UIFA JAPON のあゆみを理解し、更に未来に向けて、力強く踏み出す契機になれば幸いである。

We, Union Internationale des Femmes Architectes Japon (UIFA JAPON) was established in 1992 as a branch of L' Union Internationale des Femmes Architectes, which was founded in Paris in 1963. The first UIFA Japon General Meeting was held in June 1993, and its 25th anniversary was commemorated in 2017. The publication of the 25th Anniversary Issue was resolved in the occasion of UIFA Japon 2017 General Meeting. This is because we have strongly recognized the importance of keeping a record of the pioneer days of UIFA JAPON.

We have set up a task team for "the 25th Anniversary Issue" in a form of a study group, which is responsible for all the duties concerning the publication, such as determination of articles, appointment of the persons in charge, request of a manuscript writing, collection/layout of manuscripts, etc. In principle, we asked to submit writings to all of UIFA JAPON members, as well as people who belong to external organizations collaborated with us and outside Japan.

At the time of establishment, society's awareness of women's architects was also low as well as few number of woman professionals in the field of Japanese architecture.

We believe that the driving force to establish UIFA JAPON is the passion to UIFA. Then, there is a large number of things to be recorded; the fact that the Japanese woman architects attended at the UIFA 1st Congress immediately after its foundation and the information about how such women were involved in UIFA for almost 30 years from the foundation of UIFA to that of UIFA JAPON, the background of the establishment of UIFA JAPON, enthusiasm of the UIFA Congress in Japan, Toulouse UIFA Congress triggering aids to natural disaster areas, support activities to regions devastated by earthquakes occurred one after another in Niigata-Chuetsu, East Japan and Kumamoto regions, and studies, findings, domestic/international researches and exhibitions, etc. We have considered that efforts of UIFA JAPON members bore fruitful results of regular activities such as international exchange meetings, publication of NEWSLETTER/D'AUJOURD'HUI, "Kono yubi tomare" (Let's participate in!) initiative and group actions, etc.

Also, we must not forget strong cooperation of Laboratory for Innovators of Quality of Life, which has been offering us various conveniences such as provision of meeting rooms, storage of documents, etc. from the beginning of our establishment.

When looking back to those days, each member might come across a lot of feelings, but they were forced to write a manuscript to a certain extent due to limitation of space.

I would like to express my sincere gratitude to everyone who was involved in this project of the 25th Anniversary Issue, such as contributors of articles who spent time to check old documents and a group of the task team for the 25th Anniversary Issue, etc. I hope that this issue will not only deepen the understanding about what our UIFA JAPON has come along with, but also provide the opportunity to make a further progress towards our bright prospects.

# 25周年にあたって

Remarks on UIFA JAPON's 25th Anniversary



UIFA JAPON 名誉会長  
小川信子

UIFA JAPON 設立 25 周年にあたり、記念事業として、これまでの道程を振り返り、今後の目標を見つめようとしている。

第 2 次世界大戦後、日本の復興という大事業を前にし、今までの日本のあり方にも反省の色がみえ、女性の地位向上を目ざし、男女同権（社会的に）を目標に人々の気力を向上させた。その様な気運がみなぎった時、昭和 26 年に建築関係の仕事に従事しようと志す女性が大学を卒業した。男性の職場として確立していたところに、女性が社会的進出を求めたのである。

すでに、土浦信子、浜口ミホ、吉田文子氏が建築の世界で活躍しておられた。

第 2 世代として戦後歩み出した私達が戦後復興のいない手になろうと歩みはじめたが、社会の現実とのギャップを感じて、それぞれがなやみをかかえはじめていた。

この様な状態は、日本だけではないことを知り、フランスの建築家、ド・ラ・トゥールさんからの呼びかけに応じ、UIFA の第一回大会（フランスで開催）に、中原暢子、草野（小林）智恵子さんが参加されたのをはじめとして、UIFA 大会に、日本から代表が参加するようになり、世界の建築家と手を結び歩む意味の重要性を認識するに至った。

世界の動きをうけて、平成 4 年に日本支部を立ち上げた。世界の建築家と連携しながら、歩んで 25 年、様々の経験と日本大会、世界大会に参加して、内外の諸状況を知るにつれて、より深く、広く活動を重ねて来た。今まで継続して来たのは、皆様の努力と協力によるものであり、これを機会に、これまでの歩みを振り返り、次への歩みを深めるために、今回の企画は、重要なポイントとなる。“継続は力なり”と私は常に思い、若い世代に期待している。



## 力を生かして時代の要請に 応えよう—UIFA JAPONの25年

Responding to the Needs of Times  
with Our Strength  
- UIFA JAPON's 25-Year History

UIFA JAPON 相談役  
松川淳子



「もう四半世紀経ったのか」というのが正直な気持ちだ—25年の間にはそれなりに時期によってテーマがあった。設立から何年かの間、世界大会に参加しながらの海外の友人たちと交流を深めた時期、日本大会開催を軸に一気に国際的デビューを果たして、海外との交流はもちろんのこと、国内においてもその存在を公認された時期、それまでの蓄積を糧に、それを生かしながら自然災害の被災地支援に懸命になった時期。これは自然災害の発生が止む気配も見せない現在ももちろん続いているが、最近、この支援の中に、建築の専門家としての力を生かして貢献することを意識的に盛り込もうとしている。会長の個性も反映していることではあるが、なんといっても、UIFA JAPON が、集まって楽しむこともさることながら、その力を生かして時代の要請に応えようと努力してきた会員の力が大きい。

「女性が集まって団体をつくること」の意味は、相変わらず問われることも多い。伝統的に男性社会だった建築界で、日本では男性に交じってバリバリと働き、大きな現場や大きな賞を取る女性がどんどん出てきている最近である。会員のほとんどはそうした中で活躍しているが、だからといって、先人たちが切り拓いてきた分野を自分だけの力と錯覚することもないし、また、UIFA の会長、フランスのド・ラ・トゥールさんがいうように、「世界に目を向ければ女性というだけで教育さえ満足に受けられない国もある」ということも忘れてはいない。UIFA や UIFA JAPON の存在意味はますます大きいと思っている。

この25年に内外の心を許しあえる友人たちができ、彼女たちと情報交換をしながら切磋琢磨できていることもかけがえのない宝物である。支援やイベントで使う大荷物やたくさんの資料の置き場所となることを含めて、毎回の理事会の会場と事務局を引き受けるというわがまを許してくれた(株)生活構造研究所のメンバーたちの協力あっての25年だった。この場を借りて感謝したい。

## 25周年にあたって

Remarks on UIFA JAPON's 25th  
Anniversary

UIFA JAPON 相談役  
正宗量子



第1回UIFA JAPON 発会式に出席以来、早25年の月日が流れ、私の人生の四半世紀をUIFA JAPON と共に歩んできた今、建築を通じた幸せを感じ感慨無量だ。

日本女子大卒業後、母校の助手、先輩の事務所を経て私の建築への方向を定め、当時学び得なかった講義を東大の研究生として学んだ。自由化前の海外に叔父の秘書で同行16か国を廻った経験が、私を世界に目を開かせ『チャンスがあれば世界に目を』の言葉が私の琴線に響き続けた。UIFA 世界大会、夫の国際会議同行を含め多国に足を運んだ。特にUIFA 世界大会は、テーマに沿い国々の歴史や自然に育まれた人間の生を紡ぐ村や街、経済や思想が映した建築の今を体感し論じ合う魅力は抜群だ。海外に多くの友を得、建築技術や教育、行政の違い迄学ぶ事ができる。女性の視点で紐解く建築に興味の発端があった私が、お蔭で広い視野で建築に接し今日に到る迄設計の現役生活を続ける事ができた。

特筆すべきは『第12回UIFA 日本大会』だ。日本メンバーの底力を世界の同士に示すことが出来た。おもてなし部会を立ち上げ、日本の建築文化の良さと深さを示すあらゆる企画を立て大変な努力を重ねた事が走馬灯のように蘇る。官民を問わず仕事からみでも、一心不乱に多額の寄付を仰ぎ、勢いで皆が協力し資金作りに励んだ。その基盤が、UIFA の精神に継承されてきたと言っても過言ではない。日本の会員は、各人が有能且つ縁の下の力持ち的精神の持ち主で万事控えめ。豊かな実働集団なのである。

日本の女性建築家集団はPODOKOに発しフランスのド・ラ・トゥール氏が創設したUIFAへと参加出来たのは至極自然の流れで、我々にどれほど大きな男女共働の夢を齎した事だろうか。日本に定着し満25周年を迎えることに感謝し、更に参加者を増やし、より大きく発展して社会に貢献して欲しいものと考えている。

## 2年間副会長を務めて

—未来に繋げる場づくり

2 years since I assumed  
the position of Vice-President  
- To create arenas  
for the future

UIFA JAPON 副会長  
(2016—2018)  
井出幸子



UIFA ブダペスト（ハンガリー）大会を機に、UIFA JAPONに参画し、20年がたった。日本大会後、広報誌 NEWSLETTER を作成するスタッフに加わる。

その後の、ブカレスト（ルーマニア）大会、ソウル（韓国）大会、ヴァージニア（U.S.A.）大会と3回の国際大会に参加の機会を得た。歴代の大会に、会員たちが議長役を務め、プレゼンテーション、パネルセッションへ参加する姿に立ち会ってきた。

5年前、組織設計事務所を卒業した。役員会開催時間 6:00pm にはたどり着けることとなり、UIFA JAPON の役員会に参加することとなった。そして、3年後、稲垣会長の会長就任に伴い、そのサポート役を務める副の肩書きをいただいた。

永年、NEWSLETTER 編集に関わることで、今の時点の目を養い、仲間との貴重な関係を育ててきたことが、UIFA JAPON に参画し続けてきた大きな意味だったこともあり、広報担当兼務とさせていただいた。

副会長の業務とは、役員会の招集、議事進行が主な仕事である。それと同時に、会が目指す女性の建築家として、国際大会へ参画することのできる組織としての自負と、日本にあって、緩やかにつながる女性建築家のサロンという今までの機能を、無理なく未来につなげていく場づくりの細々としたサポートかと思われる。UIFA JAPON が特に様々なキャリアを持つ会員発案の試みを、なんらかのサポートをし続けることのできる組織であって欲しいと願ってきた。

現業との兼ね合いの中で、出来得る範囲ということで、務めさせていただいた2年間だった。そして今、役員が改選され、新たな会長・副会長のもと、次の UIFA JAPON が動き出した。

## 副会長として

—女性の仕事を掘り起こす

Message from Vice-President  
- Cultivating works for women

UIFA JAPON 副会長  
(2016—2018)  
岩井紘子



「女は花嫁前の腰掛に過ぎない」の同性著名建築家の言葉に、何時か自分が女性建築家を育ててみせるの一心で女性建築士として励んできた約半世紀。‘私の様な者に将来が掛かる住まいの設計を託されるとは’の有難さに只々精一杯の己を捧げる、そんなスタンスだけで生きて来た自分。

が、日本が誇る一流女性建築家集団 UIFA JAPON のトップを支える副会長とは。とても烏澁がましく気恥ずかしい思いで一杯だ。生来ボランティア精神が強く、人様に喜ばれるのなら、私なんかで良いものなら、と出来る範囲でお引き受けする性分がアダになったのかも。が、UIFA という団体は、凄いキャリアを持った尊敬に値するこれぞ女性建築家という方々の組織である。諸先輩はもとより同輩、後輩とも憧れと感激できる刺激的なメンバーの組織である。やるとなったら結局は見事にやりこなすのにはいつも脱帽。男女共同参画の最たる職種である女性建築士。

元来、建築は女性に適した最高の仕事と感じている自分は、UIFA こそ若い女性に憧夢を抱かせる広告塔ではないかと思う。

また、組織事務所であれ個人事務所であれ設計事務所には必ず女性スタッフがいる。この表に出て来ない有能な女性スタッフの顔がみえる団体にならないものかとも思ったりしている。イベント時学生さんに声掛けするのも大事であるが、建築関連諸団体事務局を通して、これら設計関係会社の女性スタッフさんへというお知らせを流して頂く手立てを何とか確立し、こんな処に女性建築士がという掘り起し活動をやるのも一策。最高の会長ともう一方の有能な副会長に囲まれ、地方会員としてのサブを担当させていただき、どっぷり UIFA JAPON に浸った2年間だった。大幅に若返りした新体制執行部の皆さんの活躍を期待している。業界は何と言ってもまだまだ男社会。手を携えて頑張っていきたい。

# 1章

U-I-F-A J-A-P-P-O-N 前史 1

U-I-F-A J-A-P-P-O-N の ルーツ

Chapter 1

Prehistory 1 - UIFA JAPON's Roots



1958年 林・山田・中原設計同人設立  
(写真は左から山田・林・中原)



# UIFA JAPON のルーツをたどる —女性建築家のパイオニアと PODOKO—

Tracing UIFA JAPON's Roots - Pioneering Women in Architecture and PODOKO

## 【解説】

UIFA JAPON 名誉会長の小川信子先生に UIFA JAPON 25 周年記念誌に書いて頂くお願いをしたところ、「まだ 25 周年？」と首をかしげられた。私にしてみればよくぞ四半世紀も経ったものだと感心していたのだが、小川先生からすれば違っていた。

小川先生は、日本女子大学家政学部生活芸術科住居学専攻（後の住居学科）の新制 2 回生で 1952 年卒業。1 回生の林雅子、山田初江さんらの次の学年、田中美恵子さん、峯成子さんらと同期である。新制大学制度の下で共学の建築系大学から初の女性卒業生が出たのは 1953 年で、東京芸術大学美術部建築学科で 2 人の女性が卒業しているから、小川先生たちの方が一足早かった。女子大学家政系分野で建築技術者を輩出するというのは、他の国と比べて異なった道筋である。小川先生はそのパイオニアであった。

建築分野で働く女性たちが中心となり、建築系の学生や大学院生にも働きかけて、日本最初の女性建築家の組織 PODOKO を設立した。1953 年 9 月 14 日の発会式には 29 人が集まった。戦後間もない時期にあって、建築分野の技術者たちによる様々な民主的潮流の活動があり、その一つが建築界に働く女性たちの組織 PODOKO であった。エスペラント語の「考える、話し合う、そして創る」の頭文字をとって名付けられた PODOKO には、東京を中心とする女性が集まり、1956 年には 70 余人になっていた。ここでは単に交流や情報交換にとどまらず、執筆活動や当時の労働環境の改善のために実態調査や勉強会を開催したりした。

1960 年代になると、1963 年にフランスで国際女性建築家会議（UIFA）が設立され、PODOKO のメンバーの多くが参加するようになった。1963 年の第 1 回世界大会がパリで開催され、UIFA JAPON 創立時の会長である中原暢子他、小林（草野）智恵子、林宣子が参加した。

UIFA の世界大会は 3～4 年に 1 回開かれ、日本からは、第 2 回と 3 回大会を除き、2015 年の第 18 回のヴァージニア（USA）大会まで、UIFA JAPON の多くの会員が参加してきた。

冒頭の小川先生の「まだ 25 年？」という問いは、PODOKO にかかわった女性たちが UIFA に参加し、1992 年に UIFA JAPON が設立されるまで、引き続き交流を深めていた時間は長く、このことから発せられたものと思われる。

このように、UIFA JAPON のルーツは日本における PODOKO に源流があり、国際的な UIFA という大きな流れに沿ってきたといえよう。今、そうした PODOKO 草創期からかかわってきたメンバーから、それを経験しないメンバーに世代交代をする時期にきている。したがってここで改めて UIFA JAPON のルーツを探り、記憶に刻んでおくことは、日本の女性建築家の歴史と、今後の UIFA JAPON の歩みにとって大事な作業であろう。

（中島明子）

# PODOKOの誕生からUIFAへ

From the Birth of PODOKO to UIFA

## 1. PODOKO 誕生

女性建築技術者の集まりである PODOKO (ポドコ) が 1953 年 9 月 14 日に発足し、その後、1950 年代から 60 年代にかけて活動をしていた。その発足時期は第二次世界大戦の終戦から 8 年後であった。

日本は、1945 年 8 月 15 日に敗戦を迎え、戦後は、従来までの価値観を変えるという変革期を迎え、特に女性の地位の向上を目指し、男性と社会的に同等の権利を有することになった。1946 年 11 月の日本国憲法が公布され、基本的人権が女性に認められた。

社会の変化の中で、教育改革の機運が高まり、建築関係の学習を修得した女性が、卒業後、設計事務所、施工会社、官庁、大学研究室で働くことが出来るようになった。

しかし、未経験の分野でのことで、戸惑いも大きかった。焦土と化した東京の中で、男性も同様な思いを持っていたのであろう。

建築事務所に勤務していた人々が、事務所懇談会を作り、敗戦日本の国土の再建について考えようと、研究会を立ち上げた。この会に 2 人の女性が参加していた。岸本(近藤)洋子と船引(田中)温子の 2 人で、当時の各事務所を調べ、呼びかけ人となった。

岸本さんが働いていた、銀座数寄屋橋にあった吉川事務所(都市建築研究所)に、当時 18 才から 26 才位までの女性 29 名が集まり、話し合いの会を持つことができた。

会を立ち上げるについて、先輩である浜口ミホ先生に相談し、女性でグループを作ることに賛成されたので、具体化することになった。

まず、会名については“皆で話し合い”“考えをまとめて”“創造する”と言う意味を盛り込みたいと一致した。そして、当時第三の言葉として研究している人々がいて、エスペラント語(ESPERANTO:ポーランドでZAMENHOFが提唱)を採用することにした。

考える(PENSADO)話し合う(DISKUTADO)創造する(KREADO)の3語の頭文字を使って、PODOKOと命名した(エスペラント語は子音は単独では意味を持たず、母音を付ける規則になっているとのことである)。

PODOKOの運営組織については、会長を置かず委員

制度にして、民主的に運営しようと考え次の担当者を決定した。

企画部	林(山田)雅子 市川恵美子
渉外部	中原暢子
運営部	岸本(近藤)洋子 小川信子
編集責任者	奥村(戸塚)まこと
会計部	船引(田中)温子 松田和枝

活動としては、次のような点から、始めることにした。

1. 会員の実態をお互いに理解する。
2. 勉強会、見学会を開いて現状から学ぶ。
3. モダンリビングの渡辺曙氏から依頼されて、“女性からつくる住環境”についての共同作業と原稿作成をする。
4. 対外的な活動をする。

これらについて具体的に対応することになった。

1955 年 3 月東ベルリンで第 2 回建築インター大会が開催された。協力の要請があり、PODOKO から船越輝子さんを派遣した。この会議に出席したことは日本の女性建築家が海外の代表と交流した最初であった。

PODOKO は、UIFA JAPON 発足当時まで続いたと思われるが、第一世代は、もう女性のみでグループ活動をする時期は終わりにした方がよいと考え始めていた。

## 2. PODOKO から UIFA へ

1963 年パリで第 1 回国際婦人建築家大会が開催され



戦後復興期の明るい芽生えとして「PODOKO」を紹介する朝日新聞の記事(昭和 29 年 1 月 5 日)

た。Union Internationale des Femmes Architectes (UIFA) の船出である。

日本からは中原暢子と小林智恵子が PODOKO の代表として参加し、フランスの代表ド・ラ・トゥールさんと逢うことになる。

中原はこの機会にパリに滞在して、交流を深めることになった。

この機会を得るにいたる偶然のエピソードを記しておく……実は建築家山田水城氏（当時法政大学教授）は1960年のローマオリンピックに選手として出場し、選手として出場していたソランジュさんと出会ったという。その折に日本の女性建築家の現状を尋ねられたとこのことを、後日、中原と小川が山田氏と逢った時に伺い、PODOKO の活動を話す機会があった。山田氏がソランジュさんに PODOKO のことを伝えたところ、非常に驚いたと同時に感激されたとの事であった。そして、交流の機会を望まれたとの事である。

多分、UIFA の第一回パリ大会に招聘されることに関連しているのではないかと考えている。この出会いが UIFA JAPON の歴史の始まりと言えるのではないかとと思う。

UIFA JAPON の前史も含めて皆で育ててきた活動が今後とも継続、発展することを心から願っている。

(小川信子)

## 日本の女性建築家のパイオニアと PODOKO

### Pioneering Japanese Women in Architecture and PODOKO

女性建築家の集まり PODOKO の発足は、1953年9月14日（建築研究団体協議会編『建築をみんなで』1956年）。当時門戸が開かれた女性の建築分野での処遇が紹介され、印象的なのは建設省建築研究所での体験事例である。さて、PODOKO の名称由来は、「考

える、話し合う、創る」を意味する「PENSADO・DISKUTADO・KREADO(ペンサード、ディスクダード、クレアード)」のエスペラント語の頭文字で、呼び名が愛らしい。

1954年、京大建築学生の日下（吉田）あここに、PODOKO のオルグのために中原暢子が来た。当時中原は東大池辺研の研究生。『新建築』に作品発表、茶道の心得、好印象。私は忽ち 意気投合！ 翌春休み、私は上京し PODOKO の集会に出席し、そこで奥村まこと（芸大学生）、山田（林）雅子（東工大清家研究生）、吉田（松本）安子（早大生）に会い、大変啓発された。そして、職場訪問、相賀貴美子（鈴木：『国際建築』編集）、福田（菅原）文子（設計事務所）、吉沢照子（東大平山研技官）に会い、大変鼓舞された。1955年に PODOKO から建築インター大会に船越（鳥羽）てるが日本代表として渡欧。この京都報告会で私達親密に。4年後1959年に私が日本代表に推され渡欧した。準国賓待遇で種々重責であった。続いて、フランスの UIFA 創設・組織化のため先駆者 PODOKO に出席要請があり、中原暢子が推されパリへ。

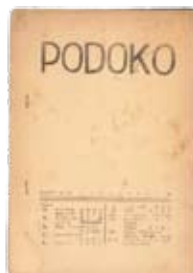
UIFA の特徴は東西の壁を越え、東欧圏が多数。発表も意欲的。また、各国の高官もさりげなく交流。例えばイラン王妃（元パリソルボンヌ大学生）。更に親密を深めると、飯島静江はインド代表に帰国途中デリーの邸宅に招待された。“門番が宝石を付けない女性は通さないから”と宝石多数を付けて無事通過。帰宅時返却しようとする“いいの”と鷹揚に！夢幻！また、吉田は国連 ISO 会議に日本代表として出席。プラグ会場でチェコ高官のヘレナと同席（UIFA 会員）。ご自宅で晩さんを、更に翌日から国内視察旅行に同乗。夢心地！

一方、PODOKO 会員は各自の専門性を一層磨き、ブダペスト HB 国際会議では論文発表者に菅原、吉沢、吉田の PODOKO 顔合わせ。やがて、菅原は日本建築学会論文賞を、吉田も内閣総理大臣表彰を頂く等、PODOKO 会員の活躍はまこと百花繚乱となる！

(吉田あこ)



建築研究団体協議会編  
『建築をみんなで』表紙  
(1956年発行)



機関誌『PODOKO』左より創刊号、2号、3号



論文発表後：菅原文子、  
吉沢照子、吉田あこ  
於ブダペスト工科大学



## PODOKO は育って UIFA へ翔ぶ

PODOKO, Grown up to UIFA

PODOKO に私が入ったのは 1962~3 年頃と思うので 55 年以上前に遡る。PODOKO は既に存在していた。田中温子さん（呼びかけ人：集まりでまとめ役を担っていた）に誘われて PODOKO へ入ったのは活動では内田祥哉建築研究室の勉強会に出席した。内田先生を囲んで若手の建築研究者が集まって始められた会は、これからの住宅建築に何が大切か、社会性も問われた総合的研究活動の意義は極めて大きかったと思う。

私が PODOKO を中原さんから引継いだ頃には、PODOKO は女性建築者の集まりとして未来に続くという考えが双方にあった。1949（昭和 24）年に新制度が発足、男女共学に進学した卒業生が社会へ進出する。女性建築者の受入れに未だ消極的で軋轢もあったが、日本の社会情勢は高度経済成長期に入った頃は、就職した職場で健闘すれば技術は発揮できるチャンスが到来した時であった。

60 年安保は解らないが、70 年安保に PODOKO は

どう向き合ったか。PODOKO の旗を作り参加するか否か話題になった。社会に活動する建築組織は幾つかあったが何処とも連携していなかった。安保に関心はあるが各個人で参加するかは決めることになった。

第 2 回（1969 年）と第 3 回（1972 年）の UIFA 大会に日本から参加者がいなかったのは、仕事に専念した時期であったから。第 4 回（1976 年）UIFA 大会では、イラン王妃から招待状が届いた中原さんは、英文の手紙を見せて、今度は行きたいと熱っぽく語った。PODOKO の活動は低迷期に入っていたが入会員を迎えている。解散風が漂うとも直感として先見は明るかった。

万葉集の古歌に、「あかねさす紫野行き標野行き野原は見ずや君が袖振る」（巻一、二十）がある。ご存知と思うが、額田王が大海人にむかい、対詠的に懇<sup>うづた</sup>へしていると解されている歌で、表現を比喻に替える。額田王は PODOKO、相手の大海人に呼び掛ける。茜色の空に日が昇る（黎明期から脱して未来への進路は開く）。広野原に立つ大海人は、女性建築者が育って合流を目指す UIFA 会員であり、フランスから呼びかける UIFA 本部でもある。PODOKO が解散すれば受皿はなくなり、日本の UIFA も消滅したであろう。低迷期を耐えて時期の到来するのを待とう。PODOKO の存続はイラン大会への参加を決めて世界に飛翔する。（白井正子）



1976 年第 4 回 UIFA 世界大会 ラムサール（イラン）にて左ファル王妃と握手する会員



1976 年第 4 回 UIFA 世界大会 ラムサール（イラン）談笑する会員たち

# PODOKO と UIFA と 女性建築家

PODOKO, UIFA and Women in Architecture

UIFA イラン大会参加者は、PODOKO に入っていないに拘ることなく、広く海外との国際交流を目指した女性建築家の集まりである。

UIFA 大会への参加は PODOKO の組織を母体としているが、イラン大会に参加した人達が帰国後、設計同人事務所に集まり、フランス本部へ UIFA 会員費を納める。今後の UIFA 大会に向けて日本は継続する意思を表している。

UIFA から UIFA JAPON 日本支部設立への体制創りには、暫くの準備期間が続く。

PODOKO のメンバーだった鳥羽てるは、女性建築家

としてソーラーハウスを設計して活躍し、かつ住まいと暮らし方に主婦の立場から視るアイデアを一般住宅誌に連載する。奥村まことは都市計画に関心を注ぐ。道路斜線制限による市街地の住宅建築から都市景観美に影響を及ぼす基準法の改正に尽力する。吉田（松本）安子は勤務先の事務所で、当時は少なかった船舶の室内装飾を女性建築者として手掛けている。

建築分野で活躍している女性の地道な歩みも評価したい。UIFA に入会する以前から活躍する人達が建築専門誌に登場した記憶を思い出す。住宅設計作品を発表した松川淳子と藤井綾子の作品が掲載された建築雑誌は記憶に刻み込まれている。他の UIFA 会員も活躍しておられることと思う。私は「県下建築コンクール作品」に参加することに意義あり、と住宅設計部門に応募（自家）して優秀賞に入った。廃材の間伐材を加工してパネル化した用材の使用を実験的に試みた。 (白井正子)



毎日新聞（夕刊）1955年11月27日付



# 2章

U I F A J A P P O N 前史 2

## U I F A 設立と世界大会への参加

Chapter II

Prehistory 2

Foundation of UIFA and Attendance at UIFA Congresses



角砂糖を使って模型を作り、説明している。第1回UIFA世界大会 パリにて

# 1963年UIFA設立と世界大会への参加

Foundation of UIFA in 1963 and Attendance at UIFA Congresses

## 〔解説〕

パリで1963年UIFA第1回大会が開催された。私がPODOKOに入り、間もない頃である。送別会が行われ、フランスの香水は貴重品扱い、饞別に選んで贈呈する。欧州の社交場へ登場するからには香水（良質の品性）をつけるのは女性建築家としての身嗜みに着眼したのかも。日本からPODOKO代表が活躍する気配りも必要なこと、声援を込めて送り出した。

中原暢子さんから今までのPODOKO資料を預かり、引継いだのは1971年頃と思う。1953年に設立「考える、話し合う、そして創る」PODOKOの精神は育ったと考えられてきた頃に、PODOKOは継続する話（中原さんから）に賛同して引き受けた。社会情勢は、建築系学科卒業生に占める女子学生数が1963年の理工学部を拡充するにつれて増加の傾向にあった。PODOKOの存在が建築学科卒業を志す女子学生に知られて建築系出身から入会を希望する新人が現れる。

PODOKO会員の中からは当初の役目が終わったのだから解散するといった話が伝わる。社会は建築関連業界へ就職し、男女差別を受けずに仕事へ進出する女性が現れる。PODOKOが解散するという噂話が流れたのであろう。新しい女性建築者の会をつくる人々から、PODOKOは私達が引継ぐから今迄の資料を渡してと熱心な交渉がくる。新しく会を創るなら基本の目標を掲げて出発すること。賛同はしても資料は渡していない。この機会にPODOKOの資料は代表である中原さんへ戻すことにして、全て中原さんへ返却済である。活動してPODOKOの精神が育ったと考える過程を超えると低迷の時期に入っていく。

PODOKOが解散するか続けるかの時期に引継ぐと、その頃に入会者が増えている。若手の新人達が希望を寄せて集まる時期を迎えて何もしないのでは意味がないと思い、建築業界では建材製品の量産化が目立って量産制度を視察に旧ソ連と欧州へ出張した某企業メーカーの話を聞くと勉強会を開いた。出張した人にPODOKO新入会者向けの最新情報PC部材の量産化による団地の報告会・解説をお願いする。未来への建築指向を試みた一つを紹介した。

UIFA世界大会第2回はモナコで、第3回はブカレスト（ルーマニア）で開催されたが、日本から出席の希望者がいないので大会参加は断念した。この時期は林・山田・中原設計同人にとって、女性建築家として建築界に登場し、住宅設計への意欲を発揮した作品を発表している。木造住宅作品に従来の木架構では対応しきれない悩みを中原さんから相談されて、それを機会に設計同人に協力することになった。この時期に次の大会はファラ王妃の後援によりイランで第4回を開催する知らせが届いた。

大会開催の時期は1976年10月11日に到着して同月27日運行。現地の観光を含んで会議参加の案内である。出欠は7月28日迄、スピーチは7月15日迄に知らせて原稿は8月10日迄に送る。作品発表の申込みは30日迄、展示品は8月20日迄に制作品がイランに届くこと。イランから発送文は6月26日の日付。参加の希望者を募り、7月初旬には参加人数を集めなければならない。PODOKO会員へは中原さんから連絡、林雅子さんは日本女子大で授業の場から参加を呼びかけた。山田初江さんは相談を。私は建築関係の知人に大会の案内を伝えて脈が有りそうな人は中原さんから説得に出る作戦を展開した。短期日の纏めは爆発的に動かざるを得なかったのだが。イラン大会への参加者はPODOKOからの声かけに参加した人々が合流している。参加者の皆様は大会に参加してUIFAからUIFA JAPONの設立への道に活躍された人達である。

25周年記念誌を発行するに当たって思い出す人物は、UIFA第1回大会が行われるとフランスからの問合せに対応してPODOKOを紹介してくださった建築家協会（JIA）理事の故藤井正一郎氏である。イラン大会についてPRをお願いした。若手への勉強会にも応援して頂いた。PODOKOからスタートしてUIFA JAPONの設立へ、日本支部25周年を迎えてここまで来たことをお知らせしたかった人である。

第5回はシアトルで開催。イラン大会に参加して海外の女性建築家と交流し、UIFAを続ける意思と今後は日本でも開催したい話題も芽生えた。パリ、ベルリン、ワシントン、コペンハーゲンへと続き、UIFA世界大会へ参加者を送り出している。

（白井正子）

## 「第1回女流建築家国際会議の報告」1

The 1st UIFA Congress 1963 in Paris, France - Report on the 1st UIFA Congress

UIFA 第1回世界大会が1963年にパリで開催された。この記念すべき大会には日本から中原暢子、小林(草野)智恵子が参加した。フランスに遊学中であった林宣子も参加したが、現地での参加ということで日本からの出席は2名があがっている。この会議の様子が日本建築家協会の「JIA ニュース」に中原がかなり詳細に書いており、貴重な記録として転載しておく。当時の熱気が伝わってくると共に、各国の女性建築家の状況等もわかり興味深い。

「JIA ニュース」1964年4月15日号より転載

### 第1回女流建築家国際会議の報告

中原 暢子

主催：フランス女流建築家連盟 (UFFA)

後援：イラン国皇后陛下

マズィオル建設相 (仏)

マルロオ文化相 (仏)

デュヴォー建築家協会会長 (仏)

期間：1963年6月26日～7月3日

場所：フランス・パリ

参加国：ドイツ・ベルギー・ブルガリア・カナダ・デンマーク・スコットランド・フィンランド・英国・ギリシア・オランダ・ハンガリア・イラン・イスラエル・日本・ポーランド・スイス・チェコスロバキア・トルコ・ユーゴスラヴィア・フランス (以上出席)、オーストリア・中国・キューバ・スペイン・イタリア・ルクセンブルグ・ノールウェー・ポルトガル・フィリピン・スエーデン・アメリカ・ソ連・ウルグワイ・ヴェトナム

参加人員：約80名。日本からは、中原暢子、小林智恵子出席(平均年齢40才位、最年長者75才、最年少者20才)

事務局：議長 S・デルベ・ド・ラ・トゥール (仏)

委員長 S・ヴァン・ペポルフ (仏)

書記長 A・ブリュール (仏)

目的：全世界の女流建築家の間に友愛と交誼を結び、各国において女流建築家が占める地位をたずね、その職業において占むべき地位を明確にし、且つこの目的のもとに最初の国際連絡並びに実行機関たる事務局の設立を目指すものである。女流建築家は何よりも先ずこの職業のもつすべての特権と義務とに従うべきものであるから、女流建築家にのみ残された領域が問題ではないが女流建築家の役割は“今日かくもきびしいこの都市に、世界に魂を

与える”ものである。

- ▶議長が、U・F・F・A (フランス女流建築家連盟) の名において、本会議の後援者・出席者に謝辞を述べついで、建設相代理、内閣官房監査並びに技術顧問のモレオル氏より「建築は単に知識・知性・技術・才能だけで出来ているのではなく、魂や心などでも創られていると思う。私は女流建築家という職業のなかに特権的地位はもたないが、選択の場はもっていると思う。それ故女流建築家はこの種の間人らしい情熱を注ぐよう補佐すべきである。」との意見が述べられた。続いて、イラン仏大使モレル氏、婦人連盟国際委員会会長リブコフスキー女史・職業婦人連盟、職業婦人権利擁護協会会長クレメールバッハ女史、婦人技師会、外科、歯科、女医師会の各代表者が祝辞を述べた。続いて各国事情紹介にうつり
- ▶「アメリカ合衆国に於る女流建築家の地位」について代表欠席のため報告文朗読。
- ▶「ドイツ現代宅地造成並びに都市計画に於る女性の要求」と題して、W・エフインガー夫人(ドイツ連邦共和国の住宅建設、都市計画担当大臣による派遣代表)の発表。次いで西ベルリンの建築家B・ケスラー夫人が「ドイツ連邦共和国に於る女流建築家の職業」について建築や都市計画の領域で、女流建築家はその腕前を發揮するのは、同業者の足跡をたどることを止め、人間が導いたこの狂った生活の中に、人間的な均衡を取り戻すことに特に努力すべきである。我々はもっと瞑想や省察にふさわしい雰囲気や建築様式を創るべきである。そうすることによって将来人間的な生活の全を、これまで殆んどどの時代にも疎んぜられて来た“考える”ということ、これにふさわしい環境を与え得るような社会に



しなければならない。」と発言した。

- ▶ 「ハンガリア女流建築家の地位、諸問題、活動」についてE・スピロ女史の発表。
  - ▶ 「イスラエルに於る女流建築家について」S・マジヤール女史の発表。
  - ▶ 次に英国のE・プライス女史が「1914年女性の建築学資格免許状取得希望者が出た。その人は今日この会議に出席しているヒューズ夫人である。」と発言し皆の注目を集めた。他の国々に於ては女流建築家の数は全建築家の約10%で、待遇その他男女同権であっても、種々の問題を残していると発言したにもかかわらず、英国に於ては、王立研究所には実際数百名の女流建築家が居り、タイムス新社屋も女流建築家の手になり、1930年のシェクスパ劇場設立のためのコンクールでも優等賞を獲得している。英国の中に於る女流建築家の歴史の古さと、地位の高さを強調した。
  - ▶ 「フランスに於る女流建築家の地位に関するアンケートの結果」についてD・フリーズ夫人の発表があった。男・女の比率は1.2%、大きなコンクール、大規模な建築工事、高度技術を要する仕事などに女流建築家が名をあげたことはなくコンクールの応募用紙には“男性”と書きされている現状をうったえた。
  - ▶ 「スイス女流建築家の地位について」B・ラム女史の発表。
  - ▶ “ブルガリアでは女流建築家は何らの差別待遇もない”とT・ペリクリューヴァ女史の発表。
  - ▶ ポーランドのピエレッカ女史より、“4500名の建築家の25%が女性で、全く男女同権大多数が公務員である仕事について”の発表があった。
  - ▷ 「日本の女流建築家の現状について」中原暢子が発表した。尚東洋からの出席は日本だけのため、特にスライドによる日本建築の紹介を行った。
- これで一応各国事情の紹介は終り、いよいよ国際協会をつくる意義は、という本論の討議に移り、約半日をついやし、各国代表の意見続出であり、特に英

国のように古い歴史をもった地位の高い国では、団結の必要はないとの意見もあったが、この運動が世界に滲透し、新しい世界が女性の手によって築かれることを願い、以下の誓約をつくり、国際連盟の結成にふみ切った。

#### 誓 約

- 1) 女流建築家はその職業上の分野で意見を交換するため、定期的に集会をもつ。
- 2) 到るところで、またすべての国で女流建築家は其の實踐の上で、権利と職能の平等を要求する。
- 3) 都市計画、住宅地及び特に家庭、女性、子供に関するすべての面で、女流建築家が綱領、規約の作成に参与することを要求する。
- 4) 公衆がより住みよい建築を要求し、またそれを認識できるようにするために、公衆の啓発を目的とする、女流建築家の運動を展開する。
- 5) 家庭生活の状態、殊に婦人がより多くの暇をもちうるように女性のおかれている状態を最大限改善するために、新しい建築概念、都市計画概念を通じて、建物全体の構造を機能的にするように追究する。

その後、国際連盟規約の草案の提出があったが、その検討並びに修正は次回に持越しはっきりした形をとって発表される予定である。

この会議の運営は事務局が行う。その構成

議 長 S・デルベ・ド・ラ・トール (仏)

副 議 長 エマソン・ブレイス (英)

ローロラ (フィンランド)

マジヤール (イスラエル)

中原暢子 (日本)

スピロ (ハンガリア)

事務総長 ビエルマン・ケヌレル (ドイツ)

会 計 係 ジェーヌ・ヴェール (カナダ)

次回大会は2年後にドイツ連邦から招かれて開催される予定である。

事 務 局 パリ16区デュモンデュルヴィル街14  
U・F・F・A内



会議場で発言の打合せ中。  
左から通訳、中原女史、小林女史。



サン・ゴバン・ガラス会社を見学。外国の  
仲間と一緒に社員食堂で。



パリ市庁舎を訪問。  
日本代表としてサインする中原女史。

## 「第1回女流建築家国際会議の報告」2

The 1st UIFA Congress 1963 in Paris, France - Report on the 1st UIFA Congress

UIFA JAPON NEWSLETTER77号「特集：UIFA 世界大会と中原暢子先生」より転載

### 第1回パリ大会

草野智恵子

1963年の初め、のん子さんから電話があった。「今年7月に女流建築家国際会議がパリで開かれるんだけど、おちえさん一緒に行かないかい?」「行きたいけど、浜口ミホさんや林さん、山田さん達がいらっしやるじゃない。」「彼女達は、亭主持ちだからだめなんだよ。」「行きたい!」と私。話は決まった。

のん子さんは南周りの船で行くと5月に出発。私は仕事の都合で6月にアンカレッジ経由の飛行機で出発した。のん子さんのご親戚のフランス公使が、自邸の近くにあるオテルパッシーに部屋を取って下さった。6月末、私達はそのホテルで落ち合った。

7月初め、会議が始まった。のん子さんは日本の女流建築家の設計した建築作品を、私は日本の代表的建築物をスライドで発表した。会議が終わった翌日はノートルダム寺院やパリ市庁舎などの見学だった。市庁舎ではのん子さんが日本代表として芳名帳にサインした。とても堂々としていらして、私まで誇らしく感じた。パリ郊外の集合住宅建設現場、シャンパン工場の貯蔵庫、化粧品会社(ランコム)の工場の見学が続いた。

夕方からセーヌ川の観光船でのパーティーに、私達は和服で出席した。パーティー会場で林のり子さんと会い、夜は中央市場(現ボンピドーセンター)にオニオングラタンスープを食べに行こうということになった。私達着物組みは目だったようで警官もニコニコ手を振っていた。

パリ滞在も少し長くなり、ご飯が食べたい!と、アルコールランプとお鍋、お米を買い求め、浴室でコトコト、ブクブクと炊いた。音と匂いの為かメイドが掃除に来た。『今日はしなくて良い。』と言うと『〇〇コムサ、コムサ』と言う。部屋には入れられないのでチップを渡して『今日は良い。』と言うと『メルシー』とにこやかに行ってしまった。我々は彼女のことを「コムサおばさん」と名付けることにした。のん子さんは料理、栄養に詳しく随分教えて頂いた。ご飯が炊けるようになる

と、キュウリ、人参、レタス、オイルサーデン等でサラダを沢山作った。外食が多く、野菜不足になっていたの、とても美味しく感じた。

7月14日パリ祭見物に行った。パレードは軍事力を見せつける事が目的という印象。パレードの後には馬の落し物がいっぱい残っている。此の時ストローの必要性をのん子さんが教えて下さった。

7月末、二人でロンシャンに行こうと、スイスでレンタカーを借り、のん子さんの名ナビでアウトバーンや田舎道を走った。教会は写真よりずっと素晴らしく、日暮れまでずっと眺めていた。そして、東京タワーとほぼ同じ頃建てられたストゥットガルトのタワーを見に行った。二人でドイツ人の独創性に拍手をおくり、エッフェル塔の二番煎じの東京タワーを思い、日本人であることを恥じた。



ロンシャンに行くため、レンタカーフォルクスワーゲン車中でちょっとオスマンののん子さん

それから、フランクフルトで車を返し、2日後にミラノで落ち合う約束をして、のん子さんはケルンに大聖堂の見学とドイツビールを飲みに行き、私はウィーンの街に見学とケーキを食べに行くために別れた。ミラノ駅で無事再会し、ホテルに荷物を置きに行くと、あまりハンサムではないマネージャーが飛び出して来て、二人ともキスされてしまった。のん子さんが部屋で「良く手を洗おうね」と石鹸でゴシゴシ洗っていたのがおかしかった。ローマ見学を終え、パリに戻ると、のん子さんが「私、1年間パリに居るつもり、おちえさん一緒に残ろうよ!」と誘って下さったが、仕事の都合で私は8月末に帰国した。

1年後、のん子さんは帰国された。「これ、のん子が働いたお金で買ったんだよ、あの時は貧乏だったから何も買えなかったものね!」とカメオのブローチをお土産に頂いた。

優しいのん子さん。あちらの世界で再会した時は、又よろしくね!

1976年 第4回 UIFA 世界大会 ラムサール(イラン)

## ファラ王妃の開会宣言

The 4th UIFA Congress 1976 in Ramsar, Iran  
- Opening Declaration by Empress Farah

1976年10月13日～17日、カスピ海沿岸のイラン北端の都市、ラムサールでUIFA世界大会が開催された。オレンジの香る公園を見下ろすラムサールホテルで、13日のレセプションを皮切りに、午前中はレクチュア、午後はパネルディスカッションという形式で会議は進んだ。40年以上前のことであり筆者の記憶も定かではない。新建築「海外ネットワーク」の拙文を元に概要をふりかえることにしたい。

当時のイランはパフラヴィー(パーレビ)皇帝の支配下にあり、世界大会はイラン政府とUIFAの共催で開催された。約35カ国に招待状を送り、女性建築家150名あまりが参加。日本からは中原暢子先生をはじめ、林雅子先生ご夫妻、山田初江先生、武田満す先生等14名が参加した。

会議のテーマは「Cultural Identity in Architecture」。「それぞれの国には固有の伝統があるが相互によく理解し、建築の想像力、表現力を高め、高次の環境を創造する方向を示唆できれば」というファラ王妃の大会宣言をうけ、過去への反省と今後の建築の在り方について、様々な角度から討議が行われた。

「最近、多くの国で伝統的なスタイルの影が薄くなり特徴のない建築が生み出され、統一感のない景観をつくりだしているが、本来あるべき姿だろうか」との問題提起に対して、「異なった目的のためにデザインされた過去のスタイルをコピーすることには何の意味もない、人々の要求を解決してきた伝統的な手法を、秩序や相互関係から探り出し再構築していかなければならない。アイデンティティの危機は建築ではなく、私たち自身にあるのではないか」等の意見が交わされた。次に、工業化・都市化が進行し、質より量というかたちで建築需要が伸



ピクニック



イラン大会展示場のファラ王妃  
(左) 白井 (右)

びてきたという現実への反省。これからの建築は環境とのかかわりも大いに考慮されるべきだとの意見が何名かの建築家から出された。

会議後、私たちはUIFAのメンバーと共に、約3週間、ハマダン、イスファハン、ペルセポリス、シラーズをめぐる延々750kmの夢のようなバス旅行にでかけた。

(大高真紀子)

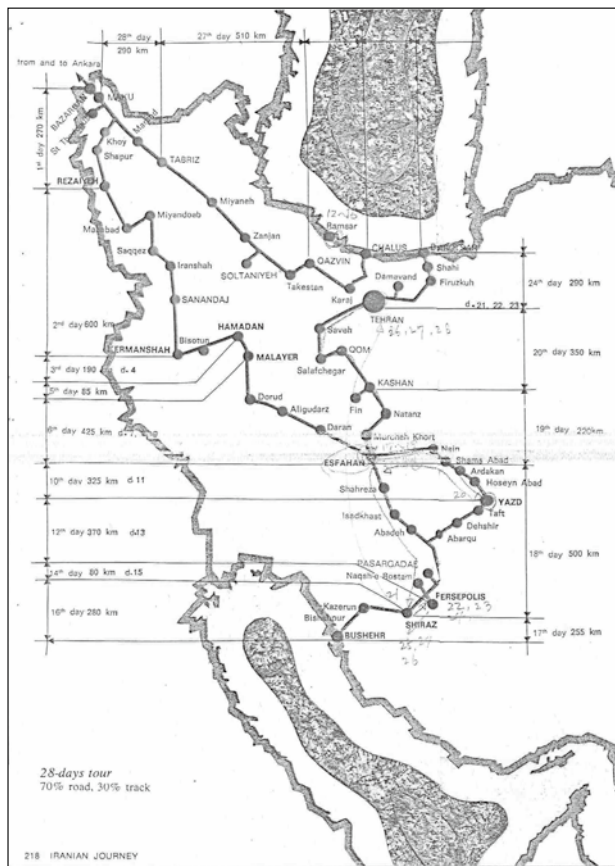
1976年 第4回 UIFA 世界大会 ラムサール(イラン)

## ラムサール宮殿での会議と 砂漠の集落

The 4th UIFA Congress 1976 in Ramsar, Iran  
- Conference at Ramsar Palace and Villages in Desert

イランでUIFA国際会議を開く通知が王妃から届いたと中原暢子さん。「今回は日本からも出ようよ」と誘われた。勤務先の建築設計事務所長に休暇の伺いをする。1年分の有休を当ててすることで漸く参加を取り付けて行くことが叶った。

テヘラン空港に到着。若い頃「ペルシャの市場」の甘い旋律に魅惑されて行きたかった国。雑踏が湧くような



イラン観光地図 実線はポストコングレスツアーのルート



街中の道路をバスで通過する。「多田野」と黒字で大きく書かれた広告柱が目飛び込む。砂漠を轟進する日本の民間企業をみるようで胸は高鳴り、躍るようである。

中原さんはVIP扱いで宿泊ホテルは別、ラムサール宮殿内での顔合わせ。パーレビ王朝期で宮殿の廊下、階段、出入口等に兵士が立ち、軍警備が厳重に配置された中で国際会議が開催された。会議のテーマは案内状によると"The Identity Crisis in Architecture"。スピーチと作品の展示で発表を行なうこと。23の国が参加した。1年半後、革命によって王朝が倒れるのを当時は知る由もなかった。

展示作品を航空便で先送り、果たして届いたのか。出展4名の作品が会場に陳列されている、一安心。中近東イスラム圏の情報は皆無で未知国への不安と期待を抱いて参加した。

展示会場ではファラ王妃が出品者へ挨拶に見える。私は某ステーションビルの耐震を見込んだプレゼンテーションで設計の説明をすると、王妃はにこやかな笑顔で話された。

会議後の観光では、砂漠をバスで移動。砂漠地の集落を訪れる。日干し煉瓦造りに住み、地下に旧集落が何層も埋まるという現地の人話が記憶に刻まれる。

参加者は、PODOKOから林雅子、山田初江、中原暢子、峯成子、白井正子、声かけに参加した人、飯島静江、大高真紀子、川嶋幸江、安藤（真尾）玲子、武田満す、平井（結崎）美蔓、船津貴子、山田規矩子、林昌二の14名。故人となられた方達を偲んで御冥福を祈る。（白井正子）

## 1978年UIFAパリ展覧会のこと

### Memories of the 1978 UIFA Exhibition in Paris

UIFAパリ展覧会は、1976年のイラン大会の2年後、1978年に開かれた。UIFAの長い歴史のなかで、会議



展覧会会場となった  
ポンピドーセンター

を伴わない展覧会だけの会はこの会のみであろう。開催は、イラン大会参加者個人宛にド・ラ・トゥールさんから直接案内がくるという連絡方法だった。私の手元には、当時の展覧会に関するド・ラ・トゥールさんからの資料は何も残っていないので、おぼろげな記憶をたよりにこれを書いている。

展覧会のテーマが設定されていなかったことだけは、よく覚えている。そのため、仕事で通常携わっている、生産施設関係の建物を出してみようと思ったのだから。計画中の1棟の研究所を含めて、4棟の生産施設関係の建物を選び、パネル化した。平面図・断面図の他に外部や内部の写真も添え、英文のタイトルや説明文をつけ、1メートル角くらいの大きさのパネルに建物1棟をレイアウトした。4枚のパネルはド・ラ・トゥールさんの事務所に郵送したが、パネルを送った日本人は私一人だということを知った。

パリでの展覧会は、ぜひ行ってみたいだった。フランス語が出来る勤め先の若い同僚にド・ラ・トゥールさんに電話をしてもらって、私の泊まるホテルを確保してもらった。生まれて初めての外国の一人旅を大変心細く思っていたが、ホテルへ着いてみるとイラン大会で顔を見知った人達が何人もいて、ほっとしたものだった。

展覧会の会場はポンピドーセンターの展示場だった。開会式はポンピドーセンターの中の大会議室で行われた。参加国の数、参加者の人数、出展のパネルの枚数等はド・ラ・トゥールさんの開会式での挨拶の中で述べられたと思うのだが、残念ながら不明である。ただ、通常の会議に併設して行われる展覧会よりも参加パネル枚数はずーと多く、大規模なものだった。

展覧会の期間中に、日帰りのパリ近郊の集合住宅の見学会や、女性建築家の事務所訪問等の催しがあった。同じホテルに宿泊している人達と、それ等の催しに参加した。

なお、展覧会はパリの後、フランスの大きな都市での巡回展を行うということだった。（山田規矩子）



同じホテルに泊まった  
UIFAの人たち

## 1979年第5回 UIFA 世界大会 シアトル (USA)

## 思い出のシアトル कांग्रेस

## The 5th UIFA Congress 1979 in Seattle, USA- Wonderful Moment at Seattle Congress

第5回 UIFA कांग्रेसが1979年9月30日から10月4日迄アメリカ・シアトル市で開催されました。私は今は亡き飯島静江さんと二人でその大会に参加しました。シアトル市はロッキードに関わる航空機工場のある所という知識のみで行った都市でしたが、水と緑に囲まれたしっとりとした景観と、まだその頃の日本では少なかった超高層建築が市の中心部に聳えた姿にすっかり魅了されました。会議は街なかにあるオリンピックホテルが会場で、UIFAの本部もそこに設けられ、出席者の多くも宿泊していたので、会議の運営にも大変便利でした。但しパネルの展示はホテル内ではなく銀行のホールの様な所で、全員で見学に行く時間がくみ込まれていました。

この時の会議のテーマは「変化する原材料に基づく新しい概念」でした。飯島さんが日本の建築基準法による設計の実例を挙げての説明の中で、日影規制にふれた時は会場に「ホーツ」といっせいに声があがりました。またキャドによる製図を「インディアンの絵みたい」と酷評した人もあり、現在と較べて今昔の感しきりです。

कांग्रेसの途中には全員船で島へ渡り野趣溢れる鮭の丸焼きのお昼をいただいたり、一日ハイキングでセント・ヘレンズ山へ行ったりもしました。この山が後日噴火したのはには驚きました。華やかな閉会パーティーの翌日、ポスト कांग्रेसツアーに参加する人達は飛行機でポートランドへ飛び、ここで会員の家を見せていただいたりした後、全員が一台のバスに乗って西海岸ツアーへ出発しました。風光明媚な西海岸を走るバス旅行でしたが、昨日も今日も同じ景色に飽きた頃、誰かが歌を口ずさみますとなんと！皆で歌えるのです。銘々が自国語で歌う菩提樹、野薔薇、シューベルトの子守唄等々の調べを乗せてバスはひた走りました。

途中何泊かして、サンフランシスコに到着、名物の急坂を上り下りするケーブルカーは修理中とこのことで乗れませんでした。ゴールデンゲート・ブリッジはしっかり見てきました。

ツアーの終点ロサンゼルスでは全員でハリウッドを見物し、建物が火事になる様子や河に落ちる等の実演に驚きの連続で楽しみました。ビバリーヒルズにもバスで行きエリザベス・テイラーの家や数々の豪邸のたたずまいを外から見物したりしました。ロサンゼルスではホテルに二泊して解散となり、皆それぞれの便で帰国しましたが、この旅行中全員すっかり打ちつけて親しくなりました。私は特にベルギーの人達と仲良くなり、その交流は30年たった今でも続いています。一台のバスに何カ国の人に乗ったのでしょうか、本当に心暖まるツアーだったとしみじみ思い返します。唯この時の様々なことを語りあえる飯島さんがもうおいでにならない……と万感の想いをかみしめています。(船津貴子)

## 1983年第6回 UIFA 世界大会 パリ (フランス)

## 幼児施設と女性建築家の活動

The 6th UIFA Congress 1983 in Paris, France  
- Infant Facilities and Women Architects' Activities

創立20周年記念大会。主題は「幼児施設」と「女性建築家の活動」。日本からは飯島静江、小川信子、梶島邦江、佐佐和子、船津貴子、松川淳子、山田規矩子、吉田あこなどが参加。

パリに着くやド・ラ・トゥール会長事務所に表敬訪問。何と凱旋門の隣。20周年記念楯(牡丹浮彫の輪島塗)



ド・ラ・トゥール会長を囲む日本代表団

を謹呈。

翌朝、会場パレデコングレへ。会長自ら受付集金。大会費と前年と翌年の年会費を払う。実務に卓越した姿を見る。それにしてもプログラムは未稿とか。しかし、私達の発表は午前中とは、慌ててスライド、動画など揃え会場へ。小川は「幼児施設計画」、吉田は「幼児便器開発」、飯島は「走行車から見た建物計画動画」を発表。好評を得、大満足。ランチはシャンゼリーゼでと繰り出す。ところが、午後のドイツ発表の司会を失念。松川が代行。ドイツ語で見事に裁く。さて、夕方、会場でシャンペンがボンボン抜かれ、歓声が天井を突く。何事とステージ近くによると「只今プログラムが出来ました」…涙の謝罪でなくよるこびの声とは？開会記念式典には各国代表が勢ぞろいし、パリ市長代理と女性権利省大臣も壇上に。私はその隣に呼ばれ、“トレゾノレ（光栄です）”と挨拶。バンケットは庁舎で、市長夫人がシャネルスーツで登場。さすがファッションの都。一同の興奮絶頂！

閉会后、小川、船津、松川、吉田でスイスの教育施設視察。モンテッソリ教育幼稚園（ローザンヌ）、教育の父ペスタロッチの生家（犯罪歴少年の更生牧場）・墓（巨大な墓碑は小学校校舎妻壁と一体）（チューリッヒ）、教育宇宙観を表現するシュタイナーのゲーテアヌム（バーゼル）。そしてル・コルビュジエの“母の家”、コルのレマン湖眺望スケッチを運転手に見せレマン湖を一周。発見。狂喜！等々。爽快無比の旅を満喫！

（吉田あこ）

## 1983 年第 6 回 UIFA 世界大会 パリ（フランス） 「子どものための建築と環境」をテーマに

The 6th UIFA Congress 1983 in Paris, France  
- With a Theme of  
"Architectures & Environment for Children"

1983 年に開催された第 6 回パリ大会は、UIFA にとっては、設立 20 周年記念大会として、設立者のド・ラ・トゥール会長の地元、旗揚げの地で開催された大切な大

会だった。「今度の大会のテーマの一つが、『子どものための建築と環境』というテーマなのよ、あなたの専門でしよう。参加しない？」との先輩の声かけがあり、大会後には、小川先生が企画されたスイスの子ども関連施設、シュタイナー学園やペスタロッチのお墓などの訪問もあると聞き、期待と不安の入り混じった気持であったが、参加を決めた。

会議がふたを開けてみると、ド・ラ・トゥールさんは、当時健在だった母上のジュリエットさんと二人で、会場の階段の下の小さな受付机で、腕まくりして参加費を集め、お札を勘定している、という親しみやすさで、いっぺんに彼女が好きになってしまった。私は、そのころ、会社で担当していた横浜こども科学館の展示計画設計をパネル化して展示した。展示物をセットしようと苦心していると、同じように奮闘しているカナダの女性が、「これを止めるにはどうしたらいいかしら」と尋ねてきたりして、すぐ仲良くなれるのだった。カラフルな民族衣装を着た人々に彩られ、あちこちでさまざまな言語が笑い声とともに飛び交う会場は、「大会」と名の付くものに参加すると、黒やグレーの背広姿の男性ばかりが目立つことに慣れていた私は、「女性の国際会議はいいなー」と心から思った。

ウエルカムレセプションはパリ市庁舎で、当時のパリ市長・シラク氏夫妻のおもてなしがあったりする豪華なものだった。発表が始まって、その進行役は、各国の回り持ちと決まっていたようだが、そんなこととはつゆ知らず、発表の聞き取りに懸命になっていた私に、「JAPAN！ JAPAN！」と次の司会者を呼ぶ声が聞こえ、見回しても日本の友人たちはどこにも見えず、仕方なく司会者席に上がり、フランス語やドイツ語の交じる発表の進行役を務めなければならなくなった。ペラペラと早口のドイツ語に困惑している私に気づくと、たちまち、聴衆の中から立ち上がる人がいて、フランス語に同時通訳してくれるという「ありがたいような、めいわくなような」事態も、今となっては楽しい思い出である。

（松川淳子）



左からド・ラ・トゥール会長、シャネルスーツを着こなすパリ市長夫人

シラク市長夫人にサインをもらう





1984年第7回UIFA世界大会 ベルリン(西ドイツ)

## 住まいと住環境

The 7th UIFA Congress 1984 in Berlin, West Germany  
- Housing & Living Environment"

1984年に開催されたベルリン大会の参加国は47ヶ国、参加者は250人だった。

この大会がそれまでのUIFA大会と大きく異なる点は、IBA (International Building Exhibition Berlin) の“Report Year 1984”の催しの一つとして大会が開かれた、ということであろう。

IBAは1987年、ベルリン市制750年に向けて、ベルリンの住環境の改善、集合住宅の建設、再開発を行うというプログラムだった。UIFA大会のテーマも、IBAのプログラムに合わせて、“住まいと住環境”であった。

当時の大会の内容について、強く印象に残っている発表は無い。しかし、東京と同じように、第2次世界大戦で激しい空襲を受けたベルリンが、なお、市民へのより良い住環境の提供ということに熱心であり、粘り強く活動し、一般の人々の関心を引き起こす努力をしていることに、驚き感心した。

大会の会場はベルリン工科大学だった。私達日本人グループが予約をしたホテルは、ベルリン工科大学の近くだったので、大会会場へは毎日歩いて行った。短い距離ではあったが、ベルリンという複雑な政治環境にある街を歩いたわけだが、壁に囲まれた街、という政治的な強い印象は受けなかった。短い滞在期間で、そこに住む人達との深い交流もなかったせいかもしれない。

大会の後、UIFA主催の南ドイツツアーに参加した。陸の孤島のベルリンを出発し、東ドイツ領内を通過して西ドイツ領内に入る。検問所での、大きな犬を連れた兵士達による、バスの両サイド下のトランク収納スペースの検査を見ていた時、5年後にこの恐ろしい検査が不要になろうとは、想像もできないことであった。

(山田規矩子)



ベルリン大会オフィシャルオープニング



ベルリン大会 ト・ラ・トゥール会長の母上、ジリエットさん(左から2番目)

1988年第8回UIFA世界大会 ワシントンD.C.(USA)

## 充実した4日間

The 8th UIFA Congress 1988 in Washington D.C., USA  
- 4 Days' Wonderful Memories

1988年9月28日から30日UIFA第8回世界会議がワシントンで催され、私たちは6名(高橋和子、松川淳子、村上美奈子、山田規矩子、山本基観代、宮崎玲子)のグループで参加した。

日本からの参加は3グループだったと記憶しているが、ワシントン空港に降り立ったとき、我々以外の日本のグループの中に、赤ん坊をおんぶ紐で背負って出てきた方がいて、空港の職員が奇異の目を向けていた。外国人にとっては珍しい光景だったと思う。

初日会議場には朝食が準備されていた。日本には無い習慣である。会義のパンフレット等を保存していないので、30年経った現在、記憶が薄らいで内容をお伝えすることが出来ないが、日本の発表は飯島静江であった。夕食はコロンビア大学でレセプションが開かれ、ここにパネル展示がされていたように記憶する。2日目夕方はAIA(全米建築家協会)でチーズパーティーが催された。

10月1日の午前中は聾啞者の初等科から大学までの学校を見学、時間的に低学年の姿は見られなかったが、係の方の案内で読書にいそむ方、テニスに興じる方など生徒さん達の生き生きした姿を拝見できた。手話を沢山取り入れているとの御説明でI'm sorryは胸を撫でる、I love youは親指人差し指小指を立て中指と薬指を折ったかたちで、この形はバッチとなっていた。お昼は公園でピクニック、午後はホワイトハウスの見学、夕方からポトマック河のクルージングでフェアウエルパーティーが催され、翌日の夕食には会員の方のご家庭を訪問。御主人が庭で焼いたステーキをご馳走になった。この4日間は充実した日々であった。(宮崎玲子)



I love you のサイン



ホワイトハウスにて(この時はホワイトハウスの内部も見学できた)

## 1988年第8回UIFA世界大会 ワシントンD.C.(USA) 記念すべきワシントンD.C.の大会

Memorable 8th UIFA Congress 1988  
in Washington D.C., USA

UIFAの第8回大会は1988年にアメリカのワシントンD.C.で開かれた。テーマは「国際的普遍的課題である住まい」(UIFA25周年記念、アメリカ合衆国初の女性建築家100年)という内容だった。

この大会は私にとってはとても意味のある大会であった。女性建築技術者の会のメンバー4人で初めてUIFAの大会に参加した記念すべき大会だったのである。これをきっかけにUIFAの会員にもなり今も活動に参加しているのである。

世界の様々な国の住まいの発表は非常に感心すべき内容で、さすがに女性の建築家の集まりだという強い印象を受けた。

さらに申し込みが急だったので事前に発表をお願いしていなかったのだが2日目の朝食の時間に私の発表を許可してもらえたのである。内容は団地の地域活動のこと、学童保育などの市民活動の話を行った。とても多くの国の方たちに訴求したようでスピーチが終わったあと、多くの方たちが駆け寄ってくださって「よかった!」といわれて感激したことを覚えている。

またフェアウェルパーティはポトマック川の船で行われ、陽気なパーティだったことも昨日のように思い出される。(吉田洋子)



初めての世界大会の参加で記念写真(ワシントンDC大会にて)



事務局会議で熱弁をふるう会長。左から、ウーテ(ドイツ)、ソランジュ、マルチェラ(フランス)、ゲルダ(南ア)

## 1991年第9回UIFA世界大会 コペンハーゲン(デンマーク) アンデルセンの国で

The 9th UIFA Congress in Copenhagen, Denmark  
- Memories in the Country of Andersen

大会の開かれるデンマークは、幼いころから「アンデルセンの国」として、私たちの心にはしっかりと刻まれている。大会の会場となったのは、シャーロットンボー宮殿で、現在では王立美術院が使っている、一見大学の教室棟のようにみえる建物だった。「建築におけるアイデンティティ」が大会のテーマで、パリ大会以来おなじみのガートルード・ガルスターさんが実行委員長だった。

港の近くの古い倉庫を改造したというホテルに泊まった私は、コペンハーゲンのまちのいろいろなものがすべてヒューマンスケールであることが気持ちよかった。このホテルで出される朝ごはんのデーニッシュペストリーの豊富さにびっくりしたり、有名なアンデルセンの人魚姫の像を撮影にいたり、これまた有名なビール会社カールスバーグのブルワリーを見学したり、故飯島静江さんと美しいジョージ・ジェンセンのカトラリーを見に行ったりと、楽しかったことばかり思い出される。さぼった記憶もないのだが、肝心の発表や展示についての記憶がほとんどない。

ニューズレターに掲載された元会員の小渡さんの文によると、発表はさまざまで、「女性と男性では光のエネルギーの脳でのとらえ方が異なり、建物設計に際して男性はモニュメンタルに、女性はフレキシブルになる。…バランスよく設計することが大事だ」「今、地球は環境、人種差別、民族問題などを抱えているが、子どもを産み育てていくことを身をもって知っている女性たちが今こそ力を合わせる必要がある」「…建築はその建物が建つ場所、そこで活動する人…などがあり、どれひとつが変化してもアイデンティティは変わる…」など、議論が飛び交ったようだ。留守宅へ送った私の絵葉書には、「市長さんの歓迎パーティーが、すてきな古い市庁舎で開か



カールスバーグ・ブルワリーの見学



開会の宣言をする実行委員長ガートルード・ガルスターさん(左)

れ、現われた市長さんは、40歳くらいの若い方で、おつきもなく、ぼつんと一人で寂しそうだったからサインしてもらった」などと、ノウテンキなことが書かれている。(松川淳子)

## UIFA会長ド・ラ・トゥールさんとの出逢い

Memories, meeting with Mme. Solange d'Herbez de la Tour, Founding President, UIFA

時は今から30年前の1988年10月20日。二ーヌにしばらく滞在した後、単身帰国の途についたときのこと。当時、フランスではゼネストが頻発し、成田行きのエールフランスが予定通り運行されるか心配であったが、無事、パリ空港でAF276便に乗り込んでみると、驚いたことに、座席にパッケージ入りの軽食2食分が無造作に置かれていた。機内食を提供する会社や職員がストライキに入ったため、機内での食事の提供は無し！ということのようであった。

先が思いやられるなど観念して座席に着くと、しばらくしてフランス人女性が隣席へ。高級なカメラを持っていたので写真家かと思って問いかけてみると、そうでは

なく、建築家だとのこと。折しもソウルで開かれたオリンピックの会場や施設などの視察のためソウルに赴かれるところであった。「実は私も建築家の端くれです。」と自己紹介したところ、「東京で小川信子先生にお会いしてUIFA JAPONの設立について相談することになっている。あなたもぜひ設立に協力して入会して欲しい！」とのお話。なんとUIFA会長Solange d'Herbez de la Tourさんであった。立派なカメラは建物や施設などを撮影するためとのこと。

フランス語訛りの英語と日本語訛りの英語での会話ながらも、お喋りが弾み、そろそろサンドイッチでも、となると、そこはさすがフランスおばさま。座席がちょうど配膳室の直ぐ近くであったことも幸いして、私のためも含めてワインの小瓶を取りに行くことしばしば。おかげで退屈な思いをすることなく、無事成田到着。思えば全くの偶然とは言え、希有且つ貴重な体験であった。

UIFA JAPON設立後、彼女も何度か来日され、2013年には、東京から岩手までご一緒して、“どこでもカフェ”の活動などを紹介させていただいた。

今も元気で東奔西走されているお姿を見ると、30年前にお会いしたときのヴァイタリティあつてのこととの思いが深い。今後益々のご健康とご活躍をお祈りしたい。

(藤田淑子)



朝4時にシャルル・ド・ゴール空港まで愛車を駆って迎えに来てくれたド・ラ・トゥールさん



アトリエのド・ラ・トゥールさん

UIFA JAPON 設立 10 周年  
名古屋大会の藤田さん



アトリエでUIFA 設立のころを語るド・ラ・トゥールさん

※いずれの写真も2003年



# 3章

## UIFA JAPON の設立

Chapter III  
Foundation of UIFA JAPON



UIFA JAPON 第1回総会

# UIFA JAPON の立ち上げ

## —1992年6月13日設立から1993年6月12日第1回総会—

Start-up of UIFA JAPON - From the foundation on June 13, 1992  
to the 1st UIFA JAPON General Meeting on June 12, 1993

### 【解説】

世界の都市を巡りながら開かれる大会に誘い合っって参加しながら、世界の友人たちとの情報交換や研鑽を楽しみ、交流してきた私たち日本勢だったが、それを楽しむうちに、「楽しんでばかりいるだけでなく、いつか日本でも UIFA の世界大会を」という気持ちが会員の中に膨らんできた。それをきっかけに、UIFA の「日本支部」をつくらうという気運が熟し、1992 年、UIFA JAPON が誕生した。事務局をどこに置くかは、「林・山田・中原設計同人」がいい、ということに決まっていたが、土壇場で、「いろいろな言葉で来る連絡などに対応するのは大変だから、だめ！」というひとことで、(株)生活構造研究所に置くことになってしまった。10月28日、飯田橋の会議室「ルコ」で第1回の役員会が開かれた。活動計画の検討はもちろんのこと、UIFA 第10回世界大会（南アフリカ - ケープタウン大会）への参加も検討されたと議事録は示している。

1992年12月に発行されたUIFA JAPONのニューズレター第1号には、中原会長（当時）が挨拶文を寄せ、「いまさら、なぜ女性だけで…」という声もあるだろうが、世界との情報交換を活発にし、国際貢献をしていきたい」、また「一人ひとりの会員の力こそが大切である」と決意を述べ、協力を呼びかけている。

設立から1年経って、1993年6月12日、第1回総会と記念講演会が開催された。故林昌二氏のお力添えもあって、会場は、赤坂の氷川会館であった。記念講演には当時財21世紀職業財団の会長だった赤松良子氏をお願いし、「21世紀に向けて翔け世界の女性技術者たち」というタイトルで講演が行われた。雇用機会均等法ができたときのいきさつや、21世紀に向けて女性の力が必要とされる必然性などについて熱のこもったお話だった。参加者は45名の会員のほか、非会員やプレス、招待者などを含め70名ほどになった。当時のニューズレターなどによると、参加者からは、「男性に負けないで、と、男性化するのではなく、男性にない女性の魅力やパワーを育てていくことを目標にしたいと思った」「会場の華やかさに、あらためて男性ばかりのパーティーがいかにも不自然かということを感じ知ったが、今後の活動拡大のためには、強力な男性応援団も必要だと思った」「自分が、いま、あまり差別されていないと思えるのは、大変幸せなことだが、これも先輩たちの積み重ねがあるからだということがよくわかった」などとの感想が寄せられている。（松川淳子）



第1回役員会  
(会議室ルコにて)



設立総会時の  
役員たち  
(氷川会館にて)

## 「志は高く、現実から目をそらさず」

—1992年UIFA JAPONの設立と第1回総会  
"Do not Turn Away from the Truth with the High Ambition"  
- Foundation of UIFA JAPON in 1992 and  
its 1st General Meeting

女性の自律を口走る青二才の渡邊などはやっと社会人になったばかりの時代にUIFAがフランスで設立された。この1963年から1992年UIFA JAPON設立まで約30年。この間9回の世界大会が開催され、先輩諸氏が遠い南アフリカ大会まで参加している。

1993年UIFA JAPONの第1回総会。6月12日(土)13:15より東京赤坂の氷川会館で開催。小川副会長による開会の辞、中原会長の挨拶の後、役員紹介があり、組織と役員の仕事分担について確認された。この組織力が、ド・ラ・トゥールさんに強い印象を与えた点かもしれない。記念講演、懇親会、前年の南アフリカ大会の報告もあり、第1回総会は盛り上がった。

記念講演は赤松良子さん。お題は「21世紀に向けて翔け世界的女性技術者たち」。

当時赤松さんは21世紀職業財団会長。赤松さんは1985年「男女雇用機会均等法」成立や「女子差別撤廃条約批准」など歴史的瞬間に立ち会った。またウルグアイ大使を経て1990年に国連女子差別撤廃委員会委員に再当選した時代でもあった1990年は国連難民高等弁務官に緒方貞子さんが就任した時代でもあった。赤松さんと時代のことごとくは『赤松良子・志は高く』（有斐閣1990年）、『均等法をつくる』（勁草書房2003）、『クォーター制の実現をめざす』（監修パド・ウイメンズ・オフィス2013年）などぜひ参照されたい。

現在も赤松さんの活動は続く。1997年国際女性の地位協会10周年を記念して「赤松良子賞」を設立。1999年政治の分野へ進出をめざす女性を支援するネットワークWINWIN設立、代表に。2008年より日本ユニセフ協会会長。社会性の高い現役活動は、志高く傘寿後の今も続いている。



赤松良子氏の著書



第1回総会における赤松良子氏の記念講演



赤松良子氏を囲んで

NEWSLETTER 2号は総会特集が組まれて、その編集後記が面白い。「これからのUIFA JAPONは貴方が主役です。『とにかく参加したけど何かあるのでしょうか』若い会員の声はかなり重いものです。国際交流という場をかりて、何をどう伝えるか、21世紀にわれわれは何をなすべきか、皆で大いに議論しましょう（広報担当）」と書かれていた。たしかに難しい課題である。当時労働組合も必ずしも均等なるたたかいをしていなかった。また、保守的な気風がいったんに解消したわけでもないが、変革への期待は大きかった。

2018年現在、女子の管理職や議員数、働く環境の近代化、平等化、子育てや介護など負担感など、未だに男女の格差が公然とある日本の著しい後進性は国際比較でも歴然としていることから考えると、専門家集団UIFA JAPONの継続性は金メダルクラスの出来事でもある。いわば、これからも「志は高く」「現実から視線を外さず、人間力活かしていきたいものである。」（渡邊喜代美）

## 子育てと仕事の両立を模索しながら

—UIFA JAPONの設立

Seeking the Balance between Child-Raising and My Work - Foundation of UIFA JAPON in 1992

UIFA JAPONが設立された1992年は、私が就職して4年目であり、仕事で関係のあった設計事務所の方から紹介があって入会した。1993年6月12日(土)に開催された第1回総会・記念講演会が初めてのUIFA JAPONの行事への参加であり、建築の仕事に関わる多数の女性の先輩方とお会いした機会となった。

当時のニューズレターを振り返ったところ、記念講演会に出席した感想をひとこと書いていた。赤松先生の記念講演の後に行われた懇親会の最後に、JRの車体のデザインをなさっている松本哲夫氏（剣持デザイン研究所 所長・日本女子大講師）が挨拶され、「JR東日本に初めて採用された大卒技術系女性が、松本氏の事務所で一年



間の研修中出産し、育児休暇取得後本人は復帰を望んでいたが退職せざるを得なくなった。能力のある人なのに惜しい。これは社会の問題であり、会社が託児所を作るなり何等かの方策を講じなければ、結局女性が子育てと両立させては働き続けることはできないのだ」というお話がとても印象深く残ったというものだった。

その頃私の勤め先には、まだ女性建築職はほんの数人しかおらず、子育てとの両立に悩んで退職せざるを得ない人もいた。そのような中、将来に不安を感じながらもUIFA JAPONの諸先輩方からいろんな経験談を教わったりしているうちに、少しずつ制度が充実し、私が育児休業に入ったところから復帰後の部分休業制度なども使えるようになり、なんとか子育てと両立しながら仕事を続けていくことができた。

その後職場のまわりにも続々と女性が入社し、今活躍を続けている。先を行く諸先輩方の努力のおかげで今の状態があること、また震災復興支援等社会的な活動を続けている会員の皆さんにも刺激を受け、交流させていただく機会を得られたことに感謝している。(牛山美緒)

男女雇用機会均等法に関わった赤松先生が何を話して下さるか興味をもって参加した。均等法が母性保護を優先させた労働法とのせめぎあいの結果という事も分かり、「男女差別」と突き放さずに「性差」を十分認識する事も必要と考えさせられた。21世紀は国際化と女の時代ともいわれ、労働力としても勿論、仕事も国際化してくる事と重ね合わせても、参加者のこの会への期待が伝わってくる様なこの会の存在の重要性を益々感じられた会だった。

(株)生活構造研究所 小池 和子

NEWSLETTR NO.2 July 1993 掲載



日韓シンポジウム

## 日韓シンポジウム (東京) UIFA JAPON の最初の国際交流事業 Japan-Korea Symposium in Tokyo - UIFA JAPON's First International Exchange Project

UIFA JAPON が創設されて2年目の1994年に、国際家族年を契機として日本と韓国のシンポジウムを東京で開催した。UIFA JAPON 最初の国際交流の大事業であると同時に、UIFA 世界大会の日本招致を頭に描きながら、意気込みをもって取り組んだ。開催にあたっては東京女性財団や多くの企業等からの援助を得ることができた。

開催前には小川信子副会長を含む6名が韓国を訪問し、9月1日に龍水荘で打ち合わせ等を行っている。韓国からはKIFA(韓国女性建築家会議)会長の金華蓮、副会長金福守、金仁淑、総務部長任仁王氏と2人の講演者が参加。シンポジウムの推進役となったのは、UIFA JAPON 会員の飯島さんと交流のあった前会長の池淳氏、元正珠氏であり、KIFAとの橋渡しをして下さった。日韓シンポジウムの概略は以下の通りである。

テーマ：「家族・住まい・社会

～明日の住まいを考える～

日 時：1994年10月22日(土) 10:30～16:30

会 場：氷川会館(東京赤坂)

基調講演：鈴木成文、金鎮愛

講 演：朴研心、小谷部育子、中島明子

パネルディスカッション：コーディネータ松川淳子

基調講演の鈴木成文先生は、東アジアの伝統的住まい方の重要性と共に、戦後日本の都市住居においてモダンリビングが創出されたのは、核家族専業主婦の大群の出現であったと話され、金鎮愛氏は、アメリカ留学を経験しており、取り組んでいる大規模なプロジェクトについて迫力をもって報告された。朴研心氏は韓国の家族と住まい方について事例をもって紹介し、小谷部育子氏は北欧のコレクティブハウジングを、中島明子は日本と韓国・アジアの家族と住まいを考える時の課題が述べられた。

会場からの質問も多く、テーマに対する関心の高さが



中央日報(韓国)  
インタビュー記事から

伺えた。参加者は 103 名。韓国からは 10 名で、日本に留学中の 5 名の学生さんが通訳として大活躍した。

シンポジウム終了後、2 日にわたり韓国側参加者の東京と横浜の見学を行い、よい交流の機会になった。

(中島明子)

## 韓日シンポジウム (ソウル)

### 21世紀の居住文化—女性が主役

Korea - Japan Symposium in Seoul  
- Residential Culture in the 21st Century  
- Woman plays a leading role

東京で開催された日韓シンポジウムに続き、翌年 1995 年にソウル市内の真新しいポスコセンタービルで韓日シンポジウムが開催された。

参加者は約 250 名、日本からは UIFA JAPON 会員 10 名を含む 12 名であった。日本からの参加者には、従軍慰安婦問題に象徴される日本と韓国の歴史的経緯から、訪問を躊躇する気持ちもあったが、実際に交流を通してそうした懸念は払拭され、共通の課題で活発な交流が行われた。概略は以下の通り。

テーマ：21 世紀の居住文化—女性が主役

日時：1995 年 9 月 30 日(土) 10:00 ~ 18:00

会場：POSCO センター・アートホール (ソウル市)

基調講演：

1. 住居形態の変遷と女性 池 淳 (建築家)
2. 現代の空間の女性化 坂本一成 (東京工業大学教授)

主題発表：

1. 住まいをめぐる女性—女性建築家の戦後史  
小川信子 (UIFA JAPON 副会長、日本女子大学教授)
2. 変わる女性・変わるべき住まい  
金 鎮愛 (都市計画家)
3. 変わる社会・変わるべき住まい 趙 成龍 (建築家)

パネルディスカッション：

5 人の講師と中原暢子他韓国から 3 名

懇親会

坂本教授の講演は、「新しい時代の空間の性格の可能性をこれからの期待を込めて“女性性”という内容で展開したもの」であった。小川会長は、日本における 50 年間のすまいに関する歴史を日本の女性建築家の登場と重ね、女性建築家による最初の設計事務所林雅子、山田初江、中原暢子の作品や会員の作品の変遷を紹介し、「未来に対する共生居住への思考等」も併せ、「21 世紀の居住文化は、男女とも主役である」と位置づけた (以上の内容は NEWSLETTER No.14, 1995 を参照)。韓国の女性建築家等の報告からは、仕事に対する誇りや熱意を感じるシンポジウムであった。

ポストシンポジウムツアーでは、ソウルから 3 時間余の河回村 (ハフェマウル) 民族村と歴史的建造物陶山書院を訪問し、さらに慶州の見学を経て、釜山から帰国した。

(中島明子)

## 韓日交流会に参加して —河回村行と仮面

Participation in Korea-Japan Symposium  
- Visit to Hahoe and Yangdong & Mask

日本と韓国は、隣国でありながら長い戦いの歴史的爪痕が残り、交流の必要性があった。

最初の訪韓時の世相は、何処へ行っても日本に対する冷やかさを感じた。だが、その世相の中でも日本の日建設計と深い繋がりのあった女性建築家・池淳氏の笑顔と温かいもてなしの数々は忘れがたい。先生は韓国女性建築家の代表的な存在で、500 余の所員を持ちソウル銀行を設計、流暢な日本語は過去の日韓の姿を象徴していた方だった。しかし、時代の趨勢は残照をすっかり消し、UIFA 韓国大会時には無に等しかったのは嬉しかった。

交流会の最初は、東大教授鈴木成文氏・小谷部育子・中島明子氏と韓国の女性建築家による日韓シンポジウム。次いで第 2 回は、ソウル市での建築家坂本一成氏のご講演だった。私は、坂本一成氏と共に行動し、先



韓日シンポジウム (NEWSLETTER No 14 1995 年より転載)



河回別神グッ仮面劇の仮面



生は先に帰国したが講演は、日本の現代建築の紹介。後の韓国縦断の旅で交流は更に深まり、日本からの参加者は釜山から帰国した。

旅の中でも河回村への旅は印象に深い。後、2012年にユネスコの世界遺産に登録されたこの村に焦点を絞り反芻しておきたい。

河回村は、ソウルから慶尚北道を3時間程の安東市に位置し、市の中心から車で40分ほどにある。文字どおりS字型に村を回るように洛東江（ナットンカン）が周囲を流れ、127戸の住宅は河に向かって建てられているのが珍しい。樹齢数百年の樗造りの瓦葺き屋根の家を茅葺屋根の家が周囲を囲んでいる。この辺りの村の住人は、『柳』という同一の姓で、儒学者の柳雲龍と首相に相当する柳成龍兄弟を輩出している。2軒は重要民俗文化財に指定されており、風水からか強風を防ぐためか松林が多い。又、「河回別神グツ仮面劇」という伝統的な芸能を守っている。世界には多くの国々固有の面があるが、世相風刺や喜怒哀楽の人間の心情を仮面の影で吐露している術がここ河回村にも定着していた。

訪韓後にユネスコの世界遺産に登録され可成り村が整備されたと聞くにつれ、河回村と京都に似た慶州の地をもう一度訪ねたいと思っている。（正宗量子）

## 日韓・韓日シンポジウム

### 日本と韓国で開催した交流シンポジウム

Japan-Korea/Korea-Japan Symposiums - Intercultural Symposiums held in both Japan and Korea

テーマ：“家族・住まい・社会～明日の住まいを考える～”

日時：1994年10月22日（土）10:30～16:30

会場：氷川会館（赤坂）

この夏は酷暑と水不足に悩まされ、足早にきた秋。UIFA JAPONでは、国際家族年にあたり、財団法人東京女性財団の支援を基に日韓交流開催に漕ぎつけた。韓

国の住まいや生活、KIFA（韓国女性建築家協会）がどのような社会状況の中で活躍しているかなど、日本と韓国における家族と住まいの関わりについて意見を交わした。基調講演・講演・パネルディスカッションで構成。韓国語、日本語にも熟達した韓国の若い素敵な女性通訳を通して分かりやすく展開、言葉の壁も乗り越えた。基調講演：鈴木成文、金鎮愛、事例紹介：朴研心、小谷部育子、中島明子。パネルディスカッションコーディネータ：松川淳子。懇親会も両国の現状と将来の展望を共に考えた。UIFA JAPON設立から2年目にしての大イベント。次回は1995年に韓日開催を約束。

#### ■ 1995年 韓日シンポジウムは韓国（ソウル）で開催

テーマ：21世紀の新住居文化―女性が主役である

日時：9月30日（土）10:00～18:00

会場：POSCO センターアートホール

参加者：約250名

韓国の建築士会的組織が全面後援と参加で盛会。日本からの参加者は、講師坂本一成（韓国側のご指名だった）、UIFA JAPON 会員10名+1名（渡邊の次女）を含む12名。ソウル市内の会場は竣工1ヶ月のガラス張り高層ビル。KIFA 金華連会長、UIFA JAPON 中原暢子会長のエール交換。発表は 1. 住居形態の変遷と女性：池淳 2. すまいをめぐる女性―女性建築家の戦後史：小川信子 3. 変る女性・変るべき住まい 金鎮愛 4. 現代の空間の女性性化：坂本一成 5. 変る社会・変るべき住まい：趙成龍。パネルディスカッションは上記講師+中原暢子、李丙漂、任昌福、曹恵貞、司会：襲時華。懇親会は韓国無形文化財成昌順の伝統音楽パンソリの公演など親しみのこもった会であった。

韓日交流に参集した女性たちのさわやかなパーソナリティと驚くべきスピードで通訳をする若い韓国の女性によって言葉の障壁は解消された。ポストツアーは有志でワゴン車をレンタル。通訳も一緒にソウルからプサンへ縦断。地域の人々のくらしは味わい深く、混沌と整然と営まれる釜山市場はエネルギーにあふれていた。

（渡邊喜代美）



日韓シンポジウムで交流するパネリスト

# 4章

## 1998年第12回世界大会（日本） 開催から20周年まで

Chapter IV  
Period from the 12th UIFA Congress 1998 in Japan  
to the UIFA JAPON 20th Anniversary



ド・ラ・トゥールさんから送られてきた激励スケッチから作ったテレフォンカード  
(パリから飛行機で成田へ、バスで青少年記念センターへ、「これだけたくさん  
の人が来るのだ!」と)

# 世界の友人たちを迎えて —1998年 第12回 UIFA日本大会の開催

Welcoming Many Friends from All Over the World  
- The 12th UIFA Congress hosted by UIFA JAPON

## 【解説】

第12回 UIFA 日本大会の開催は、ハンガリー、ブダペストで開催された UIFA 第11回大会で正式に決まった。1998年という「2年後」のことなので、帰国以来、急ピッチで作業が進められた。もともと、世界大会の開催国になるなどということに経験のあるメンバーはいなかったもので、なにもかも手探りの状態から始まった。

当初、いわゆる「会議会社」に委託して、細かな業務をやってもらえばいいのではないかと、いう心積もりがあったのだが、委託するつもりだった会社が倒産、解散するという思いもかけない事態になり、「事務局を(株)生活構造研究所に置かせてもらい、個人で会議運営をしている人を見つけて委託する」ということになったのである。国際会議の決まり事など、何一つ知らなかった私たちだった。資金集め、会場探し、プログラムの決定、コンgresバッグの作成やお土産の品選び、ツアーの企画・実現に向けての交渉などなど、実行委員会が直面した課題は山のようにあった。

途中、果たしてこれでできるのだろうか、と、くじけそうになったこともあったが、そのたびに、パリのド・ラ・トゥール会長からは、励ましのファックスが届き、結果としては、31か国、268名(国内154名、海外114名) 同伴者24名が参加した大会の開催までこぎつけたのである。

テーマの設定については、『ハンガリー大会のテーマを引き継ぎながら、私たちが20世紀に携わってきた仕事を点検し、21世紀の環境がどうあるべきか、そのために私たちが何をしたらよいかを模索することを目的として設定した』と大会初日の実行委員長あいさつで述べている。

大会概要は、以下のとおりである。

大会テーマ：「環境共生時代の人・建築・都市」

- ① 開催日 本会議：1998年9月1日～7日、ポストコンgresツアー：9月8日～12日、作品展示：9月2日～6日
- ② 開催場所 国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流棟
- ③ 作品展示 新宿パークタワーギャラリー2
- ④ 市民公開シンポジウム・横浜 ランドマークホール
- ⑤ 実行体制 名誉会長：赤松良子  
UIFA JAPON 会長：中原暢子 副会長：小川信子  
UIFA'98 実行委員長：松川淳子  
実行委員会委員：安藤怜子、在塚礼子、中禅寺登紀子ほか64名
- ⑥ 発表論文数 17カ国 56タイトル ⑦ 展示作品数 43件(国内：28 海外：15)

あれから20年経った今でも、「日本大会ほど、うまくオルガナイズされて、楽しかった大会はない」と世界各国から称賛されるまでになり、韓国(ソウル)大会、米国(ヴァージニア)大会の開催に際しては、日本大会のスケジュールや作成したフライヤーなどが「参考資料」として、求められることにもなった。会員の結束と努力、資金等さまざまな面でサポートしてくださった省庁、団体、地方自治体、企業等のみなさまのおかげさまであり、また、業務の妨げになることにもめげず、大会事務局の場所を提供してくれた(株)生活構造研究所の力も大きかった。(松川淳子)



日本大会大会議長団



第12回 UIFA 世界大会(日本)のフィナーレ

## 第12回世界大会(日本) 実行委員として

As a Member of the Executive Committee  
for the 12th UIFA Congress in Japan

UIFA JAPON と私のご縁は、第12回世界大会(日本)に実行委員の一人として関わらせていただいたことである。私自身はUIFA会員でも建築の専門家でもないのだが、建設省で都市・住宅行政を担当する中で、UIFA JAPONの先生方にお世話になり、そのつながりでお声がけいただいたのだと思う。

日本大会の実行委員会では、各部会の進捗状況や課題等の報告を受けて、いつも侃侃諤諤の議論が行われていたが、私は専門家ではないことをいいことに、できるだけ一歩引いたところから意見を述べさせていただこうと努めていた。あまりお役に立てた気はせず、どちらかというところと勉強させていただく一方だったように思っている。

一番印象に残っているのは、大会最終日の事務局会議だ。その直後の閉会式でプレスリリースすることになっていた大会宣言の案に、ド・ラ・トゥール会長からのご意見を文を追加することになり、日本語版と英語版を揃えるのにぎりぎりまでバタバタしていた。私はこの大会宣言の中の「世界の女性の『レースワーク』をつくる」というUIFAらしい表現が大好きである。

最近でも、世界中で持続可能な開発目標(SDGs)が着目されたり、相変わらず「女性活躍推進」が日本の政策課題であったりと、UIFAという組織の下、laceworkでつながった世界の女性建築家たちの活躍が求められていることは間違いない。これからも、UIFA JAPONの皆様が、日本、そして世界の建築や環境の世界で存在感を示し、ますますその活動が発展していくことをお祈りしています。

設立25周年、本当におめでとうございます。

(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長、  
内閣府地方創生推進事務審議官 頼あゆみ)



スタディーツアーにて 中央筆者  
最終事務局会議 右端筆者

## 石川金治氏のご尽力 —UIFA 日本大会開催の恩人—

Special Thanks to Significant Contribution to UIFA  
Congress in Japan by Mr. Ishikawa Kinji

東京開催が決まり、松川淳子さんを委員長に実行委員会を立ち上げ、毎月打ち合わせを行い、スケジュールの検討、会場の手配、後援依頼や助成金の申請、企業や公的団体への協賛依頼、サーキュラー作成等、担当部会との総合調整を行い、約2年をかけて準備を進めた。そのなかで、運営資金が大きな課題となった。

この状況のもと、東京都技監(開催時は東京都公園協会理事長)の石川金治氏には、なみなみならぬご尽力をいただいた。東京都からの後援、外郭団体からの寄付、都庁舎の歓迎パーティの使用と見学、東京湾クルーズ、清澄公園でのお別れパーティ等、各場面で多くのサポートをいただき、日本大会開催の恩人として、深く感謝を申し上げている。

特に資金面では公園協会をはじめとする3団体に協力依頼をしていただき、当時、都庁勤務だった私に電話で「各団体の寄付の額が決まったよ」と詳細をご連絡くださったお声は今でも忘れられない。財政状況が良好とはいえない時期であり、UIFAの日本開催について国際的意義を熱く説明くださったことと思われた。

石川金治氏は、建設局長等の要職を経て、技術職の最高ポストである東京都技監につかれた方で、河川、道路、緑化、再開発等、都の大きな事業を手がけ、後に全技術系職員のトップリーダーになられている。研究熱心で実行力があり、思いやりのある優しいお人柄で、都庁を代表するジェントルマンとして職員から慕われ、尊敬を集めた方であり、女性技術者の進出にも理解を示していただいた。

東京大会から2年後にウィーンで開かれた世界大会にはご夫妻で参加され、帰路は小川信子先生のご案内でスウェーデンにも寄られたが、バルト海のクルーズでは



2001年ウィーン大会の  
石川金治氏



甲板に席を取り、望遠鏡とカメラを動かし熱心にメモをとられていた。

東京都の公職を退任後は、NPOの理事長として、中川周辺の安全なまちづくりに尽力されたが、誠に残念なことに、2016（平成28）年2月19日にご逝去された。今でも「UIFAの皆は、元気で頑張ってるかい？」とお声がきこえるような気がしている。心から御礼申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

\*石川金治氏は、広報委員の石川和代さんのご尊父である

（石川彌栄子）

## 清澄庭園での涼亭茶会と 大正記念館でのフェアウェルパーティ

Ryotei Tea Ceremony and Farewell Party at  
Taisho Memorial in Kiyosumi Garden

日本大会も終盤を迎え、遠来の客人を中心に、清澄庭園の涼亭で中原先生を席主とした茶会が開かれた。この席は東京都公園協会の理事長だった石川金治氏のご尽力で、お借りできたもの。未だ暑さが残るこの時節に、私たちは夏の着物で参加者を出迎えた。

涼亭の名の通り、池に張り出した涼やかな広間が茶席。ここに配された長テーブルへ、客人たちが入れ替わり座し、正座という習慣がない方々への心配もなんのその、それぞれが、それぞれの形で、和菓子と一服のお茶を堪能された。私は水屋担当。水屋から広間を伺い、抹茶の影点ををし続けた。3クール終え、ホッと一息つき、皆で、大正館の会場へ移動。会場は別れの宴の熱気も終盤で、翌日からのポストコンGRESツアーへの期待感に満ちていた。

大正館前での記念写真には林先生や、インドからいらしたシン夫妻の顔が見える。ナミタ・シンさんとはブダペスト（ハンガリー）大会でご一緒した。ベジタリアンの彼女は、ポ



故中村陽子さん（左）と筆者



お茶を点てる中原会長（当時）

ストコンGRES先のウィーンでインド料理の店を探して、ご一緒させていただいた。ハンガリーではお嬢さん同伴。日本大会はご主人同伴。サトゥナム・シン氏も建築家で、ターバン姿をセッションの会場でもお見かけした。どんな経緯だったか、東京駅近辺の本屋で、彼から「インドの建築」という厚い本をいただいた。当時、彼らの娘もアメリカに留学し、建築家を目指していた。ナミタさんから、大会後、彼らの事務所のプロジェクト（海軍兵学校・女子高校）の紹介記事を送っていただき、NEWSLETTER 43号に紹介した。ナミタさんはコルゲート波板でユニークな建築作品を作り続ける遠藤修平に興味を持たれ、飯島さんが集めて下さった資料を送るという後日談もあった。日本大会後の「緩やかなレースワーク\*」を目指して、出会いを紡いでいたことを記憶している。

（井出幸子）

\*マリア・ダ・シルバ（ブラジル）さんのレースで縁取られたパネル展示が私たちの目を引きつけた。それにちなんで、UIFAの会員のつながりを「レースワーク」にたとえている。

## 墨田ツアー 路地と路地尊 木造密集地帯の防災と墨東奇譚の世界

Sumida Tour : Narrow paths and mini park  
- Disaster Prevention in Dense Concentration Areas  
of Wooden Houses and "Bokuto Kitan" World

大会4日目の墨田スタディーツアに参加。出発前に、都市計画家大熊喜昌氏から京島地区と一寺言問地区、すみだ生涯学習センターは設計者の長谷川逸子氏からレクチャーがあった。京島地区と一寺言問地区のある墨田区北部は住商工の混在した下町で、木造密集地帯。いずれも住民のまちづくり意識が高い地区。京島地区は仕事で歩いたので、一寺言問地区と交流拠点として位置づけられるすみだ生涯学習センターのコースに参加した。着いてすぐモザイクタイルの外壁の小さな木造建物が目についた。「玉の井」界限。墨東奇譚の世界だ。移動した先は道幅が狭い路地、木造住宅が軒を並べ、軒先には植木鉢や木々、そして「路地尊」。「路地尊」とは、路地の



上 すみだ生涯学習センター  
左 路地尊

安全を守るシンボル。「地域のコミュニティの場であり、災害時に避難路になる路地を大切にしながら自分たちでまちを守ろう」という考え方から。当初は防災用具等を収納する街路備品として考案、第2号基から雨水利用が導入され、草花への水やりや子供の水遊び場、また災害時の水源として災害時も使えるよう、手押しポンプで水をくみ上げている。」と墨田区まちづくり推進部の方から説明を受けた。この狭い路地を海外の女性が多い集団が、興味深そうに写真を撮ったり説明を聞いたりとは徒歩で移動。このツアーで、女性建築関係者のイベントに車いすの男性の同行も自然に行われていることが印象深く、それ以降のバリアフリー環境の整備状況をますます意識するようになったことは間違いない。すみだ生涯学習センターは、木造住宅密集地帯に突然現れたガラスと金属の近代建築。3棟が9本のブリッジで繋がっている。シースルーエレベーターや渡り廊下は「路地空間」の人の流れを意識しているようだ。卒論で「みち」を生活空間として定義した。永井荷風の墨東奇譚の世界も垣間見たこのスタディツアーは、それが実証できたのではないかと思える有意義な機会だった。

参加者 141 名 1998 年 9 月 4 日(金)午後開催。

(小池和子)

## 世田谷ツアー

### 環境共生住宅と次大夫堀り公園民家園

Setagaya Tour: Environmentally Symbiotic Housing and Conserved Traditional Houses in Jidayubori Park

日本語バス、フレンチバス、イングリッシュバスに分乗して、世田谷区へ向かった。事前に世田谷区が通訳ボランティアを派遣して頂くことになっており、UIFA 側としては、建築用語の対訳表を準備して当日通訳数名と合流した。例 囲炉裏—Firepit

#### ◆深沢環境共生住宅 世田谷区深沢

1997 年に竣工した RC5 階建ての世田谷区立特定公



深沢環境共生住宅  
世田谷区深沢



次大夫堀り公園民家園  
世田谷区喜多見

共賃貸住宅である。設計：世田谷区+株式会社市浦ハウジング&プランニング+岩村アトリエ共同企業体。

建設省の地域住宅（HOPE）計画のモデル住宅整備事業のなかの「環境共生住宅」のガイドラインに沿っており、当時大いに話題となった共同住宅である。

設計理念：地球環境を保全するという観点から、エネルギーや資源への配慮や、周辺環境との調和を考え、更に住まう人が健康で快適に暮らせるように工夫された住宅のことで、その概念は大きく3点である。①地球規模の環境に配慮し、省エネルギー・省資源・リサイクルを追及する。②周辺環境や自然環境との調和をめざす。③居住環境の健康性・快適性をめざす。

#### ◆次大夫堀り公園民家園 世田谷区喜多見

1988年に開園した民家園で、名主屋敷、民家2棟などが復元されている。昔の生活も復元するという意味から、囲炉裏には火が焚かれ、古民具などは、軒下や室内の配置されその生活体験することが出来る。民家園に到着するや、通訳のお迎えもそこそこに、外来のUIFAのメンバーたちは、歓声をあげて飛び回り、勝手にあちこち〈触る〉〈もぐる〉〈覗きこむ〉。通訳は大声をあげて説明するも聞いているのは日本人ばかり。欧米の方たちは、集団でまとまって話を聞くということは得意ではないようである。UIFA側が用意した建築用語の一覧表もあまり役に立たなかった。

(林屋雅江)

## 横浜ツアー

### 三溪園

Yokohama Tour: Sankeien Garden

第12回大会が日本で開催されるという時は、私がUIFA JAPONへの入会の誘いを吉田洋子さんから受けたばかりの時であった。顔合わせは、横浜駅西口にあるサポートセンターが会場であった。松川さんが、その会場まで駆けつけてくれた。入会して、世界大会ということをはじめ、UIFAのことを知る機会となった。



三溪園室内

三溪園の庭園

担当したのは、大会の最終日に二つのコースに分かれて見学する計画で、東京の建築作品を巡る A コースと横浜の三渓園・鎌倉を巡る B コースだった。私は横浜ツアーの案内の文言と写真を作成することになり、前もってツアーの場所に行く予定となり、横浜の本牧にある、有名な三渓園に、カメラを持って、ひとりで向かった。見学するコースには、庭園はもちろんのこと、室内も事前に見る必要があったのである。通常非公開のところを、優先的に拝見できたのは幸運であった。平日で、天気もよく、他の見学の人には、ほとんど出会わなかった。この時は二度目の見学だったが、予定している場所以外に足をのばす余裕はほとんどなかった。

その他の作業としては、場所を表示するために地図を下書きに神奈川県をプロットするように小渡さんからの指摘があった。アウトラインを手書きでなぞり、千葉県、東京都、神奈川県、更に太平洋、相模湾も表示し、黒丸の後に東京、横浜、鎌倉の記載も追加した。1998年8月13日の記録が残っていた。

三渓園の成り立ち、外苑の説明、内苑の説明を文章化し、吉村さんに郵送してフランス語、英語の表記の作業をお願いした。当日は、あいにくの雨で、傘の置き場について三渓園の職員の方々に手伝ってもらい、傘置き場等を案内し、見学のみなさんの誘導などを行った。この広い三渓園に滞在する時間は午前10時10分から11時40分までに内苑も外苑も見学の予定で、時計を見ながら、室内をあわただしく動いていた。見学の御一行さまが出発した時はホットしたものだった。（福井綾子）

### 鎌倉・三渓園ツアー

## 世界の仲間と共に過ごして

Kamakura, Yokohama Sankeien Garden Tour  
- Enjoyable moment with Fellows  
from Around the World

エクスカージョンのバスは通訳が仏語か英語かで分乗するのだが、私は同行の友が仏語を話せるので、仏語車

ベルギーから届いたベルギーチョコとアールヌーボー建築の本



に乗った。

鶴岡八幡宮は、駐車場で下車し脇から境内に入ったので、あの正面性が第一印象にならなかったのは少し残念だが、広い会場に一堂に集まり宮司さんの解説を受け、お神酒を味わい干支の飾り絵馬（寅の絵）を各自に戴く等、この機会だからこそ経験できることもあった。自由時間は各々境内を散策。滞在時間が短く、皆忙しく動いていた記憶がある。

三渓園については、主催者側の役目で皆さんの動向を気に掛けるばかりだったのか、20余年後の今、広い庭園の記憶以外は無いのである。

むしろ東京大会の後日談で、記憶に残ることがある。

無事終了に安堵していた頃、私に1本の電話があった。東京ガスの社員の方からだった。牛込警察署から彼に電話があり、クレジットカード入の財布が落とし物で届けられたがそれに彼の名刺が入っているとのこと、持ち主は海外のUIFAの会員と思われるというのである。

遡ると、新宿で海外の仲間達と食事をした店で、隣り合わせたのが東京ガスの社員の方々。お互いそこで初めて会った者同士話が弾み、名刺交換をしたのである。その流れであったか、東京ガスの建物内を共に案内して頂いたように記憶している。

ベルギーの彼女の財布に東京ガスの彼の名刺が残り、東京ガスの彼の名刺入れに私の名刺が残ったという次第。

そこで、私が警察署に出向き財布を預かることになり、実行委員長の松川さんがFAXでベルギーのメンバーに問い合わせしてくださり、一件落着となった。その後、ベルギーの彼女から美味しいベルギーチョコの一箱とアールヌーボー建築の本が私の手元に届いたのである。この本を持って、いつかブリュッセルの街を歩いてみたいと思っている。

一期一会のようにはなっているが、ベルギーの彼女は、あのエクスカージョンの仏語車に同乗していたのかも知れない、と今思い起こしている。（板東みさ子）



# 横浜市民公開シンポジウム 「すまいとまちのあるべき姿を 市民とともに考える」

Yokohama City Public Symposium  
- Thinking about What Houses and Towns Should be  
together with Citizens

- 日時：1998年9月5日(土) 14:00～16:30
- 会場：横浜ランドマークプラザ5階ランドマークホール
- テーマ：「明日のすまいとまちを考える」
- 内容：世界中から集まった建築、地域都市の環境の研究や創造に関わる女性たちが日本の旧いまち、新しいまち、東京や横浜を見学し、人と自然との共生について議論した。又、このシンポジウムは市民公開のものであり21世紀に向けて「すまいとまち」のあるべき姿、女性の建築家の役割について市民とともに考えた。

## ■プログラム

1. 開会挨拶 ド・ラ・トゥール UIFA 会長
2. 主題展開
  - ・日本のまちの感想とコメント
  - ・自国の「すまいとまちづくり」についての動向
3. 意見交換
  - ・会場の参加者との意見交換
  - ・パネリストからのコメント
4. まとめ
  - ・コーディネーター、サブコーディネーターに21世紀による「まちやすまい」の在り方。
5. 閉会挨拶 中原 UIFA JAPON 会長

## ■コーディネーター

小川信子(日本) ミルカ・プリズナコフ(米国)

## ■パネリスト

高秀秀信(日本)、クロチルデ・バイ(コートジボアール)、ガートルード・ガルスター(デンマーク)、コーネリア・チェポニク(ドイツ)、シー・ファ・ベー(韓国)、鈴木博之(日本)

## ■主催：UIFA ■共催：横浜市、(社)日本建築学会

女性は「すまい」における家族や子どもたちの問題を

一番身近に理解できる立場にいるというド・ラ・トゥールさんの挨拶にはじまり、パネリストなどから日本特に首都圏が抱えている問題が世界全体の都市の問題であることなどが問題提起された。

コーディネーターのまとめとしては自然環境を保ちながらの都市は従来の男性中心社会でなく女性参画社会にすれば世界は住みやすくなるのではないかと、先進国の過去の失敗を糧にして開発途上国も考えてほしいというまとめであった。又、歴史をなくすのではなく、伝統を踏まえて未来を考えていくことが20世紀から21世紀の橋をかけるということであった。

(会場も含め熱気ある討議内容であった。故ミルカ・プリズナコフさんや故中原 UIFA JAPON 会長のことが懐かしく思い出される。) (吉田洋子)

## 京都・奈良・神戸ツアー

### 京都・神戸

Kyoto, Nara and Kobe Tour : Kyoto, Kobe

東京大会が終了した翌早朝の新幹線で百名近くの会員が京都方面へのポストコングレスツアーに出発した。見学した寺々は数多くだったので、私達で企画で案内した所を説明しよう。

京都文化博物館は駅から北に上がった河原町三条近くにあり、戦前の銀行の建物をリニューアルした内部は、川添登氏が展示指導する京都の平安京から現代までを学べる施設だった。小物産や甘味所も館内で楽しめ便利だった。

鴨川二条大橋のほとりのホテルでの昼食時には、京都の水辺の風情をと考えていたが、折からの猛暑でそれどころではなく残念だった。

京町家は以前から知故のあった御池通りから少し下がった吉田家を見学する事ができた。二階建て、正面は店舗の典型的な町家で、通り土間、中庭、奥庭、倉々など、盛夏のしつらえ、風通し等、気候になじんだくらし



横浜市民公開シンポジウム



神戸ツアー：仮設住宅を見学に行く参加者  
(車椅子はベルギーのディータさん)



神戸の酒蔵を改装したレストランでポストコングレス  
ツアーの解散式



を見せながら話す吉田氏と夫人に、木造日本家屋の中で大勢の海外会員が背をかがめ、足音をこらして聞き取り体験していた。

宿泊した新装なった都ホテルは、建て替え後のバブルビルディングだったが、旧の茶室、日本庭園などは保存公開しており、祇園や東山の寺々も近く、辺りを探索していた会員も多かった。

清水寺、金閣寺、銀閣寺、西芳寺、二条城、西陣……その他も見学した。

次に向かった奈良での東大寺見学は 35 度を超すきびしい暑さの中ではあったが、管長が手配してくださり広域に全寺内を廻ることができた。世界の女性建築家の熱心さ、体力の強さにもおどろかされた一日となった。

神戸では、神戸メリケンパークに残されている大震災でくずれた湾岸残姿、灘のつぶれた酒蔵の再生コミュニティスペース等、阪神・淡路大震災の復興が主題となっていた。明石大橋を渡った淡路島北部のフラワーパークは、関西空港造成に運びだした土のためけずられ露出した斜面の再生であり、現場の上に立っての安藤忠雄建築研究所メンバーからの緑化、花広場など、大規模計画の説明は臨場感があった。(小島久賢)

## 「おもてなし部会」の立ち上げ

Start-up of "Omotenashi" group

1998 年に UIFA 日本大会を招聘したいと宣言したのは、その 2 年前のハンガリー UIFA 大会議事堂の壇上で事務局長が宣言。その後の 2 年間の準備期間は死にも狂いで活動に明け暮れた。まず資金計画による寄付金集めに手分けして一同が協力した。

世界からはるばる日本に集まるので、大会内容の質ばかりでなく魅力あるポストコンgressを含め、すべてにおいて本当の日本を理解していただきたいのだ。それには、『おもてなしの心』を各人が持つ必要があった。そ

こで、『おもてなし部会』を立ち上げ、縁の下の力で本当の日本大会の影の力・ワーキングチームとして成功をサポートした。おもてなしの言葉は〈もてなす〉に敬語の〈お〉を付けたもの。オリンピックを控え、現代ではおもてなしは常識語として日本ばかりか世界に通じるほどの言葉に成長したが、20 年ほど前にはとても斬新な響きやその空気さえ感じる言葉だった。

特にポストコンgress。阪神淡路大地震の爪痕が残っており、地震と建築に世界中の興味と支援の眼が集中していた。私達おもてなし部会では、関西の地を選び、日本の建築の歴史と今を観て、味わって戴くことにした。神戸、淡路、京都、奈良の 4 か所に焦点を当てた旅だ。

まずポストコンgressの総てにつき英文併記のハンドブックを作成し、日程、時間、宿泊所、案内地図、建築の図面や写真等を含め一冊の小冊子を作製した。これを片手に行動を開始した。淡路で特筆すべきは、新装の明石海峡大橋を渡り、野島断層が保存された北淡町震災記念公園を案内、地震の跡を直に触れることが出来た。本福寺、淡路夢舞台訪問は特に喜ばれたが、安藤忠雄作品は神戸でも外国人自らバスツアーを企画し見に行くというハプニングがあったことが印象に残り、これからの課題を考えさせられた。このポストコンgressを準備するにあたり、丁度 1 年前の同じ季節に、スケジュールに沿い予備旅行をしたことを思い出した。(正宗量子)

## グッズチーム

—風呂敷のお土産とコンgressバッグ—

Goods Task Team - Souvenirs of "Furoshiki" and "Congress Bag"

UIFA 第 12 回日本大会の記念品をどうするか？

大会に先がけ約 1 年前の夏から品物さがしが始まった。スコヤ、ペーパーウエイト、ルーペ、フォトフレーム、文鎮、漆器等々いろいろな意見が出た中で最後に決まったのが風呂敷であった。遠く海外から参加されるお



作成した神戸、淡路、京都、奈良のハンドブックの表紙と英文併記の内容

芹沢銈介デザインの風呂敷

お客様のお荷物の負担にならないように、なおかつ日本的なものということで選ばれた。これなら“環境共生時代の人・建築・都市”という本大会のテーマに合致するであろうし、包む以外にテーブルセンターやスカーフとしても使っていただけるであろう。小川名誉会長のご紹介により東京日本橋の風呂敷専門店美濃部商店のご協力をいただくことになった。数ある風呂敷の中から、紺地に白でいろは 47 文字を染め抜いた、人間国宝・芹沢銈介氏がデザインしたものに決定。UIFA のロゴを同じ白でコーナーに入れていただいた。記念品としての風呂敷には仏語、英語、日本語で書かれた“包む絵柄”入りの説明書を添え、大会最終日のフェアウェルパーティーでは風呂敷を使ったデモンストレーションを行った。参加者の中には早速、風呂敷をおしゃれな形に首に巻き、スカーフとして使う方も現れ、さすがと感心した。

コンgresバッグについては、A4 サイズが入る大きさとし、予算の関係で生成りの天竺木綿を使用することになった。表面には UIFA' 98 とロゴマークを入れ、裏面には協賛各社のロゴマークを並べて、広告料をいただくことに。全体的なレイアウト、色、書体などのデザインはデザイン部会におまかせし、制作は風呂敷と同じ美濃部商店にお願いした。記念品の風呂敷 300 枚、コンgresバッグ 500 枚で合計金額約 56 万円。限られた予算にもかかわらず、多くの方々のご協力のおかげでこの金額で納めることができたことに感謝している。

(河原美津子)



日本大会実行委員会の一コマ



UIFA のロゴが入ったコンgresバック



実行委員会はワークショップをくり返して意見を集めた

2002年 UIFA JAPON10周年記念@伊勢・名古屋

## UIFAの先輩から学んだこと

UIFA JAPON 10th Anniversary Commemorative Tour  
2002 to Ise and Nagoya

- Things I learned from UIFA's Senior Members

2003年4月12日(土)から16日(水)まで 名古屋能楽堂で記念特別イベントが開催された。ド・ラ・トゥール会長の記念講演、写真展、交流会と続き、翌日からは名古屋の建築探訪、締めくくりは伊勢方面へのツアーという壮大なものであった。

会長の講演『私の仕事と生活—UIFAとともに』では、ルーマニアからフランスに移った経緯や異国で仕事をするに当たり女性ということが大きなネックになったこと。それがUIFA設立の大きな動機となったことが語られた。「今でも女性であることで行動が制限されている国があるが、UIFAはもっと貢献したい、そのためにも女性が信頼されることが大切」と熱く語られた。現在、仕事をする中で女性であることの不条理を感じることは少なくなったが、今でもこのときの会長の言葉を思い出して勇気を奮い立たせることがある。

写真展「わたしにとってのユニバーサルデザイン」で様々な日常的なものを取り上げた。

提案者自らの説明付の写真展は大いに考えさせられる企画だった。私は日本の伝統的な「なます皿」に興味があり、今も使い続けているが、これも「ユニバーサルデザイン」ではないかと発表した。

建築探訪は名古屋の建築の選りすぐりを紹介した。名古屋城は戦災で焼失したが、付近には「文化のみち」として保存整備が進んでいる、大正時代の風情を残す建築が沢山残っているエリアがある。旧地方裁判所を保存した市政資料館、榎木館、武田五一設計の春田邸、豊田佐吉旧邸など。残念ながらその時に見た建築のいくつかは取り壊されている。

UIFA設立から10周年の企画は主会場を東京以外の都市で行う初めての試みだった。



UIFA 会長(右)の講演



千代区男女共同参画センターにおける10周年記念事業



伊勢ツアー



設立初期からの会員の藤田淑子さん、柳澤佐和子さんに新参者の私を加えて3人で役割を分担しながら得意な分野を担当したという思い出深い記念事業である。私は伊勢方面へは行かなかったが、真珠の産地訪問を会長がとても喜ばれたと聞いた。(谷村留都)

## UIFA JAPON 10周年記念 伊勢神宮参拝の記 UIFA JAPON 10th Anniversary -Note of the Ise-jingu Grand Shrine Worship

10周年記念イベントのクライマックスは、天照大御神を祀る皇大神宮（内宮）と、衣・食・住や産業の守り神としての豊受大神宮（外宮）の参拝だった。川添登氏、小川信子 UIFA JAPON 会長のご尽力で、短時間ながらスムーズな時が流れた。神楽殿の奥の客間では、神社本庁総長でいらした櫻井勝之進氏が私たちを出迎えて下さった。

この記念すべき訪問について、伊勢神宮広報誌『瑞垣』に、ド・ラ・トゥール会長と正宗の感想が掲載された。(正宗量子)

神宮司庁広報誌『瑞垣』196号 2003年より転載

### 一伊勢神宮を訪問して一

(※平成15年4月14日参拝 『瑞垣』編集者注)

日本を訪れた このたびの旅に際し、際立って素晴らしくまた荘厳で美しい場所を発見し知ることができました。それは伊勢神宮なのです。

庭園の敷地内にはいるや、心が「無」になり、その場に対する深い敬意の気持ち、自分の心の奥に眠る静謐な魂の開花を迎えたのでした。

この場所の その静けさと落ち着きは、我々に幸福感をもたらします。

私は、誰もがこの信心深い気持ちと 穏やかな美の空間を体験できる機会があることを祈って止みません。

ソランジュ・デルベッツ・ド・ラ・トゥール  
U.I.F.A.(国際女性建築家会議)会長

2003年4月

(原文フランス語 訳:石塚ニコラ直紀・正宗量子)

## UIFA JAPON 設立 20周年記念事業 ド・ラ・トゥール氏と行く東北の被災地訪問

UIFA JAPON 20th Anniversary Commemorative  
Project - Visit to the Areas devastated  
by the Great East Japan Earthquake  
with Mme. Solange d' Herbez de la Tour

UIFA JAPON 設立 20周年記念事業にあたり2013年5月24日～6月2日までの10日間、フランスからUIFA会長のド・ラ・トゥールさんが、今回通訳をお願いしたパリで建築事務所を営む成瀬弘さんと共に来日した。

翌25日、学士会館にて行われた通常総会後、ド・ラ・トゥールさんによる「UIFA 誕生の頃」と題した記念講演が開催された。母親の国ルーマニアで誕生した彼女は、ブカレスト工科大学で建築を学び、フランスへ移住、1950年頃自身のアトリエを設立し、建築家として活動を始めるが、女性であることを理由に仕事が順調に進まない状況があったという。女性建築家の労働環境を改善するため、1963年にUIFAを設立し、国際的な組織に発展させた。各国で開催された世界大会の様子を映像で紹介し、質疑応答へと続いた。引き続き同会場でWelcome Partyが行われ、9月のモンゴル大会やこれまでの思い出などに会話も弾み楽しいひと時を過ごした。

5月27日から3日間、総勢21名で、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災より2年2か月を経過した被災地を訪ねた。

1日目は震災よりUIFA JAPONが応援してきた岩泉に向かう。仮設住宅ができるまでの間、避難所として中心的な役割を担っていた龍泉洞温泉ホテルで昼食を採り、岩泉町役場伊達町長を訪問する。震災の被害と現状をお聞きし、ド・ラ・トゥールさんからはワインとチーズが贈られた。続いて岩泉町酪農の発祥と言われる小泉家を見学後、海沿いの小本地区へ向い沿岸部の被災地を歩き、小本駅構内での「だれでもフォトグラファ 岩泉・小本のいま 春遠からじ」展を見る。復興に向けて歩む岩泉町の「いま」の姿を住民自ら記録する写真を皆熱心



「みんなの家」で



に見た。小本仮設団地では持参した手作り和菓子とお抹茶でどこでもカフェが行われた。ド・ラ・トゥールさんは「ここに来られたことは大変嬉しい。被災後の頑張り全世界の人々が感動している」と挨拶された。宿泊先の田野畑村のホテル羅賀荘では仲居さんが、津波の直撃を受け3階まで浸水したことを震えながら話してくれた。

2日目は、田野畑村役場上机村長を訪問し、「震災後につけられた松川会長に感謝している」と語られた。木造仮設住宅や高台移転の造成地を見た後、釜石を経て陸前高田のみんなの家を見学した。伊東豊雄氏が中心になり造った10坪ほどの建築は、陸前高田の人や陸前高田を訪れる人たちの交流の場となり忙しそうだ。津波で塩害を受けた杉の柱が天に向かって伸びる中に居住空間があり、物見台からは失われた町が見渡せた。最後に陸前高田市の中心市街地から南東7kmの長洞地区の仮設、長洞元気村を訪ねた。ここは被災した住民自ら地権者と交渉し、集落内に用地を確保し一緒に生活できる26戸

の仮設住宅団地を造ったところだ。なでしこ会のめんこい女性たちの歓迎を受け、元気村の活動や高台移転計画を見聞きした。集会室にはUIFA JAPONが寄贈した太鼓も用意されていた。この日の宿泊先ベリーノホテル一関での夕食はこの旅行唯一の洋食で、ド・ラ・トゥールさんもワインを片手にゆったりと食事が楽しめた様子だった。またオーナーの斎藤さんは岩井さんとお知合いでスぺシャルデザートのおもてなしを受けることができた。

3日目は、世界遺産の毛越寺・中尊寺の他、達谷窟を見学し、浄土思想の考え方に基いて造られた理想世界を見学し、名物ハレの郷土料理の餅料理を堪能して帰京した。

帰国前の6月1日には、宿泊先のスクワール麴町内のレストランでささやかではあるが感謝の気持ち込めてFarewell Partyを開催した。

ド・ラ・トゥールさんの90歳を超えても、お元気でも何事にも好奇心を抱きチャレンジする姿に接して、大きな勇気を与えられ素晴らしい女性に見習いたいと皆思っ

UIFA20周年  
記念事業

写真で見るド・ラ・トゥール会長と行く  
東北被災地訪問の旅  
Tour to Areas devastated by the Great East Japan Earthquake with UIFA  
Founding President Solange d'Herbez de la Tour  
(岩井紘子)

2013年  
5月27日～29日

5月27日



盛岡駅集合・出発



岩泉町長を表敬訪問

5月28日



田野畑村役場を表敬訪問



田野畑村村長とド・ラ・トゥール会長



大槌町の大槌川界隈の惨状



大槌町役場の惨状



釜石駅前サンフィッシュ釜石の惨状



陸前高田市長洞の皆さんと



一関市 ベリーノホテル一関での夕食会

5月29日

たことと思う。

今回 25 周年誌を書くにあたり、陸前高田のみんなの家はかさ上げ工事で移転されること、長洞元気村の HP のトップには寄贈した太鼓が掲載されていることを知った。また復興がようやく見えてきた岩泉町は、平成 28 年 8 月の台風 10 号の豪雨で甚大な被害を受け、復旧にまだまだ時間も資金もかかる。震災から 7 年、被災からの復興 そしてコミュニティの再建等々、いまだ大きな課題が多くある。

(岸本裕子)



陸前高田市に向かう途上の「道の駅三陸」で

## UIFA20 周年記念事業 お茶目で元気なソランジュ UIFA JAPON 20th Anniversary Commemorative Project - Sweet and Energetic Mme. Solange

UIFA 会長 Solange d' Herbez de la Tour さんをお迎えして、①記念講演会@学士会館、②東日本大震災被災地視察 2 泊 3 日で岩泉町、陸前高田市他被災地をバスでの視察するスケジュールが組まれた。その企画担当者としてソランジュの爽やか、お茶目な一面に多々接した思い出が懐かしい。

まず成田空港のお迎え、長旅にもめげず元気に入国したソランジュ。松川会長との再会を全身で表現してハグ！ 穏やかな笑みでそばに立つ成瀬氏（通訳を兼ねて同行頂いたパリ在住のランドスケープアーキテクト）共々、時差ボケも感じられない張り切り方で、お迎えす



岩泉 うれいら通り商店街を見学



岩泉小本仮設住宅で住民交流会



田野畑駅近くで見た三陸鉄道列車のモニュメント



田野畑村のホテル羅賀荘にての夕食会



宮古市 たろう観光ホテルの惨状



宮古市 田老旧防潮堤水門の惨状



宮古市役所前十字路の惨状



山田町旧市街地の惨状



釜石駅前の惨状



陸前高田市  
「みんなの家」



ツアーバス内



陸前高田市長洞 UIFA 寄贈の長洞太鼓



平泉毛越寺見学



毛越寺浄土庭園にて



毛越寺達谷窟毘沙門堂



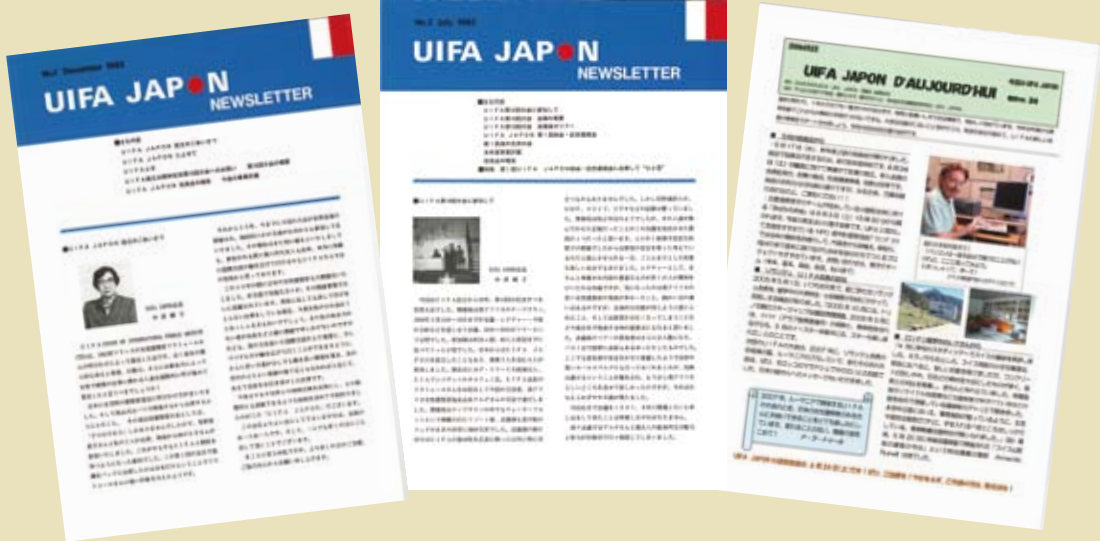
一関市世嬪の一にて最後の昼食





# 5章

## UIFA JAPON の定例活動 Chapter V UIFA JAPON's Regular Activities



左から UIFA JAPON NEWSLETTER1号、2号、UIFA JAPON D'AUJOURD'HUI（ミニニュース）復刊 No.24号



# UIFA JAPON の定例活動

## UIFA JAPON's Regular Activities

### 【解説】

UIFA JAPON は、1992年6月13日に発足し、活動の目的を次の様に定め、様々な活動を行ってきた。会則から抜粋すると以下のように書かれている。

#### 【会 則】

第4条 この会の目的は以下のとおりとする。

- (1) UIFA 活動に関する参加、協力、支援等を通じて UIFA 活動に貢献すると共に、他の海外組織との情報交流を行い、国際交流の促進を図り、技術の交流を通じて、国際社会に貢献する。
- (2) 会員相互の交流を確立し、学術および技術等の情報の交換、収集等を通じて、会員の意識の高揚と国際的理解を含め、親善に努める。

会の活動については、NEWSLETTER 第1号によると、1992年10月28日第1回役員会が、12名の役員、1名の会計監査の計13名の出席のもと行われ、今後の活動方針、役員の仕事分担、第10回 UIFA 世界大会等への参加について討議され活動方針が決められた。

今後の事業計画については、催し物として「年1回の総会・記念講演会」の開催、「年4回海外情報を収集する会」を開催予定。定期刊行物として、「NEWSLETTER 年4回」及び「年1回会員名簿」発行予定を決めている。また特別事業として、活動の記録等を継続的に行う予定を挙げた。

これまで継続されてきた定例活動は主に、「年次総会と記念講演会」、「海外交流の会」、そして不定期ながら会員の自主活動の「この指とまれ」の開催と、「NEWSLETTER (ニューズレター)」、「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI (ミニニュース)」の発行である。

総会記念講演会および海外交流の会では、国内だけでなく海外から来日した方や、海外通の方々に講師にお招きして、年3回程度開催し、勉強会をおこなっている。この指とまれば会員だれでもが企画提案し、参加者を募って実行するものである。

「NEWSLETTER (ニューズレター)」は、1992年末に第1号が発行され、1993年度4回、1994年度5回、1995・1996年度6回、1997年度5回、1998年度3回、1999年度7回、2000年度6回、2001年度3回、2002年度～2013年度4回、2014年度以降2017年度まで年3回108号まで発行されている。71+7号、83+84、100+101号は合併号で、100+101号は100号記念特集として会員の活動が紹介された。3、4、6、7、10、12、15、16号は、トピックスに特化した「D'AUJOURD'HUI」である。NEWSLETTER は、2003年から、毎年1回英文併記号となった。

「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI (ミニニュース)」は、「NEWSLETTER (ニューズレター)」のトピックスに特化した「D'AUJOURD'HUI」で始まったが、17号(2004年6月)までは発行されなかった。しかし「理事会や世界の出来事、「会員間のお知らせ版」として2004年7月14日に、ミニニュース「D'AUJOURD'HUI」復刊1号を発行、それ以降毎月発行し、2018年4月初旬に復刊160号が発行されている。

(小池和子)

## 年次総会と記念講演会

### General Meetings & Memorial Lectures

#### (1) 年次総会

年次総会は、総務担当理事と事務局が担当し、議案書や名簿を作成、案内を会員に広報して年1回開催してきた。記念すべき第1回総会は、1993年6月12日(土)

東京赤坂の氷川会館で開催された。中原会長の挨拶、役員紹介があり、現状の組織と役員の任務分担の説明があった。飯島理事の進行で議事に入り、第1号議案1992年度の活動と収支が山田理事、東理事から報告され、会計監査の安藤理事から適正正確であることが報告された。続いて第2号議案1993年度活動計画と予算が報告され承認された。以来毎年開催し、2017年7月1日(土) 日本大学理工学部8号館で第25回総会が開催された。

#### (2) 記念講演会

記念講演会は、総会後に開催され、企画は事業委員会が担当してきた。これまで25回開催され、テーマや講師、職種別は以下のとおりである。

- ①テーマ：建築と女性関連、海外の紹介、バリアフリーや環境関連、日本の女性建築家関連、日本の建築・まちづくり関係他。
- ②講師：28人。内訳：日本人25人 外国人3人（第3回リチャード・スカッフ氏「サンフランシスコにおける「アクセス」への取り組み」、第19回ドナ・デュネイ氏「未来へー女性建築家のパイオニアの肖像」、第20回ソランジュ・デルベッツ・ド・ラ・トゥール氏「UIFA誕生の頃」。
- ③職種別：建築関係11人（林昭男、吉田文子、中原暢子、富田玲子、池田武邦、尾崎利勝、菊竹清訓、榎文彦、伊東豊雄、團紀彦、妹島和世） デザイナー1人（松本哲夫）、写真家1人（吉村幸雄） 行政1人（赤松良子）、学識10人（小川信子、野村みどり、川内



第1回総会・記念講演会でUIFA JAPON オリジナルTシャツ（2500円）とトレーナー（3500円）を紹介 左端：筆者

美彦（2）、渡邊美紀、長澤泰、内田祥哉、鈴木博之、陣内秀信、齋藤公男、堂園涼子）

第1回は(財)21世紀職業財団会長を講師にお迎えして「21世紀に向け世界の女性技術者たち」というタイトルで雇用機会均等法成立までのいきさつや、21世紀に向けて女性の力の必要とされる必然性のお話をいただいた。第2回は野村みどり氏・川内 美彦氏・小川 信子氏を講師による「サンフランシスコ・オークランド・バークレーやさしい街の見聞記―」最先端のバリアフリー環境の視察の報告（視察には筆者も参加）、第3回はリチャード・スカッフ氏・川内美彦氏による「サンフランシスコにおける「アクセス」への取り組み」とバリアフリー環境がテーマ、第5回は堂園涼子氏による「点としてのMedical CrossingからCrossyardなる空間へ」。第10回は初代会長の中原暢子氏による「林・山田・中原設計同人の44年間―UFA JAPON10周年を記念して―」。第13回は名古屋で「名古屋歴史的町並み見学会（愛知万博見学を兼ねて）」尾関利勝氏。第17回は榎 文彦氏による「建築における優しさとは何か」で約350名参加。第18回は、松本哲夫氏による「デザインと機能―ヤクルトから新幹線まで―」、第21回はド・ラ・トゥール UIFA 会長による「UIFA 誕生の頃」（通訳 成瀬弘氏）。第25回は2017年7月11日に開催され、「環境と建築」（約250名参加）のタイトルで講師の妹島和世氏から自身が関わってきた豊島プロジェクトや最新作品のお話をされた。※詳細は資料3を参照のこと。

（小池和子）

### UIFA JAPON 25 周年記念講演会

## 〈妹島和世氏〉

UIFA JAPON 25th Anniversary Memorial Lecture  
by Ms.Kazuyo Sejima

UIFA JAPON 設立 25 周年にあたり、総会の記念講演を軸に何か記念的な催しを企画しようと 25 周年実行



講演後妹島和世さんを囲んで

委員会が招集され、議論を重ね、その結果、25周年記念講演会は、国際的建築家・妹島和世氏に依頼をすることとなった。大学の師である当会の小川信子名誉会長の名前を借りて、当時の会長である稲垣弘子から、まずはメールにて挨拶と講演依頼を実施。海外出張の多い妹島氏の連絡は秘書を通じてのやり取りで、一か月後ようやく快諾を得て企画チームがスタートした。会場の日本大学駿河台校舎の大教室は約250名の参加者で超満員。約半数は若い建築科の学生で、未来の建築界を担う彼らに、妹島氏の講演は大好評であったことが、企画者としてはおおきな収穫、喜びであった。

#### ◆講演内容

まず颯爽としかもフワっとした雰囲気であ場に現れた妹島氏。黒系で統一された衣装にも関わらず、強い存在感、オーラを放つ人柄にまず一撃を食らう。講演では、柔らかい口調で、「環境と建築」にご自身の強い思いを託した国内外の作品の数々が紹介され、その設計理念、構法、人々との関わり、自然との一体感、透明性などを熱く語られた。21世紀美術館の室内外空間の一体性は、地域の人々の交流、自然との融合を透明なガラス壁面で表現している。氏の代表的建築として、これからも地域のシンボリック的存在として愛されていくことであろう。また海外のロレックス・ラーニングセンターはその構造と、光を取り込むための穴が点在した室内、波のように流れる外観は、実在しているのが想像できない……という若い建築学生の声として感想が寄せられた。同感である。

一方で人々のコミュニティを意識した京都・西野山ハウスは、集合住宅でありながら、戸建て住宅のような……大きい分割されたパネルのような屋根の下に「共



創立25周年記念講演会のチラシ

に棲む」ことを意識したヒューマンスケールの作品でもある。氏の集合住宅への思いの基盤を感じることが出来た。自然環境・人々の生活・繋がり、融合性を多くの作品の中に織り込んだデザイン手法で、これからも世界を駆け巡っていく妹島和世氏の姿に拍手を送りたい。

(林屋雅江)

## 海外交流の会

### Intercultural Exchange Meetings

海外交流の会は、事業委員会が企画、事業計画を立案し、広報チラシを作成し、役割分担を役員会に諮って実施してきた。役割分担や広報は、役員を含め会員全体で協力して行っている。テーマや講師、回数は以下のとおりである。※詳細は資料を参照のこと。

#### (1) テーマ

- ①世界大会の開催国を年間テーマに決め関連するテーマ・講師で開催：ハンガリー、ウィーン、フランス、ルーマニア、アジア、韓国、モンゴル、ヴァージニア
- ②世界大会のテーマに関するテーマ・講師で開催：建築遺産の復元と再利用、環境共生、自然災害に対する女性建築家の貢献、地球温暖化における女性建築家の役割等
- ③国内外の建築・都市関連、環境関連、災害関連、高齢者福祉関連、児童・教育建築関連、造園関連他

#### (2) 講師

- ①内外のテーマ関連：学識者、建築家、建築史家、児童教育者、学校建築関連、高齢者福祉関連、大使館関係、世界大会参加会員、会員
- ②外国の方：26人・17回（1,2,3,4,5,7,8,12,13,14,18,19,31,36,49,50,53）／68回  
19回までは、講師は外国の方が12回、20回以降は5回である。(国はアメリカ・イギリス・イタリア・オランダ・韓国・スリランカ・スウェーデン・ドイツ・フラン



「水辺のまち—世界・東京そして江東」2018年3月第68回海外交流の会にて



ス・ベルギー)。

### (3) 開催回数

1993年度2回、1994年度以降2012年度まで年3回、2013年度から2017年度までは年2回開催、途中第14回は2度、回数が抜けている会が1度あり、回数では68回だが、実数で70回開催してきた。

第1回は、UIFA世界大会で顔なじみのMrs. Lilli Annを講師にお迎えし「MARVIN & Lilli Ann K. ROSENBERG 御夫妻を囲んで」というタイトルで1993年4月10日に開催。太陽や樹々や鳥、魚、貝といった自然を題材としたレリーフと、製作に市民を巻き込んだ市民参加型の活動の紹介。第2回はリニューアルなった目黒雅叙園で、漆工芸作家全 龍福氏を講師に、見学を含めた「漆を語る」を開催。第5回は日韓交流の会「家族・住まい・社会—明日のすまいを考える—」のタイトルで鈴木成文氏・金 鎮愛氏の基調講演があり、パネルディスカッションは、鈴木成文氏、韓国は金 鎮愛氏・朴 研心氏、日本は小谷部氏・中島氏で行われ、隣国韓国のことを知り得たのは有意義であったとニュースレター9号で中原会長が述べられていた。第9回は小川副会長から韓日シンポジウムについて報告があった。第13回「スリランカの建築と歴史」(チャンドリカ・ナワラットナラージャ)、第18回「国境を越えて—みかん組の設計作法と建築」(マニュエル・タルディッツ)、第28回「日本のライト—記憶と記録の間—」(谷川正巳)、第31回「施設ケアから在宅ケアへ-理論と実践」(グスタフ・ストランデン)、第42回「ルーマニアの建築—その伝統的手法と歴史的背景」、第50回「環境をデザインする」(朴賛弼)、第53回「ソランジュ UIFA 会長を迎えて」、第58回「モンゴルのコスモス—ゲルと大地とモンゴル人」(金岡秀郎)、第67回「庭と建築」(杵野俊明)、2018年3月19日の第68回海外交流の会は、「水辺のまち—世界・東京そして江東」のタイトルで開催した。(小池和子)



第56回海外交流の会資料の表紙



小金井市環境楽習館外観



小金井市楽習館内部

## 第56回海外交流の会 2012年9月8日

### 雨デモ風デモハウスと講演会

The 56th International Exchange Lecture: Comfortable Housing in both Rain and Wind and Lecture held on September 8, 2012

年間テーマ「環境」の一環として、話題の東京・小金井市に完成した通称：雨デモ風デモハウスの見学会とその理念を学ぶ講演会を企画した。

#### ◆第1部見学会：環境配慮住宅型研修施設 (通称：雨デモ風デモハウス)

この建物は1回あたりの入場者は20名までなので、2回に分けて見学会を実施した。一度に大勢の入場者があると人の放熱する熱エネルギーで、冬暖かく、夏涼しいこの施設の効果を体験できないからである。太陽の熱を電気に変換する太陽光発電システムばかりでなく、〈太陽の熱エネルギーをダイレクトに使おう〉が基本となっている。夏季、雨水を床下に設置された水袋にためて床の表面温度を25℃に保つ、冬季は天井に設置された水の流が、太陽により温められ床下の水袋を温める。さらに上水、中水、下水そして、浄水、再利用と住まいの水環境を多様に展開している。見学会は大変好評であった。

#### ◆第2部講演会：

##### 東京都市大学環境情報学部教授・宿谷昌則氏

宇宙環境に始まり、私たちを取り巻く身近な住環境へとわかりやすく、エクセルギーの理論を説明。

- ・「快適さ」とは、室温ではなく、室内表面温度が制御された温熱環境で、人体への熱負荷が小さい環境である。雨デモ風デモハウスのような温熱環境であれば、長時間滞在しても「冷房病」や「だるさ」を感じない室内環境となり、生物としての人間の体を健康に保つ、「快適」な環境であるということができる。
- ・エネルギーの「質」については、冷暖房や給湯等の



温度変換のエネルギーとしては、質の高い電気エネルギーを使う必要はなく、太陽熱等、身近な質の低いエネルギーを効率よく使うことで充分である。

1部2部共に密度の濃い海外交流の会であった。

(林屋雅江・矢賀部雅子)

## 第63回海外交流の会 2015年7月4日 ライトの落水荘と ユーソニアンハウス

The 63th International Exchange Lecture:  
Fallingwater and Yousonian House by F.L.Wright

2015年7月4日(土)午後、自由学園明日館の大教室(夕リアセン)に建築家 遠藤 現 氏をお招きした。現氏は、フランク・ロイド・ライトの高弟遠藤新氏の孫にあたり、折しも、ライト建築ツアーの引率者として現地取材から帰国したばかり。築80年近く経た名作の姿を窺える講演会である。

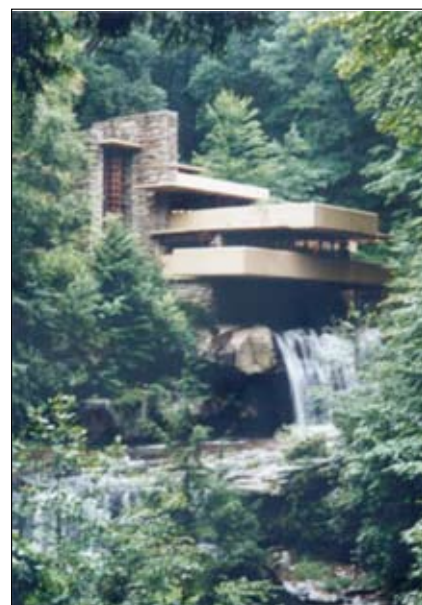
落水荘は、ライトが1935年設計のエドガー カウフマンの別荘で、自然との調和を唱える有機的建築の最高傑作と言われている。深い緑の山の中、力強く張り出したテラスの水平線、石積みの外壁の垂直線、川と滝を取り込んだ設計は言わずと知れたこと。それはさておき、内部は、広々とした居間の天井は窓際で低く抑えられ、視線は窓へ、外部の林へと誘われる。石張りの床、積み重なった自然石の柱・壁。暖炉の足元には元々そこにあった剥き出し岩盤。まるで自然の中に居ようだ。壁と窓との入隅では、サッシの縦枠もなくガラスが壁に直接つきささり、石積みの壁がそのまま外部へと延びて行く。内外の空間が遮るものもなく繋がっている。階下に行く階段のガラスの天井を開けると川のせせらぎの音が流れてくると言う。住まうものに、自然共に生き、自然を慈しむ事を教えてくれる建物のように思う。細部では、両面共に開くコーナーのスチールサッシ、石積みの壁に食い込ませた書斎のデスク、入隅の本棚など、細やかな気遣いと鋭い感性を遠藤先生の写真は語る。



遠藤 現氏



ハイガン邸 (ユーソニアンハウス)



落水荘

次紹介のハイガン邸は、1954年設計、落水荘よりそう遠くない所に建つユーソニアンハウスである。低い屋根で水平線を強調した伸びやかな外観だ。深い庇に連続した六角形のトップライト。それが屋内にも続き、石張りの床に六角形の光を内外に連ねて落としている。サッシなどの重厚さ、三角形に分割された内部トップライトガラスの繊細さ、自然積みのような凹凸のある石積み外壁、浮いたような屋根、なんとも優雅な住宅である。

本では知ることができない落水荘の細部とハイガン邸の内外を見せて頂き、あたかも現地の行ったようにワクワクし、ライトの世界に魅了された2時間であった。

(加部千賀子)

## 「この指とまれ!」

"Kono yubi tomare!" (Let's participate in) project

「この指とまれ!」は会員だれでもが企画提案し、参加者を募って実行するものである。

1999年2月発行のニューズレター33号で、新シリーズとしてはじまった。きっかけはクロアチアの Sena Seklic さんから、クロアチア語・英語訳「女性建築家の歴史について」の書籍が届き、日本語への翻訳依頼があり、東会員が呼びかけ「セナさんの本を読む会」を発足させ、2005年2月の62号で「建築の理論と実践における女性の歴史」(セナ・セクリック著)(日本語訳による)の発行が報告された。その後海外の医療施設見学

や「女性と建築」勉強会の呼びかけがあったが実現しなかった。1999年9月26日「喜多方押し掛けワークショップ」から、会員からの呼び掛けで不定期に実施。広報部会（現広報・渉外委員会）主催の見学会は、「埼玉県立大学」からである。直近では、2018年3月19日第68回海外交流の会開催当日時に、テーマ「水辺のまちー世界・東京そして江東」に連動した「清澄白河プチ散歩 - 水辺を活かして地元で活動する」（江東区）を須永会員企画で実施した。

見学先等は以下のとおりである。

#### (1) 建築家の自邸

中原暢子邸（浦和市）、林昌二・雅子邸（文京区）

#### (2) まちづくり・福祉行政、医療・福祉・教育施設

鷹巣訪問（北秋田市）、埼玉県立大学（越谷市）、日下部記念病院（山梨市）、高齢者グループハウス『ほっと館』（江戸川区）、「世田谷区立小学校のトイレ改修を見る」（世田谷区）、宮代町立小学校他（埼玉県宮代町）、ルンビニー幼稚園（葛飾区）、「風の道」まちづくりと蔵前干潟ツアー（埼玉県栗橋町）、三和町営団住宅（蕨市）、デンマークの住まいとまち（講座・千代田区）、カップマルタンの休憩小屋と足袋づくり・行田市見学（行田市）、晩秋の愛知を楽しむ（名古屋・有松・瀬戸）、UR都市機構技術管理分室（八王子市）、清澄白河プチ散歩（江東区）

#### (3) 保存・継承について

喜多方煉瓦蔵ワークショップ（喜多方市）、旧安田楠雄邸見学会（文京区）、加地邸見学会（神奈川県葉山）、「建築家土浦亀城・信子夫妻の提案」ミュージアムトーク参加（武蔵小金井市）、天竜の森（浜松市）、煉瓦職人に聞く（江東区）、旧朝倉家住宅とヒルサイドテラス（渋谷区）、小笠原伯爵邸（新宿区）、国際子ども図書館（台東区）、レンガを愛して（インタビュー・江東区）、豊洲プロジェクトと運河ルネサンス（江東区）、問われ続ける軍艦島の魅力ー歴史遺産〈軍艦島〉公開シンポジウム（足立区）、正宗徳三郎展・府中美術館（府中市）

#### (4) 建築作品

小林純子の思い出横丁トイレ（新宿区）、新木場木材会館（江東区）、邦久庵・池田武邦邸（長崎市西海市）、すみだ北斎美術館（墨田区）

#### (5) 被災地視察他

国連防災世界会議 in 仙台フォーラム&被災地視察（仙台市）、耐震診断の基礎を学ぶ（講座・千代田区）

#### (6) 世界大会テーマ

モンゴルの遊牧民 - 食と住まい（講座・新宿区）

（小池和子）

## 「この指とまれ!」の活動のすすめ

### ①『邦久庵』訪問 ②土浦亀城・信子展の紹介

Recommendable Project, "Kono yubi tomare!" - ① Visit to Hokyuan Club ② Introduction of Tsuchiura Kameki & Nobuko Exhibition

UIFA JAPON 会員は、誰でも発案し、行きたい街や見学したい建築、各種の講演会等を皆に声をかけることが出来る。事業委員会や総務がその纏め役を組織としてサポートすることもある。勤めた者自らが手をあげ、「この指とまれ!」を企画運営することが出来る。

これまでに数多くの企画提案があった。私が提案した2例を紹介する。

①建築家・池田武邦氏設計の『邦久庵』見学（2006年7月23日～30日）

九州大村湾、琵琶の首鼻という半島に建つ、茅葺屋根の先生の別宅の家事労働圏設計を依頼された。先生は日本初の高層ビルである霞が関ビルはじめ、京王プラザや三井ビルを手掛けた現代建築のトップリーダーだが、晩年になり九州の地に真逆のエコ住宅を建てた。お蔭で多くのエコ住宅を学ぶ事ができた。伝統の茅葺屋根技術を継承したい為の新築で、かなり遠路だが、30名近い参加者があった。

②『憧れのモダン住宅展—建築家土浦亀城・信子夫妻



池田武邦設計「邦久庵」外観（左）、リビングから大村湾に続くデッキ（右）



の提案』の見学（2014年4月26日）

小金井市にある、江戸東京たてもの園の20周年記念としての企画だった。土浦亀城夫妻は、大正、昭和初期にかけアメリカのフランク・ロイド・ライトの事務所建築を学び、アメリカの進んだ家政学を学んだ信子夫人は生活の中の細部まで女性の視点で設計した。このご夫妻の自邸は、高低差を生かし、有機的に段差を利用し自然に足腰を鍛える工夫が済み、お二人共に98歳の長寿を全うされた。現在、東京都の有形文化財に指定されている。この住宅を受け継いだ中村常子氏は93歳。腐朽の見られる木造建築に住みつつ継承する難しさに直面、人道的にサポートしている。

この展示会場の中心には、拡大された模型があり、周囲に設計図面が廻り、実物の家具や椅子、画家でもある信子夫人のデッサンや油絵の抽象画が展示されていた。このモダニズム住宅の日本における歴史的価値と女性の視点から設計された乾式構造住宅を是非見学すべきと思い、『この指とまれ』を企画したのである。

「この指」に是非止まり、各会員全員が企画提案し、会員の交流を深めたいものだ。（正宗量子）

## 「この指とまれ！」 歴史遺産〈軍艦島〉 公開シンポジウム&展示会にあたって

### 問い続ける軍艦島

"Kono yubi tomare!": Open Symposium and  
Exhibition of Historical Heritage, Gunkanjima  
- What still draws people to Gunkanjima

軍艦島がユネスコ世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の一つとして登録された事を記念して、2016年2月27日(土)北千住の東京電機大学で、公開シンポジウムが開かれた。同大学阿久井研究室が1975年から10年間にわたるデザインサーベいを元に、阿久井先生を始め著名な専門家3人を迎えてのパネルディスカッションである。UIFAでは、「この指とまれ！」に取り上げて、

会員とその友人など12名が参加した。

長崎県沖に浮かぶ周長約1.2キロの小さな島・端島<sup>ハシマ</sup>は、その外観から軍艦島と呼ばれている。南北480m×東西160mの岩礁の上に、日本最初のRCアパートの30号棟をはじめ70棟を超えるアパートが林立している。

1974年春、海底炭鉱として知られる端島は閉山し、その3年後の第4回調査の時、私は阿久井ゼミOBとして参加した。島は起伏の多い地盤なのに苦も無く、楽しく刺激的に歩いた事が強く印象に残っている。

軍艦島の特徴は、島ならではの建物配置にあると言う。高層なのにどの階も地盤に繋がっている事だ。斜面地に建築する場合、一般的には斜面と平行のひな壇状に配置するが、ここでは崖に対して直角に配置。超級の台風時の防潮対策のために棟の妻面を海側に向け、反対の妻面は尾根の岩盤に向かい、岩盤に腰掛けたように建てている。

一方、住まい方にも特徴があった。高密度でしかも、住居にも職場にもヒエラルキーがありながら、「戦後の軍艦島は、想像以上に住みやすい所だった」と阿久井・片寄両先生の見解だ。それは、危険を伴う炭鉱での生活や超破壊力の台風対策などで培われた島民のコミュニティ・連帯感に因るものである。相手を思いやる日本人精神がヒエラルキーを超えて島民全員の共通意識だったからだろう。

これまで建築や都市デザインを模索し続けて久しいが、再開発において人を圧倒する迫力は備わっても、人を癒すことがおざなりになっているように感じる。経済効率優先で作られてきた現代社会に、軍艦島は警告を発信しているように思える。それは計画的に次々と建てられたのではなく、島の状況・要求に応じて、島民主体で増殖していったプロセスにあるのかもしれない。風化していく軍艦島であるが、私達に重い問いかけをしているように思う。（加部千賀子）



土浦邸の階段



土浦邸の台所



軍艦島シンポジウム風景



軍艦島模型



# NEWSLETTER

## NEWSLETTER

ニュースレターの発行姿勢は、第1号の中原暢子会長の挨拶の中にあり、記事の書き手によれば、「肩の力を抜いた国際交流の場」として発足していますので、この「緩やかなつながり」という姿勢が、ニュースレターの一番の特徴〈今までどんな活動をし、どんなことを考えてきたのか。その時々思いつきのようなテーマであっても、時代の空気や、一貫した姿勢を映している〉としている。87号の「ニュースレターの変遷から見るUIFAJAPON」をもとに、それ以降108号(2018.12.25発行)までの掲載内容をみると以下の通りである。

※詳細は本資料編6とHPを参照のこと。

### (1) UIFA 世界大会

記事として最も多い。2号の「UIFA10回南ア大会の報告」に始まり、2～3年毎に開催される大会に合せ特集が組まれている。特に1998年のUIFA日本大会の前後は、大会のテーマ「環境共生時代の人・建築・都市」に関連した特集、大会後援者への「ザ・インタビュー」、「日本大会が終わって」とほぼ3年間の取り組みが掲載されている。その後も、「ウィーン大会」「トゥールーズ大会」「ルーマニア大会」「ソウル大会」「モンゴル大会」「ヴァージニア大会(+IAWA設立30周年)」と、大会テーマに沿った特集や、開催国の文化に関する特集を取り上げている。

### (2) 総会・記念講演会、海外交流の会報告

活動の骨格ともいえるべき、「年次総会・記念講演会」及び「海外交流の会」報告は、すべて記録されている。「海外交流の会」の講演内容は、UIFA世界大会のテーマと連動していることが多い。

### (3) 会員の自己紹介と活動報告

会員同士の理解と交流を深めることがニュースレターの目的のひとつ。「自己紹介」は創刊当時から繰り返し記載され「私らしく働く」「会員の仕事」「会員の活動」

等シリーズ化された。62号から連載している「UIFA会員の本」の記事も会員紹介の一端を担う。

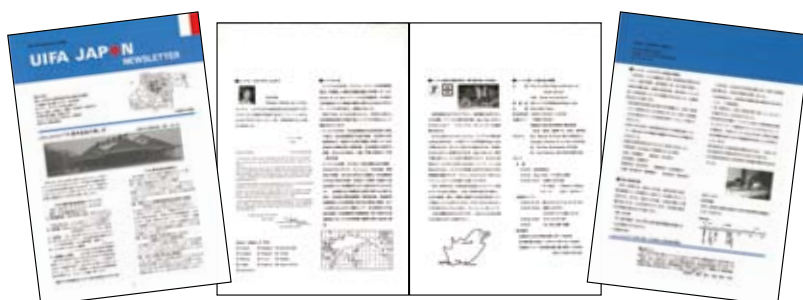
### (4) 海外の会員の活動報告

最も多いのは、ド・ラ・トゥール UIFA 会長。その他、日本大会で出会った海外会員を紹介したシリーズ「広がるレースワーク」が36号～46号まで続いた。この「レースワークをつなげる」という考え方は、83+84合併号において、「人と人をつなぐ仕組み：レースワークを広げるために」と題した特集となり、日本の会員活動(災害復興、ASWA組、大塚女子アパート、三和町を語り継ぐ)を紹介している。

### (5) テーマをもった連載

「ユニバーサル・デザインを考える」が38号～56号まで続き、設立10周年記念行事の「ユニバーサル・デザイン写真展」へと展開。その後56号から「学校トイレを考える」が始まり、自主活動グループ「ASWA組」の活動へとつながった。また、新潟地震及び東日本大震災・熊本地震の復興支援は、65号から「災害復興見守りチーム」の活動の報告が始まり、どこでもカフェ、だれでもフォトグラファ、どこでもカフェ+住宅相談会等復興支援の活動等が毎回報告されている。76号「魅力的なりノバージョン」では、全国の事例を取り上げ、保存・活用の大切さを訴えている。もう一つのテーマは、「環境」で、「持続可能な水の安全」、79号の「環境を活かす」、80号の「環境を読む」、82号の特集「森林と建築」、108号「豊洲地区運河ルネサンス活動等」など水や水辺関連がある。他に106号「ダイバーショナルセラピー」は来るべき超高齢社会を見据えた報告となっている。

(小池和子)



NEWSLETTER 1号



NEWSLETTER 3号



# 広報：NEWSLETTER、パンフレット、広報・渉外委員会

PR: NEWSLETTERS, Brochures and PR Committee

## ◆ NEWSLETTER の発行

各号履歴はホームページからダウンロード出来るようにしてある。1992年1号から2018年107号まで26年間の掲載済み。108号はこれから掲載、109号は編集中心というのがこの原稿執筆時点の状況である。現在年3回発行。1回は日英併記号。表紙の色彩は本部にちなんでトリコロール。デザインは若干変化したが基本は崩さず概ね定型化で発行コストの安定化を図っている。ホームページ掲載の原則は正会員に各号発送後の一定時間経緯後としている。全号見直してみると今回の記念誌に全号収録しても面白く、その時代が見える要素が十分ある。

特記すべきは、UIFA JAPON と災害。取り上げ方も支援の継続性もあり、自主活動の臨場感のあるニュースとなっている。基本姿勢は2011年5月25日87号で松川前会長の寄稿から要約すると、「2004年のツールーズ大会では、ヨーロッパの大洪水のあとを受けて〈災害と女性〉が大会のテーマとなり、女性の参画がどんなに大切か、大会宣言にも盛り込まれた。専門家、研究にかかわる女性の集まる会として、災害からの復興に向けての長い道のりを、被災地の皆様とともに歩み、お手伝いしていきたい。小さな会だからこそ出来ることもあると私は思っている」と記している。災害とUIFAはたえず向き合ってきたといえる。「できることをする」という無理の無いスタンスが継続性を高め地場にたった活動を多くの会員参加で行っている。その記録は貴重である。

災害と女性の課題は今も深く、住宅や町のプランニングをしつつも、心身に迫る苦悩に向き合うことも求められてくる。壊れたものはハードだけではつukれない。お茶会のようなソフトの活動、コミュニケーションの場づくりは大いに役立つ。今後の記事の幅をもっと広げたい

ものだ。一方、全会員の寄稿を期待したい。

## ◆パンフレットの発行とホームページ

広報・渉外委員会参加会員によるデザインはさすがのもの。デザイナーとしての本領を発揮したチームプレイで出来上がったパンフレットはいい線いっている。地図にモンゴル、ヴァージニア（米）などまだ記載されていない国もあるが、ホームページ上の開催一覧は更新してある。要閲覧。

## ◆広報・渉外委員会

各号発行に当たっては、メールによるやり取りは頻繁に行う。また各号一度は面子を合わせたコミュニケーションを図る。大いに議論し、その結果、企画に手直しや、今！掲載すべき記事を追加したりする。集合場所は東京都ウイメンズプラザ。会員登録してロッカーも活用。久しぶりの会合の後は、やや遅い夜となるがワインをいっばいいただきながらコミュニケーション。これもまた会議の一部分で、次号のアイデアや意見をかわす場でもある。広報・渉外委員は、NEWSLETTER 発行のほかに、パンフレットのお世話やこの指とまれの発案や企画も提案したりもする。楽しいことが継続の基本と心得ているので、メンバー全員が出席できなくてもメールを駆使して発行へ漕ぎ着く。緩やかに、それぞれができることをしている。みなさん能力は高くいいセンスである。安心快適な委員会。参加大歓迎。（渡邊喜代美）

# 広報・NEWSLETTER 等

PR Activities - NEWSLETTER, etc.

NEWSLETTER の編集に関わるようになって結構経つんだな、と今回の原稿依頼をいただいたとき最初に感じた。編集長も何度かやらせていただいたが、毎度諸先輩方の多大なサポートのおかげでなんとか発行できている。原稿締切りや校了のタイミングが海外にいる時と重なったこともあった。ホテルの薄暗い照明の中で、手書きのレイアウトをカメラで撮影して、メール添付したこ



NEWSLETTER 54号



NEWSLETTER 70号



NEWSLETTER 100-101号



NEWSLETTER 102号

ともあった。最近は、電話もメールも日本にいるのと変わらずやり取りできる。そういうときは極力平静を装うが、内心ドキドキだ。

文字数や写真数が限られる中、編集段階からかわることで、それ以上の情報に触れられるのはとても貴重だと思っている。なかなかお会いする機会のない方の考えを伺うこともできる。NEWSLETTER で取り上げた内容の中で最も印象に残るのは震災関連の内容だが、直接お話しを伺っていると、ご縁のある被災地への率直な思いと、建築士としての冷静な視点が同時にみえて、私も感情移入しつつも、さすがだな、と思いながら伺っている。座談会をするというので、なぜか奈良まで行って、スカイプで東京の会場とつないだこともあった。

編集会議でも、障子1枚で倒壊を免れた家があった、とか、紙面に入りきれない情報がたくさん出てくる。継続的に情報を発信してくださっている被災地通信を含め、他人事ではないから、自分が被災したときどうしたらいいだろうと考えるきっかけになっている。

復興ハウスのプラン集を特集で取り上げた時は、これこそ UIFA JAPON ! と思った。一つ一つ自分が生活しているようにイメージしながら拝見した。夫婦別室になっているプランがいくつかあったが、高齢者住宅と伺っていたこともあって、「片方が知らないうちに冷たくなっちゃったらどうするのか?」と正直思った。後日伺ったお宅で(もう少しやんわりと)質問してみたら、相手を起こさないなど、お互い気を使わないため、とのこと。

いろいろなニーズに合わせた細やかな配慮を改めて感じた。(飯田とわ)



奈良と東京を繋いだスカイプ座談会

## 私にとってのNEWSLETTER 編集

### NEWSLETTER Editing for Me

ここ数年は仕事が自分のキャパを越えてしまい、UIFA JAPON (以下 UJ) には全く顔を出せていない。そんな訳で私が NEWSLETTER の編集に密度濃く関わらせていただいていた 56 号から 99 号迄、10 年間余のことを書かせていただく。

私が UJ に入った時は、編集会議にはプロの編集者を 1 人お願いしていた。

この編集プロは、私が加入して最初の予算編成時に「もう私が居なくても皆さんだけで十分編集できる」とおっしゃって抜けられていった。その言葉に、建築も紙面も同じ「ものづくり」として取り組む広報メンバー、そして UJ 会員のモチベーションの高さを思い知った気がしたものだ。

編集プロがいなくなっても編集スタイルは踏襲された。当時は毎月第 1 土曜日午前中に、表参道のウィメンズプラザに集まり、次号の編集作業と次々号以降の企画会議を行っていた。

会員の皆さんが多忙な中で書いて下さった原稿を読み、小見出しを考えたり、どんなニュアンスを伝えたいのか、執筆者の意図がよりよく正しく伝わるよう話し合う。場合によっては執筆者に連絡を取り確認し、更に一部加筆や修正をお願いすることもある。それら修正原稿を紙面に割り付け、翌月の編集会議で確認。執筆者に校正をお願いし、戻ってきたものを印刷所に返し、更に校正を重ねて校了するまで濃密なメール会議が行われる。

同時に、次々号以降の企画が進む。事業委員会や災害見守りチーム等の動向を踏まえ、広報として今、発信したい・すべきことは何か、関連して会員が読みたくなる情報は何か等を考え、執筆者やテーマ、記事割を決め、発行までのスケジュールリングをして執筆依頼をしていく。

このルーティンが年 3 回(私が携わった当初は年 4 回)、回って NEWSLETTER が会員の手元に届く。現在



はもう少し違っているかもしれないが。

私にとっては結構な労力を必要とする。でも、魅力的な刺激に満ちた時間だった。広報・渉外メンバーも含めた UJ 会員の気力・体力そして感性に圧倒させられるところが UJ の定例活動なのかもしれない。今の私には、少しそれをする余裕がないけれど。(石川和代)

## ミニニュース

### Mini-news (UIFA JAPON D'AUJOURD'HUI)

広報部会(現広報・渉外委員会)が発行している「NEWS LETTER」に加えて、発行した「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI」(ミニニュース)については、「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI」の3号に計画の主旨が記載されている。A4 サイズ 2 枚両面で発行。

#### 広報活動計画

広報では、会員間のコミュニケーションをより密にし、会の活性化と充実化を目指して、これまで発行の NEWS LETTER に加え、新しいミニ情報紙 UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI を発行することにしました。この新しい紙面では、テーマに基づく会員情報を中心に海外交流の会等催物の予告、今後の会の活動計画等 UP TO DATE な話題をお届けします。情報の提供、寄稿などは是非ご協力ください。

出典：「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI 3号」より

ミニ情報誌「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI」の発行は3、4、6、7、10、12、15、16号にとどまり、以後広報・渉外委員会から発行はされなかった。

その後、「会の活動がよくわからない」、「理事になってわかるようになった」という声に答えるため、2004年7月14日ミニニュース「UIFA JAPON D' AUJOURD' HUI」復刊1号が発行された。それ以来、総務担当理事+事務局が交代で担当し「月報」という形で発行し、タイムリーな情報を提供してきた。2011

年度からは8月を除いて年11回になり、2018年4月2日、復刊160号を発行した。

毎回、広報活動計画の主旨「テーマに基づく会員情報を中心に海外交流の会等催物の予告、今後の会の活動計画等 UP TO DATE な話題」を届けている。

掲載記事は、一番多いのは「役員会報告」。次いで「海外交流の会の案内と報告」、「この指止まれ」、「総会・記念講演会の案内と報告」、「世界大会の案内・報告」(トゥールーズ、ブカレスト、ソウル、モンゴル、ヴァージニア、UIA 東京大会)など。「会員の海外便り」(スウェーデン、ドレスデン、コロラド)。「被災地支援活動の案内・報告」(中越地震被災地、東日本大震災被災地、熊本地震、スマトラ、トルコ等)。「会員からの海外建築事情」、「ド・ラ・トゥール UIFA 会長の消息」、「IAWA 関連」、「周年行事の案内・報告」(10周年、15周年、25周年)、「会員及び会員活動の紹介」(著作も含む)等。最近は、被災地支援の中で「どこでもカフェ」「だれでもフォトグラフ」が地元の自主チームに移行しその後の様子や、賞の受賞などの報告、被災地向け高齢者向け住宅の提案やそれを活用した住宅相談など、職能を生かした活動の様子が報告されている。

掲載された地域は、スウェーデン、ドイツ、アメリカ、フランス、イギリス、イタリア、オーストリア、ルーマニア、ポルトガル、ベトナム、タイ、スリランカ、シンガポール、インドネシア、トルコ、モンゴル、韓国、中国などである。国内においては、会員の所在地を含め多岐にわたり、行動範囲の広さが分かる。(小池和子)



ミニニュース UIFA JAPON D'AUJOURD'HUI 左から 45 号、75 号、96 号、115 号、129 号、159 号



## 事業委員会

### —素晴らしい講師の方々との出会い

Project Committee - Greate Lecturers whom We met

事業委員を担当させていただくようになり、いつも素晴らしい講師の方を探されるグループリーダー、委員の皆様のアナウンサーの張り方に感銘している。第66回海外交流の会では、高齢者福祉の分野でオーストラリアとの架け橋を担ってられる芹澤隆子氏をお迎えし、貴重なお話をお伺いすることができた。

芹澤氏は、オーストラリアのダイバーショナルセラピーの日本への普及活動を熱心に行なっている。オーストラリアでは、「老いることは楽しむことであり、耐えることではない」という言葉に代表されるように、すべての人が主体的に生きることを楽しむという前向きな思想がある。ダイバーショナルセラピーとは、各個人がいかなる状態にあっても自分らしくよりよく生きたいと願望を実現する機会を持てるよう、その独自性と個性を尊重し、援助するために行なう活動である。施設では孤立している人たちに対してコミュニケーションや様々な働きかけにより、家庭的な雰囲気を作り出し、施設の職員にとっても心地よい職場であることを目指している。

オーストラリアの施設の写真を拝見し、施設らしくない温かみのある雰囲気の中で、あたかも家庭にいるかのごとく暮らしている様子から、建築のデザインの重要性を再認識した。ドールセラピーがいかに高齢者の方にとって心の支えになるかという話も伺うことができた。

ノーリフティングポリシーは、日本との違いを感じた。オーストラリアでは職場で入居者を抱え上げることが禁止されているとのこと。建築の中で簡易なリフトのための収納スペースも確保されており、職員にとってもやさしい職場となっている。

福祉分野での貴重なお話を拝聴し、その中で建築に携わるものとしてどのような形で活動していくことが必要なのか、これからの課題と考えている。(小野全子)



芹澤隆子氏の講演会

## UIFA JAPONと事務局との縁

### —25年を振り返って

Close ties between UIFA JAPON and it's Secretariat  
-Looking back over the Past 25 Years

私とUIFA JAPONと事務局との関わりは、1993年6月12日UIFA JAPONの発足式となる第1回総会に向けてUIFA JAPONの事務局が、私が在籍していた松川淳子相談役(当時総務担当理事)の(株)生活構造研究所に置かれたことに尽きる。それ以来25年に渡り、事務局業務を担ってきた。

当初の業務は、1993年7月発行のニューズレター2号によると、総務担当は「会員証の発行」・「名簿の発行」(現在隔年)・「各種通信業務」。私は入退会の対応、会員番号・会員証の発注・発送、名簿発行に向け会員の情報整理・発行・送付、内外の対応に必要な資料の作成・発送、総会案内や議案書、役員会資料作成、総会・記念講演会・海外交流の会の参加名簿作成、それらの保存及び内外の問合せへの対応等に携わってきた。

「役員会」は1992年10月28日に第1回がルコ会議室で開催、翌1993年3月5日の第5回役員会以降、毎月(株)生活構造研究所を定例会場に開催。2004年度から8月は休み、2014年度から隔月で約280回開催してきた。

議案書は、山田規矩子監査役が第1回総会で作成した様式を踏襲。毎月のミニニュースのチェックや印刷・発送・保存、ニューズレターの発送・保存も業務の一つだ。

UIFA JAPONの活動の幅が広がるにつれ、事務局の役割も、作業も増えてきている。事務局業務が25年間続けられたのは、途中所員の半澤麻希子が加わったが、役員会準備や不在時の対応など(株)生活構造研究所の方々の日頃の様々な協力があってからだ。心から感謝したい。

また一会員としても日本大会に参加し、東京建築士会の発表を担い、海外の建築関係者との出会いは刺激的だった。日本での日頃の活動を身近に見聞きし、参加もしてきた。今後も活動に期待し、業務を行っていききたい。

(小池和子)



事務局における筆者





# 6章

## UIFA世界大会への参加

### —UIFA JAPONとJPN—

#### Chapter VI

#### Participation in UIFA Congress as UIFA JAPON



2013年第17回UIFA世界大会ウランバートル（モンゴル）  
国会議事堂チンギスハーンの銅像の前、参加者全員で記念撮影

# UIFA 世界大会への参加

## Participation in UIFA Congress

### [ 解 説 ]

UIFA は、女性建築家の国際的組織として創設され、数年間隔で開催される世界大会は、建築・都市計画・環境保護等の専門的技術を持つ女性たちが、世界各地の情報を集め、各分野での女性の活躍拡大と能力の周知、レベル向上を目指すとともに、国際的な友好を図る機会となっている。

1963年にパリの第1回世界大会から2015年のヴァージニア大会まで各国で開催され、18回を重ねている。

ここでは、後半の第10回ケープタウン大会から第18回ヴァージニア大会までの思い出を参加者たちが綴っている。

下記の表は、大会ごとにテーマ、参加国数、参加者数を一覧表にしたものである。開催国(市)の決定は主に前回の大会で意思表示、もしくは採択が行われるが、日本開催の場合は前々回に意思表示、前回で採択(決定)が行われている。

その時期の国際的課題をテーマにして、大学や有名施設を会場に、一週間程度の会議が行われる。

プログラムの概要は、前日には登録手続きやウェルカムパーティ、会議初日には、ドラ・トゥール会長や開催都市の首長、建設系大臣等のあいさつがあり、続いて代表的専門家による基調講演、参加者による各国の現状、研究や活動の成果についてスピーチと展示等がある。毎回、活発な意見交換が行われ、世界の各分野の情報を共有することができる。また周辺の有名な建築物や都市環境のツアーも合わせて行われ、ほぼ毎晩に各種のパーティがあり、名物料理や伝統芸能のアトラクション等を楽しみ、とくに最終日前夜のお別れパーティは一層盛り上がり、友情をさらに深め合う機会となっている。全員参加の最終会議では、発表内容の総括と評価を行い、次回開催国の立候補等も行われ、大会宣言を採択し、別れを惜しみつつ終了する。開催中に全員そろった記念撮影も行っている。

故国に帰る者は空港行きのバスに、引き続きポストコンgress・ツアーに参加する者は専用バスに乗り、開催国の名建築や旧跡をめぐる旅に出る。残った開催国のメンバーは見えなくなるまで手を振って見送ってくれる。

この会議では、先端技術の実践報告や発展途上国の支援活動等、地球全般にわたる課題を明らかにして問題意識を共有、女性技術者が世界に貢献していくことを決議している。

毎回、日本からの参加者は多く、世界の友人との再会を楽しんでいる人も多い。開催国が決まるとその国の歴史や建築都市の特徴等を調べ、あいさつ等の簡単な言葉も覚えたり、著名人による講演会も開催して事前学習を行っている。

世界の建築・都市・環境等の専門家と連日にわたり一緒に過ごすことは、仲間意識を共有し、さらなる探求心が湧き、忘れがたい日々となっている。

お国柄を反映した歓迎や会議の準備のご苦勞は、東京大会を経験した私たちには、一層ありがたく、感慨深く感じられる。次回の開催通知が待ち遠しいこの頃である。

尚、本章では1998年第12回大会(日本)は既に第4章で取り上げたので、これを除いている。(石川彌栄子)

UIFA 世界大会一覧表 (第10回～18回)

開催年	回数	開催市〈国〉	日程	テーマ・参加国数・参加者数(日本)
1993	第10回	ケープタウン 〈南アフリカ〉	1993.3.14～19(会議) 1993.3.20～29(ツアー)	「変貌する社会」／日本大会申し入れ 20か国 80人(6人)
1996	第11回	ブダペスト 〈ハンガリー〉	1996.9.1～8(会議) 1996.9.9～11(ウィーン・ツアー)	「国家的建築遺産の復元と再生」／日本大会採択 35か国 200人(29人)
1998	第12回	東京〈日本〉	1998.9.1～7(会議) 1998.9.8～12(ツアー)	「環境共生時代の人・建築・都市」 31か国 268人(154人)他に同伴者24名
2001	第13回	ウィーン 〈オーストリア〉	2001.7.1～6(会議) 2001.7.7～9(ツアー)	「人生の活動的時期の前と後」 39か国 140人(30人うち同伴者5人・非会員2名)
2004	第14回	トゥールーズ 〈フランス〉	2004.9.1～5(会議) 2004.9.6～8(ツアー)	「女性建築家の現状」「女性建築家が社会的認知を得るまで」「自然災害における女性建築家の役割」 約20か国 約80人(18名)
2007	第15回	ブカレスト 〈ルーマニア〉	2007.10.1～6(会議) 2007.10.7～14(ツアー)	「アイデンティティ」 25か国 125人(24人・同伴者とも)
2010	第16回	ソウル〈韓国〉	2010.10.4～8(会議) 2010.10.9～13(ツアー)	Green Environment (緑の環境) 18か国 174人(27人うち非会員6名)
2013	第17回	ウランバートル 〈モンゴル〉	2013.9.1～5(会議) 2013.9.6～8(ツアー)	「地球温暖化と戦う女性建築家」 8か国 モンゴル以外36人(15人)
2015	第18回	ヴァージニア 〈アメリカ〉	2015.7.26～31(会議) 2015.7.31～8.3(ツアー)	「建築関連領域における女性の役割と力」 14か国 70人(14人)



1993年第10回UIFA世界大会ケープタウン(南アフリカ)  
**喜望峰のまちで**  
The 10th UIFA Congress 1993  
in Cape town, South Africa  
- Memories in the town of the "Cape of Good Hope"

第10回ケープタウン大会は、1993年3月14日～19日に開催された。ポストゴングレスのツアーは、3月20日から29日までというかなり長期の大会であった。私自身は参加していない。UIFAとしてはめずらしく3月に開催されるということで、当時の私には、年度末に会社を空けることなど、考えられなかったためである。UIFA JAPONからは、中原暢子会長（当時）をはじめ、飯島静江さん、小渡佳代子さん宮崎玲子さん、佐藤久美子さんたちが参加された。「変貌する社会」というのがテーマだった。

この大会は、すでに1988年の第8回ワシントンDC大会の終了後の事務局会議で、ケープタウン大会の事務局長を務めることになったゲルダさんから提案されていた。「南アフリカ連邦で」という未知の場所の大会は、多くの会員にとってはとても魅力的で、ド・ラ・トゥール会長は、「キリンを見たい！」などと、大会後のツアーに心躍らせていた。

しかし大会への道筋は一直線にはいかなかった。南アフリカ連邦は、長く続いたアパルトヘイトで知られており、そこで国際会議を開くことは多くの先進国からは敬遠されていたのである。開催にこぎつけた大会の直前、アパルトヘイトは解除され、長らく拘束されていたマンデラ大統領は釈放されたが、大会が近づくと北欧勢、ことにノルウェーの会員たちからは、「ボイコットすべきだ！」というメッセージが送られてきた。その影響もあってか、参加者は多くなかったというのが小渡さんの話である。南アフリカ連邦国内の治安面も危ぶまれたが、結局大会は予定通り開催され、中原先生の帰国談では、「ツアーは、強行軍だったが、大変楽しかった。こじんまりした大会の良さもあった」ということだった。



スピーチする飯島さん



ハンガリー大会。日本担当日の議長席

中原先生は、ご自身の設計された茶室について発表され、飯島さんは、この大会で「1997年か1998年には、日本で世界大会を開催したい」という演説をしている。まだ準備ゼロの状態だったが、日本大会開催の心づもりはこの大会から始まっている。（松川淳子）

1996年第11回UIFA世界大会 ブダペスト(ハンガリー)

**1998年日本大会の実現を決めて**

The 11th UIFA Congress 1996 in Budapest, Hungary  
- Resolution for 1988 UIFA Congress in Japan

ブダペスト(ハンガリー)大会は、UIFA JAPONにとって大変重要な大会だった。この大会で、UIFA JAPONは、「日本支部」として、UIFAの大会を日本に招致することを意思表示し、正式に受け入れられたからである。

招致パンフレットを用意し、会場の入り口で配った。次回大会を日本で、と、中原先生が表明し、日本在住でハンガリー出身の先生をお招きして、ハンガリー語の勉強をして参加したので、私は、習いたてのハンガリー語を使って、「2年後に日本で会いましょう!!」と呼びかけた（あれから20年以上経ったいまでもこれだけはハンガリー語で言える!）。結果として、第12回大会は2年後に日本で開催されることに決定し、ハンガリー大会の実行委員長、マリア・フェイエッシュさんと中原会長との間でフラッグの交換をするということも大会の最後に行われたのである。

ハンガリーは、多くの会員にとって初めて訪問する国であり、フランスや米国という一般的な「西洋」イメージとまたちがった文化はとても魅力的で、UIFAに参加していることによってこそ出来る特別の経験だと思えた。ちょうど民主化への道を急速に辿り始め、「観光立国」の旗印をかかげて進もうとしているときでもあったので、グイヤシュを筆頭とする食べ物はいずれもおいしく、また、多くの古い建造物がお化粧直しの最中だったりして興味深く、東洋と西洋のはざまにある美しい国を



上 ハンガリー大会「2年後に日本で会いましょう!!」左からド・ラ・トゥール会長、実行委員長フェイエッシュさん、中原、松川



右 フラッグの交換

満喫することができた。

「発表」で使われた国会議事堂は、マジヤールの絢爛豪華な内装に包まれた立派なもので、進行役は、国別に日替わりで登壇するというきちんとしたものだ。日本からは、中原会長、飯島さん、東さん、私の4人が壇上に上がり、進行を務めた。私が自宅のお土産用に買った卓上ベルを飯島さんが鳴らして、発表の終了時間を告げることにしたのだが、少しも守られず、延々と発表を続ける人もいたりして困ったことも、楽しい思い出。

(松川淳子)

## 2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア) ウィーンのポストモダンな建築 フンデルトヴァッサーハウス

The 13th UIFA Congress 2001 in Vienna, Austria  
- Hundertwasserhaus, post-modern Architecture  
in Vienna

ウィーン大会での私の楽しみはセッション後の見学会にあった。

私はこれまで共同住宅の設計を主としており、設計するにあたり第一に考えたのは住戸とその周囲の自然環境の融合であった。

そんな中、7月5日に「フンデルトヴァッサーハウス」を見学することになった。フンデルトヴァッサーの作品は「家と人と自然の共存」がテーマと知って興味を持った。この建物は従来の伝統的な建築の規格と常識に当てはまらない変わった建物で、フリーハンドで描いた線画がそのまま建物になったかような曲線で構成されている。色とりどりの壁面、大小様々な窓。陶器の線で区切られた線が各住戸の境界を示していると想像できる。また、庭のない住宅には屋根やベランダに草木を植えるという

自由な発想で緑に囲まれた住宅とも評されている。

内部は1階のピロ



フンデルトヴァッサーハウス

ティ一部分と入り口ホールを見学しただけだが、一般の住居とは異なり、柱は一つとして同じ形のものはなく太さや曲がり具合が不規則で、色塗られたものや陶器を貼ったものなど視覚的にも楽しいものである。

おそらく住戸も同じ型のもは一つもないだろう。ひとたび建物が完成すれば、周囲の環境に溶け込み、日常に覆われて建物をつくるまでの緊張感や葛藤は内に秘められ見えなくなっていく。しかしながら、ここの住人は誰もがこのアパートに住んでいることを誇りに思っているだろう。私は集合住宅の住環境は、そこに住む人々が成長していく過程で彼らに与える影響が大きいと思っている。フンデルトヴァッサーハウスの示す遊び心、強烈な個性、自然との結び付きは、子供の頃に感じた純粋な好奇心と高揚感にも似た感情を呼び起こすものであった。ウィーンの人々にとっては最高のものであり、生活を楽ませるものだろうと思う。

この建物のこれまでの歴史がまさにその力強さを発揮し、本当の美しさが記憶に残る建物であった。

(栗山楊子)

## 2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア) 夫婦で参加した大会

The 13 UIFA Congress 2001 in Vienna, Austria  
- Attendance with my Husband

17年前「Before and After the Active Life」というテーマで開催された大会に、夫婦共大学を退職(2001.03)した機会に、新しい空気に触れてみたいと参加した。

セッションでは身近な生活環境に関連した発表が印象に残った。見学会では花の装飾・彫刻等が素晴らしいファサードの建築が魅力的な街並を構成している様子を鑑賞

した。夜はグリンツィングでワインを味わい、パワフルな女性に囲まれ、主人は踊ったりビデオで撮影した



シュタインホーフ教会外観  
(冊子の表紙より)

りすっかり仲間に入り込んでいた。ポストコングレスツアーではドナウ河を遊覧船で上り、河沿いのメルク修道院などへ立寄り、モーツアルトの生家のあるザルツブルグへ向かった。

特に印象に残ったのはオットーワグナーのシュタインホーフ教会（1907年竣工）である。この世界的に有名な建築は、広大な敷地に建てられた2000床の精神病院の中にある患者のための礼拝堂なのである。精神病対策に捧げられた人々の願いが込められている。

この写真は代表的な外観であり、内部空間は金と白の装飾や木製の家具、素晴らしいステンドグラスからの柔らかい光と調和した見事な空間であった。このやさしい空間で精神を病んだ人々が心を癒され、社会に復帰出来るのかと考えさせられた。

我々夫婦はこれまで医療・福祉・住宅など心を癒す生活環境作りに取り組み、ホスピスや精神病院などで、いかにストレスを緩和出来るか検討して来た。シュタインホーフ教会の明るい空間に共感し影響された結果、某精神病院の一角に患者・家族・スタッフの心を癒してくれる場としてのコミュニティ室を設けたほどである。

大会終了後、UIFA副会長のマリアさん（ハンガリー）と出会い、我々のブタペスト行きを知り、3人とスーツケースで満杯のマイカーで、東欧の景色を楽しみながら無事マリオットホテルに送って頂いた。名古屋の病院視察団と合流しブタペストからプラハへ、各国のすばらしい仲間と交流出来た17日間の実り多い旅であった。

（柳澤佐和子）

## 2001年第13回UIFA世界大会 ウィーン(オーストリア)

### ウィーン世界大会の記憶

The 13 UIFA Congress 2001 in Vienna, Austria  
- Memories of the UIFA Congress Vienna

21世紀最初のUIFA世界大会は、2001年7月1日～6日にウィーンで行われた。テーマは、「人生の活動



ウィーン世界大会の事務局会議

的な時期の前と後」。約140名、39国からの参加者により、盛大なウェルカムパーティで開催された。前回の日本大会で顔見知りの方々のエールの交換も華やぎを見せ、旅の疲れ等全く感じない華やかな会場であった。5・6日の午前は大会最重要課題の研究発表が行われた。内容は各国で差があり、女性に対する社会意識が伺えた。ポーランドの地下鉄関連計画等は、果敢な彼女の勇気に感銘を受けた。ウィーンは知られた名建築が多く、巨大で重厚な石造建築に圧倒される。旧市内を位置づけるリンクの中にゴシック様式のシュテファン大聖堂の巨大で美しい屋根と尖塔の高さに暫し茫然。内部の、ステンドグラスの美しさ・壮大なパイプオルガンに魅せられる。前庭は人々が憩える広場が有り、市見学の馬車が古風なコスチュームの馭者と共に出内迎えてくれる。ロココ様式のオペラ座。毎年正月2日に楽しむウィーンフィルの楽友協会やアールヌーボーのオットーワグナー設計のカールスプラッツ駅舎を今回は見落す。同氏の郵便局は巨大で美しく、アルミニウム等を用いた室内・天井の高さにも驚く。彼の別邸であったフックスミュージアムと精神病院の教会は、クリムトを思い起こす華やかさがあつた。我々のホテルは、森近くの見晴らしの良い処で、朝食は何時も屋上のテラスで、遠方に広がる緑豊かな住宅地を眺めながら楽しんだ。

ポストコングレスの旅は、楽聖モーツアルトの故郷ザルツブルグであった。ドナウ河を船で向かうと、歴史を忍ばせる巨大な古城・緑青に彩られた立派な尖塔を連ねた寺院の数々。これらは隣国ドイツに対峙する城塞都市としての歴史を物語る風景でもある。山が近いこの街は、花々に飾られた何層かのバルコニーを持つ、大きい妻入り型の民家やホテルが、広々とした草原の中に山麓まで続く。街角には、卵の殻に可憐な花を描いき、リボンに通した民芸品店などが旅人を楽しませてくれた。

（田中美恵子）



ウィーン世界大会オフィシャル・オープニング



## 2004年第14回UIFA世界大会 トゥールーズ(フランス) ヨーロッパの甚大な自然災害に接して

The 14th UIFA Congress 2004 in Toulouse, France  
- Seeing Devastated Europe by Heavy Natural Disasters

第14回世界大会は2004年9月1日～5日トゥールーズ(フランス)で開催された。大会テーマは ①「女性建築家の現状」 ②「女性建築家が社会的認知を得るまで」 ③「自然災害における建築家の役割」の三本である。参加者は20カ国約80名、日本から18名参加。

発表タイトル数は合計約23。日本からは、「女性建築家たちの現在・過去・未来—UIFA JAPONの10年のあゆみを振り返りながら—」(UIFA JAPON)、「家族が生き残るための共同作戦—保険か疎開か」(中野晶子)、「世界の震災復興活動に学びながら」(松川淳子)の計3題が発表された。

私は世界大会初参加なので、パネル展示に参加した。展示テーマは自由で、オブジェから街づくりまで様々な取り組みのパネルがロビーに展示された。日本のパネルは石川(彌)、小渡、中野、正宗、松川、稲垣の6点と、UIFA JAPONのパネル。自然素材、文化の伝承、働く女性への支援、コミュニティ、集合住宅計画、災害復興支援等、女性の視点を活かした取り組みのパネルが多く、UIFA会員が幅広い分野で活躍していることが分かった。

発表では持続的な降雨により、エルベ川などが氾濫し、ヨーロッパの広範囲を襲った洪水。地下鉄や地下室を多く持つ都市部での被害の甚大さが論じられた。ゴムボートで避難する住民の写真が印象に残る。日本の都市部も地下鉄や地下街が縦横無尽に広がり、対策が気になった。地震の多発するイランの被災地支援等も興味深かった。

ポストコンGRESツアーは9月6日～8日の2泊3日。バス1台で南西フランスのコルドからアルピ、カルカソンヌを廻った。画家ロートレックの生まれ故郷のアルピの旧市街地は赤レンガ造りで、店舗の看板もアイアンで統一され、店の内容がそれぞれデザインされていて美



展示パネルの前で

しかった。約40人の各国UIFA会員が1台のバスに乗り、昼食も夕食も共に歓談しながらゆったり過ごし、仕事の事、家族や子育て等の雑談にお国柄も覗き、ポストコンGRESツアーの醍醐味を感じた。会議の途中抜け出し4人で聖地ルルドに行き、先輩に叱られたのも今では良い思い出である。(稲垣弘子)

## 2004年第14回UIFA世界大会 トゥールーズ(フランス) 歴史と大人のセンス溢れるまち

The 14th UIFA Congress 2004 in Toulouse, France  
- Town with Old History and Mature Charm

2004年9月、前回のウィーン大会に続いて2回目の参加、今でも楽しかったという記憶が蘇る。ガラスを多用した先進的なデザインの主会場、会議の合間の楽しいランチタイム、会議の前に、いきなりダンスが始まってびっくりしたこと、歴史のある重厚な市庁舎でのカジュアルで暖かな雰囲気のパarty、フェアウェルpartyで食べたびっくりするほど大きなフォアグラのステーキ、等々思い出は尽きない。

人との出会いも有意義であった。以前から評判を聞いていたヴァージニア工科大学のドナ・デュネイさんに出会えたこと。デンマークのアリスさんの60年代の集合住宅の改修の手法から、生活者の発想で建築と向かい合う姿勢に、国が違っても女性らしい共通点があることがわかった。小川信子先生は手の届かない、恐れ多い先生という印象であったが、同じホテルで一緒に食事をしながらお話しする機会が多く、初めて普通にお話ができるようになった。先生の友人の在スウェーデンの陶芸家藤井エミさんの存在感も衝撃的だった。

ツアータイムで見学した「セルナン教会」はロマネスク的な素朴さが残るゴシック様式で重厚感のあるスタイルは迫力があり、「ジャコバン修道院」はゴシック様式の教会堂よりも付属する修道院の回廊が心に残る素晴らしい空間だった。



ウェルカムパーティで旧交を温める会員



会議の前に突然始まったダンス

## 2005年 ド・ラ・トゥールさんの「勲章」

Primal Medal, "Prize of Legion d'Honneur" awarded to Mme. Solange D' Herbez de la Tour in 2005

2005年3月に、パリのド・ラ・トゥールさんから「レジオン・ドヌール勲章をもらうことになった。お祝いのパーティーに来てほしい」と招待状をいただいた。さて、「そういわれても…都心の会場でやるから、というのとは違う、パリでやるのでしょうか…」と迷ったが、せっかくのお祝いだから、と、行く決心をし、「スウェーデンに行っている時なので、そこから行くわ!」という小川先生とパリで合流することにした。

授与式は4月5日、パリの7区にある国土交通省で行われた。すでにレジオン・ドヌールのオフィシェの勲章は持っていたド・ラ・トゥールさんだが、今回はその上の位のコマンドゥール位を授与されることになったのだった。大臣、ジル・ド・ロピアン氏はド・ラ・トゥール会長の略歴と、この分野に進む女性がほんの一握りだったころから長年にわたって仕事を続け、女性たちの連帯を助け、世界の女性を組織化し、女性の社会進出と貢献を見える形にしたことを紹介し、ド・ラ・トゥール会長は答礼でこれまでの年月を振り返りなが



ジル・ド・ロピアン大臣と

左 会長の胸にかけられたコマンドゥール位の勲章

ら、今は建築や都市計画に携わる友人たちもこのように増えていると述べ、「日本からはるばるこの式に参加してくれる友人もあることを誇りに思っている、日本は特に女性の建築家の組織化に関しては歴史がある」とコメントして私たちをねぎらってくださいました。白に近い生成りのワンピースによく映える真っ赤なりボンのついた大きな勲章が首にかけられ、花束贈呈がすむとあとは祝宴になった。200人を越える参加者、ハンガリーのマリア・フェイエッシュさん、ドイツのウーテ・ヴェストロームさん、イスラエルのショシャーナさんをはじめ、ヨーロッパを中心として世界から駆けつけたUIFAのメンバーに囲まれ、ド・ラ・トゥール会長は、晴れ晴れとした様子で、私に「この友人たちこそ私の勲章」と囁いた。この一言も忘れられない。(松川淳子)

数人で出かけた近郊の世界遺産、カルカソンヌのコムタル城はかつてスペインとの戦いにおいて重要な場所であったが、今は観光客の憩いの場となつてにぎわっていた。ローテックの生家があるアルビーの街、それらの街へ向かう車窓からの風景、など南仏の観光も大いに楽しんだ。印象的だったのは、トゥルーズを流れるガロンヌ川やミディ運河など自然の景観と土木工事、建築が一体となって風景を作っている様子だ。それはカルカソンヌの駅前のホテルや駅舎のデザインにもみられたが、古いものと新しいもののミックス加減が絶妙で洗練された大人のセンスが感じられた。(谷村留都)



バステルで栄えた豪商の旧館、アセザ館でのフェアウェルパーティの様子

## 2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア) 世界の同好者と自己存在を見つめる ルーマニアの旅

The 15th UIFA Congress 2007 in Bukarest, Romania  
- Romania Tour to take a look at myself again  
together with fellows around the world

2007年10月1日より6日間、首都ブカレストに滞在、旧市街「バルカンの小パリ」を歩き、会議・スタディーツアーに参加した。昼間より道路を囲い、掘り起して遺産調査、穏やかな時間が流れていた。

ルーマニアでは17~19世紀の建築が、一部建築当



ルーマニア大会オフィシャル・オープニング 右から2番目ド・ラ・トゥール会長、右端ガブレア実行委員長



時の姿をとどめ、町のベースとなっている。Razvan Theodorescu 氏（ルーマニアの歴史家）は、ルーマニアには、全ての建築様式があり、小さなヨーロッパのレプリカと言えとの事。タタール人、イタリア人、アルメニア人、カトリック、プロテスタント、ビザンチン、バロック、ゴシック、前衛も。民族、信条、建築様式、共に多様性を受け入れてきた。ルーマニアのアイデンティティは、東ラテン系でありながら西に目を向けてきた歴史にあり、地理を横糸に、時代を縦糸に織りなす小ヨーロッパ的宇宙にある。

今回訪れたイオン・ミンク都市建築大学、アテネ音楽堂、農民博物館、モゴショアヤ宮殿は、いずれも石造りのファサードで、建築様式を表し、ギリシャ・ローマの古典に目を向けた建物と言っている。一方、ブカレスト中心部より北へ約2km、ヘラストラウス湖畔にある農村博物館には、18.19世紀のルーマニアの農村の住いを再現し、広大な屋外に300棟近い木造家屋がある。豊かな森林資源に恵まれた木造文化で、自然素材、気候及び地形を活かしてきた歴史を知ることができる。10月の晴天、洋風モミジが黄色に紅葉、大きな懐に私たちは包み込まれた。

チャウシェスク共産時代は、パリに倣った都市軸をつくり、凱旋門と直進する大通りの先にヨーロッパ第1の大規模建築、国民の館を建設、大きな影響力を与えた。1989年政変、2007年EU加盟、(文化の)修復作業に力を注ぐ現在のルーマニアに世界が学ぶことは多い。参加25ヶ国・参加者約125人、せめぎ合う多様性を内包する文化の中、民族のアイデンティティを尊重し、共通認識を模索するとき、各地で類似の問題に直面している。国際女性建築家会議 — 旅の総括はいつも次なる旅への始まりである。(御船杏里)



ルーマニア世界大会全員集合

2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア)

## 大会と『東方への旅』

The 15th UIFA Congress 2007 in Bucharest, Romania  
- Congress & "The Journey of the Orient"

2007年、1997年ブダペスト(ハンガリー)大会に続き2度目の海外大会、ブカレスト(ルーマニア)大会へ参加した。

事前に海外交流の会企画で太田邦夫先生から、ルーマニアの木造民家の講義を受ける。

ハンガリーよりさらに東に位置する国、旧共産圏、黒海に面し、歴史が厚い層となっている地、戦前は栄華を極めた国だ。ブカレスト市内を、イオン・ミンク都市建築大学、農民博物館、農村博物館、と会場をめぐる道中やスタディツアーで、チャウシェスク独裁政権時代の気配、戦前の栄華を残す瀟洒な館群のエリアと、崩れつつある左官壁や、地下鉄主要駅の動かないエスカレーターなどのコントラストが印象的で、街のそこらじゅうで、再開発か、発掘作業か、道路は掘り返され、その場所の由来となる歴史を記した標識が併設されていた。

ルーマニアはド・ラ・トゥール会長の故郷でもあり、会長の思い入れを、大会委員長のマリアさんが中心となって、ルーマニアらしい演出が展開されていた。

ルーマニアUIFAのポスターセッションは、ルーマニアの女性建築家ヘンリエッタ・デラブランシー・ギボリー。戦前、戦間期と活躍した女性建築家のパイオニアで、今はブルガリアの領土となっている黒海の沿岸都市バルチックにバルカンハウスといわれる建物を多く残している。2015年のヴァージニア大会でマリア・ウルマ教授のプレゼンテーションもあった。その年太田先生と旅したブルガリアで同じく黒海に立ち、「持ち上げられ(浮



遊感)、大きなバルコニー(大きな窓)を持つ、東方の建築様式」が、東方を旅した同時

イオン・ミンク都市建築大学にて(右:筆者)



代のコルビジェを大いに刺激した話は印象深かった。

ハンガリーに続く東方の国を、ルーマニアの会員たちが、黒海の町コンスタンツァ、古都ブラショフ、オルソドックスと語られるルーマニア正教の教会、ニャムツの修道院に泊、大屋根をいただく壁画のある修道院群を案内してくれた。西方と異なる東方を体感した大会だった。  
(井出幸子)

## 2007年第15回UIFA世界大会 ブカレスト(ルーマニア) ルーマニアのおみやげ 「しわとりクリーム」

The 15th UIFA Congress 2007 in Bucharest, Romania  
- Romania Souvenir "Anti-Wrinkle Face Cream"

ルーマニア大会では、法末での活動を発表しようと、見守チーム(寺本、松川、宮本、安武、森田)がミーティングを幾度となく行っていた。そんなある日、行けない私を気づかってか、「ルーマニアって何かおみやげあるかな?」という話しになり、松川さんが「そういえば有名なしわとりクリームがあったと思う」と、教えてくれた。

ルーマニア大会後のミーティングで本当にその「しわとりクリーム」をいただいた。聞くところによると、日本チームはそのしわとりクリームをある薬局で競って買い求め、そのお店のクリームを買い占めてしまったそうである—あまり時間も無かったうえ、お土産としてふさわしかったのかもしれない。それとも、皆、気になっていたのか……うふふー。

さて、そのクリームの効果は?

「素晴らしかった」宣伝のように、目元にピンとハリが蘇り、塗るだけで、目元にぐんぐん入り込んで内側から肌を持ち上げてくれる感じ、とても気に入って使い果たしてしまっただけ。そのクリームを使っている時の私はしわ一つなく、間違えなくピチピチだった。もうとっくに無い。今も使っていれば……大分違ったのではないか?もっと美しかったのではないか?と思うことがある。

どなたかルーマニアに行かれるご予定の方がおられた



宿泊したホテルで日本からの参加者集合

らまたお願いしたい。

製品名は「ジェロビタル」だったか? (森田美紀)

## 2010年第16回UIFA世界大会 ソウル(韓国) 湖畔の看板に記されていた言葉

Attendance at the 16th UIFA Congress 2010 in Seoul,  
Korea - Words Written on a Sign Board

ソウル大会の最終日、ホテルの部屋割が変更されモンゴルの人と同室になる。二人とも母国語しか話せない者同士……どうなることかと思案したが、同じ人間同士!

何とかなるものである。手真似足真似に加え、つたない絵を導入してのコミュニケーションで、次の朝には二人で散歩。

言葉は通じなくとも心が通じ、3年後のウランバートル大会で再会! その時には日本語のできる人まで同行してくれていて、楽しく嬉しいひと時を過ごすことができた。

ハプニングは時としてプレゼントを運んでくれるものである。ソウル大会では何物にも代えられぬ貴重な経験を得ることができた。

散歩した湖畔にあった看板に記されていた言葉を記しておこう。

### 六然 — 自分自身を守る指針 —

- 一、自処超然  
自ら処するに超然
- 一、対人霽然  
人に温和に接して
- 一、無事澄然  
無事の時には雑念を取り除き
- 一、有事敢然  
事ある時には勇敢に対処して
- 一、得意淡然  
成功した時は淡々と行動して
- 一、失意泰然  
失意に陥った時はゆったりと落ち着いて行動しなさい

……どこの国にも通じること。

(矢賀部雅子)



散歩したホテル周辺の湖畔

## 2010年第16回UIFA世界大会 ソウル(韓国)

### 参加をきっかけに

The 16th UIFA Congress 2010 in Seoul, Korea  
- With the Participation in the Congress as Momentum

私がUIFAに入るきっかけとなったのは、中野晶子さんに誘われ、ソウル大会に参加したことだった。もう8年前になる。40年程昔、私が設計同人に雑務として働いていた時、中原暢子先生がイランにいらした話や、船でパリに渡航された話は聞いたことがあったが、まだUIFA JAPONが結成されてなく、離職後事務所に行くこともなく、中原先生からこの会について伺うことはなかった。先生のご逝去後のお誘いに縁を感じての参加だった。

まだ、会員でなかったが、市内ツアーに参加し、清溪川(チョンゲチョン)散策と東大門のザハ・ハディド設計のデザインプラザ建設現場見学は面白かった。清溪川は戦前より暗渠になり、その上に高速道路が造られていた。これらを移設し清流を取戻し、街の中に安らぎの散策路がつくられていた。

日本の日本橋も同じように景色を復原できないかなと思ったが、その後、UIFA会員の須永淑子さんが江東区で「水辺の会」の活動をしていることを知った。

また、記念講演で斎藤公男先生が「是非東京でザハ・ハディド設計の国立競技場を見たかった」と話され、その秋ソウルに行く機会があり、完成されたデザインセンターを見に行った。意外に内部は、外部のボリュームある曲面とは違いあっさりしている。デザインセンターも訪れる人が多く賑わっていた。廻りの街は夜遅くまで服、装飾品やブランド品を売るお店が多く、日によっては24時間営業の時があり夜ほど人出が多い。

様々なきっかけとなったソウル大会、私事だが、この後韓国料理とポジャギ(韓国パッチワーク)を習い始めた。偶々良い韓国料理の先生にお目にかかれたからだが、ポジャギも同じ先生に習っている。教室で韓国の旅に訪



ソウル大会会場にて記念撮影

れることもある。ソウル大会の時と違い日本からの観光客が減り飛行機の便数が少なくなっている。両国関係悪化や韓国の物価高などが原因と思われるが残念である。我々もUIFA 韓国の人ともっと交流できれば良いと思う。(薄井温子)

## 2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル)

### 大会に参加して

The 17th UIFA Congress 2013 in Ulan Bator, Mongolia  
- Impression at the Congress

東日本大震災2年後の2013年8/31~9/10、ウランバートルで開催されたUIFA第17回世界大会 モンゴル大会に参加した。UIFA JAPONとしては、発表並びに展示者の松川、正宗、稲垣、宮本、安武、山本、矢賀部、小渡、吉田(洋)、北本、井出、薄井等の他、小川、山田そして初参加の岩井ら総勢22名が参加した。初めて踏むモンゴル大地、期待に胸が膨らむ。首都ウランバートルの道路等基盤整備はまだまだだったが思いの外、ビルが建てこむ都会であった。

モンゴル語、日本語、フランス語の3か国語での数々の研究発表や、合間の昼夜様々な交流パーティがなされた。日本からは東日本大震災でのボランティア活動“どこでもカフェ”“だれでもフォトグラファ”“新地町における住宅相談”についての発表の外、宮本、安武、山本、矢賀部さんらの個人研究発表が通訳を介してなされ、別棟では矢賀部、小渡、吉田さんらのポスターパネル展示が行われた。

まだまだ発展途上の首都ウランバートルだが、郊外での交流会会場への道々や観光、宿泊先への道々は果てしなく続く大草原。はるかかなたのすそ野に点在する過密住宅群を目の当たりにすると政治、経済、教育格差、貧富格差が如実に見えるが、モンゴルは世界が注目する鉱石、石油等の資源王国。パオと遊牧民のみを想定していたモンゴルは、希望と熱気に溢れた気高く誇り高い国民



ウランバートルのコンサートホール

であることを知り、心地よいカルチャーショックを覚えた。日本からの参加がなかったら、何とも心もとない世界大会ではあったが、政財界をも巻き込んだモンゴル女性建築家のパワーには圧倒され通し。それにしても、あの大草原での待望の観光用パオでの宿泊体験や、遊牧民の生活空間見物や、乗馬体験など、あらゆる事が日本とはまるで違うスケール感、人間の原点を彷彿とさせる安堵感を覚えたものだ。モンゴルの未来が楽しみである。(岩井紘子)

## 2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル) 壮大な草原と砂漠の国

The 17th UIFA Congress 2013 in Ulan Bator, Mongolia  
- Country with Vast Prairie and Desert

中扉の写真はモンゴル大会の参加者集合写真である。ウランバートルの首長も鎮座し、行政も巻き込み、成功におわった様子がかげえる。

ここに写っているかは不明だが、北朝鮮の女性も数名参加していた。韓国人とは話をしていたものの、トイレでさえ単独行動はせず硬い表情ではあった。しかしニュースで見るような特殊な雰囲気はここにはなく、一参加者。国際会議の良い点は、行った国を知る事と開催国にアピールできること、それに似た仕事に従事する世界中の人たちと会えることである。北朝鮮に女性の建築家がいても当然だが、私には想像力が足りなかった。

この件で自分の俯瞰性のなさを反省したが、モンゴルの草原と砂漠はもっと壮大で、星空の美しさと360度の地平線は忘れることが出来ない。

会議自体も日本メンバーの発表、海外のメンバーの発表、共に興味深く、ドイツの研究者がされたウランバートルの都市計画についての発表が、遊牧民を定住させるべく開発が進んでいるがその手法で住民は幸せなのか？、というテーマが面白かった。

日本でも7名の方(松川氏、正宗氏、稲垣氏、宮本氏、



ものづくり大学OGの活躍  
発表者にはモンゴル文字で書かれた名前の額が渡された

安武氏、山本氏、矢賀部氏)が発表された。

中でも自身が参加した「Housing consultation in Shinchi-machi, Fukushima Pref.(新地町住宅相談)」の発表については、日本の実情と共にUIFA JAPONの活動を知っていただく良い機会をうれしく拝聴することができた。スペシャリストとしての復興支援ができる場としてメンバーが集まったという熱量のある発表であった。

モンゴル大会のテーマは「地球温暖化における女性建築家の役割」であったが、何よりこの発表に同行できるのと、Solange d' Herbez de la Tour 会長にお会いできるということが参加の後押しとなった。モンゴルの方の発表で、太陽光を生かしたZERO BUILDINGの発表は、形状の発想がユニークで参考になった。

モンゴル大会は、色々な意味で視野と視点が広がる素敵な機会をいただいた。(近藤真記子)

## 2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル) 大会に参加して

The 17th UIFA Congress 2013 in Ulan Bator, Mongolia  
- Impression at the Congress

私にとって初めてのUIFA世界大会。大会の会場はモンゴルの英雄チンギスハーンの銅像が正面にある国会議事堂の中である。普通では絶対入ることが出来ない。もちろん、入退場のセキュリティチェックは厳しかった。世界大会の魅力はなんと言ってもこれである。また、開催国や参加国を知る良い機会でもある。

大会では参加各国女性建築家の発表、パネル展示、交流会等を通して大いに刺激を受けた。そして、英語力をもっと身につけなくてはと痛感した。それにしても日本からの会員発表は準備が充分なされており皆さん流暢な英語で発表し、他の国々人たちに強い関心を持たれた。交流会では言葉が満足に通じなくても楽しかった。

愛知二人組は往復3万円の飛行機に乗り、宿泊した



会場の様子



ウランバートル大会の開会式



宿は怪しいホテル。普通のホテルとラブホテルが階は分けているが一緒の建物。どうりで夜間も出入りが多いはず。東京組より早く出発した私達は次の日、夜行列車の寝台車に乗って砂漠へ行った。宿（ゲル）へは真っ暗な時間に到着し、あたりに光が全くない闇の中。天の川とはこういうものだったのかと夜空を眺めた。日本で山に登り、星がきれいと感じて見るのとは全く違った。ほんとうに川だった。飽きずに眺めた。そして、朝起きて扉を開けたらそこは地平線が広がる砂漠のど真ん中だった。ゲルは床暖房付きで快適であった。観光用ではあるが現地の遊牧民を訪ねて砂漠を走った。ナビも無く、何の目印も無いのに方角が良く分かれると感心。ソーラーパネルが一枚備えられていた。ゲル生活の見方が変わった。別の日、あこがれの大草原へ行った。その中に立つガラス張りゲル(移動できない?からコテージと言うべきか)に宿泊。もちろん床暖房、トイレ、バスタブ付き。ガラスの開口部はとても広く中から大草原を見ながらお風呂にも入れる。あ～贅沢。疲れ果て深い眠りに落ちた。でもどうしてこんなに感性が合うのかと思ったら日本人の経営とのこと。どおりでスタッフも教育されているはずだ。

広いみどり草原を馬に乗って駆けた。初めての乗馬。案外走れるものだ。どこまでも青くどこまでも続く大草原だった。(伊藤京子)

2013年第17回UIFA世界大会 ウランバートル(モンゴル)

## 地球温暖化における 女性建築家の役割

The 17th UIFA Congress 2013 in Ulan Bator, Mongolia  
- Women Architects' Roles for Global Warming Prevention

第17回UIFA世界大会は、2013年9月にモンゴルの首都ウランバートルで、「地球温暖化における女性建築家の役割」をテーマとして開催された。モンゴルと聞くと、私たち日本人は、チンギスハーン、草原のゲル、



どこまでも続く大平原

騎馬民族としての生活、最近ではモンゴル人力士などを思い浮かべる。日本の成田空港とウランバートルのチンギスハーン国際空港にはMIAT モンゴル航空の直行便があり、6時間弱の所要時間であるが、現代のモンゴルの様子は想像がつきにくいのではないだろうか。

ウランバートルに到着して驚いたことは、自動車の多さとは対照的な信号機の少なさ、中心部の近代的な都市構造であった。しかし最も驚いたことは、私は単独でチンギスハーン国際空港に深夜に到着したにもかかわらず、モンゴル支部の方々に温かく出迎えていただいたことである。

大会1日目のモンゴルの環境大臣のS.Oyun氏の基調講演では、大会テーマに合わせて、地球温暖化防止のために「建築」の貢献がいかに重要かということが強調されていた。地球温暖化が進行しているため、近年では気候変動が生じ、世界各地で様々な自然災害が続発している。このため上記の大会テーマは時機を得たものであり、参加者の報告や作品展示などからも重要な示唆を得ることができた。

私は北海道下川町の森林バイオマスの取り組みについて報告し、モンゴルの多くの方々と熱心な議論を行うことができた。モンゴルでは再生可能エネルギーの賦存量が太陽光と風力で高く、“National Renewable Energy program”（2005年制定）では2020年までに全供給エネルギーの20～25%(452.1MW)を再生可能エネルギーに代替することを目標として掲げている。また現在でも、50万人以上の遊牧民がゲルで生活しており、1999年から10万件のゲルに太陽光発電を付けるプロジェクトを行っている。このような取り組みには国際協力が必要不可欠なため、モンゴル大会のように各国の持つ知識や技術、経験についての意見交換を行う機会を持つことはとても重要であった。(山本佳世子)



ザイサン・トルゴイ



テレルジ国立公園

## 2015年第18回UIFA世界大会 ヴァージニア (USA) 「ヴァージニアスタイル」のやわらかな大会

The 18th UIFA Congress 2015 in Virginia, USA  
- "Virginian Gentle and Mellow Style" Congress

UIFA世界大会に初めて参加した。「各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル」研究の一環で実施したUIFA JAPONの会員調査を発表し、その折にUIFA大会の各国の参加者にアンケートを依頼するべく、参加せざるを得なかったからだ。

大会は、日本では考えられないルーズさと、実に暖かな雰囲気満ちた進行で行われた。何しろ、誰がいつどこで発表するのかわからないし、松川さんと私のプレゼンに付けた紹介が無い等のハプニング。そして発表前日再び大変！発表会場の予定変更が周知されず、会場となるヴァージニア・テク建築学科の会場に着いたのは予定から1時間近く過ぎ。このドタバタに、ドナをはじめ主催者側は全く動ぜず、基調報告とプレゼンがスタートした。しかしこれが「ヴァージニアスタイル」

2日目の私たちの報告は、松川淳子さんと中島で、UIFA JAPONで実施した会員アンケートの概要を報告し、アンケート協力のお願いで終わった。セッション終了後に2人に呼び止められ、大変興味ある報告だったと言われ(たと思う)、家事育児の分担等の話となった。何よりも嬉しかったのは、ブラックスバーグでの夕食後、通りかかったドナさんから、「プレゼン面白かった」と言われたこと。

報告で印象に残ったのは、基調報告のSusannah C. Drakeさんの、ランドスケープと女性の歴史とN.Y.の持続可能な再生計画、ドキュメントフィルムを使ったニジェールのAmélie Essesséさんの「女性による歴史的建物保全」等だった。

私は大会終了前に帰国したが、プレコンgressのワシントンD.C.巡り、全米建築家協会(AIA)での大会オープニングは本当に楽しかった。是非見たかったマヤ・リ

ンのベトナム戦争戦没者慰霊碑《メモリアル・ウォール》を昼・夜見たし、AIAでは2014年、2015年と続けて女性会長であり、Elizabeth Chu Richterに会えたことは力づけられた。

大会終了後、小川先生を始め他の参加者は、ポストコンgress建築ツアーに行かれた。(中島明子)

## 2015年第18回UIFA世界大会 ヴァージニア(USA) ヴァージニア工科大学と ルーメンハウス

The 18th UIFA Congress 2015 in Virginia, U.S.A.  
- Virginia Tech & Lumen Houses

ヴァージニア工科大学は、バウハウス初代校長のグロピウスがハーバード大学建築学科創立に貢献、その流れを受け継いだ教育技術を理念としている。

広大なキャンパス環境には自由な空気が漲り、アメリカンフットボールでも名高い。IAWAに日本も参加し、教授の日本招聘等と交流が続く。東日本大震災後にホールで被災者が撮影した写真展示を促された。特筆すべきは、UIFA世界大会時の各国パネル展示作品を校内資料室に格納。UIFAにとり実に喜ばしい。パネル参加をしている私は、資料室で何回かのパネル参加作品に再会でき感激、もてなしの心の温かさが伝った。

建築の製図室は、学年別ではなく上級生や下級生と混合大教室である。その中の天井のない円形スペースは予約制で、会議や相談室として利用する。この大空間の吹き抜け二階周辺は廊下で囲まれ、教授陣や学生が自由に1階製図室を上からも見守っている。2階廊下奥は家具工作機械室や3Dなどを駆使した作品作りが自由にできる教室が並ぶ。このような設計製図室の在り方から発想豊かな作品が生まれ、自由を謳歌するのだ。

校庭の中央位置に、写真のルーメンハウスが展示。太陽光を取り入れるパンチングメタル様の外壁は、入射角が太陽の動きに沿い動くデザインが美しい。自家発電装



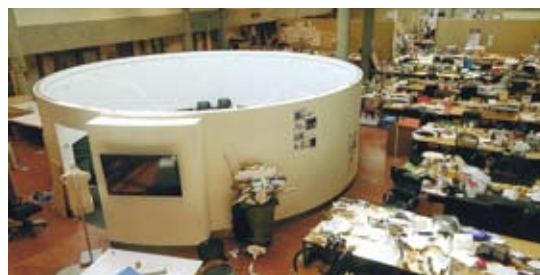
マヤ・リンのベトナム戦争戦没者慰霊碑《メモリアル・ウォール》



左から松川淳子さんと中島、通訳の大学院生大庭夏実さん



2015年のAIA会長 Elizabeth Chu Richterさん



ヴァージニア工科大学の製図室



置や音響効果、内外設備部のエコ導入、家具装置のエコ素材等々の工夫。外部の池はビオトープさながらの植物群も。数々の賞をとり、入り口にガラス賞状が並ぶ。マンハッタンのタイムスクエアガーデンにも展示されていたそうだ。外部のパネルに理論が書かれ学生は課外授業を何時でも楽しめる工夫が斬新だ。未来住宅は、この大学を象徴しているように感じた。

宿泊やスポーツ施設から大売店、植物園から資料館や過去の歴史的住宅迄キャンパス内にあり。更に大演劇場兼講堂を建築中で見学、羨ましい限りだ。（正宗量子）



ヴァージニア工科大学のキャンパスに設置されたルーメンハウス全景



ルーメンハウス内部



ルーメンハウスの解説板と全景



R. デュネイ教授によるルーメンハウスの説明



ルーメンハウスの外構パネル



# 7章

## 国際女性建築家アーカイブ

### I A W A

#### Chapter VII

#### IAWA International Archive of Women in Architecture (IAWA)



IAWA を提唱した  
ミルカ・チェルネヴァ・プリズナコフ

# 女性建築家のパイオニアたちの資料を集めて ——IAWA(国際女性建築家アーカイブ)

Precious Data about the Pioneering Women in Architecture,  
Collected for IAWA Donation  
- IAWA(International Archive of Women in Architecture)

## 【 解 説 】

IAWA（国際女性建築家アーカイブ）は、1985年に、当時ヴァージニア工科大学教授だったミルカ・ブリズナコフさんの提言で、大学とその図書館との共同プロジェクトとして設立された。世界中の女性の建築家のパイオニアたちに光を当て、その資料を収集している。

設立を提言したミルカさんは、当時女性建築家について講義しようとしても、ほとんど資料がなく、夫婦で建築家として共同で作品を作っても、夫の名前しか残っていないケースが多いことを嘆いて、資料収集を開始したという。基本的には「パイオニア世代の女性建築家、都市計画、インテリアデザインなど関連領域の女性」の資料を収集することになっているが、ほかにも、ミルカ・ブリズナコフ賞を設け、若い学生たちの研究論文等も支援している。

運営は、通常はヴァージニア工科大学都市建築学科の教授陣が当たっている。年に一度、世界10か国ほどに置いた「オフ・キャンパス・アドバイザー」に呼びかけ、総会を開き、シンポジウム、展覧会などのイベントなどを計画している。

設立25周年を迎えた2011年、IAWAはUIFA JAPONと協働で、「未来へ—女性建築家のパイオニアたちの肖像」というタイトルで展覧会を開催した。建築会館のギャラリーを皮切りに始まったこの展覧会は、関東を中心に各地の男女共同参画センターを主として8会場を巡回し、女性建築家のパイオニアたちの活動について広く世間に知らしめた。

私自身は、2003年からこのアーカイブのオフ・キャンパス・アドバイザーを務めている。2013年のアドバイザー会議では、「アーカイブの認知度を高め、資料を集めるにはどうしたらよいか」という議論があり、思い切って「IAWAを世界に知らせ、資料を集めていくにはUIFA世界大会をここで開けばよい、情報を得ようとするなら、自ら情報発信することが大切だと思う」と発言した。大学は、宿舎、会議場、パーティー会場などに十分な施設があり、世界大会開催には最適環境に思えたからである。その結果、2015年、IAWAの設立30周年とあわせてUIFA第18回アメリカ（ヴァージニア）大会が実現した。（松川淳子）



2003年11月のアドヴァイザー会議にて。中央がミルカさん



ワーキングミーティング



『建築文化』の抜き刷りを拡げて見せる筆者。鈴木淑子氏図面寄贈

## ミルカ・チェルネヴァ・ブリズナコフさんを 偲んで

Tribute to Memory of Dr. Milka Tcherneva Bliznakov

ヴァージニア工科大学名誉教授、故ミルカ・チェルネヴァ・ブリズナコフさんは、UIFA がパリで旗揚げした時、設立メンバーに加わった一人であり、前述 IAWA の設立を提言し、立ち上げた人でもある。1985 年から 1993 年まで、このアーカイブのアドバイザー会議の委員長を務め、その後、名誉アドバイザーとして、アーカイブの発展に尽くした。建築家、建築史家として業績を残しているが、特に女性の建築家について大きな関心を寄せていた。

1927 年 9 月 20 日、ブルガリア北東部、黒海沿岸都市のヴァルナに生まれ、2010 年 11 月 4 日、米国ヴァージニア州のブラックスバーグで亡くなった。1952 年にソフィア工科大学で修士号を得、1971 年、コロンビア大学から建築史の学位を授与されている。ブルガリア生まれのミルカさんがなぜアメリカに渡ったか、は、彼女自身の詳しい話があるのだが、このスペースで尽くせるものではないので省く。

彼女がヴァージニア工科大学の授業で、「女性の建築家」について話そうと、データベースに「女性、建築」などのキーを入れ、あたったところ、「産婦人科医院」などの建築がヒットしてきて、肝心の設計者と作品についてのデータは皆無だったことが契機で、アーカイブの設立を思い立ったとか。データ収集のため彼女が世界に送った手紙は 2000 通を超えたそうだ。

ミルカさんとの意識的な出会いは 1998 年の UIFA 日本大会の時である。ミルカさんは、米国の女性建築家を率いて参加し、気づいてみれば、どの世界大会でも米国勢を率いて元気な姿をみせていた。2003 年以降、IAWA のオフ・キャンパス・アドバイザーとなった私は、年次総会に行くたびに、弾丸のように飛び交うアドバイザーたちの英語に四苦八苦していたが、いつも彼女



右端がミルカさん

は「淳子がいることを忘れないで！ もっとゆっくり話して！」と気遣ってくれた。勇敢なだけでなく、困っているのを見過ごさず、限りなくやさしい人でもあったのである。  
(松川淳子)

## IAWA30 周年の展示の思い出

Memory of the Exhibition of the 30th Annivarsary

2015 年 7 月 26 日～31 日、アメリカの首都ワシントンとヴァージニア工科大学（ブラックスバーグ）で開催された「第 18 回 UIFA 世界大会と IAWA の 30 周年記念大会（18th UIFA Congress and 30th Anniversary of the IAWA）」に参加した。IAWA のことは UIFA JAPON の活動の中で、「IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア展」の企画に加わったことである程度理解しているつもりになっていたが、やはり聞くと見るとでは大違い。少しの時間ではあったが、様々な国の女性建築家の活躍した足跡を整理し、ヴァージニア工科大学の図書館をベースとして、世界のアーカイブの役割を担おうとする IAWA の意気込みに感銘を受けた。

上記のように UIFA の 18 回世界大会との同時開催であることもあり、この冊子にも収録してある UIFA の第 1 回大会でのド・ラ・トゥール会長とイランのファラ王妃の写真が載っている冊子の展示もあり、大会に参加した各国の建築家の作品の現物も展示してあった。また、それらを映像化して CUBE と呼ばれる立方体のサラウンディング・シアター感覚で展開し、世界の建築家に囲まれた感を味わうこともできる仕掛けであった。

また、IAWA の所蔵の中から、建築家でもありオスカー賞受賞の女優でもあった Lilia Skala をクローズアップし、ダウントウンのリリック劇場において、彼女の孫である Libby Skala が祖母の一生についての一人芝居を演じるという企画も印象的であった。  
(宮本伸子)



特別展コーナーに各国の資料が展示。UIFA JAPON の『未来へ』も飾られた



ヴァージニア工科大学の The CUBE でのサラウンディング・シアターによる IAWA の映像



## IAWA における「だれフォト展」

"Daredemo photographer Exhibition" at IAWA

IAWA の運営委員長・ヴァージニア工科大学教授のドナ・デュネイ先生は、中越地震の被災地・法末（新潟県長岡市小国町）や、東日本大震災の被災地・岩泉町（岩手県）など、日本全国の自然災害被災に深い関心をよせていた。米国に届く情報は少ないので、UIFA JAPON が支援を続けている地域について、機会あるごとに「あの村はどうなったか」などと尋ねてきた。また、パイオニア展や九州大学での講演など、来日の機会があるたびに、時間をとって被災地訪問をしている。法末には、同じくVTのケイ・エッジ教授とともにオープンガーデン訪問を機会に記念植樹もしている。岩泉町小本の東日本大震災の被災地には、UIFA JAPON が支援を続けていることもあって、そこで展開される私たちの被災地支援活動―「どこでもカフェ」、「だれでもフォトグラフィ」にはいつもエールを送ってくれた。3度目の写真展「春遠からじ」が終わって、それを伝えると、「その写真展をVTでやるのはどうか」という話が出た。岩泉町のフォトグラフィたちに相談してみると、彼らも大賛成、VTでの「春遠からじ展」の開催が決まった。

準備のため、パネルを担いで UIFA JAPON から7

名が渡米した。デュネイ先生、エッジ先生が大きなワゴン車でロアノーク空港まで迎えに来てくれた（写真①）。

展示設営にはVTの建築・都市計画デザイン学科の学生たちもたくさん手伝ってくれた。パネルの水平をとることなど、岩井さんが日本語で指示を出すと、彼らがそのとおりに直してくれるのが楽しかった（写真②③）。

歓迎パーティーやレセプション、学内案内などの行事がいくつも用意されていた（写真④⑤）。VTの学長公邸で開催されたオープニングに先立つパーティーでは、学長チャールス・スティーガー氏、大学が立地しているブラックスバーグの町長ロン・ロルダム氏がそれぞれ「遠いところから訪ねてくれて本当にありがとう、この展覧会を開催してくれて、6000 マイル離れた被災地と自分たちの距離が一挙に縮まった」と述べ（写真⑥⑦）記念のカップもいただいた（写真⑧）。また、小さなホワイトハウスのような公邸を学長夫人が案内してくれた（写真⑨）。滞在最終日にはデュネイ先生のご自宅で、長塚さんが席主のささやかな茶会を催してお礼に替えた（写真⑩）。（松川淳子）



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

# 8章

## U I F A J A P O N の社会貢献

### 災害被災地支援

Chapter VIII  
UIFA JAPON's Social Contributions  
Support Activities to Areas Devastated by Natural Disasters



岩手県岩泉町  
どこでもカフェのオープニング

# UIFA JAPON の社会貢献

## ——自然災害被災地支援——

UIFA JAPON's Social Contributions  
Support Activities to Areas Devastated by Natural Disasters

### 【解説】

20世紀後半から21世紀にかけて、日本では自然災害が猛威を振るい、まるで「災害列島」の様相を示している。1995年の阪神・淡路大震災から2011年の東日本大震災まで、踵を接して襲い掛かった大災害は、その後も、各地の土砂災害や台風被害など、終息の気配をみせていない。

「国際交流」を旗印に設立したUIFA JAPONでは、初め、「災害被災地支援」ということは会としての視野にはなく、阪神・淡路大震災においても、各人それぞれの所属するグループや個人として被災地の支援にあたるというスタンスだった。

2004年、第14回UIFA世界大会がトゥールーズで開催され、①女性建築家の現状、②女性建築家が社会的認知を得るまで、③自然災害における女性建築家の役割という3本のテーマが立てられた。1999年のトルコ、東マルマラ地震や当時欧州での洪水など、自然災害が世界的に相次いで起こっていたこともあり、③は「特別テーマ」だった。

この大会から帰国後、2004年10月23日に中越地震が発生した。トゥールーズ大会に触発されたこともあって、「UIFA JAPON 災害復興見守りチーム」が発足した。NPO日本都市計画家協会とともに、新潟県長岡市小国町法末（ほっすえ）集落に支援に入ったチームは、当初思いもかけなかった10年にわたる支援を開始することになった。2011年には東日本大震災が起り、中越被災地との支援・交流を継続しながら、災害復興見守りチームは、岩手県岩泉町の支援を始め、それまでの経験を生かして、「どこでもカフェ」、「だれでもフォトグラファ」というプロジェクトを展開し、すでに7年が経過し、福島県郡山市や本宮市、埼玉県加須市などの原発災害からの避難地、岩手県大船渡市、土石流災害に見舞われた東京都大島町などにもカフェを中心とした支援の守備をひろげている。

2016年の熊本地震発生に際しては、建築設計の専門家としての支援に取り組み、その力を生かして、被災者たちの住宅再建の相談に乗ることを試みている。誤解されることも多い支援の方法ではあるが、現地の理解が進むにつれ、喜ばれている。

「支援する」モチベーションは、「都市や建築の創造、研究にかかわる人間としては当然のこと」という認識にもとづいているが、そのコンセプトは、「寄り添う」「連携する」「自立を支援する」というものである。岩泉町のフォトグラファたちのチームは、自主撮影チームを作り、活動を継続していることにより、2017年10月に、NPO日本都市計画家協会の「優秀まちづくり賞」を受賞している。

(松川淳子)



中越地震（渡辺斉氏提供）



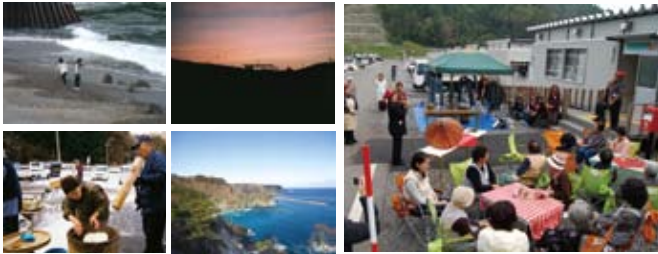
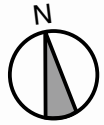
東日本大震災の津波（岩泉町提供）



熊本地震・阿蘇神社の被災



# UIFA JAPON の 災害被災地復興支援関係 MAP 2006-2018



岩手県岩泉町 (だれでもフォトグラフファ・どこでもカフェ)



陸前高田市 (太鼓の寄贈)



大船渡市 (どこでもカフェ)



新潟県長岡市小国町法末 (初釜お茶会・オープンガーデン)



埼玉県加須市 (どこでもカフェ)



福島県新地町 (住宅相談)



東京都大島町 (どこでもカフェ)



福島県郡山市 (どこでもカフェ)



熊本県御船町 (住宅相談)



熊本市 (住宅相談)



福島県本宮市 (どこでもカフェ)

## 阪神大震災に被災して

Devastated by the Great Hanshin Earthquake

大きな地鳴り音と共に、激しい突き上げと横揺れがきた。家がギシギシと軋み、物のこわれる音がする。手探りで階下に降り、着の身着のまま外へ出る。空が白み始める。屋根瓦がずり落ち、外壁に大きなクラック数箇所。一応住めると判断。周囲を見ると、古い木造家屋が多く倒壊している。信じられない光景。みな青ざめ、震えている。

電気が通じたのを機に家に入る。呆然と立ちつくす。食器棚が調理台にかぶさるように倒れ、割れた食器やガラスの破片で足の踏み場もない。冷蔵庫は一回転してドアをふさぎ、電話、FAXはちぎれてとんでもないところに転がっている。書籍は床に散乱し、額や時計ははずれて無残に壊れ、ピアノは1m移動して倒れている。形あるものの虚しさを感じる。

翌18日早朝、水と食料が隣近所から届く。お互いの助け合い、励まし合いが生まれる。

地震5日目、大雨予報。屋根の養生をせねばならない。地元では調達できず、大阪の知人に応援を頼む。夜中の3時出発。水とビニールシートを荷台にいっぱい積んできてくれる。ありがたかった。近所に配る。

地震3週目、待ち望んだ水がくる。漏水。出入りの職人が来てくれたがかなり手間どる。2Fトイレから汚水が降る。排水管破損。1階ビショ濡れ。地震に強い給排水設備は不可欠と痛感。

あの地震から早3ヵ月余が過ぎる。この間、多くの方々に助けられ、心からのお見舞いや励ましを頂き身に沁みて嬉しかった。つらい出来事ではあったが、このたびほど、人の心の温かさに勇気づけられたことはない。

今後は、地震の記憶と体験を生かし、安全で快適な住まいとはどういうものか、時間をかけて考えてゆきたいと思う。

西宮市 日高たか子建築設計室 日高たか子



新潟県 法末でのお茶会勢ぞろい



岩手県岩泉町 だれでもフォトグラファ復興途上の小本漁港での撮影会



大船渡 カメリアホールで大船渡市長や囲碁棋士もお茶席に



熊本県御船町 住まいづくり勉強・相談会



## 8-1

# 中越地震被災地への支援

## 中越地震被災地への支援

### 【解説】

2004年10月23日夕方、新潟県中越地域をM 6.8の直下型地震が襲った。最大震度は川口町の7であり、余震が多く、中山間地域の多くの集落で全村避難を余儀なくされた。

UIFA JAPONでは、ツールーズ大会のテーマ「自然災害に対する女性建築家の貢献」に触発され、この震災とスマトラ島沖の地震とつなみを契機として、災害復興見守りチームを立ち上げ、本格的に被災地支援に関わることとなった。

地震直後は各会員が、それぞれ被災住宅相談などの活動を行ったが、被災からほぼ1年後の2005年10月に、全村避難から7割の住民が戻ることになった長岡市小国町法末(ほっすえ)集落(被災当時は小国町法末)に、NPO日本都市計画家協会のメンバーとともに中越震災復興プランニングエイドの活動と一体となって復興支援に入ることとなった。

毎週末に法末集落に行って生活し、集落の総代をはじめとする方々と相談し、皆が集まって話し合う「たっしゃら会」を重ねて、「法末地区再生計画 いつまでも法末」を共同でまとめた。そして、具体的な活動が開始され、UIFA JAPONでは主に定住促進のための活動を支援し、景観ルールづくり、集落の除雪体制の強化、空き民家の活用、住み続けるための拠点づくりなどのためのさまざまな活動や調査等を実施してきた。

建築の専門家として、100年を超える古民家の集落である法末の家々に住み続けてほしいという願いから、建物調査とヒアリングによる住宅カルテをまとめ、それぞれの家にカルテと住み続けるためのガイドブックを配布し、最も古いといわれる「おもや」の調査結果をもとに国の有形登録文化財への登録も実現した。

景観を整えることを主眼として、オープンガーデン活動を集落の女性中心のグループで推進し、雪割草の植え付け、シンボルゾーン作り、講師を招いての勉強会、写真撮影会・展示会、そして毎年のカレンダー作りや野菜・山菜を使った料理教室「モバイルキッチン」などに展開している。除雪体制は、東京からも応援する「雪掘りデイ」から、近年では近傍からの若者が支援する体制につながっており、日本都市計画家協会のメンバーの一人が、現地に設立した米作りを中心とした会社を運営し、ささやかに協力してきて12年目になる。(宮本伸子)



「へんなカフェ」(囲炉裏の方言「へんなか」と「カフェ」の造語)のオープニング



## 中越・法末集落での住宅カルテづくり

—いつまでも美しい法末を目指して—

Making a Housing Record of Hossue Village,  
Niigata-Chuetsu Region - To Preserve the Beautiful  
Environment in Hossue Village Permanently

当初我々の役割は住宅相談が主だったと覚えている。現地に入って関わっていくうち、住宅は伝統的なものが多く、被災後（新築ではなく）補修して戻ってきていること、また被災前から増改築がかなり行われていることが見えてきた。現況を捉えるため、図面採取から始め、後の住宅カルテに続く。法末の支援には交通費の課題があり、活動を継続するには助成への申請が必須であった。受けた助成を通して活動を振り返る。

住宅カルテに関しては2006年から3カ年、都市化研究公室から「長岡市小国法末地区における住宅カルテの作成」で資金を得て、図面の採取や柱の傾斜の調査を行った。2006年は「集落再生に向けての家屋等の記録と発信ツールの検討」で住宅総合研究財団からも助成を受け、被災後の家屋の図面に加え、写真撮影を行ってDVDやカレンダーを作成した。このカレンダー作成は撮影者を住民に移行しながら、取りまとめをUIFA JAPONが担って継続している。2007年はハウジングアンドコミュニティ財団からの助成で「被災・過疎・豪雪集落における高齢者の共同居住実験」、雪掘り（豪雪の法末では雪下ろしではなく、雪を掘る）が困難になる高齢者が冬の間だけ共同居住できないかを検討するため、お泊り体験や雪ホリデイ（雪掘りデイ）を企画した。当時在職していた駒沢女子大の学生も多数参加してくれた。2007年公益信託大成建設自然・歴史環境基金から「長岡市小国法末地区の景観再生調査」で資金を得て、屋敷周りの木々や畑、花の状況を調査し、オープンガーデンが始動した。屋敷図から、伝統的な家には融雪池や屋敷林などが配置され、総合的に自然に向き合っていることが分かる。

2009年長期優良住宅等推進環境整備事業として「伝統的木造住宅の長期的管理モデルの開発 - 住み続けるた



カレンダー 2007 表紙



雪掘りデイ写真

めの住まいのメンテナンスノート作成」が採択され、個々の家屋のメンテナンスノート（図面等とチェックシートからなり、点検のポイント等を示す）を作成し、一軒一軒説明しながら配布した。一軒一軒手渡しという方法は、我々チームのリーダーだった寺本さんが強く主張されたのを覚えている。（安武敦子）

## 法末の初釜に参加

Participation in the First Tea Ceremony of New Year  
held in Hossue Village

法末での初釜開催は、雪深い1月である。

私の初回参加は1日遅れで法末入り。前泊の長岡から降りしきる雪の中をかいくぐる様にタクシーで向かうが、いつもの経路では行かないという運転手の言葉に不安を覚えつつ、持参した床飾りや花を抱え込んで窓先を見守るのみ。私が最初に出会った法末は吹雪のカーテン越しの景色であった。

会場となる元小学校の教室を、持ち寄った物や元々ある物を使い「床の間」に飾り付けがある如くしつらえを工夫。先輩や仲間の助けを借りて和服を着付け、どんど焼きに参加する人、茶道具の準備をする人、玄関や待ち合いに花を飾る人、それぞれの役割に従いUIFA JAPONメンバーの連携が始まる。

いよいよ茶会の始まり。地元の方々がお客様として次第に集合。点前をする緊張感も高まるが、会場の和やかな空気に救われる。大勢の方に楽しんで頂いた後は会場の片付けを開始する。帰り支度を済ませると、集落有志の方々夕食をご用意くださっている。地元の食材を使った数々の料理、搗きたて餅や漬物、等々。どれをとっても美味しく、メンバーは堪能するばかりである。

別の年は雪を踏みながら周辺散策。雪下ろし中の方に出会う。屋根の上には角の丸い厚みのある雪の層が80センチ程。今年もうそんなに積もったのですねと声をかけると、もう何回目かの雪下ろしですよ、と笑いながら



初釜茶会の飾り付けの前で



雪の壁の中を歩く筆者

のお返事。その家は代々住み継がれている伝統的な造りで、内部を快く見学させてくださった。一番広い座敷は天井高が高く、ハイサイド窓がある。一階の普通の窓高さでは積雪の頃は埋まってしまうので、明かりを採るために高所の窓を設けているというのである。風土により工夫された建築の知恵があった。見学後は、我々は例によってお茶会の準備に勤しむ。

とても寒い季節のことだが、メンバーと修学旅行の様に枕を並べての宿泊も含め、暖かい記憶となっている。毎回帰途前に本当に美味しい手作りの食事を戴くのは言うまでもない。  
(板東みさ子)

## プランニングエイドによる 中越地震被災地への支援

Support activities to the Disaster-Area of the Niigata  
- Chuetsu Earthquake by Planning Aid

2004年10月23日に発生した中越地震被災地の支援のために日本都市計画家協会、UIFA JAPON、仮設市街地研究会等の有志により「中越震災復興プランニングエイド」が立ち上がった。支援対象を長岡市小国町法末集落に絞り、集落内に取得した古民家を拠点として住民に寄り添った活動を続けることになった。集落住民を元気づけるイベント、復興のプランづくり、具体的事業支援など活動は多岐にわたった。UIFA JAPONはそのネットワークを活用して幅広く支援の輪を広げていくことになった。主要なプロジェクトを以下に記す。

### ■法末集落再生計画策定調査

集落役員、中越復興市民会議、プランニングエイドにより「法末たっしやら会」が結成され、定住、産業、交流の三部会の検討を経て法末再生の基本方針が纏められた。UIFA JAPONのメンバーは各部会に参加し調整役を果たした。

### ■法末集落古民家再生調査

UIFA JAPON 復興支援見守りチームのイニシアティ



古民家調査の打合せ 齋の神（どんど焼き）

ブで集落に残存する古民家の地震被害、建物構造、居住実態（屋敷利用状況）、意識調査など総合的に調査し、将来の環境変化への対応に資することを意図した。この調査では複数の専門研究者の協力も得た。具体的成果の一つとして築約三百年の典型的な古民家を国の登録文化財として認定を受けることができた。

### ■オープンガーデンプロジェクト

前記屋敷の利用状況調査から、各屋敷で山野草など多様な植物を育てている状況を見て、集落を訪れる人々をもてなし交流を楽しむ仕組みとして住民の自主的なオープンガーデンプロジェクト立ち上げた。以後、関連して、様々な催しが行われている。

7年間の支援活動を経て集落再生のため主体的な活動母体を立ち上げる必要性からプランニングエイドは2012年に解散し、有志により現地法人「株式会社法末天神囃子」が設立され、以後、UIFA JAPON等の協力を得ながら新たな視点に立って中山間地の集落再生活動を継続している。

(元日本都市計画家協会理事・中越震災復興プランニングエイド代表  
大熊喜昌)

## 中越地震被災地への支援 清水茂子さんへのインタビュー

Support Activities to the Disaster-Area of the Niigata-  
Chuetsu Earthquake  
- Interview with Ms. SHIMIZU Shigeko

法末での活動に、様々な形で新潟から参加していただいた新潟県建築士会の清水茂子さんに、当時の思い出を語っていただいた。

——法末の被災地支援活動に参加したきっかけは？

UIFA 会員だった故寺本晰子さんから「時々新潟県に来ていますが、新潟市に行っている時間がない。」「民家の被災後の現状調査に人手が足りない。」と聞き、少し近くから手伝いにと出かけたのが最初だった。2回程は、建築士会の他のメンバーも連れて行ったこともある。



法末での凛々しい作業姿の清水さん  
民家調査（中央が清水さん）

——民家の調査の様子は？

図面を取ったり、傾きを図ったり、床下や屋根裏も見せていただいた。とても立派な建物が多かったが、増築で小屋組みなどに手を加えられているものもあった。カルテとして各戸に返せるところまで整理したのは、寺本さんならではの功績だと思うし、その家にとっては大きな財産になっていると思う。

——お茶会やオープンガーデン、米作りなどの印象は？

どれも集落の方たちと関わることが出来、楽しく、都市部では味わえない経験が出来て良かったと思う。オープンガーデンでは花の名前など、知識が増えたこともあった。またお母さん達が作ってくださる食事がとても美味しく、特にナスの干したものをもどした煮物は、初めてで忘れられない味だった。

——集落の印象は？

季節の生活サイクルがきちんとあり、日々の生活を大切にしていると思った。落人伝説があるようにも聞いたように思うが、さも有りなんとと思われる人柄の方々が揃っていて、豊かな集落だという印象だった。

——被災地支援活動については？

被災直後は、居住者も支援者も気持ちが高揚しているが、次第に安定してくるとそれぞれの思いが違ってくる。特に法末のような中山間地の小規模で人口が減少しているような集落では、みんなのモチベーションを保ち、継続していくことはチャレンジだと思う。

(インタビュー：宮本伸子)



法末の神社参道での雪割草の植付け(2008年)



2014年の法末初釜茶会



## 東日本大震災被災地等での支援活動

Support Activities in the Disaster-Areas of the Great East Japan Earthquake, etc.

## 【解説】

外出運転中の2011年3月11日14:46pm、異常な揺れで始まった東日本大震災。飲まず食わずの身となり生活が一変した。あれから7年。全世界、全国民からの助けで生者は息を吹き返した。が、震災1か月後、目にした被災地の様は想像を絶するものだった。以後、岩手、宮城、福島の被災状況把握に暇を見ては車を走らせ、見舞いに見えるお客様を積極的にご案内する役を引き受けた。

そんな中、松川淳子さんのご縁で岩泉町小本の仮設住宅集会場でのUIFA JAPONの被災地ボランティア“どこでもカフェ”が始まった。当初会員からの調達支援物資提供と、先の中越地震法末の被災支援時に行ったお抹茶提供という、被災者の心に寄り添い、気持ちの和みになればの被災地訪問ボランティア活動が始まり、自分も地元東北の人間として当然、即参画をした。と同時にUIFA JAPON会報誌ニューズレターの被災地通信という特派員的目線で語れる場を頂き、思いを吐き出させて頂く機会に恵まれた。

被災地支援も当初全てを喪失した被災者にはどんな物資も喜んで受け入れられ、緋毛氈に生け花、掛け軸を設えた仮設住宅集会場でのお茶会はこんな初めての経験だと大変な喜びをもって受け入れて頂いた。片や同時に被災地岩泉の記録集編纂作業もなされる中、被災地小本は富士フィルムの使い捨てカメラ提供を受けて写真家橋本照高氏の協力を得、被災者住民の新たな自己発見に繋がる写真撮影の世界を構築してみた。これら7年にも及ぶ“どこカフェ”を始めとする岩手沿岸支援。その当時の被災者と未だに懐かしい顔見知りの仲になっている。

次いで都庁職員平野さんのご教示もあり、福島県郡山市での“どこカフェ”ボランティアがなされた。震災と原発事故から逃れた富岡町若宮前の社会福祉協議会サポートセンター「おだがいさまセンター」と、一寸離れた仮設住宅集会場川内村社会福祉協議会高齢者サポートセンター「あさかの杜ゆふね」での茶会を、帰宅困難を余儀なくされ仮設住宅へ引きこもりがちになった被災者たちに提供を試みたのである。東京日帰りという強行スケジュールの中、茶室風設えと着物姿でのお振舞おもてなしは被災者の感動と知的異空間を楽しんで頂けたと思う。その他、陸前高田の長洞太鼓の提供とか、地域計画連合代表江田隆三氏の下での被災地福島県新地町での住宅相談会開催など様々なボランティア活動も並行して行われた。UIFA会員である本業の女性建築家として、福島新地町での2年に及ぶ住宅相談会ボランティア。あの被災者も各自マイホームを建設されたであろう。「東京から女性の建築家さんが来てくれているという衝撃は東北の被災地としてはとても有難く、感謝です」が本音。

被災地復興復旧が福島は別としても、表面的には7割方進んだようである。今後何十年先、緑に囲まれた新しい田園風景が生まれるのだろうか、これまでの故郷的原風景喪失が吉と出て欲しい。2018年2月13日現在、震災避難者は直後推計47万人から7.4万人になった(全国)。2020年末、基盤整備の復興庁が廃止となりハード面の復興支援が終わるが、工程表に組み込まない心の復興支援を被災地はまだ必要としている。震災を知らない子ども達も小学生、小学生での体験者は大学生となる時の移ろいの速さ、前進あるのみか。天災といえど、一瞬にして家族、財産を亡くした事実は覚えていてあげたい。次の新たな災害が起きれば仕事半ばでも東北の東日本大震災復興は見捨てられる。その怖さの反面、このような震災がいつどこで起こるか知れない自然災害恐怖に、毅然と立ち向かえる教訓となって欲しいものだ。UIFA JAPONとしてのボランティアの有り方も、専門職を活かした女性の視点を生かした活動になって行くのであろうか。

(岩井絃子)



2011・3・11の東日本大震災の大津波から1週間後の状況（陸前高田市）



2011年12月18日 太鼓を贈呈（陸前高田市長洞）



子どもたちと前回のカフェでの写真をディスプレイする  
新たな記憶の写真は貴重品（岩泉町小本）



飾り付けは野の花で季節感を（岩泉町小本）



支援物資を選んだり（岩泉町小本）



カフェ運営は子どもも参加（岩泉町小本）



だれでもフォトグラフィ写真展での撮影者によるプレゼンテーション  
（岩泉町小本駅）



おでんをどうぞ！（岩泉町小本）



## 東日本大震災被災地での 支援活動のはじまり

The Beginning of Support Activities in the Disaster -  
Areas of the Great East Japan Earthquake

2011年3月11日。この日起こった東日本大震災は、私たちを凍りつかせ、「災害復興見守りチーム」のメンバーでさえも、呆然とした日々を送ることを余儀なくされていた。計画停電の発表や、テレビコマーシャルの自粛……。私にも何かできることはあるのではないかと？ 何ができるのか？ もどかしい気持ちは続いていた。

義捐金を募り、顔の見える支援を行っていかうと、田中美恵子さんの立ち上げた「おふとんプロジェクト」を支援、小島久實さんの紹介で避難所にダンボールの仕切りを作る団体への寄付、そして、陸前高田長洞地区への太鼓の寄贈など。少しずつ始めていった。

更に、何かできることをみつけようと、「見守りチーム勉強会」を開催する。被災地の様子を見てきた方、支援に参加した方、防波堤の専門家や、陸前高田での支援活動のこと。少なくとも7回開催してきた。3月に予定されていたUIFA JAPON 海外交流の会も延期され、その後、7月に行われた。見守りチーム勉強会も7月に始められている。直接の被災者でない私たちでも、気持ちの整理がついて、前を見て、一歩踏み出すのに4ヶ月近い時間がかかってしまったということになる。

自分たちでできることからやっけていこうと、今まで中越で進めてきたお茶会を、もう少しラフな感じの「カフェ」として開催し、被災者の方々の心のケアに少しでも役立てればと思った。被災地のどこへでも行くから「どこでもカフェ」、ネーミングでその覚悟を示した。支援に応じてくれる自治体を探し、2011年10月、岩手県岩泉町で最初の「どこでもカフェ」が開催された。その後、福島県郡山市・本宮市、埼玉県加須市、岩手県大船渡市などのほか、土砂災害のあった東京都大島町や熊本県御船町などで行ってきた。



贈呈した太鼓(中央)で演奏してくれた(陸前高田市長洞)

「どこでもカフェ」は岩泉の他70箇所／延べ人数において会員474名、非会員206名、計680名の参加協力があつた(2017年12月末時点)今は「住宅相談カフェ」として継続し、熊本地震の被災地である御船町や2016年台風10号被害の岩泉町にも引き継がれている。

(森田美紀)

## 岩手県岩泉町「どこでもカフェ」

"Dokodemo Café"  
in Iwaizumi, Iwate Prefecture

岩手県岩泉町における「どこでもカフェ」は2011年10月から2018年3月まで13回開催されていて、延べ30箇所298人の参加があつた。カフェで地元住民と仲良くなつて、「だれでもフォトグラフィア」へと発展、毎年行われる写真展など、東日本大震災の被災地支援のすべてはここから始まっていると言ってもいい。

震災当初の「どこでもカフェ」では、衣類や日用品などの支援品も提供した。前回のカフェで撮影した写真を展示して、気に入つた写真があれば持って行ってもらう。このアイデアは、思い出も流されてしまった住民たちにとつても喜ばれた。最初は手探りだつたカフェの開催も、慣れてきたら、準備を住民と一緒にやるなど、少しずつ打ち解けてきて、話をするようになってきた。

「津波で流されてしまったお茶碗が偶然見つかった。桐の箱に入つていてまだ開けていない。多分割れていないと思うので、持ってきたからこのお茶碗でお茶を点ててほしい。」という女性のために、心をこめてお茶を点てた。とてもきれいな夏茶碗だつた。とても素敵な話であると同時に、津波の怖さも感じざるを得ない。思わぬ出会いがあるものである。

2016年9月に震災からの復興宣言を出す予定だつた岩泉町はその直前の8月30日、台風10号の大きな被害を受けた。特に山側の被災が大きく、復興もなかなか進まない。2017年8月の住宅相談カフェは、2グルー



小本仮設のカフェ。よみがえつた夏茶碗を使って(岩泉町)



プに分かれて6箇所の施設で開催した。岩手県の女性建築士の協力も得た。住宅相談会は、彼女らの力が欠かせない。

2018年3月に「だれフォト」の活動である小本駅の写真展の展示替えと3月11日に行われるメモリアルイベントにあわせて、「住宅相談カフェ」を開催した。予想以上の相談者が訪れ、用意した机はいっぱいになった。熊本地震をきっかけにまとめたUIFA復興ハウスのプランも提案。岩泉の場合、移転先の土地はあまり広くなく、2階建てが望ましいらしい。浸水被害を経験しているため、「大事なものは2階に」と考える相談者が多かった。「どこでもカフェ」として始まった活動は、より専門性を生かしたものに変わりつつある。どのような状況であっても、被災者に寄り添い、支援を続けていく。

(森田美紀)

## 岩泉「どこでもカフェ」が 教えてくれたこと

Things that "Dokodemo Café" taught us, Iwaizumi

初めて岩泉を訪れたのは2011年の11月。盛岡から岩泉町へ向かう山間部の風景は雄大でどこか懐かしく、2時間以上の長旅も飽きさせない美しさだった。が、沿岸部に近づくとともに目に入ってきた被害状況は頭で理解できる範囲を超えていた。ただ、とにかく出来ることがあるならまず動き、自分で見た現実を心の中に残さなくてはと感じたことを、今も身震いするような気持ちで思い返している。

さて、会場となる仮設住宅の集会室。設えを整え、野の花を飾ると、まさしくそこは『カフェ』だった。住民の方が入口で「わっっ！」と声を上げてくださり、工夫で場を変える力を見た。最初はぎこちなかった方も、次第に長く話し込んだり、小さなお子さんを愛でたりと、和やかになっておられた。厳しい避難生活が続く中、他者が関わることで少しだけ、日常から離れた時間を持つ

てもらえたのではと、『どこでもカフェ』の意義を感じた初回だった。

2012年の夏にはゼミの学生2人が同行してくれたことも思い出深い。若く、テキパキと力仕事をこなしてくれありがたかったし、未来を担う学生と活動を共有させてもらったことは、教員としても貴重な経験であった。また、この回でもう一つ印象的だったのは、小成地区に初めて訪問したが、簡単には受け入れられない空気を感じたことである。一方、翌日の小本では、開始早々あっという間にテーブルが埋まり、次々と来られる方とお話が広がっていった。私たちが来ることを楽しみにしてくださり、差し入れやお土産までご用意して下さる方もおられ、継続的な活動がもたらした本当にあたたかな1日だった。

2013年以降、残念ながら私自身はUIFAの活動に時間を割けなくなったが、その後も皆様の努力で、他の地域での開催や現地の方との協働など広がりを見せていることをうれしく思う。その活動のどこかで、私が手作りの屏風もまだ、一役買っていてくれると尚うれしい。

(三戸美代子)

## 岩泉「だれでもフォトグラファ」①

Iwaizumi "Daredemo Photographer"

東日本大震災の発生はド・ラ・トゥールさんとの打ち合わせのため、松川さんと共にパリ滞在中に知ることとなった。都市計画に関わる者として何が出来るか、松川さん発案の「どこでもカフェ」と「だれでもフォトグラファ」活動にできるだけ参加したいと思った。だれフォトは、岩手県岩泉町小本地区の被災者自身で写真記録を残そうと呼びかけ、使い捨てカメラを調達して、プロカメラマンの指導を受け、発表の場を設けるという活動である。

年に数回は岩泉に通うことになり、復興の様子を定点



力仕事にも大活躍のゼミの学生たち（岩泉町）



小成地区のカフェの初日、手製の屏風とともに（岩泉町）



2015年3月8日 小本駅での写真展（岩泉町）

観測することができた。岩泉は盛岡から東に峠を越えて行く面積の広い町で、中心部までおよそ 80km、津波被害を受けた小本地区は 5 つある町の地区の一つで唯一、海に面していた。当時の町長さんと松川さんが旧知の間柄だったことで、UIFA JAPON の活動拠点となったのだが、初めて行った私には方言が聞き取りにくく、地元では当然の地理にも疎くて、参加された方との会話は難しかった。

津波被害は小本の主たる市街地 200 戸余を崩壊させたものの、人的被害は数名、それも町外で勤務中という方が多かった。大きな地震があれば次に津波が来ることは、住民に浸透していたとのことだった。仮設住宅が 3 カ所の地区・集落に分散して建設されていて、一番大きい 80 戸くらいの所に集会所があり、そこに多く通った。

撮り集めた写真は撮影者毎にデジタル化してプロカメラマンに講評してもらい、1 人 2~3 枚を選んで小本駅通路にパネル展示したり、町の 3 年間の記録集に掲載したり、という発表の場を設けた。

活動資金は当初は種々の助成金を利用することができたが、だんだん減ってしまい、寄付や UIFA JAPON からのやり繰りとなった。行かれる回数は減ったが、地元フォトグラファたちは被災から、地域の自然や美しい景色に被写体を移し、カメラを通して見ること、表現することに意義を感じて、共に撮影に出かけ、作品を批評し合ったりしている。(北本美江子)

## 岩泉「だれでもフォトグラファ」②

Iwaizumi "Daredemo Photographer"

スクリーンに投影される写真に思わず息を飲む。写真は岩手県岩泉町の町民の皆さんが撮影した作品の数々である。津波で荒れてしまった土地に力強く咲く可憐な花。復興工事が進む防波堤や街並み。朝霧かかる沼の佇まい。港に揚がる鮭。再開に喜ぶ三陸鉄道。心待ちにし



カメラマンからの指導風景

ていた伝統の祭り。慣れない仮設住宅での日常の 1 コマ。写真は一瞬で私達をその現場に誘う。光を感じ、音を捉え、香りが漂ってくる。とても素人が撮ったとは思えない力作だ。撮影者は写真を説明し、講師である写真家橋本照嵩氏はその作品 1 つ 1 つを丁寧に講評する。これは小本仮設住宅集会所で開催されていた「岩泉だれでもフォトグラファ」(通称岩泉だれフォト)の合評会の風景である。

UIFA JAPON はこの活動を牽引し支援してきた。富士フィルム社からご提供頂いた使い捨てカメラや有志からのデジカメをお配りし、仮設住宅にお住まいの方もそうでない方も皆一緒になって、町の今を収めて貰った。当初は人前で話す恥ずかしさもあってか、口が重い町民の皆さんであったが、合評会の回数が増えるにつれ、笑顔溢れる会となっていった。そしてこの作品は、三陸鉄道の小本駅構内に展示。1 回目の展示作品の中には津波で押し流される街の風景もあった。撮影者は「無我夢中でシャッターを切った」と話されていた。この場所は岩泉町の今を伝える貴重な空間となっている。

現在岩泉だれフォトの活動は、町民による自主活動に移行しているが、UIFA JAPON の支援は続いている。そして平成 29 年町民の皆さんの活動が評価され、日本都市計画家協会の主催する「全国まちづくり大会」で優秀まちづくり賞を受賞。この一報は新聞の紙面を飾り、岩泉だれフォトチームの誇りとなった。

震災の後、岩泉は甚大な豪雨災害で再び街の姿が変わってしまった。カメラを持つ手が震えると語るメンバー。それでも心のリハビリを重ね、今日もまた新たな風景をカメラに収める……今を未来に伝える為に。

(橋本ゆかり)



小本仮説集会所での合評会風景

# 岩泉町復興記録誌『明日の岩泉へ 東日本大震災岩泉町復興の記録』(全3巻) 作成協力

Cooperation to Issue "Report on Iwaizumi - after the  
Great East Japan Earthquake" (Total 3 volumes)

岩泉町の被災から復興に向けて歩むまちの姿を記録した『明日の岩泉へ 東日本大震災岩泉町復興の記録』(全3巻)の発行にあたり、UIFA JAPONの皆様に取材と記事作成にご協力いただいた。

記録誌は被災の経験や復興への取り組みを後世に引き継ぐことを目指しており、UIFA JAPONが主宰する「どこでもカフェ」や「だれでもフォトグラフィ」による写真を中心に、ほぼ全編をインタビューや座談会による聞き取りでまとめている。

取材は2012年夏から始まり、『その1』(2013年3月11日発行)では、被災から避難所での生活、仮設住宅での暮らしを中心に扱った。住民はもとより役場など関係機関の取り組みも資料の掲載にとどまらずインタビューによる生の声で伝えている。仮設に暮らす住民による座談会では仮設住宅の課題や快適に暮らす工夫なども聞くことができた。

『その2』(2014年3月11日発行)では、仮設住宅から災害公営住宅への入居や、漁業を中心とする産業の動きなど、復興への現況をさまざまな角度から探った。「だれでもフォトグラフィ」の座談会では、カメラを通してとらえた復興への実感等も語っていただいた。

『その3』(2015年3月11日発行)では、災害公営住宅や集団移転地での新築住宅、被災した元の場所での修復した住宅と、住む場所が分散する中で、新しいふるさとの姿をテーマに、次世代を担う若者や中学生からもふるさとへの思いや期待などを聞いた。

3巻の発行にあたり、取材対象は延べ90人、写真を掲載いただいたフォトグラフィは延べ136人にのぼる。取材はいずれも過密スケジュールの中での実施となった



「その1」、「その2」、「その3」記録集表紙 表紙は大正5年、昭和44年、平成18年の岩泉町小本周辺の国土地理院地図をデザインしている

が、UIFA JAPONの皆様は常に温かくきめ細やかなインタビューをされ、被災者支援の豊富な経験に助けられた。また、仮設住宅や恒久住宅のあり方、コミュニティの再生など、まちづくりや建築に携わる専門家の視点あってこそこの記録誌であることは言うまでもない。足かけ4年にわたり記録誌作成をご一緒させていただいたことに改めて感謝申し上げます。

(元株式会社生活構造研究所研究員 青木裕美子)

## 岩泉町を訪ねて

Visiting to Iwaizumi

初めて盛岡から岩泉町小本へ行く途中なんときれいな山や川の所だろうと思った。震災にあったとは思えないような優しい穏やかな風景。もちろん被災地の小本はまるで違う姿ではあったが。その景色が2016年8月豪雨災害により変わってしまった。橋は落ち、川は流木や土砂で荒れ。

「明日の岩泉へ」の取材で多くの人に出会った。舗装もしてない道を訪ねていった酪農家。震災で絞った牛乳が集荷されなかったこと。地震では大きな被害は無かったが消防団で救助に出かけたこと。遠い道のりを走って通った学校のこと。不便でも生まれたここが好き。岩泉乳業を岩泉の牛乳で動かす。後継者がいないが血がつながってなくても酪農のことが好きな人が見つかるまで頑張る。そう話して下さった彼の顔が浮かぶ。あの聞き取り後、2016年の水害で岩泉乳業が被害にあい1年半休業した。でも、その大きな災害からも復帰したのはあの彼らの情熱があったからだと信じている。

だれフォトで知り合った人たちもみんな自分の町が好き。良い写真が撮れるのもみんな自分たちの町が好きだから。だから、何があっても立ち上がれる。みんなで力を合わせて。私は自分のふるさとを離れて50年近くなるがそれでも大好き。山も川もそして人も。岩泉の人た



小本駅待合室の表示



ちも親、子供、友達、親戚や近所の人がいるから頑張れる。仮設住宅、復興住宅でも人とのつながりの必要性が一番大切だった。私達が支援なんておこがましい。私は行く度に勇気づけられている。だから、また行きたいと思うのではないかな。何度も行くうちに繋がりが生まれている。あの美しい山や川が元に戻るのはいつの日になるかわからない。でも、人間関係は今まで以上に強く結びついて行くことだろう。厳しい現実を見て育っている子どもたちも自分の町を愛し、たくましく、思いやりのある人間に育っていくことだろう。未来は明るい。ふるさとを愛し、たくましく育ってほしい。

三陸鉄道岩泉小本駅ホームの待合室入口に「想人待ち愛室」（おもとまちあいしつ）と掲げられている。胸が締め付けられる。（伊藤京子）

## 福島県新地町での住宅相談

Housing Consultation in Shinchi-machi  
Fukushima Prefecture

平成 25 年 2 月に新地町での住宅相談に 2 回出向いてから早 5 年の歳月が過ぎている。あれから復興も進み日常生活が戻っているのだろうか。原発汚染で故郷を離れた方も見えるが、多くはこの地で暮らしたいと願っていたことを思い出す。

大震災の被害を受けた方々に少しでも役に立てればと、現地に向かい被害状況を直接目にした時はニュースや映像で見ていたものの、町役場以外は何も残ってなく遠方に海が見える。そんな町全体が喪失した様に驚愕した。

新地町は被災地の中では比較的早い復興計画で造成が進んでいるが、相談者の話の中から、仮設住宅に肩寄せ合い窮屈な生活を営んでいる大変さや、今までと違う場所となり、どうしたものかという不安が隠しきれないでいる。

相談の中で、まずは被害状況を伺い、家族構成や今ま



住宅相談の様子

での暮らし、これからの生活など、聞き取るだけであつという間に相談時間の 1 時間が過ぎていた。次の相談者が居ない場合は延長したり、2 日間に渡って相談を受けたりしていたことを思い出した。

震災前の敷地は 100 から 200 坪以上あり、南に面して 1 間半の玄関と廊下がある。廊下の右に応接間とその北に台所、左に 2 間続きとなる前室と座敷があり、床の間と仏間が並ぶ典型的な日本家屋に、駐車場や畑仕事の小屋が並んでいた。隣の家との距離もあり、ゆったりした造りだったが、新しく造成され、あてがわれる区画は半分程の大きさとなってしまふ。今までの生活が守れないがどう工夫すれば良いか、の相談が多かった。

大阪の下町で育った私にはそれでも随分ゆとりある土地に見えたが、環境の違いはさておき、相談者の不安を少しでも和らげ前を向いて歩み出して欲しいと、知恵を絞った。ハウスメーカーで計画を進める世帯が多く、地元の工務店や設計士の選択があることのアピールも必要だと痛感した。

5 年の歳月が過ぎて、相談に見えた方々も、新しい土地で家が建ち生活を営んでいるであろう。久しぶりに新地町へ訪れたいと思う。（川口亜稀子）

## 住宅相談@福島県新地町役場

Housing Consultation at Shinchi-machi Office,  
Fukushima Prefecture

この写真を見るたび、冷たい冬の海岸の荒地を思い出す。震災から 1 年と 11 か月たったの被災地入りだったが、壊滅した住宅基礎だけが残る荒涼とした現状を見て、住宅再建には大変なパワーと順序が必要だと感じた。

復興に何か携われないか悶々とする時期に住宅相談の募集があり、即決で申し込んだ。

この募集ほど行きたいと思えるボランティア募集はなく、非常に感謝している。だが 自分の職能でお力にな



被災地俯瞰

れるのだったらと意気込んで現地に乗り込んだものの、現実の厳しさは想像以上。人影はなく土木作業のトラックが道路に列をなすだけだった。

新地町は全 2500 世帯なので、それほどたくさんの方が役所に相談にみえることはなく、相談も一日に二人ペースだったが、相談内容は驚くほど普通の間取りや工事の悩みだった。工事費の交渉はできるかとか、断熱材の話、ペットの話、洗面所の広さの話……建築家の考える復興住宅や定住住宅の理想形と何か視点が違う。いかに、私たちが上から目線で被災地での住宅プランを考えているか痛感した。彼らは自分の住歴からの理想のすまいを実現しようとしていて、それは当然だった……。

また、担当者をお願いして壊滅した町や高台の造成地を見せていただき、仮設住宅にお連れいただいた。仮設から定住という動きをしていただきたい思いからだ。仮設住宅でお会いするのは女性住人ばかり、これは何だろうとは思ったが、私たちが女性の良さを生かせる点でもあろう。

結果、相談員としてお役に立てたかどうかはわからないが、私自身が被災地の厳しさを知り、SNS で発信したり周囲の人間と共有することが長期的な支援につながり、それこそが本当の意義ではないかと思えた。

実は後日、住民の方と SNS 上でもつながり、海岸清掃を元気に続けてみえたりと地域再建の様子を影ながら拝見している。  
(近藤万記子)

## 福島県新地町での 住宅相談と住宅セミナー

Housing Consultation and Seminar in Shinchi-machi,  
Fukushima Prefecture

東日本大震災から 2 年が経った 2013 年初旬、私は福島県新地町に住宅相談に行った。ここは被災地の中でも復興が早いが、まだ海岸近くは津波の爪痕が生々しく残っていた。鉄道も回復していないため仙台からバスで



新地町仮設住宅

向かった。相談は 1 月と 2 月数回行われ、会員が交代で訪れた。

既に造成が始まり、住宅相談に訪れる人は具体的にこの敷地に住むか決まりつつあった。突然訪れた住まいづくり、それも住み慣れた敷地で行われるはずの計画を、移転先で考えなければならない。中には被災前に家を建てたばかりで借金を抱えている方もいらした。また、それまでの敷地は広く数百坪の広さも珍しくなく、特に海岸に近い敷地は平らな所が多い。しかし津波対策のため、新しい分譲地は高台につくられ、広さも平均 100 坪程度で、都会に住む我々にとっては見慣れた分譲地だが、新地町の方々にとっては慣れない光景だった。「こんなに狭い所に家族 4 人住めるでしょうか？」と 30 坪程度の 2 階建てプランをお持ちになる。すぐ近くに隣家が建ち、落ち着かないとおっしゃる。確かに今までの環境とは大きく異なる。

住宅メーカーの図面をお持ちになる方が多かった。これならば分譲地毎にメーカーまたは設計者が計画し施工や材料を工夫すれば、もっと経済的に建築できるという意見が会員から出ていた。あまりにも多くの被災に復興が無計画に進められているように思えたが、多くの人が狭くて寒い仮設住宅から早く解放されたがっていた。

敷地造成が終わり、住宅着工が始まる秋頃に、再び住宅相談が必要と町から要請があった。最初にセミナーを開き、その後同時に個別相談にのる予定で、私がセミナーの講師を務めるため「住まいづくりは楽しく」と題したパワーポイントを準備した。けれども訪問した 11 月、相談に訪れた人は一人だけだった。既にプランは決定し着工間近で、もう相談する必要がなかったのか拍子抜けで、事前の情報収集や広報が大事と痛感した。うまく支援できなかった苦い思い出である。  
(薄井温子)



新地町住宅  
相談の様子

## 福島県新地町での 住宅相談に思う

What I felt at Housing Consultation Sessions in  
Shinchi-machi, Fukushima Prefecture

東日本震災の被災地支援で何かお手伝いが出来ないかと、もどかしく思っていたところ福島県の新地町で住宅相談会をUIFA JAPONで受けるという話が出たときに、一も二もなく手をあげた。やっと職能を生かしたお手伝いができるとの思いだった。2013（平成25）年2月の仙台空港は少し雪が残る程度である。仙台空港に飛行機が着陸する航路……というのは津波と同じ方向だ……と思ったのは私だけかな……？ 思わず手を合わせていた。新地町には交通手段として仙台空港が一番近い。

UIFA JAPONの仲間小池さんと二人で担当することになり、新地町役場に向かう。町が作成した開発図面を見せていただき、日ごろ目にする図面とは違うので何うと、標準が土地面積100坪、大きいのは150坪で小さいもので80坪という区画で、造成も始まっているとのこと。ただこの辺りは高台がないということで敷地はいくぶん内陸部にあった。被災した海岸線は全て町が土地を買い上げるということだそうだ。平面プランは住宅メーカーのものを持参する人あり、まったく何にもなしでどこから手を付けていいかもわからない……という方もいて、目の前で店舗付き住宅のプランをしたこともあった。ほとんどが漁業関係の方だとか、相談を受けて感じたことは、ほかの地区に比べて復興が早いと思った。

お昼ご飯は役場近くのお寿司屋さんに行ったが、神棚を指さされてここまで水が来た……と。このお寿司屋さんには後に関西の友人たちをつれて行って「大勢来てくれた」と喜んでおられた。ただ目を海岸に向けると、そこには何も無い風景があり、最初行ったときには日の丸の旗に「頑張る」という寄せ書きがたくさん見受けられたが、その半年後には風雨にさらされて写真のような形に変わってしまった。あれ以来新地町には行ってないが、



被災した海岸線……  
何も無い



お抹茶のお点前（郡山市あさかの杜ゆふね）



郡山市の会場「おだがいさまセンター」  
での談笑

ぜひとも再訪したい場所でもある。

（上田壽子）

## 福島県郡山・本宮にて

In Koriyama / Motomiya, Fukushima Prefecture

UIFA JAPONのNEWSLETTERで東日本大震災の被災地支援活動に関する報告を目にする度に、何とかお役に立てないものかと思っていたが、2012年7月21～22日の郡山・本宮への支援活動に名古屋から参加することができた。

会場の「おだがいさまセンター」は郡山市富田町にあり、福島第一原子力発電所に近い富岡町からの避難者を受け入れている生活復興支援センターである。折しも七夕とあって、復興への願いを込めた短冊いっぱい竹飾りや、天井から吊り下げられた折り鶴の群が華やいだ雰囲気醸し出していた。早速、着物などに着替え、少しでも和んでいただきたいとの気持ちを胸に、持参した自家製の和菓子とお抹茶で「どこでもカフェ」を開催した。

被災者の方々は、地震による直接的な被害に加え、福島第一原子力発電所で発生した、あってはならない事故に伴う放射能汚染被害を蒙り、生活する上での困難だけでなく、風評被害を含めて大きな精神的苦痛を強いられていた。しかし、引き籠りがちの高齢者や障害を持たれた方々も、このときばかりは笑顔を絶やさず、周りの方々と打ち解けてお話しされており、少しはお役に立てたかなと思った。住民の方々とのお話し合いで、多くの困難の中、前向きな強い姿勢で立ち向かわれていることに深い感銘を受けた。

震災から7年たった今、未だに除染作業は終結を見ず、復興は道半ばである。故郷へお帰りになった方々も、昔とは全く違ってしまった雰囲気戸惑いを感じておられるとのことである。新聞紙上では行政と住民との乖離が報じられている。心安らぐ生活の場である住宅の設備や内装の充実、行政への提言と見極めなど、まだまだ多くの支援が求められている。女性としての、また建築家と



しての視点から、なすべきことは多いとの思いは強い。  
(藤田淑子)

## 岩手県大船渡にて

In Ofunato, Iwate Prefecture

岩手県では「どこでもカフェ」として、東日本大震災の被災地である岩泉町や大船渡においてお世話になった。心より御礼申し上げたい。

私の住む一関市は、岩手県南の内陸に位置し、2011年太平洋沖地震では震度6弱だったが、甚大な被害があった。都市機能がストップし、商店や病院の建物に被害が出て通常の業務が開始するまで1ヶ月ほどかかった。一関は30～40年おきに大きな地震にみまわれる地域。私達建築士は来たるべき地震に備え、耐震の啓蒙活動をしていた。地震直後は、耐震補強をした住宅を訪問し、ほぼ被害がないことを確認した。その後、被害のあった住宅の相談を受けながら、再び地震があった場合、崩壊が予想される住宅を最優先に耐震補強工事を始めた。私が津波被害を実際に目にしたのは2年を過ぎた2013年だった。

UIFA JAPON からの大船渡開催の囲碁祭での「どこでもカフェ」の応援要請があったのが、少しずつ落ち着きを戻しつつあった2015年だった。県内の女性建築士に声をかけ大船渡の会員を中心に10人が参加させていただいた。大船渡での「どこでもカフェ」は、回を重ねる毎に、被災者支援から復興支援に移行し、囲碁での復興・振興へ重きが置かれ、カフェへの参加者が減少してきたということで、第3回囲碁まつりが最後となった。岩手県女性委員会では、大船渡での「どこでもカフェ」への参加は第2回目からの2回となったが、たくさんのお話を学ばせていただいた。被災した者には、なかなかできないことを率先してUIFA JAPONの皆さんがお手本をしてくださったことを心に留め、今後の活動の参考にさせていただきたい。

「朝顔茶会」の報告である。岩手県建築士会一関支部では、会員を中心に一般の方々やNPOを設立し廃校になった学校の保存活動を展開している。活動の一つとして、その旧達古袋小学校の119mの校舎に、毎年朝顔を咲かせている。「どこでもカフェ」をきっかけに、朝顔を鑑賞していただく機会となっている。「どこでもカフェ」に参加し、開催の勇気をいただいた。

大船渡での「どこでもカフェ」ではたくさんの学びがあった。ありがとうございました。

(岩手県建築士会一関支部 阿部えみ子)

## 岩手県建築士会盛岡支部女性委員会 とUIFA JAPON

Women Committee of Morioka Branch,  
Iwate Architects & Building Engineers Association &  
UIFA JAPON

震災後3週間目の4月1日に、盛岡支部での視察活動に参加し、初めて沿岸の津波被害を目の当たりにした。内陸部に住む者にとっては、テレビ・新聞等で凡そ想像していたはずだが、実際にみる現状は、言葉にできないほどの悲惨な状況で、ただただ自然の力の脅威を思い知らされた。帰途、盛岡への道中は平常の光景で、ただひとつ、いつもと違うのは、自衛隊車両が頻繁に行き交い、ヘリコプターが度々飛んでいた。

毎日テレビのニュースを見、新聞の記事を読み、果たして内陸の者に何ができるのか?ただ手をこまねいて悶々としていたが、盛岡支部の女性委員のメンバーから提案があり、人々の心とまちに彩りを取り戻すことを願っての、「<sup>はなさか</sup>花咲プロジェクト」の活動を始めることになった。野田村と久慈市、及び大槌町吉里吉里の2か所に、春と秋の年2回ずつ訪問して、仮設住宅に住む皆さんと一緒に、プランターに野菜苗や花苗を植える活動をしてきた。当初、避難所から仮設住宅へと移り、独り家の中ですること無く、お互いに顔を合わせることも少なくなっていた皆さんは、この花のお蔭で水遣りや



岩手県建築士会女性委員会スタッフと一緒に



カメラアホール広間での「どこでもカフェ」



2011年6月 大槌町吉里吉里における  
花咲プロジェクト

収穫の楽しみ、外に出て会話をする機会が増えたと喜んでいました。2011年6月から計25回の訪問をしてきたが、いつも訪問してきた仮設団地が閉鎖になるということで、2017年11月で活動を終了した。

大震災の影響で、通常7月に行われる全国女性建築士連絡協議会が、延期されて2012年2月に京都市にて開催され、その全体会で被災地の現状や花咲プロジェクトの報告をさせていただいた。発表後に宮本前女性委員長より、UIFA JAPONの皆様が岩泉で「どこでもカフェ」を行なっていることを知らされ、岩手に居ながら全く知らず、その後の3月のカフェから手伝いとして参加し、以後、女性委員会もしくは有志の活動として通算15回、一緒に活動させていただき、有意義な機会を得ることができた。

一人では難しいことも組織として活動すればできることもあり、これからも可能な限り足を運びたいと思っている。(一般社団法人岩手県建築士会女性委員会 小山田サナエ)

## 埼玉県加須市での支援 避難者に手作り和菓子を

Supportive Activity in Kazo City  
- Handmade Japanese Sweets Event

埼玉県加須市旧騎西高校避難所は双葉町からの避難者60世帯が暮す。避難者が運営する無料カフェ「珠寿」は、居住の教室からは寒く長い渡り廊下があり利用者が少ない。皆が集まる機会になればと手づくり和菓子を持って、2013年2月宮本、平野、稲垣で訪問。和菓子は綺麗で美味しいと好評。書道の先生だった方が、掛け軸を見て墨について語られ、元豆腐屋さんが得意な手品を披露、ロシア人女性に来るなど賑やかだった。2年前の大地震の凄さを語る方もいて、自宅は地震時の食器が飛び出し、本が散乱したまま、ネズミの棲みかになっているとのこと。原発からの避難で先が見えず、どうして良いか困っているなど切々と訴えられた。不便な避難所暮らしの中、手芸や書道など趣味に打ち込み前向きに生きようとする



手作りくす玉を披露する避難者



土石流が乗り越えた流木止めの鉄骨柵 (大島)



大島カフェ後の記念撮影

姿に、自分達に出来ることは何か考えさせられた。

(稲垣弘子)

## 伊豆大島復興支援 土石流被害の大島を訪れ

Visit to Izu Oshima Damaged by Severe Mudslides  
for Disaster Support

2013年10月16日、台風26号により伊豆七島の大島は暴風雨に見舞われ、三原山の外輪山で大規模な崩落がおき、土石流で元町神達地区や大金沢、八重沢周辺の家屋が流失し389棟が損壊した。

被災から1年後の2014年10月15日(水)、状況視察を兼ねて3人で訪島。家財道具が散乱し半壊状態のままの家屋、橋の欄干は工事用の柵のまま、コンクリート基礎が家々の存在していたことを示す草むら等々神達地区には土石流の爪痕が色濃く残っていた。

視察後、北の山仮設住宅集会所で、「どこでもカフェ」開催。毎週開かれる「あいべえ」というカフェの中で、和菓子とお抹茶を提供。仮設住民の男性5人、女性2人が参加、民生委員や社協関係者も手伝ってくれた。東日本大震災被災地での「どこでもカフェ」は参加者の多くが女性であったが、大島の北の山仮設では男性が多い。普段の集まりでも女性はあまり参加しないとのこと。土地柄なのだろうか。

台風時の話しや、黒文字の由来、お抹茶談義と幅広い話題で、また来てくださいと歓迎された。帰路は高速ジェット船に飛び乗る慌ただしさだったが充実した視察と「カフェ」であった。

翌2015年1月24日(土)、大島町椿園「新町亭」(奇跡的に被害を免れた)での復興まちづくりイベントに、参加。

一面土砂で覆われた地域で、地域全体の電気、水道は不通、トイレは汲み置き水を使用との連絡であったが、急遽、町役場が仮設水道を引いてくれ大助かり。大島町の茶道会メンバーも駆けつけ準備、お点前もされ、地域挙げて歓迎、協力し、新町亭に入りきらないほどの大



盛況であった。地域力の逞しさ、素晴らしさを感じた。  
(稲垣弘子)

## 伊豆大島復興支援

### 「どこでもカフェ」の記憶

Memory of "Dokodemo Café" in Izu Oshima  
as a Supportive Action for Disaster Recovery

2015年1月24日(土)、「どこでもカフェ」が大島で行われた。2013年10月の台風26号による土石流災害復興祭「大島椿祭り」における復興まちづくり研究所主催「囲碁大会・コンサート」への協賛である。UIFA JAPONでは、稲垣・石川・岩井・宮崎・森田諸氏と田中が参加。厚手のコートを着込み竹芝棧橋から大島へ。快晴に恵まれ、沿岸の景色を愛でつつ大島に着くと椿の花の真盛りだった。午後会場のホテル椿園の宴会場「新町亭」にバスで向かう。途中で製塩工場があり、今は塩田では作らないのだと知った。「新町亭」は一抱もあるか“あすなる”の大黒柱に、梁間4～5間程の船底型天井・曲り大梁の江戸期木造建築。

床の間近くに囲碁グループ・土間近くにしつらえられた茶席の辺りで我々が陣取った。盛況なので持参のお菓子では足りないかと案じたが、和菓子・ケーキの寄贈を頂き、充分なおもてなしが出来た。都庁の「心の唄バンド」のコンサートや母と子供達のコーラスが披露され、和やかな宴であった。夜は宿の「赤門」で現地の方々も交え、都庁グループ合同の海の幸一杯の交流会が行われた。

翌日は、「大島まつり」の為「カフェ」は中止。町長の祝辞に続き、老若男女のパレード等を見学。復興祭を盛り上げる島民の喜びを感じた。

午後は復興研の平野氏(賛助会員)の案内で、被害の現場を見学。山頂近くで派生した土石流が、高さ4m程の“流木止めの鉄骨柵”も役に立たない勢いで、一気に大量の木を根こそぎ押し流した。42分間で、死者17名・行方不明者39名・家屋の流出多数が発生した。昨

日の会場「新町亭」もホテルの大部分は流出、此の一枚のみが残ったという。流出土砂の山は其処・此処に見受けられ、犠牲者を弔う献花台も設えられていた。島は水不足ではと感じた事が有った。宿の風呂は温泉と聞き、翌早朝入りに行くと、浴槽にはお湯が溢れ出ているのに洗い場の水が出ない。止めているのだと気が付いた。諸々不自由な環境にあっても、人々は明るく暖かだった。ホテル椿園の御当主清水勝子様から記念のシャープペンシルと椿の花で染めた淡いピンクのハンカチを頂いた上、埠頭にまでお見送り頂き島を後にした。(田中美恵子)

## 首都防災ウィークにおける「防災カフェ」

"Disaster Prevention Café" project during the Tokyo  
Disaster Prevention Week

首都防災ウィークは、首都東京における防災減災活動を目的とし、毎年9月の一週間、両国の横網町公園でイベントを、東京都慰霊堂では講演が行われている。

UIFA JAPONは公園内の一角で「防災カフェ」を開いてきた。イベントを通して、首都の防災について考える、とても大切な機会である。法末の支援や大船渡のどこでもカフェでもご一緒していた木谷さんの紹介で始めて、2014年から今までで4回を数える。

毎年だいたい50人くらいのお客様がみえて、季節のお菓子とお抹茶を一服200円で販売している(被災地支援ではないので)。決して元がとれるものではないのだが、この場を活かして広く一般市民の方々に防災について考えてもらう機会を設けて、一緒に勉強していきたいと思っている。

昨年度(2017年9月)の開催では、大船渡のサンマの塩焼きが無料配布されたこともあり、今までが一番多くのお客様がみえた。耐震診断に関する情報・住宅相談など、被災地支援でも行っている専門家としての活動にもつなげていきたいと考えている。(森田美紀)



椿園新町亭での大島衣装でのお点前



新町亭のあすなる大黒柱



防災カフェにおける海外からの旅行者との語らい



## 8-3

# 熊本地震被災地への支援

## 熊本地震被災地への支援

### 【解説】

熊本地震は2016年4月14日M6.5と4月16日M7.3の地震が立て続けに起きた。直ちにUIFA JAPON 会員に寄付を募り、支援先を検討した。

UIFA JAPON の被災地支援は顔の見える支援を原則とし、支援の手が届きにくい所を探した。会員から「御船町は益城町の隣にあり、甚大な被害を被っているが、益城町や西原村ばかりが報道され、御船町の被害状況はあまり知られていない。義捐金など支援の地域格差が激しい状況」との情報を得た。御船町のホームページによると世帯数6,224世帯。ほとんどの家が被害を受け、3分の1が全半壊ということが分かった。御船町を支援先と決め、会員からの見舞金を御船町に送ることにした。

9月下旬、御船町藤木正幸町長を訪ね見舞金を贈呈し会談した。「復興住宅モデルハウスを仮設住宅団地内に建設予定だが若い人向きが多い。1000万円位で建てられる高齢者向け復興住宅のモデルプランがあると高齢被害者が前向きに再建しようという気持ちになるのではないか。」とのお話を頂いた。

会談後の視察でも屋根にブルーシートのかかった家が連なり、1階がつぶれ、2階が地面に着いている家や墓石が倒れて散乱している光景に、直下型地震の凄さを実感し、被災者の復興に少しでも役に立ちたいとの思いを強くした。

そこでUIFA JAPONとして専門性をいかし、「高齢期のコンパクトな住宅」を提案しようと復興ハウス設計グループが中心になり会員全員に呼びかけ、11月下旬には15坪～20坪の23案が提案され、『ユイファ・ジャポン復興ハウス－高齢期のコンパクトな住宅の提案集－』として、クリスマスに御船町役場に送った。

この提案集を直接被災住民に説明しようと「住まいづくり勉強・相談会」を企画した。2017年3月下旬、熊本建築士会女性部会、御船町役場復興推進課の参加を得て、仮設住宅団地みんなの家で開催した。「住まいづくりの勘所」という紙芝居も行い、「勉強になった」と好評を得た。この相談会の感触を基に、現地の資材高騰、人手不足による建築価格の高騰を受け、高齢者向けの最小限住宅12坪案を再提案することを決めた。再度、12坪案を会員から募集、「提案集パートⅡ」にまとめ、12月初旬、御船町で「住宅相談カフェ」を開催。熊本建築士会女性部会に協力依頼し、他業種の専門家、地盤、融資、弁護士に呼びかけて参加をつのり、多業種連携住宅相談会で多方面の相談に応じることができた。また、どこでもカフェの経験をいかし、お抹茶とお菓子を用意し寛いだ雰囲気での相談会にした。

熊本は遠距離のため、今後訪問しなくても、プラン集を見て、自分の暮らしに合ったプランを見つけ出せるよう、12坪案のブラッシュアップを図り、現地での相談会に役立ててもらおうことを考えた。2018年3月下旬御船町役場を再訪し、住宅相談時に役立ててもらおうよう「提案集パートⅢ」を贈った。熊本建築士会女性部会メンバーによる住宅相談会を続けて頂き、UIFA JAPON は後方支援の形で協力することにした。

プラン集は徐々にブラッシュアップされ、今後の自然災害被災地での高齢被害者の住宅再建に役立つ形となってきた。地域による気候風土差や地域独自の住まい方などの問題等はその都度、検討し相談時に対応できるようにする。熊本地震被災地支援は中越地震、東日本大震災の被災地支援の経験をいかし、「どこでもカフェ」と「住宅相談会」を組み合わせた「住宅相談カフェ」とし、被災者に寄り添い自立を助けるというUIFA JAPON の被災地支援のスタンスをカタチにし、今後の自然災害被災地支援の1つの方向を見出したと言えよう。(稲垣弘子)



熊本城飯田丸五階櫓



御船町のブルーシートで覆われた屋根、屋根、屋根



被災した益城町の民家

## 「住まいづくり相談カフェ」

"House Building Consulting Café" Project

熊本の被災地における住宅相談は、手探り状態ではじまった。

UIFA JAPON が中越地震以降被災地支援の一環として、茶会（茶飲み会）を開催し、ちょっとした「高揚感」と「くつろぎ」の時間を共に、「どこでもカフェ」という名で、被災地カフェキャラバンを続けてきている。あり合わせのもので季節の凝縮した茶席空間を、仮設集会場の内外に組み立てる。これは、建築を業とする私たちの勢いもある。そして、被災された方々と、一服の抹茶や、ロイヤルミルクティを楽しむことを続けてきた。

熊本地震で御船町の町長との談話から、UIFA JAPON で「高齢者向けの復興住宅プラン集」を作ることとなった。それを携え、相談会を開催する事とした。やはり、カフェは UIFA JAPON が培ったツールで外せない。相談カフェの開催である。発災後 1 年弱の昨年 3 月の相談会は、町役場のスタッフ、熊本建築士会女性部会の方々と共に開催した。提案集の勘所を説明後、茶菓を一緒にいただく。

個別相談は少なく、宅地のことや、公の助成についての心配事について、町役場の担当者の説明を皆で一緒に聞く、という形となった。そこで、上田さん持参の紙芝居「今住宅を建てるならば……」などの説明が人気を博した。皆の顔を見ながら車座となって語りあい、互いに問いかけ合い、説明を聞く。勉強会的な茶話会もあり得そうだと感触を得た。ただ、この「車座型勉強会的相談カフェ」の成立は、発災後、仮設住まいに慣れ始め、再築せねばという発災直後の高揚も徐々に収まり、その後のことを考える切迫感が未だないという段階だったという読みもある。

その後、発災後 1 年半経った昨年末の相談会では、被災建物の解体がほぼ終わり、仮設居住の期限が見え、

各人の覚悟が見えてきた時点での開催となり、皆での「車座型勉強会」の後、個別の相談を多く受けることとなった。時間の経過から、被災住民と助言できる専門家との相互交流的な段階から、個別の課題が顕在化してくる段階へと、相談カフェの形は変わっていくプロセスだったと考えられる。（井出幸子）

## 住宅相談

Housing Consultation

熊本は私の故郷である。1 度目の地震は家族や友人などの安否確認に焦った。翌日未明 2 度目の地震からは電話もメールも繋がらない。TV は凄惨な惨状を映し出し、心配は募るばかりだった。現地では重なる余震におびえながら自宅にも居られず広い駐車場で車の中で寝る日々だったようだ。

熊本地震被災地住宅相談会に初めて参加したのは 2017 年 12 月である。UIFA JAPON の活動としては、すでに 3 度目で、20 坪コンパクト住宅からもっと小さな 12 坪を依頼され、プランを持って御船町仮設住宅団地 3 か所へ訪問した。12 月 2 日(土)午後、ふれあい広場第 2 仮設住宅団地。看板張り出しから各人持ち場を確認。熊本建築士会の持田氏、地盤の田尻氏、九州財務局の川西氏、弁護士の宮崎氏も到着。2 時にはお客様も続々やってきた。2 時～ UIFA JAPON 稲垣会長の挨拶の後上田氏の紙芝居による木造住宅の建方説明、財務局川西氏の二重ローンガイドライン説明。各先生方の説明の後、それぞれの被災者の個別相談に乗る。持家で倒壊した土地に新たに家が建つのだろうか？具体的な地盤の相談には列ができた。夫婦で参加の方には家族構成をもとに間取りや予算についての相談に乗る。家族の話や住まい方の悩みを聞かせてくれた。翌日午前中、落合仮設住宅団地では上田氏の紙芝居にみな真剣に聞き入った。UIFA JAPON 4 名、地元建築士、弁護士、地盤専門家、御船



2017 年春熊本御船町相談会



三船町役場の担当者と熊本建築士会の方々



みんなの家でそれぞれ個別に住宅相談  
(2017 年 12 月)

町職員の4名お客様8名。午後滝川仮設住宅団地ではお客様が二重ローンガイドラインに当てはまる方で熱心に聞いておられた。別のお客様は今まで住んでいた土地は諦めて他の場所に小さな家を建てたいからと UIFA JAPON で作った 12 坪のコンパクトプランに大変興味を持たれ感心された。

今回はジャンルを超えたスタッフが集まり相乗効果があり充実した相談会となった。帰り路、倒壊した家々は片づいて道路はきれいになったものの側にある電柱は傾いたまま竹林も荒れたまま、これからが復興の始まりだ。

(柏原雪子)

## 熊本地震での住宅相談を軸とした 建築士としての活動

### ～様々な方々の支援を受けて～

Actions as an Architect, mainly focused on the Housing Consultation after the Kumamoto Earthquake  
- Backed by supports from people in a variety of fields

熊本地震から2年。被災地の建築士として、様々な団体の方々からご支援を受けながら、被災先で相談会を開催してきた。そのことについて、ご報告したい。

熊本県建築士会女性部会では、20年前から毎月一回、固定の場所で住宅相談を受け付けているが、被災後は表1のように、様々な場所出張相談会を開催している。

被災直後、応急危険度判定に始まり、建物（公共施設、

文化財、住宅等）の被害状況確認に追われる中、県外からの支援に助けられる日々であった。それは、建物のみならず、被災地の住民の方々に対してもそうである。被災県の建築士は、被災当初は建物の判定に追われ、被災者に寄り添った相談の受付を受ける余裕が無い日々であった。そのような時に、他県からの支援はとてありがたく、私たちをゆるく巻き込みながら相談会へと繋げてくれた。

UIFA Japon の皆様には、初年度の9月、3月、次年度の12月、3月と4度のご来熊で、相談会の企画および小さな住宅の住まい方まで含めたご提案を頂いた。熊本県建築士会で開催している相談会は、相談のみの場であったため、皆様の勉強会+茶話会+相談会の方式を目のあたりにし、多くの学びを得ることができ、今後に活かしたいと思った。

2年が経過し、被災地支援の格差を感じている。被害が大きいとされている益城町、西原村はメディアにも取り上げられ、また、仮設団地には様々な支援がある。今後、私たちは支援が行き届いていない被災者の方に対する相談会を他団体と連携し継続していく予定だ。

また、住宅の復興は、建物のみではなく、地域の復興までも考える必要がある。地域の継続があつての復興であり、そのためには、地域の設計者、施工者、供給者、流通者の連携が不可欠であり、建築士会女性部会として、生活者の視点でアドバイスをし続けたい。

(熊本県建築士会女性部会 持田美沙子)

表1 住宅相談会開催地、主体、開催時期

相談会開催地	主体	開始時期
熊本市椿ヶ丘地区	福岡の建築士+九州大学+熊本大学等	H28.4月～
避難所での相談会	地域包括センター+熊本建築士会女性部会	H28.5月
阿蘇	熊本県建築士会+子育て支援センター	H28.5月
益城町ましき野	東北の建築士+熊本建築士会+地質調査業協会	H28.6月～
甲佐町津志田地区	熊本県建築士会+五木源住宅復興支援チーム	H28.6月～
西原村	建築士会九州ブロック	H28.6月～
益城町宮園地区	東北の建築士+熊本建築士会+地質調査業協会	H28.7月
益城町辻の城地区	熊本県建築士会+地質調査業協会	H28.11月
御船町	UIFA Japon + 熊本県建築士会	H29.3月
御船町	熊本県建築士会	H29.7月
御船町	UIFA Japon + 熊本県建築士会 + 弁護士 + 財務局 + 地質調査業協会	H29.12月
熊本市鶴屋百貨店	熊本県建築士会	第4土曜日
被災住宅	熊本県建築士会等	随時



御船町仮設住宅みんなの家で住まいづくり勉強・相談会



# UIFA JAPON 復興ハウス 『高齢期のコンパクトな住宅の提案集』の 作成にあたって

UIFA JAPON Housing Reconstruction Design,  
Compact Houses Proposal for the Elderly<sup>1)</sup>

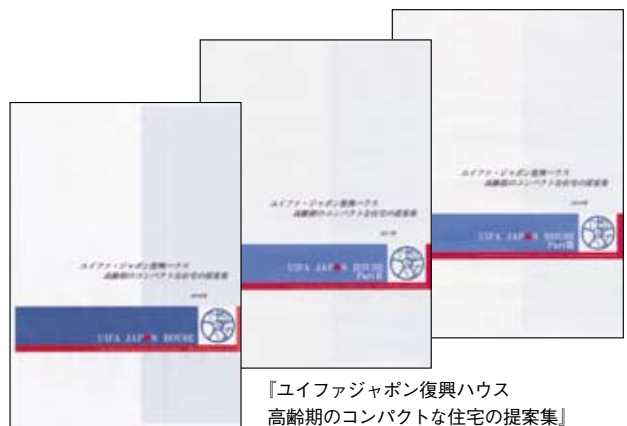
「復興住宅のモデルプランは若者向けのプランのようで、もうひとつじっくりこない。被災した高齢者がこの被災のショックから立ち直るきっかけとなるような高齢者向けのプランの提案をいただけると嬉しい」という熊本県御船町藤木町長のお話を受けて、2016年秋、全会員に向けてプラン募集があった（Part I）。その応募がきっかけで、その後の Part II、Part III のまとめ役を担うことになった。

Part I では、面積が 15～20 坪、工事費は 1000 万円程度が条件。しかし、復興住宅相談に携わった熊本県建築士会の方より「12 坪位の住まいの要請が主流」というご意見を頂き、12 坪案を募った（Part II）。更にブラッシュアップをし、2018年3月、Part III <12 坪・16 坪案> が出来上がった。寝室からトイレにアクセス

しやすく、玄関入口が3方位以上に対応。バリエーションとして一部屋（4 坪）増した場合のプランも加えた。これまでの住宅設計で、多くのご年配の建て主さんのお話や行動から、高齢期には、<LDK+ 寝室 + 水場> のコンパクトな造りが適しているという事を学んだ。動線的にもバリアーがなくスムーズな動きができ、日常の大切なモノが常に視界に入る所、手の届く所に配置されている事が重要だ。これらを考慮してプランを作成した。

今年3月末、熊本に行き、この復興プラン集を御船町長や熊本県建築士会女性部会の方などに贈呈した。また、見学した南阿蘇の西原での御木源<sup>ヨキゲン</sup>住宅復興モデル住宅が 15 坪だったが、Part III <12 坪・16 坪案> の活用の可能性は大きいと感じた。

熊本県建築士会の住宅相談（熊本のデパート）に Part III を持参したが、どの相談も使って頂く段階ではなかった。今後、建て主さんの家族構成や生活スタイルに合わせ、コンパクトハウス 12 坪プランをベースに自在に応用して頂き、フットワークのいい快適な住まいの実現の一助になれば、嬉しい。（加部千賀子）



左から PART I : 2016 年、PART II : 2017 年、PART III : 2018 年作成



熊本市内のデパートでの住宅相談会  
相談員の両側が  
UIFA JAPON 会員  
右から二人目が筆者

# UIFA JAPON 復興ハウプラン作成

Creating UIFA JAPON Housing Reconstruction  
Design Plans

熊本地震は2016年、4月14日と16日に発生した地震である。

その当時は病院のベッドでひとり、深夜、携帯ラジオを聞いていた時だった。室内にはテレビがなく、詳しい情報もないまま、ただ心配をするしかなかった。益城町の地名を連呼していたがどの辺なのか、不安のまま、一夜を過ごした。家族に頼み、朝刊を持参してもらい、状況が少し、わかるようになっていった。

これまでに2011年の東日本大地震のおりに、仮設住宅の案を募っていることを知り、鉄道の輸送に使われている、コンテナを二段重ねて二階建ての仮設住宅とか、地元の建築士事務所協会開催の仮設住宅のコンペにも応募したものだった。

熊本の地震のさいにも、アイデアを提案したいと思っていたときだった。

2016年秋にUIFA JAPONから、熊本への復興ハウプランの作成を募集していることを知り、早速、応募した。

地震から半年以上経過しているので住民の方々の気持ちに少し余裕がうまれたのではないかと、また、目を通してくれる機会があればと応募したものである。

坪数は、狭いが次第に余裕ができれば、増築も可能になるし、近所の顔馴染みであれば、共同で使用可能な、お風呂、洗濯場、時々集まって、会食ができることなどを提案した。やはり、木造で更に平屋で、材料が揃えば、仕事ができる人に教わりながら、共同で作業ができるような計画を考えていた。地元での、顔が見える関係ができていればこそ、何かと寄り添ったり、頼りあつたりの関係はあるのではないかと期待をこめての案である。実際のところ、自分の体との相談になると、熊本まで出かける気力に欠けてしまっていたのが残念であった。復興ハウプランを眺める余裕が出来た住民のみなさんのそばで、「こんな間取りはどうですか」。相手の顔をみながら、「感想を聞いてみたい」と思うだけである。手にとって、眺めてもらえれば、それだけで、十分な気がする。

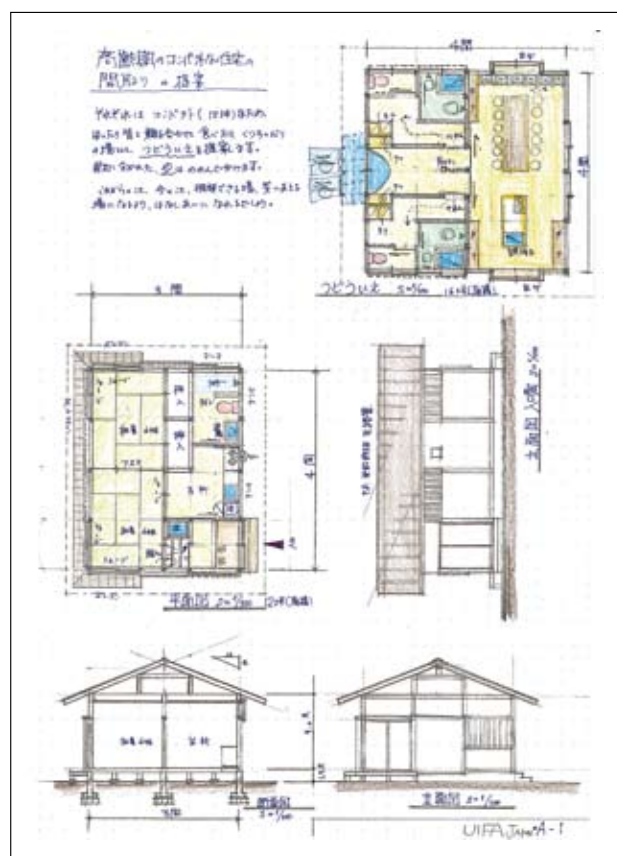
(福井綾子)



益城町被災住宅



住宅相談会風景



# UIFA JAPON 復興ハウプラン — 高齢期をいきいきと暮らす 住まいの提案

Creating UIFA JAPON Housing Reconstruction Design Plans - Proposals for houses where elderly can live more active lives

奇しくも地震の数日前のこと、私はライトアップされた春爛漫の熊本城の天守閣を車窓から見上げていたのがある。整った姿はシンボルとして輝いていた。

その頃、水俣市で保育園の設計の仕事が竣工に向けて進んでいたのである。初めての熊本での設計の仕事を通して、その風土や風景や人々や食材の一端を新鮮に知ることができ、春夏秋冬を楽しんでいた。

テレビ画面を通して知る地震の惨事に、私は言葉も無く見入るばかりであった。

水俣の仕事は、地震の影響で竣工が遅延の他被害は無く竣工したのだが、被災地へは僅かの募金支援しか私はできない… 忸怩たる思いを抱えたままで過ごしていたところ、UIFA JAPON で復興ハウスの高齢期の住宅モデルを提案しようとの企画があった。若者向けの提案は多いが、高齢者に向けての提案が少ないとの御船町町長の

声を受けてのことだという。UIFA JAPON 支援金の届け先町である。

住まいの設計を主な仕事としている私としては、本来それは、風土や土地の特性・風の流れ・太陽の向き角度等々を見極め体感した上で、住み手と共に暮らしの設計をすること、と考えているので、誰が住むのか？どこにどう住むのか？が不明では、案を出すのが難しいのである。

しかし、「高齢者」を私とし、「暮らし方」を想定し、少しだけ肌で感じた熊本の地を思い起こしつつ、小さな住まいを提案してみよう、と考えた。求められているのは「避難のための住まい」ではなく、「これからの暮らしの住まい」なのだから。

空間感覚での九州間が気に入ったところでもあった。地元産の木材とも出会ったばかりであった。その思いで提案する私の住まいが、熊本のどなたかの住まいづくりのヒントになれば幸いである。毎日が楽しく、生き生きと動ける暮らしのベースキャンプとなる住まいを私は欲しいと思っている。

具体的な敷地で、顔の見える住み手と一緒に、これからの暮らしのための「住まい」の設計計画ができればもっと良いのだが。  
(板東みさ子)





# 9章

## 女性建築家の発掘・調査研究・展示

Chapter IX  
Findings, Researches & Studies, and Exhibitions  
of Women in Architecture



2013年1月  
神奈川県立かながわ  
女性センター会場

# 女性建築家の発掘・調査研究・展示

Findings, Research & Studies, and Exhibitions of Women in Architecture

## 【解説】

UIFA JAPON が創設以降推進してきた活動の1つに、「女性建築家」に関する調査研究がある。UIFA JAPON の活動の歴史的経緯や特徴を把握しておく必要があるだろうということが底流にある。

特に UIFA JAPON は、設立から今日に至るまで、日本の女性建築家のパイオニアたちが集まり支えてきたことがあり、これらパイオニアの女性は、第二次大戦前後の草創期の日本の女性建築家の状況をよく知っており、また UIFA の一連の世界大会の多くに参加して各国の女性建築家との交流をもち、作品や研究発表を行う等の経験をしている。

しかし、パイオニア世代のメンバーが高齢になり、世代交代が進もうとしている時期に入り、これらの貴重な経験を記録しておかなければ、パイオニアの女性建築家たちの存在は、一部の人を除いては歴史の中に埋もれてしまうかもしれないという危機意識もあった。

最初の作業は1997年の『すまいをめぐる女性－女性建築家の戦後史を辿りながら』である。ついで、2002年に「女性と仕事の未来館」(当時)で開催された「女性と建築展－仕事と家庭の両立を支援するすまい・まちづくりに向けて」展で、ここで蒐集された資料を基に住宅総合研究財団(現住総研)に申請して行った「日本における戦前・戦後の草創期の女性建築家・技術者」(2004年)の研究である。この成果を生かして、IAWA25周年を記念して2011年から2012年にかけて開催した「未来へ－女性建築家のパイオニアたちの肖像」巡回展に繋がった。

女性建築家のパイオニアに関する一連の研究の後に行ったのが、「各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル」である。財団法人(当時)建築技術教育普及センターの助成を得る前の2014年から会員調査を行い、その結果を2015年のUIFA世界大会(米国)では発表すると共に、その機会を利用してUIFAの会員の調査を実施し、併せて世界各国の女性建築家の状況をデータからまとめ、日本の女性建築家の特徴を明らかにした。

こうした活動は、日本における「女性建築家の発掘」のための一連の取り組みでもあった。

(中島明子)

## 女性建築家の過去・現在・未来を探る

## 【解説】

UIFA JAPON は、『住まいをめぐる女性』の発行、女性と仕事の未来館における展示、住総研助成による研究において、女性建築家・技術者の歴史と実態を明らかにしてきた。それは日本において登場した女性建築家・技術者の存在と仕事を浮き彫りにし、記録し、建築の歴史に記したいと思ったからであり、今日の女性建築家・技術者のルーツを明らかにしておきたいと思ったからでもある。

70年近く前、女性に門戸を開いた新制大学の建築系・住居系の大学に進学した女性たちは、卒業後職を獲得するために奮闘し、そして職に就いてからもさまざまな壁に直面した。

職場と社会には性別役割分業や封建的気風が根強くあり、少数故に孤立しがちな女性がやむなく仕事を辞めることも少なくなかった。結婚して子どもをもった女性は、幸運にも保育所を利用できるか、親や親族に助けてもらわなければ、仕事を中断しなければならない。男女の賃金格差も大きく、大手建設会社は長く女性を正社員として受け入れなかった。

ただ、第二次大戦後の間もない時期は民主化の風が吹き、両性の平等意識が広がり、少数の女性が建築への進出をむしろ好もしく迎え入れる雰囲気もあったという。そうした中で PODOKO が生まれ、女性による設計事務所が誕生し、女性たちは前進し続けた。

その後、女性の社会進出が進み、建築分野でも女性が増え始めたことを背景に、環境は変わり始める。特に大きな影響を与えたのが男女雇用機会均等法と男女共同参画基本法である。国際的な女性の発展の潮流を背景に 1975 年に国連国際女性年が開催され、それは 1985 年の男女雇用機会均等法に繋がる。さらに 1999 年に男女共同参画基本法が成立し、建築分野の雇用の平等と発展を強力に後押しした。出産・育児に対しては保育所の整備が前進したことも大きい。

さらに十数年たち、建築や都市計画分野で仕事をする女性は急速に増えつつある。仕事と家庭を両立する条件が整いつつあるとはいえ、未だに他の先進諸国や北欧、旧社会主義国に比べて女性割合が少ないのは、さらに克服すべき課題があるのだろう。それを解明していく課題が私たちの前にありそうだ。

(中島明子)



## 『すまいをめぐる女性

### —女性建築家の戦後史を辿りながら—』の発行

Issuance of "Houses surrounding Women  
- Tracing the Postwar History of Women in  
Architecture"

『すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら—』は、1997年3月にUIFA JAPONが発行した小冊子である。

そもそもの発端は、1994年10月に行われた韓国との交流シンポジウムに発表するためからだった。その後、(財)東京都女性財団の助成を得て進められ、1996年第11回UIFA大会(ブダペスト大会)で中間報告を行った。UIFA JAPONの理事を中心に、会員の協力を得て進めたものである。

問題意識は、日本の戦後50年の住まいに関する歴史は、日本の女性建築家の登場の歴史でもある、ということに根差している。浜口ミホから始まる日本の女性建築家たちは、一貫して住まいの問題に取り組み、住宅設計に携わり、この活動は日本の女性建築家の歴史でもあり、「住まい」と「住文化」における女性のポジションの歴史でもあった。

UIFA JAPONの会員からは、「テーマにふさわしい明快な提案のある住宅」で「1945年から1995年間に竣工したもの」を募った。これらを下敷きに年表を作成し、戦後50年の住宅と社会における女性のポジションを分析している。内容的には、急増しつつある高等教育における建築系コースの女子卒業生数の分析を前提に、住宅建築における女性建築家の仕事を、第1期：戦後民主主義の気運と「主婦」の登場、第2期：家庭のプロデューサーとしての主婦、第3期：高齢期の女性への対応、としている。巻末には、ブダペスト大会で中原暢子会長(当時)の発表のための英文原稿、社会情勢や政策、林・山田・中原設計同人の作品、UIFA JAPON会員の作品、建築界での話題の住宅作品などを年表化して相互関連が一目瞭然になるようにしたものを

含む、現在でも読み応えのある小冊子となっている。

年表は、表装され、第11回ハンガリー(ブダペスト)大会に出展された。(松川淳子)

## 女性建築家の戦後50年の 到達点を探って

### —「女性と仕事の未来館—仕事と家庭の両立を支援する 住まい・まちづくりに向けて—」展示

Tracing the Goal that Women in Architecture achieved  
for 50 years after the World War II

- "To Create Housing and Community with a Good  
Balance of Work and Life for Women" Exhibition at  
the Center for the Advancement of Working Women

「女性と仕事の未来館」は、2000年1月に厚生労働省の外郭団体、財団法人女性労働協会が運営する施設として開館した。女性労働協会は、働く女性の地位向上及び女性労働者の福祉の増進を図ることを目的とした事業を展開している。しかし「女性と仕事の未来館」は、政府の「事業仕分け」の中で「閉鎖」と判定され、2011年3月31日に閉館し、女性就業センターへと形を変えている。

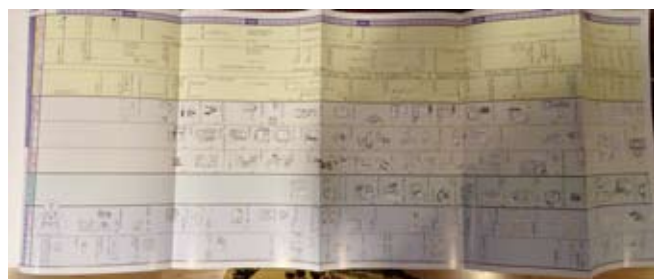
(株)生活構造研究所は、2001年度に女性労働協会から女性と建築についての展示を企画する委託を受け、UIFA JAPONに全面的協力を依頼、実施したのである。

展示は(株)生活構造研究所の企画に基づき、企画監修委員会として、中原暢子(UIFA JAPON会長)、小川信子(UIFA JAPON副会長)、小谷部育子(日本建築士会連合会女性委員会委員長)、中島明子(UIFA JAPON)、林昌二、宮本伸子(東京建築士会女性委員会委員長)があたり、(公社)日本建築士会連合会、(一社)東京建築士会などの協力も得て、全国の女性建築士から現状や提案を募り、展示としてまとめた。

展示は2002年3月15日から8月20日まで女性と仕事の未来館で開催され、パネルディスカッション、トークイベント、シンポジウム等もこの期間に開催さ



『すまいをめぐる女性』  
の表紙



作成した年表



パネルディスカッション  
「住まい・まちは働く女性をサポートできるか？」

れている。

展示に際して、故吉田文子というパイオニアの女性建築家を発掘したこと、PODOKO という 1953 年に旗揚げした女性建築関係者のグループに光を当てたことはこの展示を作成する作業の中での大きな成果だったといえよう。現在、UIFA JAPON の中で少しずつ進めている女性建築家のパイオニアについての調査・研究もここに端を発している。

戦後 50 年をかけて、女性建築家が到達した地点がどこであるかはさておき、少なくとも女性の作り手の数の増加が、生活空間のあらゆる面に及び、「女性の視点」としてポジションを獲得しつつあることはこの展示でも明らかになっている。結果はまだ見えないながらも、「仕事をとるか、私生活をとるか」という二律背反を超えて、生活と仕事が遊離していない「等身大の住まい」という新しい価値観に向けて社会を動かす女性の力を示すことができているのだと思う。(松川淳子)

## 女性建築家のパイオニア研究 (住総研助成) 「日本における戦前戦後の 草創期の女性建築家・技術者」

Research Study on the Women Pioneers in  
Architecture (granted by Jusoken)  
- "Japanese Women Pioneers in Architecture Around  
the World War II"

日本では女性が高等教育に参加できるのは、ごく例外を除いては第二次大戦後であり、新制大学になってからであった。日本女子大学から始まる家政系の女子大学の住居系学科の流れは、世界的にも珍しい建築士を養成する高等教育機関になった。同時に共学の建築系学科も女性にも門戸を開くが、女性が最初に卒業した 1953 年には東京芸大の 2 人、1954 年に北海道大学、横浜国立大学で各 1 名で、1960 年までに共学系建築学科を卒業した女性は約 30 人程度であった。

しかし、2002 年 3 月～ 8 月に開催された「女性と建



女性建築家のパイオニア・吉田文子さんの仕事場から

築展—仕事と家庭の両立を支援する住まい・まちづくりに向けて—」(女性と仕事の未来館)において、新たな資料、特に吉田文子氏のご遺族から譲られた資料があり、戦前の教育を受けて建築家になった女性たちがいることについても明らかにしておく必要があると思い、そうした日本の草創期の女性建築家の研究に本格的に取り組むことになった。

住宅総合研究財団の研究助成に応募し、松川淳子、杉野展子、宮本伸子及び中島が、1 年半をかけてまとめたのが「日本における草創期の女性建築家・技術者」\*である。

当時、女性建築家のパイオニアである土浦信子については小川信子、田中厚子が、浜口ミホについては北川圭子が、林雅子については建築家林雅子委員会が、成果を発表していた。つまり、そうしたパイオニアの方々が亡くなられる時期でもあり、その記録をまとめることが重要になっていた。

内容は次の通り。

1. 女性建築家の登場とその背景
  2. 日本における女性建築家の〈草創期〉の定義
  3. 〈草創期〉の女性建築家
  4. 女性建築家の組織——困難をのりこえるために(ポドコ、UIFA、UIFA JAPON)
  5. 女性建築家のアーカイブ
- おわりに

(中島明子)

\*松川淳子、中島明子、杉野展子、宮本伸子「日本における草創期の女性建築家・技術者」『住宅総合研究財団研究年報』No.30、2004 年。



展示風景

## I A W A 25周年記念 女性建築家のパイオニア巡回展

## 〔 解 説 〕

I A W A (International Archive of Women in Architecture 国際女性建築家アーカイブ) は、1985年にヴァージニア工科大学のミルカ・ブリズナコフ氏により設立され、以後全世界の女性建築家の作品類の第一次資料の蒐集が行われ、ヴァージニア工科大学に収蔵・展示されている。

2010年にはI A W Aが創立25周年を迎えるのを機に、UIFA JAPON会長でありI A W Aのアドバイザーであった松川淳子が呼びかけ、UIFA JAPONとI A W Aが連携した事業が企画された。

日本側では、日本のパイオニアの女性建築家の資料がある程度集まり、これらを公表する場を考えていた時期でもある。2002年3月～8月にかけて「女性と建築展——仕事と家庭の両立を支援する住まい・まちづくりに向けて」を(財)女性労働協会「女性と仕事の未来館」(当時)で開催したUIFA JAPONのメンバーが制作の中心となって活躍し、ここで蒐集したパイオニアの女性建築家関係の資料や図面等を基に、住総研の助成を受けて「日本における草創期の女性建築家・技術者」をまとめた。

そこで日本及びI A W Aのコレクションを利用して、日本と世界の女性建築家のパイオニアの展覧会を開催することが決まり、実行委員会が結成された。当時の松川淳子UIFA JAPON会長とI A W A委員長ドナ・デュネイ、副委員長のケイ・エッジ、ヘレナ・ルナールが協力体制を作り、UIFA JAPONのメンバー13人と広報渉外委員会、事業委員会が担当した。

当初の企画は、建築会館ギャラリー(第一会場)で、2011年6月7日～17日の展示及び6月6日オープニングと6月11日記念講演会が、時を同じく開催されたUIA(国際建築家連合)2011東京大会における東京国際フォーラム(第二会場)での展示であった。この企画に対して公益財団法人建築教育技術普及センターから助成金を得ている。

第一会場でのオープニングではI A W A副委員長のケイ・エッジによる「東西のパイオニアたちに見るオーバーラップとパラレル」の講演、記念講演会ではI A W A委員長のドナ・デュネイによる「未来へ—女性建築家のパイオニアたちの肖像」があり、女性建築家の組織やその成果を蒐集する意義について語られた。

第二会場となったUIA2011東京大会では、展示物を再構成して臨み、ここに参加したド・ラ・トゥールUIFA会長や各国の建築家たちと交流を深めるよい機会になった。

この展覧会が好評だったこと、また女性活躍推進の流れにのって、UIFA JAPON会員がかかわる女性センター等からの展示要請があり、国立女性教育会館、中央区立女性センター(ブーケ21)、男女共同参画センター横浜北(アートフォーラムあざみ野)、千代田区男女共同参画センター(MIW)、神奈川県立かながわ女性センター、越谷男女共同参画支援センター(ほっと越谷)と、結局全8会場での〈巡回展〉になった。

展覧会では建築に関わる学生・院生、教員、専門家は勿論、一般の市民等の多数の人々に、女性建築家とそのパイオニアの存在を知ってもらうことができた。(中島明子)



第一会場 ケイ・エッジ教授のレクチャー



第一会場の展示風景



第二会場展示



## IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展

### 神奈川

IAWA 25th Traveling Exhibition "For the Future: the Pioneering Women in Architecture"  
- Kanagwa Prefecture -

「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展」が東京で開かれたのに刺激され、ぜひ神奈川でもということになり2箇所で開催した。

神奈川県藤沢市 江ノ島のかながわ女性センターの展示は、2013年1月～2月に開催した。NPO 法人かながわ女性会議の事務所も女性センターの中にあるので展示については協力してもらった。江ノ島の女性センターは風光明媚な場所にあり、観光で来た一般の方も立ち寄ることもある施設なのでいろいろな人の目にも触れたと思われる。又、女性センターでは様々な男女共同参画の講演会やイベントが開かれるので多様な参加者に見てもらうこともできた。女性の建築家の早くからの活躍をご存じない方も多く、驚かれていた。

また、横浜市あざみ野のアートフォーラム（男女共同参画センター横浜北）ミニギャラリーでの展示は2016年2月～3月に開催した。ここのフリースペースは女性建築技術者の会の横浜グループも活用しているので会員の方たちにも来てもらった。

一般のフリースペースと図書館を利用する方たちに加え、小さな子ども連れの若いお母さんたちにも見ってもらうことができた。ぜひ子どもたちが大きくなったら女性の建築家の活躍を伝えてほしいと思う。（吉田洋子）

## IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展

### 千代田

IAWA 25th Traveling Exhibition "For the Future: the Pioneering Women in Architecture"  
- Chiyoda-ku -

アメリカ・ヴァージニア工科大学の IAWA（国際女性

建築家アーカイブ）25周年記念行事と連携して、日本の女性建築家パイオニア展を建築会館で開催したのが2011年6月のことだった。IAWA 創設者のミルカさんに面識はなく松川淳子さんから話に聞いただけだったが、後を引き継ぎ発展させたドナ・デュネイ氏とやりとりして、松川さんと成田までお迎えに行くなどアテンドのお手伝いをした。パネル一式の荷物を受け取るまで、少しハラハラもした。

その後9月にはUIA 東京大会があり、東京国際フォーラムの吹き抜け廊下でも展示し、UIA 大会の折から、ドラ・トゥール会長を始めモンゴルのUIFA 会員もいらして、一緒に見ていただくことができた。そうした充実した日米の先進的な女性建築家を紹介した展示だったので、続けて中央区の女性センター、神奈川県江の島の女性センターと巡回して女性建築家の存在をアピールし、翌年の6月23日～29日には千代田区男女共同参画センター MIW でも展示した。

MIW は女性の地位向上を目指すという理念から一歩進んで、男性にも視野を拡げた男女共同参画という考えが広まりつつある時期に開設され、当時は10年余りを経ていた。オープンに当たっては(株)生活構造研究所が関わり、私もお手伝いをさせてもらったので、その場でのパイオニア展ということで感慨深いものがあった。千代田区のHPでは、「暮らし・手続き」というトップ項目の「男女平等・人権」に登場する区政の中枢に位置している。

MIW は施設の愛称で、男性 (Man) や女性 (Woman) の間の情報・意見交換 (Intercommunication) という意味が込められた。私が通った当時の千代田区役所は道路の反対側にあったが、久しぶりに訪れると新しい建物に変わっていて、展示は10Fの施設内でなく1Fホールの、通りがかりの人にも見やすい場所にパネルを並べることができた。（北本美江子）



横浜市あざみ野（男女共同参画センター横浜北）アートフォーラムミニギャラリー



かながわ女性センター展示



千代田区 MIW のパイオニア展—千代田区役所1階ホールにて

## IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展

### 埼玉

IAWA 25th Traveling Exhibition,  
"For the Future: the Pioneering Women in Architecture"  
-Saitama Prefecture-

「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展」の巡回の中で埼玉県内で開催された2つの展示の概略を紹介する。

一つは国立女性教育会館（通称 NVEC ヌエック、埼玉県比企郡嵐山町）における『建築と歩む～チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ～』で、2012年8月～12月に同館アーカイブセンター展示室で開催された。NVEC がさまざまな分野においてチャレンジした女性たちのあゆみの展示企画として、この年建築家を取り上げたもので、パイオニアたち6人の展示はUIFA JAPONの企画展示を貸し出したものであり、チャレンジする建築家としては活躍中の女性建築家3人を取り上げていた。

もう一つは最後の会場となった越谷市男女共同参画センター（ほっと越谷）において開催されたもので2013年3月であった。会場の都合上、展示できた内容は限定的ではあったが、幅広い階層の市民に見ていただける会場であった。また、同センターの関係者の方から、浜口ミホさんのパネルを貸してほしいという更なる要望があるなど、情報発信は多様性が必要かと感じた次第である。（宮本伸子）



国立女性教育会館（NVEC）でのパイオニア展（上・右）



越谷男女共同参画支援センター・ほっと越谷でのパイオニア展

## IAWA25 周年記念女性建築家のパイオニア巡回展

### 会場図

IAWA 25th Memorial Exhibition  
"For the Future: Pioneering Women in Architecture"  
- Venue Layout Map

2011年6月建築会館ギャラリーの展示を皮切りに、関東近辺の女性センターを中心に「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展」を8箇所において開催した。

各会場の大きさや展示スペースの状況はさまざまで、その都度展示内容を見直し、レイアウトを工夫し、できるだけ多くの人々に見ていただけるよう工夫した。建築関係者だけでなく、広く一般の方々に見ていただき、建築の仕事における女性の活躍を発表できたと思う。各展示会場と展示期間は以下の通り

- 第1会場 建築会館ギャラリー（東京）  
2011年6月7日～17日
- 第2会場 東京国際フォーラム（東京）UIA 2011 東京大会 2011年9月26～28日
- 第3会場 中央区立女性センター「ブーケ21」（東京）  
2011年10月5日～11月6日
- 第4会場 男女共同参画センター横浜北「アートフォーラムあざみ野」（神奈川）  
2012年2月7日～3月4日
- 第5会場 千代田区男女共同参画センター「MIW」（東京）  
2012年6月23日～29日
- 第6会場 国立女性教育会館「NVEC」（埼玉）  
2012年8月7日～12月9日
- 第7会場 神奈川県立かながわ女性センター（神奈川）  
2013年1月8日～2月8日
- 第8会場 越谷市男女共同参画センター「ほっと越谷」（埼玉）  
2013年2月13日～3月31日

（森田美紀）

第1会場  
建築会館ギャラリー



第2会場  
東京国際フォーラム



Second Exhibition:  
26<sup>th</sup> September to 28<sup>th</sup> September at Tokyo International Forum



Tokyo International Forum Opening ceremony of UIA 2011 Tokyo Our Exhibition Place

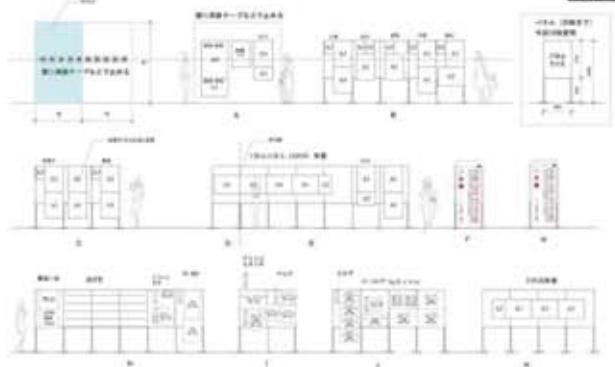


Dorina's Opening Speech Exhibits Helene's Closing Speeches

第3会場 中央区立女性センター（ブーク21）

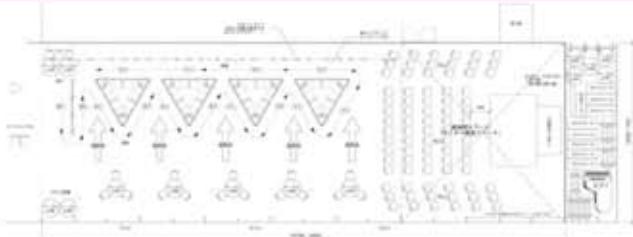


第4会場 男女共同参画センター横浜北  
(アートフォーラムあざみ野)

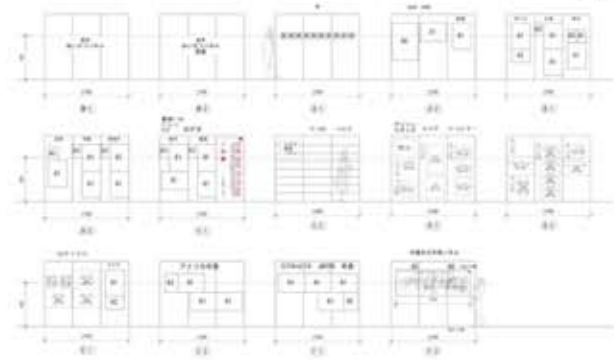




第6会場 国立女性教育会館 (NVEC)



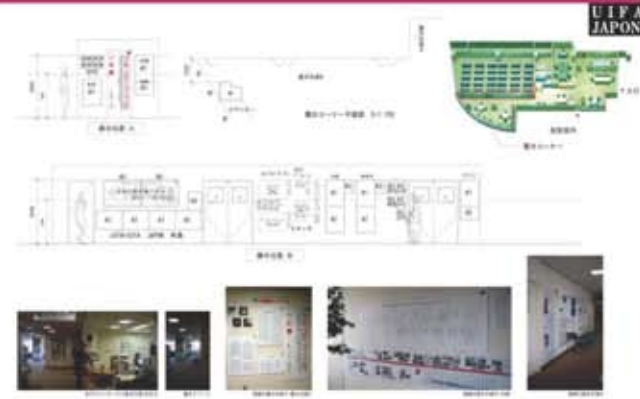
第5会場  
千代田区男女共同参画  
センター (MIW)



第7会場 神奈川県立かながわ女性センター



第8会場 越谷市男女共同参画センター (ほっと越谷)



## 「女性建築家のキャリア形成とライフスタイル」 国際調査研究

### 【解説】

パイオニア展で日本における女性建築家の先達のことが大分明らかになったこともあり、次に女性建築家がよりよい仕事（Decent work）を行い、より豊かなライフスタイルを築いていくために、キャリア形成とライフスタイルの国際調査を行うこととし、2014 - 15年に『各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル』の研究を行った。

こうした各国横断的国際調査は、調査対象の協力を得ることが難しく、Architects' Council of Europe（ヨーロッパ建築家会議）が毎年加盟各国のメンバーに実態調査を行ってまとめている他にはあまり見られない。そこでUIFA JAPONとして、国際女性建築家会議（UIFA）の組織を利用して行うことにした。

2014年12月にUIFA JAPONの会員調査を行い、これをベースに公益財団法人建築技術教育普及センター調査・研究助成に応募し、資金を得たことでスタートした。

研究体制は2つに分かれ、第Ⅰ部各国の女性建築技術者の背景と動向（データ分析チーム：石川彌榮子・宮本伸子・小池和子・中島明子）、第Ⅱ部「アンケートを通してみた各国女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル」（アンケート調査チーム：松川淳子、稲垣弘子、森田美紀）である。

データ分析や事例調査からは、日本における建築分野の女性は増加しているが、女性が半数近くを占める国に比べて高くはないが、若い層が増加しており、これらの女性が活躍できる環境が求められること、かつては建築現場の環境の悪さや力仕事は女性の進出を妨げる一因であったが、近年ではいずれの国でも相当改善されてきている、出産・育児・介護については、アジア諸国では親の支援により出産・育児を乗り越え介護問題が大きく、北欧では社会サービスの充実により介護負担が軽い。また、米国のAIA、英国のRIBAは、それぞれ組織を挙げて多様な人々の建築職への参画を目指すダイバーシティ政策の中で、女性の課題を積極的に取り上げて活動を展開している。

国際調査では、UIFA JAPON会員51人、UIFA会員58人、合計109人について分析した。

各国の女性建築技術者全体としていえることは、①家族に建築関係者がいる人が半数を占めること、②不快な思い出がある人は6割、③建築関係の職を選んだことについては9割以上が良かったと回答し、④今後については「社会貢献したい」という人が4割もいる。

日本と海外の違いで特徴的なことは、①海外では母子二代にわたって建築家という人がいる。②「不愉快な思い出」では「差別・不平等」が「東欧・北欧」を除き30%～50%あり、「セクハラ等のいやがらせ」の経験があるのは「南欧他」と「日本」だけだった。

この研究の成果は『各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル』（UIFA JAPON所蔵）にあるので、参照してほしい。（中島明子）

# 女性の就業状況の国際比較 まだまだ低い日本

International Comparison of  
Women Employment Status

- Still lower employment rate of Japanese women

調査は、日本の「建築技術者」における女性技術者の状況を「国勢調査」「建築資格者・団体」「建築技術者教育機関」「公的団体」を中島さんと宮本さん、「建設業5団体」は石川さんが担当し、統計やヒアリングから分析した。若年層では女性建築技術者の進出が見られるが、年配者がもともと少なく全体では低い数値をしめしている。

日本及び各国の女性の就業と各国のワーク・ライフ・バランス施策は小池が担当、男女共同参画に関する国際的数値と欧州連合（EU）のジェンダー平等施策は中島さん、東南アジア諸国連合の女性労働は宮本さん、各国の建築士制度等の資格要件は小池が担当した。「国勢調査や労働力調査」「男女共同参画白書」「雇用状況実態調査」「内閣府 HP」「欧州連合の男女均等法制の最近の動き他」「建築教育普及センター調査・研究報告書」を分析、OECD 東京事務所へヒアリングを行った。OECD 加盟国 34 カ国（2014 年）で女性の就業状況を国際比較。平均値は 61.0%、日本は 63.7%で 16 番目。一番はアイスランド 79.3%、トルコが最下位。管理職に占める女性の比率は、日本 11.3%（2014 年）。フィリピン 47.1%(2013 年)はアメリカ、フランス、スウェーデンの欧米諸国より高いのは特筆すべきことである。長時間労働者の割合は、日本は男女とも高く、韓国も同様である。割合が低いのは、オランダ、ノルウェイである。アメリカ、フランス、オランダ、ノルウェイ、イギリスやドイツでのワーク・ライフ・バランス施策の導入が女性の就業環境を支えている。日本の女性は労働力として期待されているものの、M 字曲線で示されるように日本の女性の就業状況は「仕事と家庭の両立が困難」なことを示している。男女雇用機会均等法後に女性の総合職

への道は開かれたものの「母性保護と労働」を両立させる望ましい就業環境は、まだまだ途上と言える。

UIFA JPON の第 1 回総会記念講演会で、男女雇用機会均等法に関わった赤松良子氏の話を書いて、ニュースレター 2 号（1993 年 7 月）に感想を書いた。「キャリア形成とライフスタイル」のデータ調査は、21 世紀の「女性の就業状況」を把握する貴重な調査になった。

（小池和子）

## キャリア形成と ライフスタイルについての データ調査を担当して

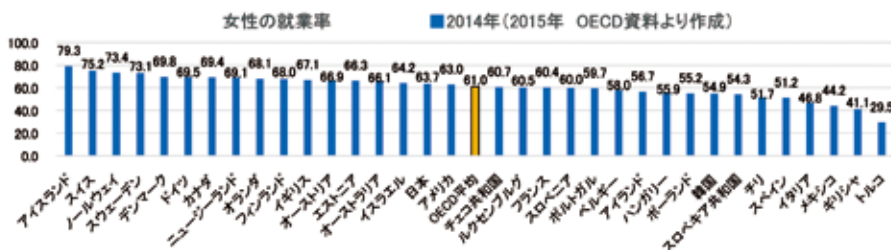
Implementation of Data Research,  
"Career Development and Life Style"

私は、「グローバル視点でみた女性建築技術者の課題」を担当した。中島明子さんが IUA（国際建築家連合）、ACE（ヨーロッパ建築家会議）の資料、AIA（アメリカ建築家協会）、RIBA（王立英国建築家協会）、ヨーロッパ各国、そしてカナダ、さらに韓国や上海までを担当したのに対し、私自身は主として ASEAN 諸国の状況の調査を担当するというかなり限定的なものになった。

当初、できる限り現地での実情をあたるという姿勢で望んだが、各国の大使館などにデータをあたってはみたものの、そういった情報はないという回答か、別の団体を紹介されても連絡がつかずということで、結局成果が得られず、唯一タイの日本企業の現地法人でのヒアリングのみに終わってしまった。

そこで、もっぱら、国連関連のデータと、ASEAN が諸国のデータを収集しているものを組み合わせて用いることで、わが国との客観的な比較調査を行う方針に転換した。

それらの結果として、欧米での建築技術者の中での女性の進出は、AIA の会長が女性であることに象徴されるようにきわめて高いということは予測されてはいた





が、EU での調査では女性が半数を超える国があったり、ASEAN 諸国においても多くの女性が建築技術者あるいは建築関連の業務に従事しており、女性の比率からみると日本は、かなり世界から取り残されているのだということが実感された。

また、子育てとの両立については、多くの国では、先進的であるか発展途上であるかは問わず、公的、家族内、更に職場の柔軟性といった中で母親一人に子育てを負わせているわけではないことが感じられた。高齢者の介護については、まだどの国にも課題はあるようであった。

(宮本伸子)

## キャリア形成とライフスタイル —20カ国のアンケート調査から見えるもの

Career Development and Life Style  
- Findings from Questionnaire Survey in 20 Countries

今回の国際調査は世界各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイルの実態をアンケート調査により把握し、比較分析を行うことを目的とした。調査は日本会員を対象とした予備調査(2014年12月～15年1月)を踏まえ、英語版と日本語版のアンケート票を作成し海外会員対象と日本会員対象のアンケート調査を実施した。

海外会員対象アンケート①UIFA 第18回世界大会(於米国2015年7月30日～8月4日)実施:10カ国73人に配布 10カ国37人回収(回収率50.68%)②電子メールによる実施(2015年12月10日～2016年1月10日):37カ国124人に配布 10カ国21人回収(回収率16.93%)日本会員対象アンケート①UIFA JAPON 会員(2015年11月3日～25日):73人に配布 51人回収(回収率69.86%)総数:配布:270人 回収:109人 回収率:40.37%。

アンケートの設問等の作成は研究チーム全員で行ったが、海外向けアンケート調査は松川、森田、稲垣の3



報告書表紙

人で担当。膨大な UIFA 会員リストの中から、送付可能者リストを作成。3人で国別に担当。アンケートを送付し、返信者には、回答お礼メールを送る。

アンケート集計では、自由記述部分の判読に一苦労。言語圏が多岐に渡り、スペルの綴り方も様々。なかなか進まない作業を続けやっと集計作業へ。短期間でまとめるため、毎日グラフと格闘。今回は国別サンプル数にばらつきが多く、踏み込んだ分析が出来なかったのが残念。国際アンケート調査は貴重なので、次回、機会があったら地域別集計が出来る位のサンプルがとれるように考えたい。

一例を下記に挙げる。

- (1) 進路選択……「家族に建築関係者がいるか」は、海外では母親と二世代にわたる場合があるが日本にはない。建築関係を選んだ動機は、「仕事の魅力」が6割強。家族や先生に「勧められた」人の割合は海外の方が多い。
- (2) 仕事……「自分にとって大切な仕事」は、海外では若い時期の規模の大きい仕事。日本は自分自身の頑張りや、他人から評価されたことが「大切な仕事」に繋がっている。

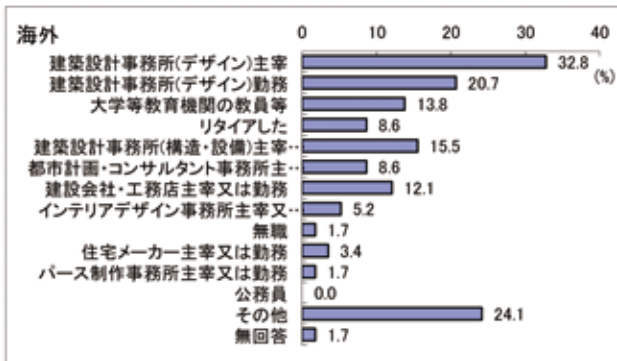
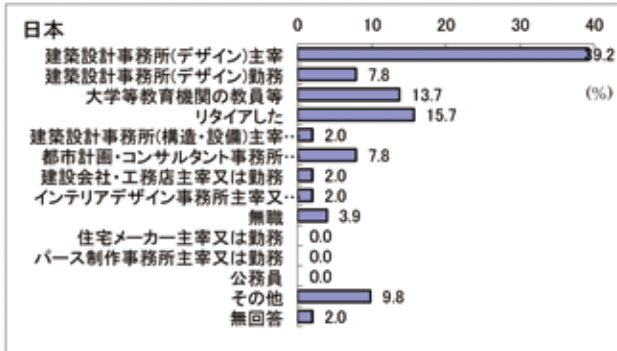
109人の回答者の内、7割強が自分の意志で建築関連領域の仕事を選び、9割強の人が建築関連領域の仕事を選んで、良かったと思っている。(稲垣弘子)



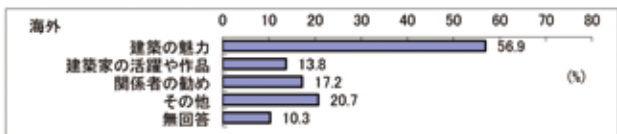
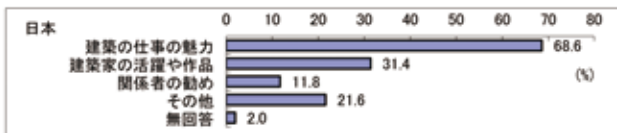
海外会員向けアンケートお願い用紙

# アンケート結果の一部

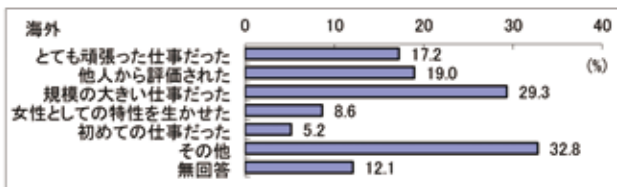
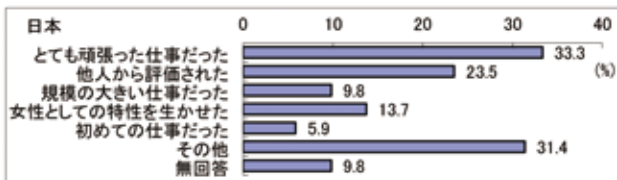
## ★所属と立場



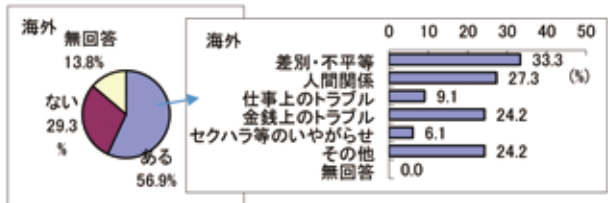
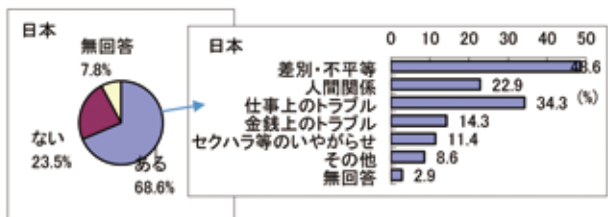
## ★建築関連領域を選んだ理由



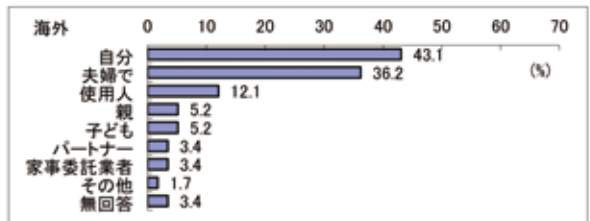
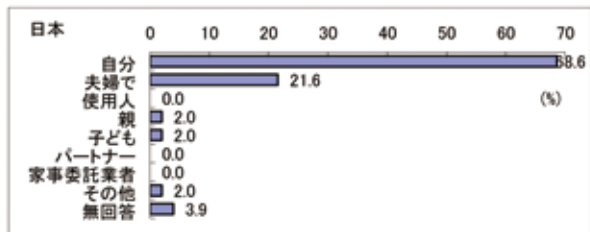
## ★自分にとって最も大切な仕事の理由



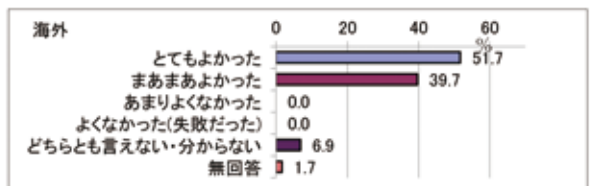
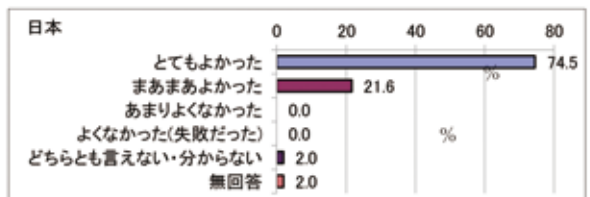
## ★仕事を続ける中で、不愉快な(ひどい)思い出はあるか



## ★現在、家事(調理・洗濯・掃除・家計管理等)は主に誰がしているか



## ★「建築関連領域」の仕事を選択したことについて

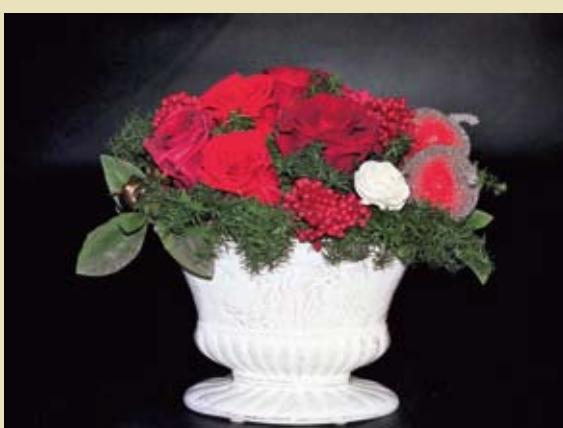


# 10 章

## さまざまな分野での受賞

Chapter X

Award Winning in a Wide Variety of Fields





# UIFA JAPON 会員たちの受賞

Prizes Given to UIFA JAPON Members

## 【解説】

建築や都市計画、造園等の分野で、女性が活躍するようになり、その作品や活動業績等が評価され、様々な賞を授与されるようになった。それは建築における女性の仕事が、それぞれの分野で評価されてきたことを示している。

日本建築学会では、早くは1980年に林雅子さん、1985年に長谷川逸子さんが学会賞（作品）を受賞しており、1998年には菅原文子さんが学会賞（論文）を受賞されている。作品賞や奨励賞を受賞する女性も増えている。日本建築家協会、日本建築士会連合会、その他の業界団体、国や自治体・団体の賞等も数多くあり、これからも多くの女性が受賞してゆくに違いない。

さらに国際的にも評価されるようになり、2010年に国際的な建築賞の頂点にあるプリツカー賞を、女性として2人目、日本人女性として初めて受賞した妹島和世さんの活躍は眩しい。

本25周年記念誌では4人の受賞者に執筆を頂いた。しかし、UIFA JAPONの他の会員も様々な賞を受賞されているはず。にもかかわらず、それらを取り上げるには至らなかったことはお詫びしたい。

最後に、UIFA JAPON 災害復興見守りチームの「環境共生活動賞」の受賞と、岩手県の「岩泉町だれでもフォトグラファチーム」が第12回日本都市計画家協会「優秀まちづくり賞」を受賞したことも掲載した。

付言すると、UIFA JAPONとして、2016年度は社会貢献と女性建築家研究等をまとめ、2017年度は社会貢献に焦点を絞って日本建築学会賞（業績）に応募したが受賞はならなかった。UIFA JAPONによる女性視点と国際交流を絡め、継続的で地域・被災者に寄り添って行う災害被災地支援が評価されなかったことは残念であった。しかし、UIFA JAPONのあり方と被災者支援をより深める必要があることを提起されたと受け取ればよいのだろう。（中島明子）



記念講演会場前で

## 2010年日本建築学会教育賞 (教育業績)

Architectural Institute of Japan Prize given in 2010

### 教育業績

建築分野における女性の研究者、建築家をはじめ、広く実務者の育成に携わった長年の貢献

終身会員 小川信子殿

あなたの業績は日本建築学会教育選考委員会において選考の結果、建築教育の発展に貢献する優秀な業績と認められました。よってここに日本建築学会教育賞を贈りその業績を賞します。

2010年5月31日

社団法人 日本建築学会

会長 佐藤 滋

上記に記した様な文面の賞状をいただき、ここに記するのも心苦しいことです。

大変幸いなことに、日本女子大学に助手として採用いただき、40年余り、無事務めさせていただいたことが、このような光栄な機会を与えて頂きました。

諸先生方、先輩にご指導いただき今日まで学び、研究生活、創造生活が出来ました。

また、若い方々の力が私を育てて下さったこと、本当に幸せと思います。この機会をかりて、心より感謝と御礼を述べさせていただきます。(小川信子)



日本建築学会教育賞受賞  
小川信子記念講演  
(日本女子大学成瀬記念講堂)

## エイボン女性大賞受賞

Avon Women Award

2008年のある日の夜、突然、エイボン賞の大賞受賞の知らせが届いた。失礼なことにその時私はエイボン賞とは何かさえ知らなかった。調べてみると、第1回は市川房江さんから始まって宮城まり子さん、最近では石牟礼道子さん、吉永小百合さん等など、蒼々たる女性たちがおられ、その中に選ばれたなど本当に寝耳に水だった。当時、事務所の近くにお住いの林昌二さんがお散歩で我が事務所に来られることが多かったのだが、「雅子もいただけてますよ。おめでとう」といわれ、増々恐縮したことを覚えている。その賞は、トロフィーと賞金がいだけるのですが、そのうちからボランティア団体等に一定の金額を寄付することが義務づけられています。そこで、1985年頃から公共トイレの進化やイメージチェンジに貢献した日本トイレ協会と、女性建築家の国際的集団であるUIFAとした。日本トイレ協会は、公共トイレの進化に携わる、まちづくりの実践者、建築家、機器や建材メーカー、紙の会社、メンテナンス会社、市民等々の集団で、今年で創立33年、UIFAはご存知の通りです。2つの団体が共通しているのは、真摯な活動で社会的貢献は絶大なのに、あまりお金には恵まれない?ことである。

受賞式には私と3人で壇上に登り、うれしくも面はゆい気がしたことを覚えている。

その時、エイボン賞の選定委員でもあり、元朝日新聞の記者で国際福祉大学の熊由紀子さんのスピーチは印象的なものであった。「インフラが整備されたといわれる日本の社会において、公共トイレは、汚く暗く怖い、臭いと、足を引っ張る存在であった。女性は特に不便で安心して利用できなかつた。小林さんの仕事は、それらのイメージを払拭させ女性にとって生きやすい世づくりに貢献してくれた。それが賞を受賞された理由です。実



UIFAの当時の会長小川信子先生と、日本トイレ協会会長の平田純一氏

は、審査会では、世界的テニスプレイヤーやピアニストやバレリーナの名も挙がりました。しかし、地道に活動を続けトイレのイメージを変えてきた方にこそ贈ろうということとなりました。」と。私はそのスピーチで、今までの疑問が晴れ、大いに納得することができた。そして、どんな仕事であろうと、誠実に考えていると、誰かが必ず見てくれるものということ、改めて思いなおした一瞬でもあった。(小林純子)

## A' Design Award 金賞(イタリア) / AR AWARD (イギリス)

A' Design Award (Italy) / AR AWARD (U.K.)

### 【A' Design Award 金賞 現代美術館の家】

「美術館のような住宅を建てたい」という絵画と音楽が趣味の施主の住宅は美術館のように室内を一筆書きで巡る事ができる。施主の「外部視線の遮蔽」要望をかなえつつ、風や光が抜け、シークエンスと重層性のある空間構成とした。エネルギーに頼らない建築的手法で多湿、多雪課題に対応し快適な住環境を実現した。【A' Design Award 2015-2016 金賞】【ふくい建築賞 2016 住宅部門優秀賞】等を受賞し、日本建築学会『作品選集 2017』等、国内外の書籍に掲載されている。

### 【AR AWARD Aqua-scape】

Aqua-scape は大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ 2006 に出品した実験的建築である。前年の新潟中越地震で被災した子供たちに笑顔を取り戻してもらうために子ども達だけが入場できる特別な空間をつかった。プラスチック素材を織物のように編む「形態抵抗構造」とすることで、骨のない柔らかくて不定形な「クラゲ」のような建築を成立させ、十日町市の中心的施設<キナーレ>中庭の水盤に浮かべた。2006年【AR AWARD】を受賞した。

AR AWARD はイギリスの建築誌 Architectural Review が主催する世界的な賞のひとつで、有名無名を



現代美術館の家  
© Hiroshi Ueda



Aqua-scape (イギリスで展示した The Orangery version) © F.A.D.S

問わず世界中から応募がある。受賞後、Aqua-scape は多数のメディアで紹介され、『ディテール』誌ではドイツ本国版を皮切りにアメリカ版、日本版の表紙を飾った。また、2009年にはイギリスの美術館のオファーにより、私と藤木隆明が共同主宰するF.A.D.S(藤木建築研究室)初の個展が実現し、会期延長を含め4ヶ月のロングラン開催となった。

海外の受賞式に参列する度に感じる事は、審査委員が純粋に作品で評価する点である。知名度や実績、建築用途や規模は不問。Aqua-scapeのような実験的建築も広義の建築と捉え、独自性(独創性?)を評価する傾向にある。作品だけを見て就職を希望してくる海外の学生も含め、自分の目で見極め評価する人々を信じて地道に設計活動をしている。(佐藤由紀子)

2017年第29回住生活月間功労者表彰(国土交通大臣賞)の受賞

## UIFA JAPONの活動成果が 表彰されたと理解して

The 29th Commendations during the Home Lifestyle Month in 2017(Award of the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism)  
- Proof of the Fact that UIFA JAPON's activities have been highly appreciated

2017年秋に、(公財)日本建築士会連合会から「住生活月間の功労者表彰で、国土交通大臣表彰に推薦する」というお知らせをいただいた。そういう名前の表彰があることも知らなかったの、大変驚き、辞退も考えなくはなかった。しかし、推薦して下さった連合会には、それも申し訳なく、また、表彰理由が、東京建築士会の女性建築士委員会で、委員長を2期務めたこと、UIFA JAPONの被災地支援活動を続けていることなどであるということなので、私自身の表彰というより、女性建築士委員会やUIFA JAPONの活動の成果の表彰であることだと考えなおし、賞をお受けする決心をした。

改めて、住生活月間について調べてみると、国土交通



表彰状と切子の花瓶と盾



省では、「毎年10月を『住生活月間』と定め、住意識の向上を図り、豊かな住生活を実現するために総合的な啓発活動を展開している」ということで、その行事の一環として、関連分野において活躍した個人や団体に対し、「功労者表彰」を行っているとのことである。

表彰式は、2017年10月1日(日)に長崎県佐世保市のアルカス SASEBO というところで、高円宮妃殿下のご臨席で実施された。個人と団体を合わせて、国土交通大臣表彰が28件、住宅局長賞が16件ということだった。大臣表彰の「個人」は、15件で、女性は私を含め2名、啓発活動、団体役員、労働環境整備、長期優良住宅の普及、建築設計や工事監理に従事その発展に寄与、国際協力などが功績概要として挙げられている。

私の場合は、「多年にわたり『高齢化社会における住宅・住環境のあり方についての普及・啓発活動』に取り組み、多くの女性建築士の育成と委員会活動の活性化に寄与した。また、国際女性建築家会議日本支部を率いて、女性建築家の特性を生かし、中越地震、東日本大震災等、各地の自然災害の被災地支援に尽力した」というのが理由となっている。

UIFA JAPON の力と、私自身は「歳をとったのだ」ということを実感したものである。 (松川淳子)

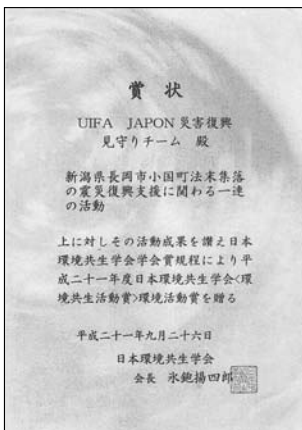


表彰式の会場  
(佐世保市  
アルカス SASEBO)

## UIFA JAPON 災害復興見守りチーム 「環境共生活動賞」の受賞

2009年9月26日、つくば国際会議場で開催された日本環境共生学会第12回学術大会において、UIFA JAPON 災害復興見守りチームが「新潟県長岡市小国町法末集落の震災復興支援に関わる一連の活動」に対して「環境共生活動賞」を受賞した。お茶会をはじめ、法末集落においてのUIFA JAPONの活動が評価された。授賞式には寺本晰子が出席し、賞状を受け取った。

(森田美紀)



日本環境共生学会  
第12回学術大会  
「環境共生活動賞」賞状



道普請の様子 (2009年)



オープンガーデンで集落を見学する都市部からのお客様

## 岩泉町だけでもフォトグラファチーム 第12回日本都市計画家協会 「優秀まちづくり賞」を受賞

2017年10月8日に横浜市立大学金沢八景キャンパスで全国まちづくり会議が開催され、全国から選ばれた8チームのプレゼンテーションが行われた。「岩泉町だけでもフォトグラファチーム」代表の織笠清氏がプレゼンテーションを行い、惜しくも大賞は逃したが「優秀まちづくり賞」を受賞した。

(稲垣弘子)



全国まちづくり会議 会場前でUIFA JAPON 応援団と



岩泉町だけでもフォトグラファチーム代表 織笠清氏のプレゼン風景



日本都市計画家協会会長から賞状を受け取る織笠氏

# 11章

## U-FLA JAPON 共に

Chapter XI  
Together with UIFA JAPON





# UIFA JAPON と共に

Together with UIFA JAPON

## 【解説】

UIFA JAPON の会員のマジョリティは、「女性」「建築技術者」である。しかし、建築界の職域拡大と共に、様々な職種・分野の人々が「建築」を超えてかかわるようになり、UIFA JAPON のメンバーも、多彩なメンバーで構成されるようになった。

その広がりを職域分野からあげれば、インテリアデザイン、都市計画・まちづくり、公園緑地・景観デザイン、教育研究関係、行政関係、さらにそれらの複合的分野があり、さらに広がりつつある。

対象とする建築も、少子高齢社会に対応して、子どもの施設から高齢者施設や住宅、シェアハウスやコーポラティブなどの共生型住宅や、エコハウス、コミュニティ施設の他、かつては女性の進出が少なかった巨大なタワービルや大規模施設や市街地開発の計画・設計に取り組む女性や、それらの施工現場で働く女性も増えてきた。女性が働きやすいように労働環境が改善されたからでもある。当たり前のように海外での仕事も多くなった。

さらに UIFA JAPON の会員とのつながりで、UIFA JAPON の活動自体に関心をもつ「異分野」の方々も参加している。

ただ、会員の約 8 割が東京を中心とする首都圏在住・在職者で、名古屋等中部圏が 1 割強、他の 1 割の会員は各地に点在している。それを反映して、活動自体がどうしても東京に偏ってしまう点が、UIFA JAPON にとって悩ましい問題ではある。

それでも、東日本大震災復興支援、熊本地震復興支援では、東北、九州の会員が奮闘されてきたことは 8 章を見ればおわかり頂けるだろう。

男性は賛助会員として登場する。UIFA 世界大会への参加を始め、自然災害被災地支援活動では、それぞれの立場から参加され、協同の取り組みを行ってきた。

こうした多彩な会員が、UIFA JAPON の活動を豊かなものにしていく。

UIFA JAPON に入会した契機は様々だが、災害支援等を通して共通の体験を重ね、共に専門的知識や技術を学び合い、楽しみを分かち合い、最大のイベントである UIFA 世界大会への参加によって、より深いつながりを築くところに魅力を感じている。

この章では、そうした多彩な会員のプロフィールを浮き彫りにするために、UIFA JAPON とのかかわりや期待、日頃感じていること等を自由に書いて頂いた。 (中島明子)

# 米国に暮らして—私の仕事 これまでとこれから

Living in the U.S. - My Works in the Past and Future

## 1. 建築計画から政策研究へ。

UIFA JAPON の 25 才を祝します。

私は今年 73 才、1980 年代後半から 2005 年までは主に米国で暮らし、その後も関西と米国との間を行き来する生活でしたので、UIFA JAPON の成長にはお手伝いできなかつた。しかし松川さんをはじめ、UIFA のご活動には心から敬意を表するとともに、日本において、また世界において、女性建築家にはまだまだ多くの挑戦すべき課題があると思っている。

私は 1967 年日本女子大の住居学科を出た。仕事を持ち働くことは当然と考えて、卒業後、掲示板に出ていた唯一の名も知らぬ設計事務所に入った。そこは稀有の才能を持っていたある建築家と東大出の数理統計家を含めた 3 人ほどの人たちが経営(?) していて、喧々諤々と「新しい」計画論を創出しようとしていた。その議論は当時の私には意味なく、私はひたすら事務所の生業となる設計作業に従事し、日夜図面描きに没頭した。今でいうなら、過重労働、低賃金もいいところだったが、それが「設計」という仕事と思って働いた。でもこの(早世した)建築家に設計と空間論を叩き込まれ、この経験が実際には私の建築理解への第一歩となったといえる。しかし、そこでの「鍛錬」に心身ともに疲れて 2 年弱で辞め、その後結婚、夫から、建築計画を学ぶことを進められて、東大闘争後入試が再開した年に東大大学院に入った。入試の面接にずらりと並ぶ教授陣、当時の著名な建築家たちのことも、実はろくに知りもせず、試験に受かったのには、本人が最も驚いた。社会人への大学院の開放という時代の流れによる幸運であったものと思う。その後、女子大から次々に優秀な計画研究者が多くの大学院へ進まれ、博士号を取られ、日本の建築計画研究に多大な貢献をされてきた。その先駆けになれたことは私の秘かな

誇りである。

しかし当時、建築設計活動に、大学院での「計画研究」ということが極めて重要であるとは思っていなかったが、吉武・鈴木研究室では建築計画を学び設計事務所での鍛錬を「計画研究」に整理しなおすことができた。修士を終えてから、個人的な事情もあって、米国と日本との間を行き来することになり、その間で、再度東大で博士号も取り、そして結局長く米国に暮らすことになって、足掛け 20 年余、米国のシンクタンクで政策研究という分野に従事した。その間にアメリカの独立シンクタンク、民間非営利組織 NPO、政策分析評価といった、民主主義の根底を支える理念と制度に触発され、それらを日本に紹介するという使命を果たそうと考えるようになった。建築計画研究の方法と思考は、政策研究と政策形成プロセスに、特に政策評価と分析に適用できる(これは世界に広げる価値がある)。私は「建築家」にはならなかったが、政策研究者としての基盤には建築計画の方法論と思考があると思っている。この政策研究という分野は日本に不可欠の研究領域である。これを振興し、政策研究者を確実に増やすことが喫緊の課題である。

## 2. 70 を超えて：これからのこと。

今、私に残された時間が限られてきた中で、私の関心は 3 つほどある。一つは世界の民主主義に関わること。まずは、アメリカの民主主義の後退と崩壊をいかに回避するかという課題だ。私は米国市民であるので、市民としては、日々署名とカンパに小さな努力をしている。日本の課題としては、日本の予算政策の改革のための、政策研究・評価と分析を基にする独立財政機関を創ること。まずはゆるぎないデータを作る制度の構築である。

二つ目には、7 年半になる東北の震災復興の過程を、今後も、私の愛する気仙沼・大島のおばあ様たちの視点から見続けること。三つ目に、20 年近いモンゴルとの交流を、人々の暮らしの向上につなげること。そのひとつとして、外国人技能実習生制度の下に、モンゴルの快活な女性たちに介護士として東北に来てもらおうと模索している。もうひとつ、モンゴル・ウランバートルの住



ワシントン時代の住まい (1988 年 UIFA ワシントン大会のあと、飯島さんと松川さんが訪ねてくれた)



象徴としての議事堂は人々に愛されている。クリスマスのあるころ。



投票の公正を求める小さなデモ：寒空の下、2018 年 1 月 11 日連邦裁判所前

宅問題の改良に、モンゴルの伝統的移動住居「ゲル」を使うという、モンゴルの若手の活動、ゲルハブ・プロジェクトを支援したいと考えている。(www.ucrca.org、GERHAB プロジェクト参照)

途上国の住宅・都市・環境問題の解決と、コミュニティ開発には、女性の研究者と建築家の力が必要と思う。25周年を機として、UIFAJAPONの方々が、広く途上国の、特に婦女子の健康と生活の向上へ視野を広げ、活動を広げられることを望んでいる。(上野真城子)

## 各地からの便り 「ながさき便り」の試み

Essay from North to South  
- Experiment by "Nagasaki Report"

25周年という節目の記念誌に寄稿させていただくことは、活動の担い手というより活動見守り手である身としては、恐縮千万の思いである。加入させていただいたものの、なかなか活動に参加できずに申し訳なく思っている。

今は、送っていただく「ニューズレター」や「D'AUJOURD' HUI」から、多くの情報や活動の様子を受信中の状況だが、「UIFA 世界大会」や「海外交流会」や「この指とまれ」と題した見学会などの参加報告に刺激を受けている。特に、『被災地通信』等で報告される被災地の人々の暮らしの復興に向けての様々な活動は、建築の専門家としてはもちろんだが、女性の立場を活かした継続的な活動であり、誇らしいものだと思う。そして、受信する多くの情報は、地元での諸々の活動に対して示唆を得るものも多く、それらは地域還元役に立っている。

私の数少ない参加体験としては、2017年1月のUR都市機構技術管理分室見学会で、振動実験棟の「三次元振動台実験装置」での貴重な体験は忘れられないし、日本人の暮らし方の変換点に位置する集合住宅の住戸が移築復元されている集合住宅歴史館では、時間を忘れて見



学生の空き家活用提案について、自治会役員へ事前説明の様子(安武会員と共に)

入ってしまった。その他の活動や見学会にも状況が許せばできるだけ参加したいと思いつつ、しばらくは身軽に動けない日々である。そこで、受信するだけでなく長崎からも、時折、「ながさき便り」的な情報発信ができ、双方向の通信ができるようアンテナを張っていこうと思っている。

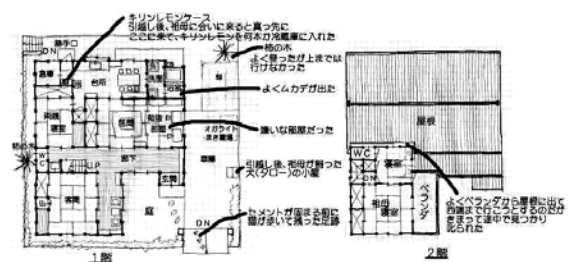
ICT化が進み、多種多様な情報が瞬時に手に入る時代だが、961.7km(国土地理院の測地線長)という東京—長崎間の距離は厳然と存在する。皆様方とお会いできる機会が極端に少ない遠方在住でありながら、会員として迎えていただいたことに感謝している。(平野啓子)

## 各地からの便り 記憶に残る家

Essay from North to South  
- Houses that left a great impression

私が生まれたのは広島県呉市長谷町という海と山が近い田舎町の木造2階建ての家だ。広島市内に引っ越したので8歳までしか住んでいないが、そこには祖母が残って当分の間暮らしていた。今はもうない。16年ほど前に記憶を頼りに平面図を書いて愛知建築士会の広報誌に文章とともに掲載したことがある。何の資料がなくても記憶だけで結構書けるものだなと感心した記憶がある。子どものころに覚えたことは今でも忘れていないことが多い。その頃呉では、早口言葉の1つに「石川島播磨重工業呉造船所」というのがあった。私は今でも覚えているしすらすら言える。子どものころに覚えた歌もいつもその頃の記憶とともに思い出す。呉の家も子どもの頃の色々な出来事、場面と共に思い出された。

原稿を16年前に書いたころから、子どもが大人になり、そこに住んでいなくてもその場所がなくなっても、自然に色々な記憶をたどれるような、記憶に残る家を建てていきたいと考えてきた。今でも、子どものころから多様な空間に身を置くことで、柔軟にいろいろな物事を捉えられる力、想像力を養う助けになればと思いながら、



私の生まれた家



日々設計しているつもりだ。それでも私一人にできることは限られる。

私の小中高時代は、家庭科の時間に衣食住の「住」について詳しく勉強したことがなかった。

現在は、それではいけないと建築士が学校に赴き、色々な興味深い授業をされているところもあるようだ。私はできるだけ若い時期からの住教育が大事だと思っている。もちろん、愛知でもちょっとした活動からスタートし、少しずつでも住教育が充実するよう努力したい。先日も、幼い子どもに、家・収納・片付けなどにまつわる絵本の読み聞かせをするのもよいのではないかとの意見を耳にした。全国の、世界の女性建築士が集まる当会でもぜひ、若いころからの住教育の重要性をPRしていかるとよいなと考えながら、16年前に書いた下手な図面を眺めている。(杉原尚子)

### 各地からの便り

## 地形からみる名古屋の歴史と展望

Essay from North to South  
- Nagoya's History and Vision from a Geographic Viewpoint

名古屋は日本のほぼ中央にある大都市で周囲の観光地へのアクセスが優れている。最近の調査で観光に行きたくない街のトップに位置付けられているのは少々残念だ。

現在の名古屋の骨格を紐解くとき、徳川家康が名古屋城を築城する頃からスタートするが、その先見性には大いに驚かされる。洪水で悩まされていた低地の清須から東側の良好な台地の北西の角に移転した。いわゆる清須越えである。城の北と西は低湿地なので攻められにくい。東と南に多くの寺社を配置し警護を固めた。名古屋城は焼失したが、石垣で囲まれた内堀とその内部はそのまま残っている。丸の内、三の丸の上級武士の屋敷跡はそのまま市役所や県庁を含む官庁街になっている。更に南側の栄地区は、札の辻跡が残る繁華街で、現在もこの辺りは碁盤目の街区がほぼそのまま残され、ビジネス、商業



名古屋古地図  
出典 network2010

の中心地である。下図の中央部分の象の鼻といわれる部分が熱田台地で、この際を掘り、港へと繋がる運河を作り物流に利用した。台地の高低差は約6m、車で走っていると認識できる。また、地名からもかつての姿が想像できるのが楽しい。

現在、名古屋駅を中心に新しいビルが増え、集客力が上がっているが、防災を担当する専門家たちはそれを危惧している。かつての鉄道は蒸気機関車だったので、煙や騒音の被害が多く、いわゆる迷惑施設。大事な中心部から少し離れた、工事のしやすい軟弱地盤が選ばれているからである。熱田台地から西は岐阜県の養老山脈まで良好な地盤がゆるゆる下がっているという地形で、それは江戸時代の東海道が熱田から三重県の桑名までは海路であったことでもわかる。

名古屋の道路は広いので有名であるがこれは延焼防止のためでもあり、大都市の中では都市防災の備えが進んでいる。集客力や利便性だけで都市を見るのではなく、歴史的背景や地形的観点なども合わせて考えてみると、これからの展望が見えてくる。(谷村留都)

### 各地からの便り

## 建築素材の源流を知る、見る、活かす

Essay from North to South  
- To Understand, See and Utilize the Origin of Architectural Materials

名古屋で設計事務所を開設して20年もの間、住まいづくりを営む中で、愛知県含め中部地方は、自然から生まれる土や和紙、木材など建築素材に恵まれた産地である事に気付いた。

豊富な素材が揃っているにも関わらず、海外から輸入する木材やタイルをカタログでセレクトしている現状を見直して、少しでも多く地元材料を取り入れたいと思い、松の育つ山へ入り、タイルや石の産地を訪れ、そこで育て守っている組合や職人の方々と会い、素材が生まれる過程を見聞きする事を数年続けている。



既存障子利用の雲龍和紙の  
屏風



かわら美術館にて

直接製作現場を訪れ生産者と繋がることで、オリジナル品や廃材を活用するイメージが膨らむ。その事例として、豊田市小原村へ通い、楕の密度を調整してグラデーションの雲龍和紙を注文して、既存の障子を使って屏風を製作した。また、多治見のタイル工場で不要となったタイルを大量に受取り、公民館の駐車場に町民達と一緒に敷き込むワークショップを行った。

個人で見聞きするだけでなく、多くの建築士にも繋がって欲しいと、見学会の企画も進めており、先日は三州瓦の産地高浜を訪ねた。かわら美術館では学芸員の案内で瓦の歴史や遍歴、文様の意味など伺い、紀元前 11 世紀の中国瓦や日本最古の瓦の展示を見て、知恩院の国宝御影堂に納めた鬼瓦の工房を訪れ、鬼師の仕事を拝見した。

自然の中から生まれる木材や左官の土、石、タイル、瓦など、水と火の被害に遭わぬよう気遣えば、非常に寿命の長い素材である。

時代の変化で、古めかしくまた技術が追いつかなくなって使われなくなった建材が、建築士の視点で転用方法や新しい商材を提案することが出来ないかと考えているが、日々の忙しさで実現していない。いつか形にしたいと望んでいる。

今出来ることは、少しでも多く地場の素材・建材を使い職人達の技術が活かせる建物をつくる設計士であることと、所有者の望みを形にした上で、その価値を理解して長く愛でてもらえるように、丁寧に伝えていくこと。

消費する時代が見直され、長生き出来る建物をつくるのが環境保全になり地場産業を守ることに繋がると考え、日々の仕事に活かしたいと思っている。

(川口亜稀子)

各地からの便り

## 建築を志した原点は吉野に

Essay from North to South  
- Yoshino, My Origin as an Architect

いいくにつくろう (1192) 鎌倉幕府、鳴くやウグイス



自宅から若草山と大仏殿を遠望

(794) 平安京。さて平城京は何と覚えたか……？ 710 年に飛鳥藤原京から北へ 20 キロの平城京に遷都されたのが奈良の都である。この平城京は考えてみれば京へ遷都される 84 年間の間に恭仁京や長岡京への変遷など、とどまっただけでなかった都がこの「奈良」なのだ (ちなみに奈良から京都は北へ 40 キロ)。東に春日原始林、西に生駒山と周囲を山々に囲まれた盆地に奈良の都がある。

今私はその平城旧跡から東へ約 1.5 キロあたりのマンションに暮らしている。東に若草山、西に生駒山を望む。生駒山の向こう (西) が大阪平野である。田舎者の私には東京や千葉など行って山並みが見えないところにいると急に落ち着かなくなる。自分はいったいどこにいるのだ……と。夏は暑く冬は盆地特有の寒さにも、懐かしさがある。

玄関ドアを開けると若草山と大仏殿の屋根、二月堂が目飛び込んでくる。冬の茶色一色の景色が緑に変わっていくさまが、私は大好きだ。以前は 12 月の末頃の飛火野 (奈良公園内) は鹿の群れだけで、ほとんど人はいない……これも大好きな光景だった。

今はありがたくも (?) 年中東大寺南大門前は、ここは雷門か……と思うほどのにぎわいである。これは地元にとってとても喜ばしいことではあるかと思うが、昔の (?) 奈良大好きな方々には敬遠されているのが実情だ。お寺のどっしりした柱や屋根、これらはいつまでも裏切りはしない。建築をやっている私にとって、まるで試されているような、それでいて見守ってくれているのがこの麓群なのだ。

私は元々奈良市内の生まれではなく、県内の吉野郡下市町というところで 25 年ほどを過ごした。下市町というのは歌舞伎「義経千本桜・鮎屋の段」に出てくる「いがみの権太」で通名。山々に囲まれた山峡の町で、昔は吉野杉を使った (柱材の残りを使った) 割り箸の産地でもあった。奈良県の約半分は山なのだ。かつてはそれが三大美林の吉野杉、桧の産地であった。それが 15 歳で建築を志した原点かな？ (上田壽子)



大仏殿正面

各地からの便り

## 東日本大震災から7年が経過して思うこと

Essay from North to South  
- What I feel, 7 years after the Great East Japan Earthquake

2011年3月11日に発生した東日本大震災の時、私は現場に居て、隣の家の瓦が落ちるのを呆然と見ていた。すぐにライフラインがストップし、ロウソクを灯して暮らす日が始まり、ラジオから聞こえる情報に何か現実離れした感覚に包まれていた。それから7年が経過し、沿岸部被災地では、防潮堤が建設され、陸と海が分断されている。

宮城県建築士会女性部会は、震災の2年後「女性建築技術者の会」より提案のあった「記憶の中の住まい」プロジェクトに協力した。これは津波で流されてしまった家の記憶や暮らしの思い出を傾聴し、聴き取りシートと図面を作成するもの。その後、女性部会の正式な事業として取り組み、今まで、延べ29名の方にお渡しした。

沿岸部被災地は、災害危険区域に指定され、海辺での生活は失われようとしている。「記憶の中の住まい」の聴き取りでは、震災前に「不便だけれど、自然の恵み豊かな生活」「鍵をかける習慣が無く、おすそ分けをしあう近所づきあい」そんな沿岸部共通の生活が見えてくる。かつて、確かにあった海と共に暮らした生活の記憶を、記録としてお渡しする活動になっている。

山を切り開いて高台に作られている防災集団移転地に住宅を再建し、元のコミュニティを再構築しようとしている集落、水田を埋め立てて、平地に作られたかつてのニュータウンの様な移転地で、新しいコミュニティを作ろうしている街など、被災地の今の姿は様々。女性であり、建築技術者として、沿岸部被災者の気持ちに寄り添った活動を息長く続けていきたいと思っている。

(清本多恵子)



記憶の中の住まい



荒浜防波堤に咲く  
ハマヒルガオ

私と UIFA JAPON

## 千人茶会から被災地支援へ

I and UIFA JAPON  
- From the Tea Ceremony with a Thousand People,  
to Support Activities to Disaster Areas

2011年秋、国際建築家連盟（UIA）の世界大会が東京で開催される事になった。世界中から来日する建築家やその家族と交流を深め、日本文化に触れていただく機会を設けようと「UIA 千人茶会」が企画され、9月27日、28日の二日間、国立博物館裏庭の茶室で開催された。

これに先立ち、千人茶会に協力する事になった UIFA JAPON では、英語で茶道について説明したり、おもてなしができるようにとフロリダ出身で横須賀在住の Jone Teint 先生をお招きして2010年12月から月2回、有志による茶道英会話講習会を始めた。作法、道具や茶室は勿論の事、秋の茶花の名称や掛け軸の意味、「茶とは何か?」といった事まで教えていただいた。

本番当日は主に表千家の方々が亭主をつとめ、UIFA JAPON は由緒ある5箇所の茶室のうち九条館と応挙館で正客や場内案内係を担当した。東日本大震災の後で開催に不安の声もあったと聞かすが、日本文化や茶会に強い関心をよせる参加者が多く、私達は様々な質問に対して学んだ成果を発揮して応対し、心を込めておもてなしした。日本全国から寄贈された数々の老舗銘菓を見るだけでも贅沢な茶会であったし、一椀の茶で心が通じ合い、いくつもの縁が生まれた催しだった。

その後、UIFA JAPON は千人茶会で培ったお抹茶によるおもてなしの心で被災者を元気づけようと「おもてなしチーム」を結成し「どこでもカフェ」を始動した。手作りの和菓子や掛け軸、茶道具などを携えて岩泉や大船渡、郡山などを訪れ、自宅から持参した草花や道端で摘取った野花を仮設住宅の集会室に飾り、毎回心をこめた出張茶会を催した。一服の茶をともしる間にポツポツと体験を語る人もおり、何気なく集う時間と空間を共有する意義を実感した。



千人茶会  
左から  
宮本伸子、筆者、  
三上紀子



思えば私自身が練切りや干菓子などの和菓子をつくり茶花を嗜むようになったのも、もとをたどれば千人茶会が契機であり、得難い機会であった。（佐藤由紀子）

NEWSLETTER NO.8 September 1994 より転載

# 住む

特集

## “私の家族・住まい・社会”

～明日の住まいを考える～

Special Report ; My Family, House and Society  
- Thinking about Future Houses

7年程前、引っ越しはシンドイから今が限界だろうと家を建てることにした。今まで住んでいた木造家屋の南側にコンクリート造で、屋上のある家というのが依頼人(亭主)の注文だった。1階に駐車場と事務所、2階に居間・食堂・台所、3階に各人の寝室と洗面・便所・浴室と仏間を配した。これから年をとるのだから小さなエレベーターを付けたい、という友人達の忠告に「私は怠け者、楽なものがあれば足を使わなくなるから」と付ける位置は考えたが設けなかった。ところが家が出来る前に循環器と呼吸器の疾患で入院してしまった。階段の昇りは特にきつかった。屋上で玉川の花火が良く見えると言われても昇る気にもならなかった。比較的元気になった現在、エレベーターを付けるべきかなと思っている。子どもの自立後は、気のあった友人達4人位で各自の部屋を持ち、ヘルパーさんに協力してもらい、共同生活が出来たらと考えている。（草野智恵子）



私と UIFA JAPON

## 日中共同研究と UIFA JAPON

I and UIFA JAPON

- Japan-China Collaborative Study and UIFA JAPON

「世界中の青空を、ここ東京国立競技場に集めた第26回 東京オリンピック！」躍動感溢れるNHKアナウンサーの声が今も脳裏に焼きついている。あれから53年、私は日大建築系初の女性教授としての職務を終え、2018年3月怒涛の教育・研究職をリタイアした。

1996年に始まった中国黄土高原のヤオトン（地中住居）の近代化に向けた日中共同研究成果が、World Habitat Award 2006を受賞したことが契機となり、2018年5月11日、空気調和衛生工学会がプロジェクトリーダーの中国西安建築科技大学 劉加平教授を国際名誉会員に推挙し、明治記念館で表彰式が挙行された。

20年間にわたる劉先生との日中共同研究では、ハルピン・ウルムチ・北京・西安・延安・長沙・重慶・ラサ（チベット）・四川・昆明・福建省（客家土楼）など、中国大陸の5つの気候区のパナキュラー（土着）建築を探訪し、この間の学術交流に参加した学生諸氏は数十名に達し、NHKアジア&Worldでは、ヤオトンの近代化が紹介された。

その頃、吉田あこ先生を介して1998年第12回UIFA世界大会が日本で開催される事を耳にし、UIFA JAPONの事務局をおいていた(株)生活構造研究所ではコアスタッフが頻りに会合を重ねていた。当時中国西安建築科技大学の院生だったWei Qinさん設計の新型ヤオトンのコンペ優勝作品を紹介すべく、私は彼女の身元保証人となり、日本に招待した。これが、私とUIFA JAPONとの出会いであり、現在彼女は、上海大学で教鞭をとっている。

これまで関わった事業委員としての業務を顧みると斎藤公男氏、妹島和世氏、芹澤隆子氏各々の講演会における、非常時誘導など、false safeの対応を肝に命じるべ



ヤオトン調査について講演する筆者

きであろう。UIFA JAPON は建築関係の社会貢献事業、イベントの遂行に際しては、特定の人が過負担とならないよう、京都大学吉田寮の自治に見る、新しい時代に適応可能な運営を検討されたい。(吉野泰子)

## 私と UIFA JAPON 復興支援活動をとおして I and UIFA JAPON - Through Disaster Support Activities

UIFA JAPON に入会して初めての活動が、復興ハウス設計グループ「ユイファ・ジャポン復興ハウス高齢期のコンパクトな住宅の提案集」の作成だ。UIFA JAPON がこれまで長年被災地に寄り添い、復興支援を続けてきた活動の一つだ。

そしてこの度熊本へ、そのプラン集を持って赴いた。地元の熊本県建築士会女性部会と交流、協力の上、住宅相談会を実施した。被災地からは遠く離れた東京の建築士が熊本の地域性や状況がわからないままどのような協力ができるのか、不安な思いのまま熊本へ向かった。

現地ではさまざまな想いで復興の計画にたずさわっている力強い女性たちに出会った。また相談会では、先入観のない専門家としての意見がいかに大切かも痛感した。頭で考え思い悩むより現地に飛び込み自分のできることを精一杯行うこと。少しでも役に立ちたいという想いをきちんと受け止めてもらっていたと痛感した。支援以上に多くの刺激と活力を受け東京へ戻った。

想いはただの想いに留まらず、実行に移し、何かを少しでも動かす。そして結果がまた次の想いを見せてくれる。UIFA JAPON は、そのような場であったのだと改めて気づくことができた。これから多くの刺激を受けて、まだまだ知らない UIFA JAPON の魅力に触れていきたいと思う。(井元美佐代)



相談風景：左 井元 右 山下



One Za'abeel Project (ドバイで工事中のプロジェクト)



YKK80 ビル (2015 年竣工)

## 私と UIFA JAPON 私の仕事 I and UIFA JAPON - My Works

私は、1989年に日建設計に入社し、以降30年にわたり様々なプロジェクトを担当している。大学卒業後は設計事務所での仕事を希望していたため、大学の先輩を頼りに、女性も分け隔てなく採用するといういくつかの設計事務所を訪ねた。

当時、男女雇用機会均等法が施行され数年経ち、日建設計でもちょうど女性の技術職の採用を検討するとのことだったため、面接を受けることにし、入社した。

日建設計では、女性技術職第一号と言われていたが、入社してみると、様々な経緯を経て既に実質的には技術職として働いている女性の先輩が数名おられた。その中のひとり、飯島静江さんにお声がけいただき UIFA JAPON に入会した。飯島さんは当時空港計画の専門家として既に立場を確立しておられ、成田空港をはじめとする空港プロジェクトに取り組みされていた。飯島さんに、UIFA JAPON は女性建築家の国際的な組織の日本支部とのかを教えていただき、そのような組織があるのか…という驚きと共に日本支部の方々の意欲的な活動内容に興味を抱いたものの、私のほうは設計の仕事を感じることに精一杯で、全く UIFA JAPON の活動に参加できず、あっという間に今日まで時間が経ってしまった。

定期的に送付いただく NEWSLETTER から、生活や女性としての視点を常に持ちつつ、様々な国の女性建築家との交流や都市的なスケールの話まで、建築や都市についての本質的なテーマを掘り下げている活動を拝見する中で、国内外を問わず、建築に関わる様々な分野で活躍している多くの女性の姿を知り、励まされている。

現在、私の身近にも、私が入社した頃には想像ができなかったほど、女性設計者の仲間が増えた。まだまだ解決すべき問題も多くあるが、やり甲斐のあるプロジェク

トに取組む事が出来るチャンスも多い。地に足のついたプロの設計者として、そして UIFA JAPON の一員として、胸を張って発表できる建築の実現のため、今後も日々精進したい。(中村晃子)

## 私と UIFA JAPON ハンガリー大会でデビュー I and UIFA JAPON - My Debut at UIFA Congress in Hungary

UIFA の存在を知ったのは 1976 年 UIFA 世界大会がイラン (ラムサル) で開催されたとき。私の師 (川嶋幸江) がイランに行くという。初めての海外旅行の上、初めて飛行機に乗るということで大騒ぎしたことを記憶している。UIFA JAPON 創立の時に、教科書に出ているようなそうそうたる先生方を生で見たのは驚きと緊張だった。

1995 年師の勧めで入会させていただきハンガリー大会にデビュー。ハンガリーの建築を見せていただき、パラメントで会議して、ハンガリー語をフランス語と英語に翻訳され、とうとう日本語には翻訳ならず。最低、英語くらいは理解できないとついていけないことを痛感した。パーティの時、今は亡き飯島氏が外国の会員の方々に私をニューフェイスとして紹介して下さった。いろんな国の言葉が飛び交う中で、皆様とてもフレンドリーに接して下さった。

1997 年～2000 年タイ・バンコックに 3 年住むことになり、衣・食・住がエキサイティングな暮らしは何度かニューズレターに寄稿したとおりだ。帰国後、腰掛のつもりで勤め始めた工務店に 10 年いて、この間ほとんど UIFA JAPON の活動には (とても魅力的なイベントもあったのだが) 参加できず。

定年退職後やっと活動に参加できるようになったのは東日本大震災のボランティアからだった。どこでもカフェは私の趣味であるお菓子作りが



ハンガリー大会 日本議長団  
左から 東・飯島・中原・松川



ブタベストの発表の会場

役に立った。

初めて被災地を目の当たりにして、地震の巨大なエネルギーと津波の全て<sup>きら</sup>浸っていく恐ろしさに驚いた。カフェでは集まれた皆様は語ることも少ないながら、ぽつぽつと残った抹茶茶碗の話をしてくださり、その茶碗でお抹茶を点てたことで会話が広がった。その後、岩泉小本で繰り返し行ったカフェでは笑い声も出てくるし、新しい住宅に夢を語られることもあった。

UIFA JAPON の活動を通して、多くの出会いが私の人生を豊かなものにしてきている。(柏原雪子)

## 私と UIFA JAPON UIFA JAPON に入会して I and UIFA JAPON - What I Think After Belonging to UIFA JAPON

ゆいふぁ? 皆様方の存在を知ったのは、大変失礼な事だが、つい数年前である。平成 26 年建築士会の全国女性建築士連絡協議会の分科会: 震災② ボランティア活動の報告に出席した時に、松川さんのお話を伺った。新潟と東北での活動報告であった。最初に少しお話し下さった、UIFA JAPON の説明に心が躍ったことを覚えている。ただ、その頃の私は、全建女 (全国女性建築士連絡協議会の略称) に出たのも 2 回目、建築士会に入っていたものの、『建築士』もぺらっと目を通す程度、建築に関する本はおろか、ファッション誌さえ、買っても読まないまま、ただ積んでいるような状態であり、雑多な日常生活と仕事を何とかその日の 24 時間に押し込め、やり過ごす日々であったため、その出会いは、イケメン俳優とすれ違ったような、一瞬のときめきで終わっていたのだ。

「UIFA に入らない?」「あ、まだ英語話せないので」「そんなの、大丈夫よ」「あ、はい」とは言ったものの、本当に入会させて頂けるとは思ってもいなかったのである。さらに全建女の時の記憶で真っ先に思い起こされた



全建女の分科会で「UIFA JAPON の被災地支援」について発表する松川淳子さん (手前) と筆者



のは「海外の建物を見に行く」事で、英会話の心配をしたのだ。お声掛け頂いた岩井さんに、本当に大変失礼な話である。

さて、入会後に送って頂いた資料等を読ませて頂き、HPを見せて頂き、会則を見て本格的に青ざめた。「会員2名以上の推薦を受け、理事会の承認を」とある。今まで全建女などで出会う建築士の皆さんを「スゴйнаあ」とへらへらと見ていたのだが、そんなわけにはいかなかった。再び、HPを見て色々と探してみる。今すぐ、出来そうなことは。

こんな状態で原稿の依頼まで受けてしまい、申し上げられることは一つしかない！ どうか皆様、勉強させていただきますので、よろしくお願いたします!!(小林淑子)

## 造園という視座 コミュニティと緑

From a Perspective of Landscape Gardening  
- Community & Green

30年近く前だが、仕事でマンションのミニコミ紙を作っていた。内容は集合住宅についてのマナーやルールについて啓発するものだった、当時は未だマンションの住まい方について理解が浸透していなかったため、トラブルになる事が多くあった。共用部分と専有部分の区別もつかず、法の整備も十分でない時代、トラブル防止のためにデベロッパーや管理会社が発行するものだった。

他のマンションではどうしているのか知りたいといった読者の希望も取り入れ、全国各地のマンションを取材した。建物管理のための組合であり、コミュニティとは関係がなさそうであるが、皆口を揃えているのはコミュニケーションの大切さ、そして皆で協働する意義である。コミュニティと管理の関係に目を開かれる思いだった。

そこから自分の職能を活かして、地域に関わりたいと考えるようになった。江東区はどこへ行くにも橋を渡るほどの水辺の街である。当時は地域にとって水辺はあまり意識されていなかった。地域の特長である水辺を地域



恒例となる祭りの会場について、企画段階で水辺から視察する深川観光協会役員

と共に活かしたいと考えた。「NPO 江東区の水辺の親しむ会」という団体を立ち上げた。

経験や体験は水辺に対する意識を変える。こうなったらいいな、こうしたいと地域が言い始めるようになる。門前仲町の大横川。地域の商店街と「お江戸深川さくらまつり」を企画し恒例化して20年近くになるが、初めの企画段階で、商店街の役員を船に乗せた。乗る時には静かだったメンバーが、フェンスの色が目立ちすぎる、倉庫の壁の色はもっと明るい方がいいなどと言い始めた。非日常の体験が水辺への興味や関心を高めたと考えている。

水辺は治水や安全の面から強固な護岸が有り、陸上での水辺の意識はどうしても遠のく。陸上と水辺の意識の乖離を埋めるため、緑が有機的な役割りを果たし、地域が水辺に目を向ける効果があるのではと考えている。そしてみんなの水辺体験が、より良い水辺づくりに寄与する効果が有ると考え活動している。(須永淑子)

## 視座を変えて 現代美術の世界から

A Different Perspective  
- From the Contemporary Art World

国際女性建築家会議日本支部の存在を叔母(松川淳子)から聞いたのはいつのころだったか、今となってはすっかり思い出せないが、おそらく設立時の慌ただしい時に、叔母の近況のひとつとして聞いたような記憶がある。日本に限らず世界中で女性建築家の活躍がめざましい昨今ではあるけれど、そんな時代に25年前のことを想像してみると、建築を職業として選択することが女性にとってそう簡単ではなかったことや、だからこそこのようなネットワークづくりが重要だったのだろうことをあらためて考えさせられる。

私が働いている現代美術の世界はどうやら女性が活躍しやすいらしく、他分野と比較すると女性が大きな決定権をもつ組織も決して少なくはない。美術と建築はもと

もと近い距離にある分野であるように思うので、なおさらのこと建築の世界の男性優位的なところが目立つようで気になっていたけれど、最近はそのアンバランスさも変わってきているのかもしれない。妹島和世さんのSANAAは現代美術の世界でもひっぱりだこのスター級プレイヤーだし、日本館がグループ展形式で参加した前回のヴェニスビエンナーレ建築展でも女性建築家の名前が目立っていた。

そんな今を思いながら、UIFAというどうしても最初に私の脳裏に浮かぶのは「ド・ラ・トゥールさん」という名前。実際にお目にかかったことはなく、叔母がいささか興奮気味に「ド・ラ・トゥールさん」について話していた時の断片的な記憶である。自らが選んだ職業への情熱が、国境や人種や（もちろん年齢も！）超えて、遠くの人と人を結びつけ、新しい何かを作り出すエネルギーを発することを、傍観者としての私ですら感じとったのだろう。ジェンダー問題が複雑な様相を呈する現代ではあるけれど、同性であるがゆえに様々な差異を乗り越え、刺激しあい連携してきたのであろう支部の25年間に心から敬意を表したい。（細井眞子）



ブカレストからコンスタンツァに向かう途中で出会うドナウ川下流  
(2007年ルーマニア大会)



黒海クルーズを楽しませてくれた  
海軍練習船  
(2007年ルーマニア大会)



コンスタンツァのオウィディウス像  
(2007年ルーマニア大会)



清溪川のスタディツアー（2010年韓国大会）



モンゴルの大平原（2013年モンゴル大会）



古きアメリカに出会う  
(2015年アメリカ大会)

賛助会員として

## 楽しかった世界大会の記憶

Message from a Support Member  
- Great Memory of UIFA Congress

UIFA JAPON と付き合って、「なかなかいい会だな」と思ったのは、世界大会に「同伴」して、ハンガリー、ルーマニア、モンゴル、米国（ヴァージニア）などの国々で、普通行きにくい場所へ案内してもらったことである。

都市計画を専門とする身にとっては、その筋で大切なところへは、不便でも頑張って行くこともあるのだが、それでもなかなか行けないところもあって、ありがたかった。

ルーマニア大会のときの海軍練習船での黒海沿岸クルーズ、ドイツやオーストリア、ハンガリーで見えてきたドナウ川が最終的に海にそそぐまちを見たこと（これについては、UIFA JAPON のNEWSLETTER74号に「ドナウ川流域考」として書いた）や、モンゴル大会の草原の雄大な美しさなどは、印象深い。（土田 旭）

賛助会員として

## サポーター(賛助会員)というより……

Message from a Support Member  
- Someone, rather than a supporter

サポーターというより、私は UIFA JAPON の「ポーター」(荷物持ち・運転手) 会員だ。少し長くなるが、何故そうなったかを書いてみる。

長く東京都庁の住宅屋(建築職)として過ごしてきた私のライフワークは「5K」で、①Kは公営住宅(都営住宅)、②Kは高齢者住宅、③Kは(災害時の応急)仮設住宅、④Kは環境共生住宅、⑤Kは(それらを実現する)計画だ。

とりわけ、分野①②で黎明期の「高齢者集合住宅・シルバーピア」計画に、小川信子研究室の都営住宅調査・提言は大きな影響を与え、困難だった新築都営住宅での高齢者単身住宅(1DK)を全国に先駆けて建設・供給できた。現在民間で急増している「サービス付き高齢者向け住宅」の基礎にもなった。私を含め初動期の都の高齢者住宅担当は小川先生に足を向けて寝られない。

その小川先生(当時の UIFA JAPON 会長)が、「松川会長が、2005 年の中越地震で被災した新潟県長岡市の法末集落の復興支援に取り組む」という。分野③で、東京都から派遣され、全村避難の山古志村仮設住宅や長岡操車場跡地の仮設サポートセンター計画に関わった自分が案内・運転しないで誰がやる的な「おせっかい&ナイト的精神」で私の「UIFA JAPON ポーター活動」が始まった。

ポーターの仕事は大荷物を車や電車に積み、車を運転し、現地で雪かき、荷物運び、会場設営をすることが主だ。しかし、こうした長岡法末集落支援活動のポーター

活動によって多くの住民と接することができ、公的派遣で現地入りした以上に復興街づくり・都市計画・建築の在り方について学ぶこ



岩泉町訪問



お茶会の前に川内村応急仮設住宅団地にて

とが出来た。UIFA JAPON が現地に入ることを大切に、きめ細やかに被災住民と話し合い、住民の復興の力を創出していく「お茶会」や「撮影会」は、2011 年東日本大震災後の福島や岩手(岩泉)での「どこでもカフェ」「だれでもフォトグラフィ」につながる。

長岡市法末集落での「UIFA JAPON ポーター活動」の経験があったので、私は 3.11 東日本大震災直後の福島・宮城・岩手への東京都職員派遣へ自ら手を挙げる事ができた。また、7年にわたる陸前高田市の長洞集落の復興支援を継続し、長洞の本『実践!復興まちづくり』も書くことができた。

今後も岩泉等への「UIFA JAPON ポーター」として関わりますので宜しくお願いします。(平野正秀)

賛助会員として

## 旅の道なり

Message from a Support Member  
- My challenging journey

3.11 が大きなきっかけだった。TV の画面に出された残酷な世界。度重なる揺れで恐怖感に心が折れそうになった。未曾有の災害は多くのものを奪っていったのである。東京に住む私にも何か出来る事は無いのだろうか? …考え悩んでも直ぐには答えは見つからなかった。

その年の秋、UIFA JAPON の松川淳子さんと知り合った。色彩の勉強の延長で建築に興味を持ち、自分のフィールドを広げている時期だった。松川さんを通して知る建築の世界は奥深く、また UIFA JAPON の活動に感銘した。その後ボランティア活動のお仲間に入れて頂き賛助会員になるに至った。

UIFA JAPON の扉を開けると多くの素敵な女性達に出会った。多忙を極めながらも仕事と活動の両立を果たし邁進する方。炎天下であっても愚痴一つ溢さず笑顔で作業をこな



ボランティアの大切なアイテム



す方。ボランティアで使用するお菓子作りの際は、作る喜びだけではなく食する楽しみを体感させて下さった方。また、寺社仏閣や茶室の魅力を教えて下さった方。台所を通して世界の生活様式を語って下さった方。ある時は帰りの車中で、フランク・ロイド・ライトについて熱く語って下さった方もいらした。どのシーンも私の大切な宝である。

私はこの素敵な UIFA JAPON の皆さんの為に、「お助け隊」として活動しようと決めたことが賛助会員になるきっかけだった。ただ時折、力不足が故に自問自答することもある。想いのパワーだけで猪突猛進しているのではないか？これで良いのか？…と。こんな不器用な私だが、実は一緒に「お助け隊」として行動を共にする友がいる。賛助会員ではないが私より先に活動に参加していた彼女。これからも私は自問自答を繰り返し、友と協力して活動の旅を続けたい。そして出来る事ならば、もっと多くを学び、誰かのために役立つ旅となれば幸いである。

(橋本ゆかり)

#### 賛助会員として

## 私見：これからの UIFA JAPON 像

Message from a Support Member

My Personal Opinion : UIFA JAPON's Future Vision

約1年前に賛助会員として入会させて頂いた。短い期間ではあるが、諸活動の一端を垣間見るなかでの思いを述べさせて頂く。

恐らく、国際女性建築家会議としての特徴は、既存の価値観に捕らわれない自由闊達な意思や表現の発信の場と考えられるので、今後も、各方面で「女性」としての特徴を活かしての活動が継続される事を希望する。しかしながら、これまでの歩みには恐らく「男性」の目からは見えにくい多くの困難が伴う（伴ってきた）ものと推測され、「女性」と名付けることの根底には、現状では、その立場や価値観が「男性と同等（以上）」に評価されて

いない」という問題点を内包しているように感じる。このことを活動の前提とすると同時に、その独特なバランス感覚をより発揮することで、これからの文化文明の発展に、積極的に寄与するという皆様の強い信念を感じている。

そのなかで「賛助会員」とはどのようなもので、どのようにあるべきかということが当方が考えるべき課題と認識している。当方と当方の連れ合いも共に建築分野の研究者であり。家庭を築きつつそれぞれの道を歩んできた。共感、反発等、色々な想いを抱きながら家族として歩み、寄り添うことで価値観を共有できたのではないかと考えている。感情や意見を出し合うこと、お互いの立場を理解すること、そして同じ目標に向けて協力しあうことの重要性、必要性をこれまでの人生を通じて痛感している。私的な家族と社会的な組織とは異なるのかもしれないが、「女性」建築家会議の「男性」賛助会員として今後も長く活動させて頂くことで、将来、「人類」の建築家会議として進化してゆくことを期待すると同時に、それに向けて本会議が今後とも力強く歩まれることを祈念する。UIFA JAPON 設立 25 周年、誠におめでとうございます。

(吉野涼二)



UIFA JAPON の海外交流会で挨拶する筆者

UIFA JAPON 誌上座談会

会員としての今・そしてこれから

The 25th Issue Special Talk  
- Now and Future as UIFA JAPON Members

コーディネーター… 定行まり子 (日本女子大学家政学部住居学科 教授)

参加者… 安武 敦子 (長崎大学大学院工学研究科 教授)

大崎友記子 (岐阜女子大学 家政学部生活科学科住居学専攻 教授)

鈴木 敦子 (一級建築士事務所 a 設計事務所 主宰)

神村真由美 (駒沢女子大学 住空間デザイン学類特任教授、

ALICEITONE DESIGN 代表)

井関まい子 (エルリングクリンガーマルサン株式会社)

御船 杏里 (株式会社大林組 設計本部)



上段右から  
定行まり子さん  
安武敦子さん  
大崎友記子さん  
鈴木敦子さん  
下段右から  
神村真由美さん  
井関まい子さん  
御船杏里さん

**定行:**この度は、皆さま、お忙しい中、ご参加いただき、ありがとうございます。UIFA JAPON25 周年記念誌作成にあたり、今後の魅力ある UIFA JAPON の活動等について、座談会を行うことを計画しておりました。しかし、全国各地からお集まりいただく機会をつくるのは難しく、皆さまから原稿を頂き、誌上で座談会風にまとめることに致しました。このコーディネーターを務めさせていただくことになりました定行です。どうぞよろしくをお願いいたします。

私は日本女子大学の住居学科で 20 数年教員をしています。研究テーマは、子どもの環境です。最近では待機児童が問題なっていますが、保育環境の質について調査研究をしています。東日本大震災後は、UIFA JAPON でも活発に支援活動が継続していますが、当時、建築士会連合会の女性委員長であったことから、全国の女性建築士と東北とを繋ぐことに力を注ぎました。現在では、研究室の学生たちが福島の子どもの日常生活の回復に微力ながら取り組んでいます。

ところで、UIFA JAPON 入会ですが、母校である日本女子大学に戻ったころ、日本で UIFA JAPON の大会を開くことが決まり、その時に入会したと思います。私は正宗さんが率いる「おもてなし部会」に所属して、できたばかりの研究室の学生全員を駆り出しました。それ以降、目立ったことはできていませんが、今回のようなお役を務めさせていただき、恐縮いたします。

まず、お一人お一人、自己紹介を兼ねて、現在のご自身の仕事についてお聞きしたいと思います。

**大崎:**以前は建築設計事務所を主宰しておりましたが、ご縁がありまして大学の教員となりました。専門は建築計画、住宅設計ですが、建築設計以外にもインテリア系の科目も担当しています。岐阜女子大学の住居学専攻では、建物の企画・設計から建設までを学生たちが主体となって行う特別プロジェクト実習があります。3 年生が中心となって企画をたて、大学側にプレゼンを行い許可が出ると、実施設計、施工作業を行います。施工作業は、大工さんや職人さんから指導を仰ぎ、座学だけでは学び得ない実践力が養われる実習です。これまで木造平屋建ての実習棟や災害時浴室棟などの建設、大学施設である学生食堂や学生寮のリフォーム、トイレのリノベーションなど、学生と共に作業をしております。

**鈴木:**大学を出てから 5、6 年ほど設計事務所等で修業し、その後独立して以来個人で活動しています。

一戸建ての住宅やマンションリフォーム等の規模の小さいものについては個人で行っていますが、大きなプロジェクトにはチームの一員として関わっています。元々、大学でまちづくりの研究が盛んな研究室に在籍していたので、今でもそのつながりで、ワークショップなど地元の方々との対話を通して、施設等の新築や改修を行うといった内容で関わっています。

現在自宅事務所なので、積極的に外と関わっていないと引きこもりがちになってしまうので、今までの設計者仲間のつながりを大事にし、また講習会や勉強会の集まりにはなるべく参加するようにしています。

**安武:**専門は建築計画で住環境問題などを主に対象として研究しています。長崎には建築の教員が少なく、専門から専門外まで色々に関わることになり、活動が毎年のように増えて行き、やりがいはありますが、自身の交通整理が大変です。

**御船:**仕事内容は建築設計、いわゆる基本設計と実施設計、そして工事監理をしています。大プロジェクトの一翼を担い、プロジェクトの目指すべき道を、ジャンルを超えて多人数と協働し、各人の個性を引き出しつつ皆で創り上げる楽しさを感じ、協働したからこそ目標に到達できると考えています。

**井関:**現在はドイツ語と IT の知識をいかした仕事をメインについています。やりがいは日独の両方の方々に感謝されることです。悩みは仕事が特殊ですとなかなか見つかからないうえ、現場が終われば契約満了になってしまうことです。時差のことも常に考えて業務をするのも慣れてはいるものの国際企業ですのでもしかたはないとはいえ課題です

**神村:**駒沢女子大学住空間デザイン学類でインテリアデザインを中心に教えています。特任という立場で自身のインテリアデザイン事務所との両立をさせていただいています。

事務所の主な設計活動は宿泊施設（ホテル・旅館類）のインテリアデザインが専門です。東京五輪を控えるせいや、外国人観光客の増加に伴う時流の影響で事務所での設計の仕事量が増加しており、責任を果たすためどのような体制とやり方で業務をこなしていくかは最大の課題です。宿泊業界は顧客の満足度を上げることにしのぎを削っており、当方は宿泊施設内のパブリック部分から客室まで様々な空間の設計を行います。



**定行**：仕事の中で、やりがいといったことはいかがでしょう。

**大崎**：学生と一緒に設計や施工の作業をし、ものづくりをすることが、やりがいとなっています。また、近隣の市から依頼を受け、空き家のリノベーションの提案にも取り組んでおり、学生が実社会の課題に触れる活動ができることも、私にとってのモチベーションとなっています。

**鈴木**：個人住宅の設計などのじっくり作り上げていく楽しさはもちろんのこと、いろいろな地域のプロジェクトに関わることによって、様々な人々の暮らし、考えに接することができ、自分の考えが広がります。またそれらを実際の空間に立ち上げることは、かなり困難ではありますが、とてもやりがいのある仕事だと感じています。

**神村**：各種の Web での評価が発達した現在、完成した空間とそこで過ごす時間に対してゲストからの良い評価が定着すると、結果クライアントの課題（多くの場合施設の稼働率や宿泊単価アップによる経営改善）を解決し、経営基盤を安定させ、より良い投資環境と良い経営循環が続くというダイナミックな変革の一端を担う醍醐味を感じています。ひいては過疎地とも言える田舎にあることも多い宿泊施設のデザインを通じて、伝統産業活性化などに関わったり、過疎地の数少ない就業環境に関わる面白さも最近感じています。大学ではこのような設計活動での現場体験や子育て体験を含めて伝え、キャリアを長く続けていける女性の後進を育成できるよう願っています。

**定行**：ありがとうございます。皆さま、設計や教育など、ご活躍されているんですね。UIFA は人材の宝庫と思えました。ところで、UIFA の会員になったきっかけを教えてくださいいただけますか。

**大崎**：愛知建築士会の女性部会の活動でお世話になっていた谷村留都さんからお誘いをいただき、参加させていただきました。女性建築士の活動であること、海外も含め幅広い活動や支援をされていることに共感いたしました。

**井関**：最初の出会いは大学時代の恩師の中原暢子先生、峯成子先生の勧めでした。2012 年に入会しましたが、私が関西にいた際に峯先生の計報を UIFA JAPON のホームページで知りました。建築の仕事

から離れているときに、大学や建築関係の友人とは別のネットワークの重要性に気づきました。また自身が独身であるところの一種の罪滅ぼしでもあります。

**鈴木**：会員の方からの紹介で入会させていただきました。皆様の活動から、自分の視野や活動の幅を広げることに繋げられるといいな、と思い入会いたしました。

**安武**：同潤会アパートのシンポジウムかで、松川さんに「中越地震の復興で活動したいと考えているんだけど、UIFA に入って活動しない？」と誘われたように記憶しています。当時、新潟大の先生らと仮設住宅の方で仮設カフェ事業をやっていて、その延長で参加してみようかと思いました。

**御船**：会員の方に勧められて入会しました。日常業務と関連しつつ、実際の業務を離れての活動は、世界大会から講演会、ニューズレターまで、もの考えるヒントにあふれています。

**神村**：現在の所属大学組織の前身の「空間造形学科」時の主任が現会長の稲垣先生でした。様々な催しが行われていながら学会ほど窮屈ではなさそうで、女性らしい視点の活動も多く、自身の専門であるインテリア以外の内容にも触れられるかと考えました。

**定行**：設計や教育などのお仕事で、正に働き盛りの皆さまが、UIFA JAPON の活動とお仕事や研究とのバランスをどのようにとっているのかお教えいただけますか。

**鈴木**：入会させていただいて、すぐに子どもができ、妊娠～出産～育児の流れでその都度なんとか仕事とのバランスをはかりながら、日々過ごしています。現在は UIFA JAPON の活動はお休みさせていただいています。もう少し落ち着いたら、と思っています。

**安武**：誘われたきっかけの中越地震の支援は月に 1 回現地に行くことを原則としていたこともあり、現地に行く前後の打ち合わせや準備、作業整理など研究の空白期間になったことは否めません。学会大会の懇談会で、口の悪い友人に（論文を出してないので）「死んだのかと思った」と言われたこともあります。ということでバランスは取れていませんでした。今の大学では論文、論文と言われるので、あのような活動は難しいかもしれません。

**神村**：実は現在、東京五輪を控えるせいか、自身の事務所の仕事量が最大値になっており、大学と事務

所で手一杯になってしまったため、UIFA の広報委員の活動をお休みさせていただいているところです。広報の先輩の方々には誠にご迷惑をおかけしておりますが、このような状況をお許しいただいており、大変ありがたく、同時に誠に申し訳なく思っています。

**御船**：2007 年の UIFA 世界大会ルーマニア開催の年に入会。この年は、世界大会に 1 週間参加させて頂きました。活動、仕事、研究等のバランスは、複数並走させることで、アイデアが生まれ、頑張れると感じています。

**大崎**：大学の仕事に忙殺されており、ほとんど UIFA JAPON の活動に参加できていないのが悩みです。しかし、会員の皆さんの活動報告やお知らせなど、特に熊本の復興ハウスの住宅提案については、昨年度のゼミ生が大変興味を持ち、刺激を受けたようです。学生に皆さんの活動内容を紹介していくということが、今の私のバランスのとり方かもしれません。

**定行**：なるほど。皆さま、忙しく、それぞれの事情がおありで、バランスのとり方は簡単ではないようです。大崎さんと同様に、私も UIFA JAPON のチラシは、学生が手に取り見られるところに置いています。関心を寄せる学生もいて、それは貢献しているかなと、お役に全く立っていないのに、勝手にバランスを取っている気になっています。

**定行**：最後の質問にしたいと思います。どの団体でも高齢化が進んでいますが、建築を志す若い女性も増えていますが、UIFA JAPON の若い会員のために、どのような魅力、取り組みが必要とお考えですか。

**安武**：誘って言われるのは「入るメリットは？」「会費が高い」です。地方では東京のように交流の場もないのでニューズレターに会費を払っているようになります。かといって支部活動は人数が少なく難しい。入会から数年間はスタート割があったり、建築士会の女性部会と連携してそちらの情報も来たり、海外の UIFA の海外会員情報（仕事や連絡先など）も共有できたり、など考えられます。

**井関**：やはり、年会費のディスカウント。会員には他の学会や NPO 等の会も兼任していらっしゃる方が多いので、少しでも負担が少ないようにすると思います。独立性のある組織づくりは魅力だと

思います。世界大会をはじめとした国際色は引き続き PR すべき項目かと存じます。

**鈴木**：先程も申したように UIFA JAPON の活動についてまだ浅く、分からないことが多いので一般的なことになりますが、具体的な取り組みや人々の繋がりの広がりを感じられるといいなと思います。

**大崎**：興味のある講演会や見学会、取り組みはなされていると思いますが、仕事や家庭のことなどで、まず時間的余裕がないというのが、私自身の本音です。個人的には時間の使い方や働き方を見直す、また家族の理解、協力が必要だと感じております。

**御船**：楽しさをアピールする（楽しさを見せる、あるいは楽しくする）工夫が必要です。先日の総会時の妹島和世さんの講演等は大学生の参加も多く有意義でした。講演会等の企画は、少人数の定員によるアットホームな雰囲気、アピールポイントのひとつと感じます。

**神村**：会員外の学生も含め若い公務員や大学関係者、企業にお勤めの方々も参加しやすく、参加者の学習意欲や、達成感が得やすいようなコンペやワークショップなどの主催が必要なのかもと想像します。UIFA JAPON が云々よりも参加者が幅広い意味で何らかの利益を受け取れ易そうだと感じるような内容や、広報の仕方が必要でしょうか。従来の催事も含め、開催の情報を浸透するためには広報の方法を web 系の SNS などを使用する等、とにかく多くの方の目に触れる方法に変革していく必要があります。かなりの大仕事にはなりますが…。

**定行**：皆さまありがとうございました。なかなかお会いする機会もありますが、設計、教育、研究などにおいて、ご活躍されている様子が分かり、UIFA 会員の底力を感じました。若い人向けの会費の検討、学生なども関心を持つ企画の提供、SNS などを利用した広報のあり方、また、子どもや家族も参加できるようなイベントもあると、家族の理解も得られて、UIFA らしさが出るような気がいたしました。



未来へ  
For the Future



「生命の木」  
イザベル・ベネ (彫刻家 UIFRANCE 会員)



大学における建築分野の学生の女性割合が急速に増加し、大規模プロジェクトに関わり、世界で活躍する女性も増えている。このような状況の中、「世界の建築分野の女性達が、専門的視野から国を超えて情報交換を行い、活動を発展させ、お互いの影響を自覚しながらそれぞれの水準の向上を目指す」という UIFA の目的はまさに時宜を得ている。世界大会では大会テーマに沿って、発表・展示・討論・視察を行ってきた。開催国の建築・文化に触れ、海外の建築分野の技術者と交流するという UIFA の組織はますます重要性を増している。

UIFA と緩く連携しながら、UIFA JAPON は「国際交流」「会員相互の研鑽」「社会貢献」の3つの柱を中心に活動を続けている。

1. 「国際交流」に関しては、2～3年毎に開催される世界大会が今後も継続できるよう国際組織である UIFA にどう貢献していくか、その方法を考え、世界の女性建築家・技術者と連携し、国際交流を更に深めていくことが重要である。
2. 「会員相互の研鑽」は、研究グループや設計グループによる専門性をいかした調査、研究、海外交流の会や NEWSLETTER、D'AUJOURD'HUI による幅広い知識の修得、研鑽、情報交換、会員の発意による見学、研修等、自由に且つ充実していきたい。
3. 「社会貢献活動」は、自然災害被災地支援を中心に、被災住民に「寄り添う」、「連携する」、「自立を支援する」という UIFA JAPON の被災地支援の基本精神に沿って、専門知識をいかした支援の方法を探り、地元支援に徐々に移行しながらコミュニティの再建につなげる。更に、防災・減災への啓発活動に取り組むということを継続していきたい。また、幅広い社会貢献活動の道も探りたい。

UIFA JAPON 設立から25年が経過し、活動の中心を担う会員の世代交代の時期を迎えている。男性社会といわれた建築分野に女性の道を拓いてきた世代から、グローバル時代にあって、男女共同参画・ダイバーシティの流れの中で、ワーク・ライフバランスを重視する世代へと交代し、活動の方法も自然と変わっていくだろう。時代の要請に応えながら、UIFA の基本精神を脈々と伝えて行って欲しい。

“UIFA は世界の平和や平等のために、もっともっと貢献し、美しい世界をつくっていきたい”

UIFA 創始者ソランジュ・デルベッツ・ド・ラ・トゥール会長の言葉である。

これが UIFA の基本精神。私達もより広い視野で活動し、より一層の国際的連携活動を行っていきたい。

UIFA JAPON 25周年記念誌編集委員会一同



# 資料編

References

- 1 UIFA JAPON の前史と 25 年 1992 ～ 2017  
UIFA JAPON History
- 2 UIFA JAPON 歴代役員  
List of the Successive Board Members
- 3 総会・記念講演会  
List of General Meetings and Memorable Lectures
- 4 海外交流の会  
List of Intercultural Lectures
- 5 この指とまれ！  
List of "Kono yubi tomare!"
- 6 UIFA JAPON NEWSLETTER  
List of UIFA JAPON NEWSLETTER
- 7 UIFA 世界大会開催記録  
Review of UIFA Congresses

# 1 UIFA JAPON の前史と 25 年:1992～2017 UIFA JAPON History

年	前史・UIFA とUIFA JAPONと国際交流	社会貢献・災害被災地支援	女性建築家の発掘と意義の発見
1953	最初の女性建築家集団 PODOKO 設立		
1963	国際女性建築家会議 UIFA 結成 第1回大会・第1回国際展覧会(パリ) 日本参加		
1969	UIFA 第2回世界大会(モナコ)		
1972	UIFA 第3回世界大会(ブカレスト)		
1976	UIFA 第4回世界大会(ラムサール) 日本参加		
1978	UIFA 作品展(パリ) 日本参加		
1979	UIFA 第5回世界大会(シアトル) 日本参加		
1983	UIFA 第6回世界大会(パリ) 日本参加		
1984	UIFA 第7回世界大会(ベルリン) 日本参加		
1988	UIFA 第8回世界大会(ワシントン DC) 日本参加		
1991	UIFA 第9回世界大会(コペンハーゲン) 日本参加		
1992	6月 UIFA JAPON 設立(初代会長 中原暢子)		
1993	UIFA 第10回世界大会・UIFA 創立30周年記念(ケープタウン) 「変貌する社会」 日本参加		
1994	日韓交流シンポジウム「家族・住まい・社会ー明日の住まいを考えるー」(東京) 東京都女性財団助成		
1995	韓国女性建築家会議との交流シンポジウム「21世紀の新住居文化ー女性が主役である」(ソウル)	会員個人レベルでの阪神・淡路大震災支援	
1996	UIFA 第11回世界大会(ブダペスト) 「それぞれの国の建築遺産の復元と再利用」 日本参加 日本大会を提案		『すまいをめぐる女性ー女性建築家の戦後史を辿りながらー』発行(東京女性財団助成研究)
1997			
1998	UIFA 第12回世界大会(東京) 開催 テーマ「環境共生時代の人・建築・都市」(実行委員長 松川淳子)		
1999		トルコマルマラ地震、台湾集集地震被災地支援(松川、建築学会調査団に参加、) その後4年にわたりトルコ被災地調査・交流	
2001	UIFA 第13回世界大会(ウィーン) 「人生の活動的な時期の前と後」 日本参加		



年	前史・UIFA とUIFA JAPON と国際交流	社会貢献・災害被災地支援	女性建築家の発掘と意義の発見
2002			女性と仕事の未来館「女性と建築展」(株)生活構造研究所(企画運営) 展示作成。パネルディスカッション等
2003	UIFA JAPON10 周年記念事業(名古屋) 松川淳子 IAWA (国際女性建築家アーカイブ) のアドバイザー就任(以後毎年出席)		「日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者」『住総研研究年報』NO.30(住総研助成研究) 10 周年記念事業「女性建築家たちの現在・過去・未来」CD 完成
2004	UIFA 第 14 回世界大会(トゥールーズ) テーマ「自然災害に対する女性建築家の貢献」日本参加	UIFA JAPON 災害復興見守りチーム編成、自然災害の被災地を女性の視点から支援する決意スマトラ沖地震への義援金贈呈	
2005	UIFA 会長ド・ラ・トゥール氏「レジオン・ドヌール勲章」受賞(小川、松川祝賀会参加)		セナ・セクリック(クロアチア)『建築の理論と実践における女性の歴史』をチームで翻訳刊行
2006	佐藤由紀子「AR AWARD」(イギリス)受賞	中越地震の被災地・新潟県長岡市小国町法末集落支援に着手・被災状況住宅カルテ作成・初釜茶会等開催・カレンダー作成販売・オープンガーデン・モバイルキッチン(住宅カルテ以外 2016 年まで継続中)	
2007	UIFA 第 15 回世界大会(ブカレスト)「アイデンティティ」日本参加		
2008	初代会長・名誉会長中原暢子逝去	岩手・宮城内陸地震の被災地・栗原市へ義捐金送付 四川地震への義援金贈呈	
2009	小林純子「エイボン女性大賞」受賞	日本環境共生学会学会賞 環境活動賞受賞「新潟県長岡市小国町法末集落の震災復興支援に関わる一連の活動」	
2010	UIFA 第 16 回世界大会(ソウル)「Green Environment」日本参加 小川信子会長建築学会教育賞(教育業績)受賞	第 16 回世界大会にて発表・パネル展示した中越地震支援「オープンガーデン」・「どこでもカフェ」を第 51 回海外交流の会「2011 UIFA SEOUL 報告会」で報告	
2011	IAWA メンバー中越地震被災地法末へ	東日本大震災の被災地・岩手県岩泉町への支援 「どこでもカフェ」(岩泉町・郡山市・大船渡市・大島・首都防災ウィクリー)「だれでもフォトグラフ」(岩泉町)というプロジェクトを実施(以後継続)	IAWA25 周年記念「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像」巡回展 第 1 会場建築会館、第 2 会場東京国際フォーラム、第 3 会場中央区立女性センター、第 4 会場男女共同参画センター横浜北、第 5 会場千代田区男女共同参画センター、第 6 会場国立女性教育会館、第 7 会場神奈川県立かながわ女性センター、第 8 会場越谷市男女共同参画センター(ほっと越谷)
2012		「どこでもカフェ」は福島県郡山市、本宮市、岩手県大船渡市、東京都大島町へ展開。福島県新地町での住宅相談会開催	

年	前史・UIFA とUIFA JAPON と国際交流	社会貢献・災害被災地支援	女性建築家の発掘と意義の発見
2013	IAWA 「だれでもフォトグラファー」展（ヴァージニア工科大学） UIFA 第 17 回世界大会（ウランバートル）「地球温暖化における女性建築家の役割」日本参加・震災報告	第 17 回世界大会にて東日本大震災の被災地支援発表・パネル展示 第 54 回海外交流の会「東日本大震災後—今私たちに何ができるか いままでとこれから—」報告 岩泉町復興記録『明日の岩泉へ・その 1』編集協力	IAWA25 周年記念『未来へ—女性建築家のパイオニアたちの肖像巡回展の記録』発行
2014		岩泉町復興記録『明日の岩泉へ・その 2』編集協力	「女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル」会員アンケート
2015	UIFA 第 18 回世界大会（ワシントン DC + ブラックスバーグ）「建築関連領域における女性の役割と力」日本参加	国連防災会議でパネル展示（仙台） 第 18 回世界大会にてアンケート結果発表 岩泉町復興記録『明日の岩泉へ・その 3』編集協力 ネパール地震への義捐金贈呈	第 18 回大会及びその後「女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル」UIFA 会員アンケート実施
2016	佐藤由紀子「A'Design」（イタリア）金賞受賞	熊本地震の被災地支援 熊本地震への義捐金贈呈、被災地訪問（御船町） 「ユイファ・ジャポン復興ハウス—高齢期のコンパクトな住宅の提案集」Part 1 の作成及び「住まいの相談・勉強会」開催	『女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル研究』（建築技術教育普及センター助成研究報告書）
2017	7 月 1 日 UIFA JAPON 総会・設立 25 周年記念講演（妹島和世） 10 月 1 日 松川淳子「住生活月間功労者」表彰（国土交通省）	熊本地震被災地訪問（御船町）、 「ユイファ・ジャポン復興ハウス—高齢期のコンパクトな住宅の提案集」—と「住まいの相談・勉強会」開催 岩泉町台風被害支援「ユイファ・ジャポン復興ハウス—高齢期のコンパクトな住宅の提案集」を用いた「住まいの相談・勉強会」開催 岩泉町台風被害へ義捐金送付・支援策検討	11 月 北海道大学大学院生張 娉さんへ『女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル研究』の貸出

作成 中島明子

## 2 UIFA JAPON 歴代役員

## List of the Successive Board Members

期	年度	名誉会長	相談役	会長	副会長	総務	事業	広報・渉外	会計・監査
第1期	1993年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田	山田・吉田(あ) 村上・平井 吉田(よ)	飯島・川嶋 船津・日高 大高・渡邊	東・小渡 監査：安藤
	1994年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田	山田・吉田(あ) 平井・正宗 吉田(よ)	飯島・川嶋 船津・日高 大高・渡邊	東・小渡 監査：安藤
第2期	1995年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田	山田・吉田(あ) 平井・正宗 吉田(よ)	飯島・川嶋 船津・日高 大高・渡邊	東・小渡 監査：安藤
	1996年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田・沖山	山田・吉田(あ) 正宗・吉田(よ)	飯島・川嶋 日高・渡邊 緑川	東・小渡 監査：安藤
第3期	1997年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田・沖山	山田・吉田(あ) 正宗・吉田(よ)	飯島・川嶋 日高・渡邊 緑川	東・小渡 監査：安藤
	1998年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田・沖山	山田・吉田(あ) 正宗・吉田(よ)	飯島・川嶋 日高・渡邊 田中	東・小渡 監査：安藤
第4期	1999年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 藤田・沖山	山田・吉田(あ) 正宗・吉田(よ)	飯島・川嶋 日高・渡邊 田中	東・小渡 監査：安藤
	2000年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 柳沢・日高 中井	山田・吉田(あ) 正宗・栗山 吉田(よ)	飯島・北本 渡邊・田中	草野・吉田 (ま) 監査：東
第5期	2001年	ド・ラ・トゥール		中原暢子	小川信子	松川・峯 柳沢・日高 中井	山田・吉田(あ) 正宗・栗山 吉田(よ)	飯島・北本 渡邊・田中	草野・吉田 (ま) 監査：東
	2002年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	柳澤・日高 中井・高橋	山田・吉田(あ) 吉田(よ)	渡邊・須永 中野	栗山・飯田 監査：飯島・ 東
第6期	2003年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	柳澤・日高 中井・高橋	山田・吉田(あ) 吉田(よ)	渡邊・須永 中野	栗山・飯田 監査：飯島・ 東
	2004年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	川崎・谷村・ 日高・中井	山田・石川(や) 吉田(よ)	渡邊・須永 中野	栗山・飯田 監査：小渡・ 東
第7期	2005年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	川崎・谷村 日高・中井	山田・石川(や) 吉田(よ)	渡邊・須永 中野	栗山・飯田 監査：小渡・ 東
	2006年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	川崎・谷村 上田・中井 安武	山田・石川(や) 吉田(よ)	渡邊・須永 石川(か)	飯田・森田 監査：東・ 栗山
第8期	2007年	ド・ラ・トゥール 中原暢子		小川信子	正宗量子 松川淳子	谷村・上田・ 中井・安武・ 山本	山田・石川(や) 吉田(よ)	渡邊・須永 石川(か)	飯田・森田 監査：東 栗山
	2008年	ド・ラ・トゥール 中原暢子 (7月5日逝去)		小川信子	正宗量子 松川淳子	伊藤・上田・ 中井・安武・ 山本	小林・林屋 吉田(よ)	在塚・古村 須永	福井・森田 監査：栗山 山田



期	年度	名誉会長	相談役	会長	副会長	総務	事業	広報・渉外	会計・監査
第9期	2009年	ド・ラ・トゥール		小川信子	正宗量子 松川淳子	伊藤・上田 中井・安武 山本	小林・林屋 吉田（よ）	在塚・古村 須永	福井・森田 監査：栗山 山田
	2010年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子	北本・伊藤 中井・安武 山本	林屋・三上 吉田（よ）	在塚・須永 黒石	福井・森田 監査：上田 山田
第10期	2011年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子	北本・伊藤 中井・安武 山本	林屋・三上 吉田（よ）	在塚・須永 黒石	福井・森田 監査：上田 山田
	2012年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子 稲垣弘子	伊藤・岩井 安武・山本	林屋・三上 矢賀部	井出・薄井 黒石	森田・北本 監査：上田 山田
第11期	2013年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子 稲垣弘子	伊藤・岩井 安武・山本	林屋・三上 矢賀部	井出・薄井 黒石	森田・北本 監査：上田 山田
	2014年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子 稲垣弘子	伊藤・岩井 安武・山本	林屋・矢賀部 岸本	井出・薄井 渡邊	森田・北本 監査：上田 山田
第12期	2015年	ド・ラ・トゥール 小川信子		松川淳子	正宗量子 稲垣弘子	伊藤・岩井 安武・山本	林屋・矢賀部 岸本	井出・薄井 渡邊	森田・北本 監査：上田 山田
	2016年	ド・ラ・トゥール 小川信子	松川淳子 正宗量子	稲垣弘子	井出幸子 岩井紘子	井関・伊藤 安武・山本	林屋・小野 岸本	薄井・宮本 渡邊	森田・栗山 監査：上田 山田
第13期	2017年	ド・ラ・トゥール 小川信子	松川淳子 正宗量子	稲垣弘子	井出幸子 岩井紘子	井関・伊藤 安武・山本	林屋・小野 岸本	薄井・宮本 渡邊	森田・栗山 監査：上田 山田

作成 松川淳子 稲垣弘子

### 3 総会・記念講演会

### List of General Meetings and Memorial Lectures

	年月日	講師 敬称略	タイトル	場所	参加者
01	1993年 6月12日	赤松良子	21世紀に向けて翔け世界の女性技術者たち	氷川会館	70名
02	1994年 6月11日	野村みどり・ 川内美彦・ 小川信子	サンフランシスコ・オークランド・パークレイ —やさしい街の見聞記—	東京芸術劇場 中会議室	60名
03	1995年 6月11日	リチャード・スカッフ 川内美彦	サンフランシスコにおける「アクセス」への取り組み	科学技術館 第3会議室	
04	1996年 6月8日	渡辺美紀	ハンガリー講演会 レヒネル・エデンの建築探訪	東京芸術劇場 中会議室	
05	1997年 6月14日	堂園涼子	点としての Medical Crossing から Crossyard なる空間へ	砂防会館別館シエーンバツハサポー 会議室「立山」	34名
06	1998年 6月13日	林 昭男	岐路に立つ建築—持続可能な社会に向かう建築の道筋—	砂防会館別館シエーンバツハサポー 会議室「立山」	
07	1999年 6月12日	吉田文子	あんなことこんなことあったかしら —建築家吉田文子氏のお話—	弘済会館 会議室「桜」	
08	2000年 6月10日	吉村行雄	北欧の近代建築 —写真家・建築家吉村行雄氏のお話—	弘済会館 会議室「桜」	35名
09	2001年 6月9日	長澤 泰	Environment of Aged Life —これからの高齢社会と居住環境—	弘済会館 会議室「桜」	31名
10	2002年 6月29日	中原暢子	林・山田・中原設計同人の44年間 —UIFA JAPON10周年を記念して—	ゆうぼうと 研修室「かたくり」	39名
11	2003年 6月28日	富田玲子	学校建築と私	自由学園明日館	45名
12	2004年 6月12日	池田武邦	持続可能な循環型社会への道 —21世紀は女性の時代—	けんぼプラザ	40名
13	2005年 6月25日	尾関利勝	名古屋歴史的町並み見学会 (愛知万博見学を兼ねて)	愛知県女性センター 「ウィルあいち」	32名
14	2006年 6月24日	内田祥哉	「すまいと和小屋」 —伝統的民家のフレキシビリティ—	女性と仕事の未来館	46名
15	2007年 6月23日	菊竹清訓	女性と建築文化	女性と仕事の未来館	43名
16	2008年 6月21日	鈴木博之	保存と創造—アンコール遺跡群から現代都市まで—	東京大学工学部 1号館15号教室	61名
17	2009年 6月20日	槇 文彦	建築における優しさとは何か	日本女子大学 成瀬記念講堂	約 350名
18	2010年 6月12日	松本哲夫	デザインと機能 —ヤクルトから新幹線まで—	(株)前川製作所本社ビル 共創ホール	
19	2011年 6月11日	ドナ・デュネイ ヴァージニア工科大学教授	「未来へ —女性建築家のパイオニアの肖像」	キャンパス・イノベーションセンター東京国際会議場 (CIC 東京・東京工業大学田町校舎)	

	年月日	講師 敬称略	タイトル	場所	参加者
20	2012年 6月16日	伊東豊雄	これからの建築を考える	経済調査会大会議室	
21	2013年 5月25日	ソランジュ・デルベツ ツ・ド・ラ・トゥール 通訳：成瀬 弘	「UIFA 誕生の頃」 (その後 東日本大地震被災地視察)	学士会館 203号室	50名
22	2014年 6月28日	陣内秀信	「歴史をふまえた水都の再生と創造」 —欧米都市と東京を比較して—	法政大学市ヶ谷田町 校舎 都市プロジェ クトルーム T312室	
23	2015年 6月6日	團 紀彦	「建築における共生的思考について」	ビジョンセンター 日本橋会議室 504	
24	2016年 6月18日	斎藤公男	新しい建築のみかた —技術と芸術の融合とはなにか—	日本大学 1号館 121会議室(駿河台)	
25	2017年 7月11日	妹島和世	「環境と建築」	日本大学工学部 8号館(駿河台)	245人

作成 事業委員 林屋雅江 事務局 小池和子



## 4 海外交流の会 List of Intercultural Lectures

年度	回数・開催日	講師 敬称略	タイトル	会場	参加者数
1993年	第1回 4月10日	Lilli Ann K. Rosenberg	MARVIN & Lilli Ann K. ROSENBERG ご夫妻を囲んで	INAX 銀座ショールーム 8階 Public Space	41名
	第2回 12月18日	全 龍福	漆を語る	目黒雅叙園	
1994年	第3回 1月29日	Dr. アナリザ・モリーニ	イタリアの居住環境について— 女性建築技術者達の活躍ぶり—	星稜会館	
	第4回 2月26日	Dr. Elizabeth Laverick OBE 近藤次郎他	産業研究会第3回国際シンポジウム FOR TOMMOROW —世界の中の日本の女性科学者・技術者— (共催：日本女性技術者フォーラム、 日本婦人科学者の会、工技院女性研究者の会、 農水省女性研究者有志)	野口英世記念館 共催：日本女厳術者フォーラム、 日本婦人科学者の会、 工技院女性歌者の会、 農水省女性研究者有志	185名 内9名
	第5回 10月22日	鈴木成文、キム・ジンエ、 キム・インスク、池淳、 キム・ボクスー、小谷部、 小川、中島、松川、飯島、	日韓交流の会シンポジウム 家族・住まい・社会 —明日のすまいを考える—	氷川会館	
	第6回 3月18日	杉山知之	デジタルメディアの世界を さぐる	デジタルハリウッド株式 会社	28名
1995年	第7回 7月16日	マレラ・ヘレハーゲン	オランダのランドスタット地域 と住宅問題	芸術劇場	
	第8回 11月4日	デボラ・ディスノー	映画づくり・空間づくり	子どもの城	
	第9回 1月7日	小川信子	韓日交流シンポジウムの報告	中野サンプラザ	
1996年	第10回 7月27日	五島聖子	ランドスケープの役割と現代の 傾向	東京芸術劇場	30名
	第11回 11月30日	UIFA JAPON 会員の 報告	1998 UIFA JAPON 日本大会 開催に向けて—UIFA ハンガ リー大会報告会—	新宿オゾン	
	第12回 3月20日	キャロル・マンク	日本における建築家のインター ナショナルチームの活動— 1998年 UIFA 日本大会に向けて	ECO としま (豊島区立 生活産業プラザ)	
1997年	第13回 8月23日	チャンドリカ・ナワ ラットナラージャ	スリランカの建築と歴史 スリランカ大使夫人のチャンド リカ・ナワラットラージャさん のお話	オカムラショールーム	40名
	第14回 11月15日	中村陽子	40歳をすぎでの海外留学 —会員中村陽子さんのイギリ ス AA スクール留学体験のお話	オカムラショールーム	
	第14-2 (15) 回 3月14日	ジルケ・フォートク、 六反田千恵	ジルケ・フォートクさん・六反田 千恵さんが語る「ドイツのまち・ 日本のまち」〈都市と環境〉編	オカムラインテリア館	22名

年度	回数・開催日	講師 敬称略	タイトル	会場	参加者数
1998年	第15(16)回 5月9日	高橋 元	コーポラティブハウスだからこそできる環境共生住宅	けんぼプラザ	34
	第16(17)回 7月11日	渡 和由	チャーミングな建築 —自然環境とやわらかく共生する持続可能な建物—	国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流館	
	第17(18)回 3月27日	吉野泰子	中国黄土高原緑化計画におけるヤオトン住居の環境調査と近代化に関する試み —日中共同調査結果報告—	けんぼプラザ	
1999年	第18(19)回 7月31日	マニュエル・タル ディッツ	国境をこえて—みかんぐみの設計作法と建築—	国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流館	22名
	第19(20)回 10月30日	小澤紀美子 長島キャサリン 岩村マグダレーナ	「子どもと環境フォーラム」 —日本・イギリス・ドイツ五感に触れる体験を大切に—		
	第20(21)回 2月18日	遠藤 楽	F.L. ライトと明日館	けんぼプラザ	29名
2000年	第21(22)回 8月26日	松川淳子	トルコ大地震から1年 —被災地はどう変わったか—	けんぼプラザ	
	第22(23)回 11月13日	川西芙沙	みることとみえること—ドイツ児童文学から見た内面の世界と外面の世界—	けんぼプラザ	
	第23(24)回 3月10日	伊藤哲夫	ウィーンの都市と建築 —歴史の流れの中で—	新日鉄代々木センター	
2001年	第24(25)回 4月21日	高根澄子 西野雄一郎	モンテッソーリ幼児教育のお話と横浜モンテッソーリ幼稚園見学	横浜モンテッソーリ幼稚園	32名
	第25(26)回 5月26日	谷澤由紀子	ウィーンに咲いた花 —ハプスブル家最後の皇妃エリザベートの美の世界—	けんぼプラザ	
	第25-2(27)回 11月24日	UIFA JAPON 会員の報告	第13回 UIFA ウィーン世界大会からの報告—シュロス・ウィルヘルミネンブルグからザルツブルグへ—	国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流棟	24名
	第26(28)回 2月16日	一番ヶ瀬康子	モンゴルの福祉事情	けんぼプラザ	30名
2002年	第27(29)回 5月31日	南迫哲也	明日館のライト—南迫哲也先生によるお話しと見学—	自由学園明日館	29名
2002年	第28(30)回 2月8日	谷川正巳	日本のライト —記憶と記録の間—	自由学園明日館	16名
	第29(31)回 3月22日	稲富 昭	目と手としての建築	自由学園明日館	
2003年	第30(32)回 11月29日	井上 裕	これからの高齢者住宅とグループホーム—北欧・英国に学ぶ終の棲家—	自由学園明日館	29

年度	回数・開催日	講師 敬称略	タイトル	会場	参加者数
2003年	第31(33)回 2月7日	グスタフ・ストランド デル	施設ケアから在宅ケアへ —理論と実践—	けんぽプラザ	28名
2004年	第32(34)回 7月17日	三宅理一	フランス文化の多様性と都市再生	女性と仕事の未来館	19名
	第33(35)回 11月27日	UIFA 第14回トゥールーズ世界大会からの報告		女性と仕事の未来館	21名
	第34(36)回 3月26日	平川良信	環境先進国デンマークと日本	女性と仕事の未来館	15名
2005年 年間テーマ 環境	第35(37)回 6月4日	中村真珠	スマトラ沖地震の復興プロセス に学ぶ	国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟	40名
	第36(38)回 8月7日	ブリジット・ライヒマン	水の都市ベルリンの雨水利用と生活(雨水東京国際会議の一環として企画)	すみだ環境ふれあい館 交流ルーム	23名
	第37(39)回 3月11日	西條一止	自然とともに生きる —健やかな日々のために—	新宿鍼灸柔整専門学校 3階大講義室	31名
2006年	第38(40)回 10月29日	シェスティン・ シェネッケル/ イングラ・ブロンベ リー	スウェーデンにおける建築界の女性 —私の仕事・暮らし・住まい—	女性と仕事の未来館	
	第39(41)回 12月9日	小川信子 藤井恵美	陶器の街・スウェーデン・グスタブスベリーの歴史・保存・再生	スウェーデン大使館 オーディトリウム	
	第40(42)回 2月17日	定行まり子 2007年	子どもにとっての住まい・まちづくり —ドレスデンの取り組みから—	日本女子大学 百年館低層棟 701号室	
2007年 年間テーマ ルーマニア	第41(43)回 8月25日	小松義夫	ドナウ川とルーマニア —歴史と民族の多様性—	国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟	
	第42(44)回 9月15日	太田邦夫	ルーマニアの建築—その伝統的手法と歴史的背景—	女性と仕事の未来館	
	第43(45)回 2月9日	UIFA JAPON 会員の報告	第15回 UIFA ルーマニア世界大会からの報告	女性と仕事の未来館	
2008年 年間テーマ 「アジア」	第44(46)回 9月6日	白井宏昌	象徴の構築とサステナビリティ—オリンピック都市、北京&ロンドンから学ぶこと—	新日鉄 代々木倶楽部	
	第45(47)回 12月6日	篠崎正彦	世界遺産ベトナム・ホイアンのまち並み保存と生活の変化	東洋大学白山校舎	
	第46(48)回 3月7日	山田幸正	インド圏のイスラーム建築—ヒンドゥ文化の中に咲いたイスラーム—	首都大学東京 南大澤キャンパス	
2009年 年間テーマ 韓国	第47(49)回 9月26日	富井正憲	漢城、京城、ソウル 3時代の建築	神奈川大学 16号館	



年度	回数・開催日	講師 敬称略	タイトル	会場	参加者数
2009年 年間テーマ 韓国	第48(50)回 11月28日	原田美佳	韓国の生活と文化	駐日韓国大使館 韓国文化院	
	第49(51)回 3月6日	パネルディスカッション	韓国の現代文化 —若者に聞く— 榎本直信・趙晟恩・宋由貞・ 李東昱	成城大学 8号館8階832室	
2010年	第50(52)回 9月18日	朴 賛弼	環境をデザインする	法政大学市ヶ谷校舎 ポアソナードタワー 25階	
	第51(53)回 11月27日	UIFA JAPON 会員の報告	2011 UIFA SEOUL 報告会	新日鉄代々木倶楽部	
	第52(54)回 7月23日 (東日本大震災で延期)	柳沢 要	未来の学校建築を考える —海外の教育改革と学校建築の潮流— 内田洋行ビル見学会	(株)内田洋行新川本社ビル【ユビキタス協創広場 CANVAS】	
2011年 災害 環境	第53(55)回 9月27日	ソランジュ UIFA 会長を迎えて UIA (国際建築家会議) 日本大会で来日のソランジュ 会長他海外からの UIFA 会員との交流会 (海外招待客 10名通訳 1名含む)		銀座・四万十川 (土佐料理)	31名 ゲスト 10名
	第54(56)回 11月26日	UIFA JAPON 会員の報告	東日本大震災後 —今私たちに何ができるか いままでとこれから—	(財)経済調査会・4階 大会議室	
	第55(57)回 2月18日	倉阪秀史	持続可能な社会におけるデザイナーの役割 ~再生可能エネルギー基盤の経済に向けて~	旭硝子 (AGC) studio 2階・会議室	
2012年 環境 モンゴル	第56(58)回 9月8日	宿谷昌則	第一部: 見学会 小金井市環境 配慮住宅型研修施設 第二部: 講演会 「人の住まいと環境技術」~身の丈にあった 建築技術・デザインとはなんだろうか~	第三部 左記施設見学の 後、 第四部 講演会: 東京都 立科学技術高校会議室	36名 37名 +α
	第57(59)回 12月22日	八尾 廣	『モンゴル建築・都市最新事情』 —急速な経済発展のもと、草原 で何が起きているか—	東大駒場ファカルティ・ ハウス セミナー室	
	第58(60)回 3月2日	金岡秀郎	モンゴルのコスモス —ゲルと大地とモンゴル人—	旭硝子 (AGC) studio 2階・会議室	38名
2013年 年間テーマ モンゴル	第59(61)回 11月30日	UIFA JAPON 会員の報告	第17回 UIFA モンゴル大会報告会	日本大学5号館2階 524号室	
	第60(62)回 3月8日	竹沢えり子	街がつくった「銀座のルール」 ~銀座にはなぜ超高層ビルがないのか~ (銀座街づくり会議、 銀座デザイン協議会事務局長)	旭硝子 (AGC) studio 2階・会議室	25名?

年度	回数・開催日	講師 敬称略	タイトル	会場	参加者数
2014年 年間テーマ 米・ ヴァー ジニア	第61(63)回 11月15日	稲富 昭	大都市と人間—ヴァージニア工科大学とグロピウス— 教会内の見学も実施(教会関係者による)	淀橋教会 インマヌエル礼拝堂	40名
	第62(64)回 3月28日	小林克弘 2015年	ニューヨークの発展史と現在の動向	首都大学東京(南大沢) 9号館2階226室	
2015年 年間テーマ 米・ ヴァー ジニア	第63(65)回 7月4日	遠藤 現	Fallingwater & Kentuck Knob—ライトの落水荘とユーソニアンハウス—	自由学園・明日館大教室 「タリアセン」	
	第64(66)回 10月24日	UIFA JAPON 会員の報告	第18回 UIFA アメリカ大会報告会 ヴァージニア工科大学にて開催	日本大学5号館(神田駿河台)2階524号室	
2016年	第65(67)回 11月26日	伊礼 智	沖縄の外部空間から学ぶ	旭硝子(AGC) studio 2階・会議室	40名
	第66(68)回 3月25日	芹澤隆子	オーストラリアの介護施設に見る「ダイバーショナルセラピー」	日本大学5号館(神田駿河台)2階524号室	28名
2017年	第67(69)回 11月11日	柘野俊明	庭と建築	田島ルーフィング(株) 東京ショールーム 「Elab(エラボ)」	35名
	第68(70)回 3月19日	陣内秀信・久染健夫・ 佐藤哲章・松川淳子	水辺のまち —世界・東京そして江東—	江東区深川江戸資料館2階小劇場	224名

注) 回数欄の( )内の数字は通算回数

作成 事業委員 林屋雅江 山田規矩子 事務局 小池和子

## 5 この指とまれ！ List of "Kono yubi tomare(Let's participate in)" projects

年月日	タイトル	企画者	備考
1999.3.27	翻訳「A SEARCH OF WOMEN IN ARCHITECTURAL THEORY AND PRACTICE」	東由美子	喜多素子、古村伸子 中村陽子、東由美子 三上紀子、吉村康子
1999.4	ハワイのホスピタル訪問計画	渡邊喜代美	
1999.5	「女性と建築」をテーマに勉強会をしよう！	田中厚子	
1999.9.26	「喜多方押し掛けワークショップ」	飯島静江	佐藤久美子（執）
1999.11.20	〈風の道〉まちづくりと藤前干瀧見学ツアー	須永淑子	堀越哲美（講師） 向井愛（案・執）
2000.7.4	埼玉県立大学・同短期大学部見学	渡邊喜代美 井出幸子	田邊孝浩（案） 井出幸子（執） 寺尾信子（執）
2001.4.7	「帝釈天附属ルンビニー幼稚園」と「帝釈天題経寺の庭園」	渡邊喜代美	川西芙沙（案） 定行まり子（執）
2001.8.17-18	新しい福祉のモデル—鷹巣訪問	渡邊喜代美	稲垣道子（執）
2002.4.6	「中川と背後地」見学	須永淑子	三上紀子（執）
2002.9.28-29	「水彩フェスティバル」参加	須永淑子	渡邊喜代美（執）
2002.11.30	「国際子ども図書館」見学	正宗量子	川西芙沙（案） 古居みつ子（執）
2003.6.3	同潤会江戸川アパート見学会	小島久實	定行まり子（執）
2003.11.27	宮代町立小学校他訪問	渡邊喜代美	富田玲子（案）
2004.2.26	国際子ども図書館と 国際アンデルセン賞作家・画家展を観る	正宗量子	川西芙沙（案） 北島美和子（執）
2004.5.20	世田谷区立小学校のトイレ改修を見る	中野晶子	小林純子（案）
2005.3.14	見て、刈って、食べて 東京を守る堤防を守ろう栗橋 体験ツアー	須永淑子	
2005.10.29	高齢者グループハウス「ほっと館」見学	東由美子	田中厚子（執）
2006.7.23-30	池田武邦邸見学	正宗量子	中野晶子（執）
2006.9.24	日下部記念病院見学	柳澤佐和子	柳澤佐和子（設） 北村和代（執）
2006.11.30	小笠原伯爵邸見学	山田初江 正宗量子	山田初江（執）
2008.10.8	旧安田邸見学	三上紀子	谷村留都（執）
2009.1.29	新宿西口思い出横丁のトイレ	井出幸子	小林純子（案） 井出幸子（執）
2009.6.7	旧朝倉家住宅とヒルサイドテラス見学会	正宗量子 三上紀子	河原美津子（執）
2009.8.9	レンガを愛して— 鬼頭日出雄氏インタビュー	松川淳子 須永淑子	松川淳子（執）



年月日	タイトル	企画者	備考
2010.1.12	新木場木材会館見学	寺尾信子	寺尾信子（執）
2010.4.3	三和町営団住宅・三和町見学	在塚礼子	在塚礼子（執）
2010.9.3/6/13	ハングル講座	林屋雅江	朴 賛弼（講師） 渡邊喜代美（執）
2010.12 初旬	天竜の森見学	須永淑子	桑原学子（執）
2012.9.22	林 昌二・雅子邸見学	小川信子 小池和子	久保田永三（案） 白井克典（案） 小川信子（執）
2013.4.20	モンゴルの遊牧民～食と住まい～	林屋雅江	宮崎玲子（講師） 戸川理子（執）
2013.6.25	旧安田楠雄邸へようこそ —多児貞子さんに聞く—	薄井温子	薄井温子（執）
2014.4.5	浦和の中原暢子邸を尋ねて 見学会	小川信子 松川淳子	上田壽子（執）
2014.4.26	「憧れのモダン住宅展 —建築家土浦亀城・信子夫妻からの提案」 ミュージアムトーク参加	正宗量子	正宗量子（執）
2014.11.1	加地邸をひらく— 継承をめざして— 見学会	薄井温子	薄井温子（執）
2015.3.14-18	国連防災世界会議に於いてパネル展示 並びに東日本大震災、福島県新地から宮城県南沿岸 被災地ツアー開催	岩井紘子	岩井紘子（執）
2015.5.23	「ヤマボウシの家」	井出幸子	井出幸子（執）
2015.5.30	「デンマークの住まいとまちのデザイン」	中島明子	福田成美（講師）
2015.11.7	「カップマルタンの休暇小屋（レプリカ）と足袋づくりの街へのお誘い」	宮本伸子	板東みさ子（執）
2016.2.27	問い続ける軍艦島 —歴史遺産〈軍艦島〉公開シンポジウム	加部千賀子	加部千賀子（執）
2016.10.13-14	晩秋を愛知で楽しみませんか	伊藤京子	上田壽子（執）
2017.1.20	UR 都市機構技術管理分室見学会	井関まい子 牛山美緒	中野晶子（執）
2017.5.17	すみだ北斎美術館見学へのお誘い	稲垣弘子	吉田あこ（執）
2017.7.22	豊洲プロジェクトのしくみと、住民がかかわり変わる街（運河ルネサンス）	須永淑子	志村秀明（講師） 北本美江子（執）
2017.8.2	耐震診断の基礎を学びませんか	岩井紘子	中村捷子（講師）
2017.12.10	正宗得三郎展（府中市美術館）見学へのお誘い	正宗量子	岩井紘子（執）
2018.3.19	清澄白河プチ散歩「水辺を活かして地元で活動する」	須永淑子	須永淑子（執）

凡例（執）：NEWSLETTER等への執筆者、（案）：案内してくれた人、（設）：設計者

作成 事務局 小池和子

# 6 UIFA JAPON NEWSLETTER List of UIFA JAPON NEWSLETTER

号、発行年月日	掲載項目
01号 1992.12	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 設立のごあいさつ</li> <li>○UIFA JAPON によせて</li> <li>○UIFA とは</li> <li>○UIFA 創立 30 周年記念第 10 回大会へのお誘い 第 10 回大会の概要</li> <li>○UIFA JAPON 役員会の報告 今後の事業計画</li> </ul>
02号 1993.7	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA 第 10 回大会に参加して</li> <li>○UIFA 第 10 回大会 会議の概要</li> <li>○UIFA 第 10 回大会 会議後のツアー</li> <li>○UIFA JAPON 第 1 回総会・記念講演会</li> <li>○第 1 回海外交流の会</li> <li>○本年度事業計画</li> <li>○役員会の報告</li> <li>■特集：第 1 回 UIFA JAPON 総会・記念講演会に出席して "ひと言"</li> </ul>
03号 1993.11 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS：広報活動計画</li> <li>○MESSAGE： ド・ラ・トゥール UIFA 会長からの手紙 ・第 2 回海外交流の会 ・第 3 回海外交流の会</li> <li>○今月の話題：日本で活動する海外の女性たち No.1</li> </ul>
04号 1994.01 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS：第 3 回海外交流の会 Dr. モリーニのプロフィール</li> <li>○MESSAGE：第 2 回海外交流の会 参加者からのメッセージ</li> <li>○今月の話題：各地会員からのメッセージ</li> </ul>
05号 1994.03	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 役員からのメッセージ</li> <li>○UIFA 会長ド・ラ・トゥールさんからのメッセージ</li> <li>○第 2 回海外交流の会 韓国編</li> <li>○第 3 回海外交流の会 イタリア編</li> <li>○第 4 回海外交流の会 国際編</li> <li>○今後の事業計画</li> <li>○役員会の報告</li> </ul>
06号 1994.05 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS： 第 2 回 UIFA JAPON 総会のお知らせ ・(勲東京女性財団より助成金の認可 ・新しい会員名簿の作成</li> <li>○MESSAGE：新会員からのメッセージ ・各地会員からのメッセージ</li> </ul>
07号 1994.07 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS： 第 2 回 UIFA JAPON 総会、シンポジウムの報告 ・S. d' Herbez de la Tour さん会見</li> <li>○MESSAGE：UIFA JAPON シンポジウムに参加して</li> </ul>
08号 1994.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日韓シンポジウムの概要 ・プログラム ・ソウルでの打合せ</li> <li>■特集：私の家族・住まい・社会 ～明日の住まいを考える～ (個人会員に聞く)</li> <li>○役員会の報告</li> </ul>
09号 1995.01	<ul style="list-style-type: none"> <li>○年頭のごあいさつ</li> <li>○日韓シンポジウムの報告</li> <li>○韓国からの女性建築家たち</li> <li>○講師・コーディネーターからのメッセージ</li> <li>○韓国側講師一行の東京見学記</li> <li>○参加者・通訳からのメッセージ</li> <li>○ド・ラ・トゥール UIFA 会長来日記</li> <li>○役員会の報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
10号 1995.03 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS： ド・ラ・トゥール UIFA 会長よりニュース ・役員会の報告</li> <li>○第 6 回海外交流の会</li> <li>○MESSAGE：阪神大震災について私の考えること・できること</li> </ul>
11号 1995.05 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 3 回 UIFA JAPON 総会、記念講演会のお知らせ</li> <li>○第 6 回海外交流の会の報告</li> <li>○役員会の報告</li> <li>■特集：阪神大震災 その後の街の動き</li> </ul>
12号 1995.07 'D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今月の話題：UIFA JAPON 第 3 回総会・記念講演特集</li> </ul>
13号 1995.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特集：第 1 回～第 10 回までの UIFA 世界大会 ・HISTORY OF UIFA ・第 1 回パリ大会 ・第 4 回ラムサル (イラン) 大会 ・第 7 回ベルリン大会 ・第 8 回ワシントン D.C. 大会 ・第 9 回コペンハーゲン大会 ・第 10 回ケープタウン (南ア) 大会</li> <li>○第 7 回海外交流の会 オランダ編</li> </ul>
14号 1995.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特集：韓日シンポジウム特集 ・韓日シンポジウムで感じたこと ・韓日シンポジウムの概要 ・講演後記 1・2 ・シンポジウム参加記 1・2 ・ポストシンポジウムツアー</li> <li>○第 8 回海外交流の会 アメリカ編</li> </ul>
15号 1996.02 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○TOPICS： 第 9 回海外交流の会の報告「日本の女性建築家の 50 年の歩み」 ・戦後の施策住宅の流れ ・林・山田・中原設計同人の歩み ・女性建築家の軌跡 ・両親の家Ⅱ—引越しに伴う高齢者家族の住まい</li> <li>○今月の話題</li> </ul>
16号 1996.03 D' AUJOURD' HUII	<ul style="list-style-type: none"> <li>○今月の話題：「UIFA '96 ハンガリー大会 (September/2~8/1996) の案内」</li> </ul>
17号 1996.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1996 年度通常総会を迎えるに当たって</li> <li>○1996 年度通常総会のお知らせ</li> <li>○1996 年度役員会の報告</li> <li>○第 12 回 UIFA ハンガリー大会参加ツアー</li> <li>○(勲東京女性財団女性研究活動</li> <li>○会員の自己紹介 No.1</li> <li>○海外だより</li> <li>○NEWS —会員の活動—</li> </ul>
18号 1996.07	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 4 回総会報告</li> <li>○ハンガリー大会研究発表要旨・参加者の紹介・ハンガリー語のレッスン</li> <li>○会員の自己紹介 No.2</li> <li>○新役員の紹介</li> <li>○寄稿 (百聞不如一見)</li> <li>○新刊紹介</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
19号 1996.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特集：第11回UIFAハンガリー大会 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンガリー大会概要</li> <li>・発表論文について</li> <li>・発表パネルについて</li> <li>・ハンガリー大会日記</li> <li>・ハンガリーの印象</li> </ul> </li> <li>○第12回UIFA日本大会に向けて</li> <li>○会員の自己紹介 No.3</li> </ul>
20号 1996.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第12回UIFA日本大会の開催に当たって</li> <li>○第12回日本大会テーマ「環境共生時代の人・建築・都市—21世紀における調和的関係の構築をめざして—」によせて No.1</li> <li>○寄稿 阪神大震災その後 現地からのフラッシュレポート</li> <li>○会員の自己紹介 No.4</li> <li>○UIFA JAPON 事務局を訪ねて</li> </ul>
21号 1997.01	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本大会準備進捗状況</li> <li>○UIFAに本大会準備ワークショップ1 ワークショップ1 各グループからの報告</li> <li>○第10回海外交流の会</li> <li>○助成研究報告発表会レポート「すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら—」</li> <li>○ドキュメント1—UIFA日本大会に向けて（1996年11月22日～1997年1月15日）—</li> </ul>
22号 1997.03	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA会長ド・ラ・トゥールさんの手紙</li> <li>○私の考える環境共生時代 <ul style="list-style-type: none"> <li>・工業地域</li> <li>・まちづくり・住まいづくりと居住者参加</li> <li>・住まい</li> </ul> </li> <li>○第12回海外交流の会</li> <li>○ドキュメント2 UIFA日本大会に向けて（1997年1月29日～1997年3月20日）</li> <li>○会員の自己紹介 No.5</li> </ul>
23号 1997.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA国際女性建築家会議 第12回日本大会開催に向けて <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごあいさつ</li> <li>・開催概要</li> <li>・UIFAおよびUIFA JAPONの概要</li> <li>・ご支援・ご協力をお願い</li> </ul> </li> </ul>
24号 1997.07	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第5回総会を終えて</li> <li>○第12回日本大会 広報活動の報告</li> <li>○UIFA JAPON 第5回の総会、講演会の報告</li> <li>○UIFA第12回日本大会実行委員会部会報告「すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら—」の発行</li> <li>○ドキュメント3 UIFA日本大会に向けて（1997年3月20日～1997年7月5日）</li> </ul>
25号 1997.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第3回ワークショップの報告</li> <li>■特集ザ・インタビュー —第12回日本大会名誉顧問の赤松良子先生にきく—</li> <li>○ドキュメント4 —第12回UIFA日本大会に向けて—（1997年7月7日～1997年9月6日）</li> <li>○海外交流の会</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
26号 1997.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA第12回日本大会 広報部会からの報告</li> <li>■特集ザ・インタビュー—財団法人東京都公園協会理事長 石川金治氏—</li> <li>○環境共生にかかわる2つの講演会に参加して</li> <li>○環境共生の視点でロンドンの生活を考える</li> <li>○バンコックにて(1)</li> <li>○中国は今、こんな地球環境共生住宅に着手</li> <li>○ドキュメント5—第12回UIFA日本大会に向けて—（1997年9月10日～1997年11月01日）</li> </ul>
27号 1998.02	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「日本大会概要」—地球市民としての議論の展開を—</li> <li>■特集ザ・インタビュー —セコム株式会社取締役最高顧問 飯田亮氏—</li> <li>○UIFA第12回日本大会への参加 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「環境共生時代」=「エコロジー的危機の時代」の都市・建築・空間</li> <li>・UIFAの行方</li> <li>・人と人が共生する住まい</li> </ul> </li> <li>○バンコックにて(2)</li> <li>○ドキュメント6—第12回UIFA日本大会に向けて—（1997年11月12日～1997年12月20日）</li> </ul>
28号 1998.04	<ul style="list-style-type: none"> <li>○バリアーはありますか？</li> <li>○ド・ラ・トゥール会長を囲む会開かれる</li> <li>■特集ザ・インタビュー：住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団 松田妙子氏</li> <li>○小さなできごとから</li> <li>○UIFA大会へ向けての大きな期待と小さな野望</li> <li>○日本の心と木造建築—自然との共生</li> <li>○「UIFA '98 第12回日本大会」への参加</li> <li>○ドキュメント7—第12回UIFA日本大会に向けて—（1998年01月24日～1998年02月28日）</li> <li>○海外交流の会</li> </ul>
29-30号 1998.07	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON1998年度第6回総会 記念講演「岐路に立つ建築」- 持続可能な社会に向かう建築の道筋 -</li> <li>○UIFA第12回日本大会準備中中間報告</li> <li>○プログラム部会からの報告</li> <li>○おもてなし部会からの報告</li> <li>■特集ザ・インタビュー —日本建築学会会長 尾島俊雄氏—</li> <li>○新会員の紹介 その1</li> <li>○ドキュメント8—第12回UIFA日本大会に向けて—（1998年03月01日～1998年04月25日）</li> <li>○海外交流の会の報告と予告・UIFA '98 記者発表会</li> </ul>
31号 1998.08	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特集ザ・インタビュー - UIFA JAPON 会長中原暢子氏、第12回日本実行委員長松川淳子氏</li> </ul>
32号 1998.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特集 UIFA国際女性建築家会議第12回日本大会を終えて <ul style="list-style-type: none"> <li>・UIFA '98日本大会を終わって</li> <li>・皆様、お疲れさま！</li> <li>・UIFA国際女性建築家会議第12回日本大会宣言</li> <li>・UIFA国際女性建築家会議第12回日本大会概要報告</li> <li>・皆さんのおかげです</li> <li>・Labyrinth（迷路）から喜多方へ</li> <li>・プログラム部会が担当した事について</li> <li>・おもてなし雑感</li> <li>・横浜の一日を担当して</li> <li>・広報、そして現実</li> </ul> </li> </ul>



号、発行年月日	掲載項目
33号 1999.02	<ul style="list-style-type: none"> <li>○役員会の報告</li> <li>○'98 UIFA 日本大会実行委員会打ち上げパーティの報告</li> <li>○ド・ラ・トゥール UIFA 会長と再会</li> <li>○UIFA 大会とブルガリアの4人とのホームステイ</li> <li>○新会員紹介 その2</li> <li>○新シリーズ この指とまれ</li> </ul>
34号 1999.04	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「海外交流の会」の報告</li> <li>○中国「ヤオトン」住居と環境共生</li> <li>○UIFA '98 記録ビデオ「堂々完成!!」</li> <li>○ザ・ドキュメント</li> <li>○UIFA HOMMAGE</li> <li>○役員会の報告</li> <li>○「この指とまれ!」の報告</li> <li>○「この指とまれ!」ハワイのホスピタル訪問のお誘い</li> </ul>
35号 1999.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会参加への呼びかけ</li> <li>○UIFA '98 日本大会の報告会が開催された</li> <li>○女性センター・女性週間とは</li> <li>○女性ネットワークとしてのUIFA '98 を振りかえる</li> <li>○「千夜一夜」にパネラーとして参加して</li> <li>○MIW・女性週間に「UIFA・日本大会」の模様をパネル展示</li> <li>○役員会の報告</li> <li>○「この指とまれ!」「女性と建築」をテーマに勉強会をしよう!</li> <li>○NEWSLETTER 新編集体制</li> </ul>
36号 1999.07	<ul style="list-style-type: none"> <li>○記念講演会 吉田文子さん ・「あんなこと、こんなこと、あったかしら?」</li> <li>○第7回総会報告</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク 「いつの日か韓国でUIFA国際会議を」シー・ファー・ペー</li> <li>○「鮎色の村—プロローグ」佐藤久美子</li> <li>○この指とまれ!「喜多方押し掛けワークショップ」/役員会報告</li> </ul>
37号 1999.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>○海外交流の会 「国境をこえて—みかんぐみの設計作法と建築」—マヌエル・ダルディッツさんのお話し—</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク2 ・「日本とブラジルの文化のかけらを編み込む1」マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ ・この指とまれ! ・「関西国際交流セミナーを振り返って」寺尾信子 ・「〈風の道〉計画のその後と名古屋のまちづくり」向井愛 ・「共生する内装」栗山礼子 ・「都市と農村の共生—北海道版」中井和子</li> <li>○この指とまれ!「〈風の道〉まちづくりと藤前干潟見学ツアー」</li> <li>○海外交流の会のお知らせ</li> <li>○セナさんの本を読む会</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
38号 1999.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○喜多方ワークショップ ・「煉瓦蔵のある鮎色のまちを訪ねて」</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク3 ・「日本とブラジルの文化のかけらを編み込む2」マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ ・「ベトナムの古都・フエの生活レポート」六反田千恵 ・DOCOMOMO 活動をご存知ですか1 ・ちょっとお知らせ「ナディアさんコンペに優勝」 ・ちょっとひとこと「プリーズ・プリーズ」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
39号 2000.01	<ul style="list-style-type: none"> <li>○海外交流の会 ・「子どもと環境フォーラム」 ・小澤紀美子さん・長島キャサリンさん・岩村マクダレーナさん</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク4 ・「タリアセンからのたより」土井由美 ・「震災都市の復興支援活動」大村綾子 ・DOCOMOMO をご存知ですか ・ちょっとひと言「レバーハンドル」大高真紀子</li> <li>○東京女性財団 1998 年度研究助成報告会</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
40号 2000.03	<ul style="list-style-type: none"> <li>○de la Tour UIFA 会長からの便り</li> <li>○アルゼンチンからの便り Graciela Schmidt</li> <li>○海外交流の会 遠藤楽さんのお話 「F.L. ライトと明日館」</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク5 トルコ大地震の被災地を訪ねて 松川淳子 「風の道」まちづくりと蔵前干潟ツアー 須永淑子 DOCOMOMO の活動をご存知ですか? 山名義之 フランス・モダニズム建築の保存と DOCOMO-MO FRANCE</li> <li>○ちょっとひと言 ユニバーサルデザインを考える 「眼鏡」中村陽子</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
41号 2000.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2000 年度 通常総会・記念講演会へのお誘い</li> <li>○連載企画 広がるレースワーク6 ・もう一度考える、「レースワーク」</li> <li>○セナさんの本を読む会</li> <li>○この指とまれ!「埼玉県立大学・同短期大学部見学」</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「痴呆高齢者のためのケア環境」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
42号 2000.07	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 第8回総会開催</li> <li>○広がるレースワーク8 ・タイの「ダルマの心」 ・カナダの老人福祉施設を訪ねて</li> <li>○この指とまれ!—喜多方ワークショップのその後</li> <li>○NEXT 30 years 国際会議 IN HELSINKI</li> <li>○ドコモ国際会議へのお誘い</li> <li>○ユニバーサル・デザインを考える ・「住宅設計のユニバーサルデザイン」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
43号 2000.09	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2000 年度 UIFA JAPON 通常総会記念講演 ・吉村行雄さん ・「北欧の近代建築」に魅せられた一日</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク8 ・「インド・自然との調和をめざす建築」 ・「モンゴル国への旅」</li> <li>○この指とまれ!「埼玉県立大学見学記」</li> <li>○特別企画「ユニバーサルデザインを考える」</li> <li>○ド・ラ・トゥールさんを訪ねて</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
44号 2000.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第21回海外交流の会報告 ・トルコ大地震から1年 松川淳子さん</li> <li>○連続企画 広がるレースワーク8 ・もう一度考える、「レースワーク」 ・これからの30年:高齢社会に向けて</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「街角のユニバーサルデザイン」</li> <li>○2001年UIFA世界大会へ行こう!</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
45号 2001.01	<ul style="list-style-type: none"> <li>○新世紀のごあいさつ</li> <li>○2001年 UIFA への賀状</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える 「北国の視点で考えるユニバーサルデザイン」</li> <li>○海外交流の会</li> <li>○「みることとみえること」川西英沙さんのお話</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
46号 2001.03	<ul style="list-style-type: none"> <li>○レースワークの発展をめざして</li> <li>○UIFA JAPON 地域交流会 ・北海道交流会報告 ・愛知交流会報告</li> <li>○UIFA ウィーン大会まで - 事業部会の動き -</li> <li>○林雅子さんを偲ぶ</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「色にも音にも優しく」</li> <li>○シアトル大地震—ヘイスティングさんは無事！</li> <li>○この指とまれ！</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
47号 2001.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2001年度 ・通常総会・記念講演会開催のお知らせ</li> <li>○第13回国際女性建築家会議 ・ウィーン大会情報</li> <li>○ウィーンへの誘い ・海外交流の会「ウィーンの都市と建築」 ・ゲミュートリッヒなウィーン</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○「ウィーン会議」資料情報</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「みんながわかるデザイン」</li> </ul>
48号 2001.08	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2001年度 第9回総会報告 ・記念講演会報告</li> <li>○第13回 UIFA 世界大会報告 ・世界の女性建築家の魅力と迫力 ・ウインネルワールドを望むギャラリー ・ウィーン建築の魅力堪能して ・会員になる最大のメリットを経験して</li> <li>○海外交流の会報告 ・モンテッソーリの幼稚園見学</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「ロービジョンの人たちのために」</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
49号 2001.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「UIFA 第13回大会の記録ノート私家版から」</li> <li>○21世紀初のUIFA 世界大会 ・発表概要—“Before and After the Active Life” への多彩な視線 ・ポストコンGRESSツアー報告記</li> <li>○海外コラム「マニラを訪ねて」</li> <li>○この指とまれ！報告「新しい福祉のモデル—鷹巣訪問」</li> <li>○会員報告「水彩フェスティバルを実施」</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える「ユニバーサルデザイン考」</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
50号 2002.02	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA ウィーン大会報告会</li> <li>○ド・ラ・トゥール会長訪問記</li> <li>○地域からの発信—名古屋からの報告 ・地方からの発信を大切に ・名古屋の値打ち感覚 ・わたらしい住まいづくり ・環境と共生する住まい</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○役員会報告 / 役員会からのお知らせ</li> </ul>
51号 2002.05	<ul style="list-style-type: none"> <li>○総会案内</li> <li>○海外交流の会報告「モンゴルの福祉事情」</li> <li>○「女性と建築展」 ・女性建築家の力強い活動の軌跡 ・「女性と建築展」からの問いかけ</li> <li>○この指とまれ！報告</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
52号 2002.08	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2002年度通常総会開催 記念講演「林・山田・中原設計同人の44年間」 報告</li> <li>○海外交流の会報告 ・母を案内したい明日館 ・四寸勾配と切妻の屋根</li> <li>○「女性と建築展」トークセッション ・共働きの視点から見た住まいとまち ・仕事と家庭の両立におけるコミュニティの可能性</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える</li> <li>○建築家林雅子展のご案内</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
53号 2002.11	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2002 座談会—10周年を迎えて ■特集 女性と建築 ・仕事をする女たちのこれまでとこれから ・「林雅子展」を観る ・3人の女性先駆者が語る住まい・女性・社会</li> <li>○次回 UIFA 世界大会についてのアンケート結果</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える</li> <li>○水彩フェスティバル報告</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
54号 2003.02	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON「10周年記念行事」が春の名古屋で ・この機会に名古屋へどうぞ 谷村留都</li> <li>○ダイアン・デイヴィス女史を迎えて</li> <li>○私らしく働く - 地域で、組織で 阿部祥子 橋田洋子</li> <li>○この指とまれ！報告 古居みつ子</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える 寺尾信子</li> <li>○お知らせ / 役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
55号 2003.06.03	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 10周年記念イベント <ul style="list-style-type: none"> <li>・ド・ラ・トゥール UIFA 会長の記念講演とメッセージ</li> <li>・名古屋での建築訪問記</li> <li>・「私にとってのユニバーサルデザイン」写真展</li> </ul> </li> <li>○海外交流の会報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本のライト」</li> <li>・「目と手としての建築」</li> </ul> </li> <li>○同潤会 江戸川アパートメントの見学会</li> <li>○大塚女子アパートメントのこと</li> <li>○私の考えるユニバーサルデザイン</li> <li>○記念事業経過報告 役員会報告</li> </ul>
56号 2003.08.28	<ul style="list-style-type: none"> <li>○これからの UIFA に</li> <li>○UIFA JAPON 2003 年度第 11 回総会開催 基調講演報告「学校建築と私」建築家 富田玲子 子さん</li> <li>○ユニバーサルデザインを考える <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私にとってのユニバーサルデザイン」写真展の魅力</li> <li>・学校のトイレを考える</li> </ul> </li> <li>○第 2 回 私らしく働く一地域で、組織で</li> <li>○男女共同参画週間展示に出展しました</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
57号 2003.11.27	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成 15 年度 東京ウィメンズの助成金が UIFA JAPON 設立 10 周年事業に!!</li> <li>○国際女性建築家資料館「IAWA」のアドヴァイザー会議に行ってきました！ <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学校のトイレを考える」No.2</li> <li>・学校のトイレを変えよう</li> </ul> </li> <li>○私らしく働く一地域で、組織で No.3 <ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO 法人グリーンネックレスと私</li> <li>・自治体の中のわたし</li> </ul> </li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○この指とまれ！報告</li> <li>○川への関心が川をきれいに</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
58号 2004.02.26	<ul style="list-style-type: none"> <li>○海外交流の会報告 これからの高齢者住宅とグループホーム</li> <li>○第 14 回 UIFA 世界大会、トゥールーズ（仏）で開催決定</li> <li>○私の研究・私の活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究会「UD—多領域からの挑戦」の報告</li> <li>・高齢者が高齢者を支える—カナダの福祉を学ぶ老年学セミナー</li> </ul> </li> <li>○私らしく働く一地域で組織で No.4 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私らしく学ぶ」—もう一つの Degree をめざして—</li> <li>・「遊び」が全面、「仕事」は背景</li> </ul> </li> <li>○この指とまれ！報告</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○UIFA 関連団体からのよびかけ</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

(田村伴子編集終了)

号、発行年月日	掲載項目
59号 2004.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA 第 14 回世界大会に参加しよう</li> <li>○総会・記念講演会・懇親会のお知らせ</li> <li>○10 周年記念事業「女性建築家たちの現在・過去・未来」CD 完成</li> <li>○第 31 回海外交流の会報告 = 「施設ケアから在宅ケアへ—理念と現実」</li> <li>○第 14 回トゥールーズ世界大会に向けて <ul style="list-style-type: none"> <li>・トゥールーズの魅力・フランスの知恵が生んだトイレシステム</li> </ul> </li> <li>○名古屋から発信 = 「愛・地球博」・建築士オープンステージ 2003</li> <li>○私らしく働く一地域で、一組織で No.5 <ul style="list-style-type: none"> <li>・マリンスパあたま・注文住宅専門のコンサルティングと「第三の性」</li> </ul> </li> <li>○「小川先生いってらっしゃいの会」報告</li> <li>○UIFA 会員の本</li> <li>○パリからのすてきなお知らせ・同潤会大塚女子アパートメント保存活動</li> <li>○「学校トイレ改修セミナー」に参加して</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
(以後ヘッドデザイン変更・自主編集)	
60号 2004.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2004 年度第 12 回通常総会報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・総会記念講演会「ハウステンボス・エコシティーへの挑戦」池田武邦氏</li> </ul> </li> <li>○第 32 回海外交流の会「フランス文化の多様性と都市再生」三宅理一氏</li> <li>○第 14 回 UIFA 世界大会 いよいよ開催へ</li> <li>○私らしく働く一地域で、組織で No.6 <ul style="list-style-type: none"> <li>・育ててゆく・北海道・花のあるまちづくり</li> </ul> </li> <li>○この指止まれ！「世田谷区立小学校のトイレ改修を見る」</li> <li>○研究余滴</li> <li>○旧同潤会大塚女子アパートの保存・再生活動から</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
61号 2004.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA 第 14 回大会を振り返って 小川信子・松川淳子</li> <li>○UIFA 世界大会で出会った、各国の女性建築家 谷村留都 <ul style="list-style-type: none"> <li>・トゥールーズで感じた、海外女性建築家たちの情熱 吉田洋子</li> <li>・UIFA：楽しかったポストコングレスツアー 小渡佳代子</li> <li>・アフター・ポストコングレスのスウェーデン行 雑感 正宗量子</li> </ul> </li> <li>○中村陽子さんを偲ぶ</li> <li>○役員会報告</li> <li>○編集後記</li> </ul>
62号 2005.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 33 回海外交流の会「UIFA トゥールーズ大会の報告会」に参加して 東由美子 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「トゥールーズ大会」のテーマの展開へ（渡辺）</li> </ul> </li> <li>○第 34 回海外交流の会のご案内「環境先進国デンマークと日本」</li> <li>○阪神・淡路大震災 10 周年記念事業「創造的復興フォーラム」に参加して 小谷部 育子</li> <li>○新潟中越地震支援の現場から「被災地住宅相談キャラバン隊」に参加して 宮本 伸子</li> <li>○私らしく働く No.7 <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域で—奈良中心に住宅の検査と設計 上田壽子</li> <li>・組織で—安全な建物を作ろう 長谷川久乃</li> </ul> </li> <li>○「セナさんの本」販売のお知らせ</li> <li>○この指とまれ！（須永）</li> <li>○モーガン邸をご存じですか（田中）</li> <li>○UIFA 会員の本・役員会報告・編集後記</li> </ul>



号、発行年月日	掲載項目
63号 2005.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○名古屋でお会いしましょう 小川信子</li> <li>・2005年第13回総会と記念行事のお知らせ 正宗量子</li> <li>○ド・ラ・トゥール UIFA 会長の勲章—レジオンドヌール勲章授与式に参加して—松川淳子</li> <li>○海外交流の会報告 平川良信氏による『環境先進国デンマークと日本』矢賀部雅子</li> <li>○私らしくはたらく〈地域から〉福岡で今 久保直子</li> <li>○災害復興見守りチーム UIFA JAPON 私たちに何ができるか 寺本晰子</li> <li>○学校のトイレを U+i+F+A にしよう 中野晶子</li> <li>○愛知万博より 自然の英知 シェア・ペトロヴィッチ</li> <li>○ライトのドキュメンタリー映画、9月に日本初公開</li> <li>○会員おすすめの本</li> </ul>
64号 2005.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2005年度 UIFA JAPON 第13回通常総会報告</li> <li>・「名古屋歴史的街並み見学会」参加記</li> <li>○特別寄稿「水の安全・安心—災害は死角を突いてくる」</li> <li>○ベルリンでの雨水利用～エコロジーな街づくりモデルプロジェクトの体験から～を聞いて</li> <li>○「スマトラ沖地震の復興プロセスに学ぶ」</li> <li>・海外交流の会参加記 -1</li> <li>・海外交流の会参加記 -2</li> <li>○愛・地球博を見学して</li> <li>○追悼 中善寺紀子さんが急逝されました</li> <li>○この指とまれ!「高齢者グループハウス「ほっと館」見学」のご案内</li> </ul>
65号 2005.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 災害復興見守りチームの活動報告</li> <li>○保存と再生 女性の協働組織・投資・実証的環境共生</li> <li>化粧品工場から女性起業家センターへの再生</li> <li>—保存技術と協働マネジメント術 求道学舎の場合</li> <li>—屋敷町の町並み保存と活用 白壁アカデミアの活動</li> <li>—民家の再生 先駆者中善寺紀子の成し遂げた再生の仕事</li> <li>○団地再生シンポジウムから</li> <li>○会員おすすめの本『「環境建築」読本』</li> <li>○ライト建築アーカイブス日本設立記念イベント報告</li> </ul>
66号 2006.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○IAWA アドヴァイザー会議参加記</li> <li>○第37回海外交流の会のお知らせ</li> <li>○災害と向き合う</li> <li>—中越地震被災地 陽光台仮設住宅地を訪ねて</li> <li>—災害見守りチーム企画「法末復興祈念はつがま」</li> <li>—UIFA JAPON 企画シンポジウム『仮設・日本村誕生をめぐって』</li> <li>○私らしく働く—地域で —水辺の活動と防災—</li> <li>○マレーシアからの便り</li> <li>○この指とまれ! 報告「ほっと館」見学会</li> <li>○会員の本『もうひとつの子どもの家(ホーム) 教護院から児童自立支援施設へ』</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
67号 2006.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON アンケート 少子高齢化社会のなかの会員たちと提言</li> <li>○UIFA JAPON 通常総会と記念講演会</li> <li>○UIFA JAPON 少子高齢化に関するアンケート結果報告(1)～(3)</li> <li>・子育てと仕事を両立させるために</li> <li>・介護と仕事を両立させるために、その他</li> <li>○「各国の子育て環境」(1)</li> <li>・スウェーデンの少子化対策</li> <li>・子どもを産み育てやすい社会環境をつくるために—ドイツ—</li> <li>○「各国の子育て環境」(2)</li> <li>・地域で育てる—カナダの子育て</li> <li>・地域における児童館の役割—日本—</li> <li>○コレクティブハウスかんかん森の運営と暮らし</li> <li>○第37回 海外交流の会 報告</li> <li>—自然と共に生きる—健やかな日々のために—</li> <li>○災害復興見守りチームの活動報告(3)</li> <li>○ほっと館・地域の中で</li> </ul>
68号 2006.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2006年度第14回通常総会報告</li> <li>○記念講演「住まいと和小屋」</li> <li>—伝統的民家のフレキシビリティを聞いて</li> <li>○海外交流の会へのお誘い</li> <li>○さまざまな景観への取り組み</li> <li>・メルボルン：波止場の再開発と景観</li> <li>・日本の美しい都市ランキング評価中</li> <li>・法末の棚田景観はどう変化するのだろうか</li> <li>・景観形成へ種を植える～都市デザインチームリーダー木下庸子が語る～</li> <li>・東京都における今後の景観形成について</li> <li>○この指とまれ! 那久庵を尋ねて—長崎の旅</li> </ul>
69号 2006.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第38回海外交流の会報告</li> <li>・スウェーデンにおける建築界の女性—私の仕事・暮らし・住まい—</li> <li>■特集：持続可能な環境を求めて</li> <li>—世田谷 松陰村を訪ねて</li> <li>—水辺から考えるアーバンエコ</li> <li>—バイオアイランドネットワーク</li> <li>—越後妻有大地の芸術祭・3年大祭</li> <li>○法末(長岡市小国町)との1年</li> <li>○この指とまれ! 報告「日下部記念病院見学会」</li> </ul>
70号 2007.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第39回海外交流の会報告</li> <li>陶器の街・スウェーデン・グスタブスベリの歴史・再生・保存</li> <li>○IAWA アドヴァイザー会議報告</li> <li>■特集：会員の仕事持続可能な環境づくりでの取り組み—</li> <li>—エネルギーのメジャーを持ち歩く</li> <li>—団地再生におけるコミュニティの重要性</li> <li>—身近な生活環境デザイン</li> <li>—日下部記念病院見学会</li> <li>○この指とまれ!—小笠原伯爵邸見学記</li> <li>○災害復興見守りチーム定期報告</li> <li>○UIFA 会員の本 -1—『スウェーデン 陶器の町の歩み』</li> <li>○UIFA 会員の本 -2—『アルバムの家』</li> <li>○役員会報告</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
71+72号 2007.07.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 第15回通常総会 報告</li> <li>○総会記念講演会: 菊竹清訓先生「女性と建築文化」を聞いて</li> <li>○ルーマニア豆知識</li> <li>○UIFA JAPON 会員「私の仕事」: 会員たちの仕事・活動・生活 15周年記念企画</li> <li>○第40回海外交流の会: 「子供にとっての住まい・まちづくり—ドイツ・ドレスデンの取り組みから—」</li> <li>○訃報: 川崎衞子さん~千の風になって~</li> <li>○会員の本「都市は誰のものか」</li> <li>○法末「あぜ道茶会」報告</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
73号 2007.11.27	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ルーマニア特集号</li> <li>○ルーマニア大会特集 <ul style="list-style-type: none"> <li>—UIFA 第15回大会会議報告</li> <li>—会議日報(10月1日~6日)</li> </ul> </li> <li>○海外交流の会報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>—第41回(ドナウ川とルーマニア)</li> <li>—第42回(ルーマニアの建築)</li> </ul> </li> <li>○ルーマニア大会ポストコンGRESツアー <ul style="list-style-type: none"> <li>—旅日記</li> <li>—ハイライトは巡礼の旅</li> <li>—遅昼の腹ごしらえ</li> </ul> </li> </ul>
74号 2008.02.27	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第43回海外交流の会報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>—修道院のスケッチから</li> <li>—食を通じてのルーマニア</li> <li>—トイレウォッチング</li> </ul> </li> <li>○アイデンティティー <ul style="list-style-type: none"> <li>—長岡市小国町法末地区復興支援の歩み</li> <li>—ルーマニア正教に見たルーマニア</li> <li>—ドナウ流域考</li> </ul> </li> <li>○本づくりの現場から</li> <li>○会員の本「環境建築ガイドブック」</li> </ul>
75号 2008.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 第16回通常総会と記念行事のお知らせ</li> <li>■特集 アイデンティティー アジアの建築・まち・住まい <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハフェマウル(河回村)をたずねて</li> <li>・香港はアツい</li> <li>・中国の魅力的な空間</li> </ul> </li> <li>○新シリーズ募集します「魅力的なりノベーションここにあり」</li> <li>○6月総会の開場は建築の宝の山—東京大学本郷地区散策のおすすめ</li> <li>○会員おすすめ本「場所に聞く 世界の中の記憶」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
76号 2008.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○名誉会長 中原暢子惜別の辞</li> <li>○UIFA JAPON 第16回通常総会 報告</li> <li>・第44回海外交流の会のお知らせ</li> <li>○総会記念講演 鈴木博之先生「保存と創造—アンコール遺跡郡から—」</li> <li>○本郷キャンパス見学に参加して</li> <li>○産業としての観光—遠い国と近い国で考える—</li> <li>○魅力的なりノベーション/第1回</li> <li>○新へんなカフェオープン</li> <li>○UIFA JAPON ASFA 組始動</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
77号 2008.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第44回海外交流の会報告「象徴の構築とサステナビリティ」</li> <li>○東京オリンピックから北京まで; 44年間のさま変わりと今後 <ul style="list-style-type: none"> <li>・変化していく住宅団地</li> <li>・東京の変節を映す水辺</li> <li>・高層建築の行方</li> </ul> </li> <li>■特集: UIFA 世界大会と中原暢子先生</li> <li>○会員の本「鎌倉『まちのいろは』」</li> <li>○魅力的なりノベーション No.2「旧安田楠雄邸」</li> <li>○見守りチーム「オープンガーデンモニターツアー」に参加して</li> <li>○ASFA 組の活動「ふにゃとさかにゃの Welcome Toilet」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
78号 2009.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第45回海外交流の会「世界遺産ベトナムホイアンのまち並み保存と生活の変化」報告</li> <li>○IAWA アドバイザー会議報告 設立25周年を迎える IAWA</li> <li>○小林純子さんエイボン女性大賞受賞</li> <li>○魅力的なりノベーション No.3 新宿西口思い出横丁のトイレ</li> <li>○ASFA 組活動報告 トイレ界隈の壁面 ART 化完成</li> <li>○災害復興見守りチーム活動報告 第4回初釜 in 法末 at やまびこ</li> <li>○世田谷区民会館・区庁舎に向けたシンポジウム報告</li> <li>○会員の本「提言! 仮設市街地—大地震に備えて—」</li> <li>○役員会報告</li> </ul>
79号 2009.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第46回海外交流の会「インド圏のイスラーム建築」報告</li> <li>○第17回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ</li> <li>■特集 環境を生かす <ul style="list-style-type: none"> <li>・大地の声に耳を傾ける</li> <li>・成瀬記念講堂での総会開催によせて</li> <li>・風水と「風の道」—現代に風水を活かすには</li> </ul> </li> <li>○魅力的なりノベーション No.4 —デンバーのグレーターパークヒル地区</li> <li>○韓国女性建築家との交流</li> <li>○この指とまれ!「旧朝倉家住宅とヒルサイドテラス見学会」</li> <li>○会員の本「韓国現代住居学—マダンとオンドルの住様式」</li> </ul>
80号 2009.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2009年第17回総会・記念講演会報告</li> <li>○2010 UIFA ソウル大会概要(暫定)</li> <li>○第47回海外交流の会のお知らせ「漢城、京城、ソウル、三時代の建築」</li> <li>○総会記念講演: 榎文彦氏「建築における優しさとは何か」</li> <li>○アジアの台所から</li> <li>○ソウル清溪川再生譚</li> <li>○魅力的なりノベーション No.5 —赤レンガ図書館</li> <li>○旧朝倉家住宅と代官山ヒルサイドテラスを見学して</li> <li>○モダニズムと「環境を読む」</li> <li>○紹介: IAWA(国際女性建築家アーカイブ)のセンターニュース</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
81号 2009.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第47回海外交流の会報告「韓国の魅力に触れる」</li> <li>■特集：「乗り超える力」—魅力的なりノベーション—</li> <li>・雨煙別小学校—開拓精神が育む—</li> <li>・アルテピアッツァ美唄—アートのカ—</li> <li>・日本大通—賑わいのある都市景観の創造—</li> <li>・レンガを愛して—</li> <li>・鬼頭日出雄氏インタビュー—</li> <li>・煉瓦のある2つの景観</li> <li>○ASWA組の活動</li> <li>○災害復興見守りチーム 活動報告</li> <li>○世田谷区本庁舎等整備審議会報告</li> <li>○会員の本</li> </ul>
82号 2010.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第48回海外交流の会報告</li> <li>「韓国文化への扉! 안녕하세요(アンニョンハセヨ)」</li> <li>■特集：森林と建築</li> <li>新木場木材会館探訪記</li> <li>天竜の森見学記</li> <li>木と暮らし：半乾燥地域の農村で</li> <li>○魅力的なりノベーション</li> <li>○ASWA組 活動報告</li> <li>○会員の本『北のランドスケープ』</li> <li>○災害復興見守りチーム</li> </ul>
83+84号 2010.07.15	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2010年第18回総会報告</li> <li>○2010年総会記念講演「デザインと機能」小記</li> <li>■特集：人と人をつなぐ仕組み：レースワークを広げるために</li> <li>・災害復興見守りチーム、法末集落との協働</li> <li>・ASWA組、公立学校の「トイレをアート空間に」</li> <li>・同潤会 大塚女子アパートメントハウス</li> <li>・三和町を語り継ぐ</li> <li>・街イキイキ：えだきん</li> <li>○ケニア報告2 友好国日本</li> <li>○第49回海外交流の会報告</li> <li>○ソウル大会参加申し込みについて</li> <li>○魅力的なりノベーション</li> <li>○巡回展—IAWAの設立25周年を祝って</li> <li>○会員の本『心に響く空間—深呼吸するトイレ』</li> <li>○UIFA JAPONの新パンフレットとホームページ</li> </ul>
85号 2010.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 新会長を引き継いで</li> <li>○2010 UIFA ソウル大会 全体報告</li> <li>第1日報告 第2日報告 第3日報告</li> <li>○写真でつづるポストコングレスツアー</li> <li>○第50回海外交流の会報告「環境をデザインする」</li> <li>○ハンダ講座に参加して</li> <li>○2回の「韓国住文化」勉強会に参加して</li> <li>○魅力的なりノベーション No.11</li> <li>○IAWA25周年記念 日本巡回展と講演会</li> <li>○UIFA JAPON 英文パンフレットとホームページ</li> </ul>
86号 2011.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○未来へ—女性建築家のパイオニアたちの肖像展(仮)の開催にむけて</li> <li>■特集 小川信子から学ぶ継承と発展</li> <li>・「日本建築学会教育賞」受賞記念講演会から</li> <li>・小川信子先生に迫ってみました!—「継承と発展—考える・話す・創ることからの出発」</li> <li>○飯島静江さんを追悼する</li> <li>○賛助会員第1号からのメッセージ</li> <li>○会員の本『「建築外」の思想—今和次郎論』</li> <li>○魅力的なりノベーション No.12 会員方式で寺の庫裏を宿泊施設に改造—樹林寺</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
87号 2011.05.25 3.11大震災	<ul style="list-style-type: none"> <li>○災害と私たち UIFA JAPON</li> <li>○2011年度総会+記念講演会案内</li> <li>○「女性建築家のパイオニアたちの肖像展」案内</li> <li>■特集 UIFA JAPONの現在</li> <li>・ニューズレターの変遷から見る UIFA JAPON</li> <li>・KIFAの歩みと現在</li> <li>・KIFA 18人の日本最新建築探訪</li> <li>○峯成子さんを偲ぶ</li> <li>○『大塚女子アパート』今和次郎賞受賞</li> <li>○災害見守りチーム活動報告</li> </ul>
88号 2011.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 定例総会とパイオニア展報告</li> <li>UIFA JAPON General Meeting and Exhibition</li> <li>■特集1：女性建築家のパイオニア展</li> <li>Special Feature 1: The Exhibition</li> <li>・特集2：東日本大震災</li> <li>Special Feature 2: The Tohoku Earthquake</li> <li>○災害見守りチーム活動報告</li> <li>IAWA Professors Visited Hosse</li> <li>○ASWA組活動報告 ASWA Team Activities</li> <li>○水曜イブニングトークに参加して</li> <li>Evening Talk on June 1st</li> <li>○会員の本 Member's Publication</li> </ul>
89号 2011.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIA2011 東京大会における UIFA JAPONの活動報告</li> <li>○第52回海外交流の会「未来の学校建築を考える」</li> <li>■特集：東日本大震災 会員の活動 その2</li> <li>・UIFA JAPON プロジェクト：岩泉町「どこでもカフェ」</li> <li>・連載：被災地通信—被災地人として今は—</li> <li>「被災地にふとんを送ろう会」を立ち上げて</li> <li>連続研修会「これからの復旧・復興に何ができるか」報告</li> <li>「三陸鉄道フロントライン研修」に参加して</li> <li>Beyond Disasters, through Solidarity towards Sustainability</li> <li>○訃報 武田満す氏のご逝去</li> <li>○災害復興見守りチームの報告</li> <li>○ASWA組活動報告</li> </ul>
90号 2012.02.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○パネルディスカッション「東日本大震災後」・支援のポジション</li> <li>■特集：東日本大震災 会員の活動 その3</li> <li>・第2回「岩泉町どこでもカフェ」に参加して</li> <li>・仮設からはじめるコミュニティづくり</li> <li>・連続研修会「これからの復旧・復興に何ができるか」報告</li> <li>・連載：被災地通信(2)—奇遇な出会い—</li> <li>○全羅北道建築文化祭訪問レポート</li> <li>○災害復興見守りチームの報告</li> <li>○武田満す先生の思い出</li> <li>○ASWA組の活動</li> </ul>



号、発行年月日	掲載項目
91号 2012.05.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○震災1年で見えてきたものUIFAの1年間の活動とその方向性について</li> <li>■特集：岩泉・小本のいま……春遠からじ</li> <li>・「どこでもカフェ」の活動を振り返って</li> <li>・連続研修会「復興計画とは何か」報告</li> <li>・People First！人々が培ってきた文化社会に根差した復興を</li> <li>・連載：被災地通信(3)——一年目の被災地を巡り——</li> <li>○横浜でパイオニア展開かれる！</li> <li>○第55回海外交流の会「持続可能な社会におけるデザイナーの役割」</li> <li>○ボランティア活動とASWA組</li> </ul>
92号 2012.09.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2012年度総会基調講演「これからの建築を考える」</li> <li>○UIFA JAPONの2012年度の活動を展望して</li> <li>○「郡山第一回どこでもカフェ」開催</li> <li>○講演会「ぶらり法末花の旅」報告</li> <li>■特集：くーるじゃぱん・明日へつなぐ記憶—伝技塾について—</li> <li>・ハンティントン庭園ジャパニーズハウス</li> <li>・日本庭園文化の読解—自然の骨格と仕組みに学ぶ—</li> <li>○魅力的なインベーションNO.13「ターニングポイントは小さな画廊で」</li> <li>○連載：被災地通信(4)——進まない復興事業——「パイオニア展」と「建築と歩む展」</li> <li>○会員紹介の本『つなみのえほん』</li> <li>○さあ行こう！「モンゴルで集結」</li> <li>・ウォーミングアップ企画「思い出のシアトルコンGRES」</li> </ul>
93号 2013.01.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「第56回海外交流の会」参加記</li> <li>○エクセルギーハウスを体験して</li> <li>○大国のはざまでタフに生きる国・モンゴル</li> <li>○林昌二・雅子邸見学に寄せて</li> <li>○岩泉の「だれでもフォトグラフィア」の写真展をVTで！</li> <li>○いつも感心するUIFAの復興支援</li> </ul>
94号 2013.04.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第57回海外交流の会の報告『モンゴルの建築・都市最新情報』</li> <li>○第58回海外交流の会の報告『モンゴルのコスモスゲルと大地とモンゴル人』</li> <li>■特集：「住みつなぎ—住まいを地域に聞く」</li> <li>・在林館（ありりんかん）の記</li> <li>・自宅の庭を「まちの縁側」に</li> <li>・会員の本：『住みつなぎのススメ』</li> <li>・高齢社会をともに住む・地域に住む</li> <li>○被災地通信(5)</li> <li>○岩泉町の復興記録集が出来ました</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
95号 2013.08.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2013年度通常総会・設立20周年記念講演会</li> <li>○ド・ラ・トゥールUIFA会長と行く東北の被災地訪問</li> <li>○IAWA"Daredemo Photographer Exhibition"訪問記</li> <li>■特集：「住宅を継承するための方法」</li> <li>・世界遺産トラストの活動</li> <li>・地元で愛されてこそ次世代に遺せる 藤井厚二「聴竹居」</li> <li>・旧安田楠雄邸へようこそ—多児貞子さんに聞く—</li> <li>○この指とまれ！「モンゴルの遊牧民～食と住まい～」</li> <li>○連載：被災地通信(6) 全国に届け、被災者の真の声</li> <li>○会員の本『第3の住まい』</li> </ul>
96号 2013.12.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○美しい草原とパワフルな人々—第17回UIFA世界大会@モンゴル</li> <li>・第17回UIFAモンゴル大会—交流雑感</li> <li>・地球温暖化とゲル-セッションを通して</li> <li>・UIFAモンゴル大会 パネル展示</li> <li>・UIFAモンゴル大会 ポストコンGRESツアー</li> <li>Poster Session:The Exhibition Panel of UIFA japon.</li> <li>○被災地通信(7) 被災地復興の進捗状況と現実</li> <li>○ニュースレターについてのアンケートの結果の報告</li> </ul>
97号 2014.04.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第60回海外交流の会報告「銀座のルール—銀座はなぜ超高層ビルがないのか」</li> <li>■特集：「被災地の現場で働く女性達」</li> <li>・復興まちづくりの最前線</li> <li>・女川町復興支援業務</li> <li>○被災地通信(8)</li> <li>○岩泉町の復興記録集 その2ができました</li> <li>○会員の本：『続 生活環境の探求 子ども・生活歴とすまい』</li> </ul>
98号 2014.09.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 2014年度通常総会</li> <li>○総会記念講演—陣内秀信氏講演報告「歴史を踏まえた水都の再生と創造」</li> <li>○建築家が自らの“すまい”に求めたものを訪ねる 中原邸と土浦邸</li> <li>○会員の活動—地域で、職場で—</li> <li>○被災地通信(9)</li> <li>○会員の本『初めてのマンションベランダ緑化』『語り伝える戦時下の暮らし』</li> </ul>
99号 2014.12.26	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第61回海外交流の会 参加記「人間と大都市—ヴァージニア工科大学の教育を原点として—」</li> <li>■特集：「会員の活動と作品の紹介2—地域で職場で—」</li> <li>・小谷部育子・材木座で『座やまのべ』を開く</li> <li>・温故知新・時流心穏</li> <li>・地元では・た・ら・く</li> <li>・寺本晰子さんを偲ぶ</li> <li>○被災地通信(10)</li> <li>○「この指とまれ！」報告</li> <li>○全国まちづくり会議2014 in 北上</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
100+101号 記念号 2015.06.30	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 18 回 UIFA 世界大会は、7 月最終週に米国で開催されます！</li> <li>○UIFA JAPON 活動概要</li> <li>○UIFA JAPON 2015 年度通常総会と記念講演会</li> <li>○第 62 回海外交流の会「ニューヨークの発展史と現在の動向」</li> <li>○100 号記念 UIFA JAPON 会員活動紹介</li> <li>○会員の本『東日本大震災岩泉町復興の記録 その 3』</li> <li>○被災地通信(11) 防災会議フォーラム&amp;被災地ツアー</li> </ul>
102号 2015.11.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 18 回 UIFA 世界大会@ USA-IAWA 設立 30 周年との共催</li> <li>・ワシントン DC の 3 日間と連邦議事堂の印象記</li> <li>・ワシントンからのバス移動とバージニア工科大学</li> <li>・松川・中島のプレゼンテーションと各国の印象的な発表</li> <li>・各国のパネル展示</li> <li>・「私のお気に入りの一枚の写真」</li> <li>・写真で見るポストコングレスツアー</li> <li>・第 63 回海外交流の会—ライトの落水荘とユーソニアン・ハウス—</li> <li>・IAWA30 周年記念事業として開催されたイベント</li> <li>○被災地通信(12) 被災地ツアーから見たもの</li> <li>○この指とまれ!+ 会員の本『デンマークの住まいとまちのデザイン』</li> </ul>
103号 2016.03.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 64 回海外交流の会—UIFA 第 18 回アメリカ世界大会出席報告会</li> <li>○この指とまれ!</li> <li>■特集：会員の活動紹介～大規模災害に向き合う</li> <li>・記憶の中の住まいプロジェクト～東松島を訪ねて</li> <li>・法末（ほっすえ）支援の継続と発展—モバイルキッチンなど</li> <li>・豊島区の事前復興まちづくり訓練に建築士として参加して</li> <li>・知ることから始まる地域防災</li> <li>○被災地通信(13) 震災 5 年目を迎える被災地として</li> <li>○映画「波伝谷に生きる人びと」の問題提起</li> </ul>
104号 2016.09.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UIFA JAPON 会長就任挨拶</li> <li>○2016 年度通常総会報告</li> <li>○記念講演「新しい建築のみかた」 斎藤公男先生の講演を聴き</li> <li>○『各国の女性建築技術者のキャリア形成とライフスタイル』</li> <li>○調査結果の報告</li> <li>○被災地から</li> <li>・岩泉町被災地支援のこれまでとこれから</li> <li>・熊本地震レポート（熊本地震から 3 ヶ月）</li> <li>・熊本・大分地震の仮設住宅建設</li> <li>・被災地通信(14) 東日本大震災 5 年にして思う</li> </ul>

号、発行年月日	掲載項目
105号 2016.12.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 65 回海外交流の会</li> <li>・町と家の「あいだ」をデザインする—沖縄の外部空間から学ぶ— 伊礼智氏講演報告</li> <li>■特集：座談会</li> <li>中越、東日本、熊本などの被災地報告から見えてきたもの</li> <li>～私たちが暮らしたい住まい・まち～</li> <li>○被災地通信(15) 台風 10 号、あの岩泉を直撃!</li> <li>○この指とまれ! 晩秋を愛知で楽しみませんか</li> <li>○会員の本『教養としての都市計画・まちづくり』北本美江子</li> </ul>
106号 2017.04.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○第 66 回海外交流の会</li> <li>・芹澤隆子氏が語るオーストラリアの介護施設に見る『ダイバーショナルセラピー』</li> <li>○第 25 回 UIFA JAPON 総会・記念講演のお知らせ</li> <li>■特集：UIFA JAPON 復興ハウスと被災地支援の可能性</li> <li>○UR 都市機構技術管理分室見学会に参加して</li> <li>○被災地通信(16) 三被災地巡りをして思う</li> </ul>
107号 2017.09.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○2017 年度通常総会報告</li> <li>○UIFA JAPON25 周年記念講演会 講師 妹島和世氏を迎え</li> <li>・この指とまれ! 企画 すみだ北斎美術館 見学に参加して</li> <li>■特集「UIFA JAPON のグループ活動」</li> <li>・災害復興見守りチーム</li> <li>「だれでもフォトグラフィ」グループ/「どこでもカフェ」グループ</li> <li>住まいづくり勉強・相談会グループ/法末支援グループ</li> <li>・研究チーム</li> <li>25 周年記念誌作成グループ</li> <li>『UIFA JAPON 復興ハウス—高齢期のコンパクトな住宅提案』の設計活動グループ</li> <li>○豊かな時が流れる—日本のコレクティブハウジング』「青本」へのプロセス</li> <li>○熊本地震から 1 年</li> <li>○被災地通信(17)</li> </ul>
108号 2017.12.25	<ul style="list-style-type: none"> <li>○岩泉町だけでもフォトグラフィチームが</li> <li>○第 12 回日本都市計画家協会賞・優秀まちづくり賞を受賞</li> <li>○NPO が遭遇した、豊洲地区運河ルネサンス活動の紆余曲折</li> <li>○この指とまれ! 豊洲 に参加しました</li> <li>○防災カフェ報告</li> <li>○被災地通信(18) 災害王国日本、どうしよう</li> <li>○法末モバイルキッチン in 神楽坂</li> </ul>

作成 事務局 小池和子

## 7 UIFA 世界大会開催記録 International Union of Women Architects – UIFA REVIEW OF CONGRESSES

1963 – 1st Congress U.I.F.A. in Paris, France, and the 1st international exhibition of achievements of women in architecture	Topics: «Women in Architecture in the World» «The requirements of the Modern City formulated by Women» (first women in architecture of England, graduated in 1914, attended the congress).	Under the high patronage and in the presence of Ms. MAZIOL, Minister of Construction and Housing, André MALRAUX, Minister of Cultural Affairs, M. DUVAUT, President of the Association of Architects in France
1969 – 2nd Congress U.I.F.A. in Monaco, Monte Carlo, and international exhibition	«The contribution of Women Architects in the Design of the New Cities»	Under the high patronage and in the presence of the Princesse Sérénissime Grâce de Monaco
1972-3rd Congress U.I.F.A. in Bucharest, Romania, and international exhibition	«Proposals and Cooperation of Women Architects for making the New Urban Areas more friendly»	Association of Architects of Romania (with participation of women architects of 28 countries)
1976 – 4th Congress U.I.F.A. in Ramsar, Iran, and international exhibition	a/ Integration of existing communities in the development of urban ares and their achievements b/ Cultural overturning of the communities facing quick transformations c/ Development of a peaceful architecture d/ Rehabilitation of historical sites in order to preserve a cultural identity	Under the high patronage and in the presence of Chabanou d' Iran Farah DIBA (with the participation of Women Architects from 18 countries)
1978- Exposition Internationale U.I.F.A. in Paris, France, at Centre Pompidou	Without any previous established topics	Sous le Haut Patronage et présence du Président de la République, M POMPIDOU et M VIVIEN, Ministre de la Construction (with the participation of Women Architects from 53 countries)
1979 – 5th Congress U.I.F.A. in Seattle, USA, plus exhibition (took over later by the American Institute of Architects and AWA – Association of Women in Architecture of Los Angeles (6 seminaries)	«New Design Concept inspired by changes in progress»	Under the high patronage of the President J. CARTER and in the presence of the Ministers of Construction, Developement, AIA etc. (with the participation of Women Architects from 53 countries)
1979 – First workshop of U.I.F.A. in Berlin, Germany	«Women in Architecture and Urban Planning» Information related to l' U.I.F.A. and conference sessions of different women working	
1981 – Second Workshop of U.I.F.A. in Berlin, Germany	«Participation of resident people in the design of their environment»	80-100 participants
1983 – 6th Congress U.I.F.A. in Paris, France, and international exhibition (at Grand Palais des Congres – Porte Maillot)	«Constructions and Environment for Children» (Remember: l' U.I.F.A. after 20 years !)	Under the high patronage and in the presence of the Minister of Human Rights, Minister of Urban Planning and Housing and the Mayoralty of Paris
1984 – 7th Congress U.I.F.A. in Berlin, Germany, and exhibition: History of Women in Architecture (a first review)	«Housing and Environment»	Under the high patronage of the President of Germany
1988- 8th Congress U.I.F.A. in Washington, U.S.A.	«Housing, an international issue» (Remember: l' U.I.F.A. after 25 years!) Remember: 100ans from the graduation of the first women in architecture in USA	With the support of AIA – American Institute of Architects
1991 – 9th Congress U.I.F.A. in Copenhagen, Denmark, and exhibition	«The identity in Architecture » (To preserve and to keep the characteristics in the Archiecture of each country)	Minister of Constructions & Mayor of Copenhagen (with the participation of Women Architects from 50 countries)
1993 – 10th Congress U.I.F.A. in Cape Town, South Africa, and exhibition	«Organisation of Construction Environment in the Developing World» (Remember : l' U.I.F.A. after 30 years!)	Under the high patronage of Mr de KLERK & Mrs de KLERK, the Chamber of Architects and other important people
1996 – 11th Congress U.I.F.A. in Budapest, Hungary, and international exhibition	«Refurbishment and Rehabilitation of National Patrimony»	Under the high patronage of the Minister of Labour, Mayor of Budapest, Ministry of Environement, Ministry of Education and Culture



1998 – 12th Congress U.I.F.A. in Tokyo, Japon, and international exhibition	«The Human Being, the Architecture and the City towards a symbiotic reunion with the Environment»	Under the high patronage of the Mayor of Tokyo and the Minister of Housing & Environment
2001 – 13th Congress U.I.F.A. in Vienne, Autriche, and international exhibition, puis extension à Salzburg	«Before and after the active life» (Construction & Environment for children, students and aged people»	Under the high patronage of the Mayor of Salzburg
2004 – 14th Congress U.I.F.A. in Toulouse, France, and exhibition of achievements of women in architecture and art works executed by women (in September)	«Participation of Architect Women after a cities and environment disasters (cataclysms)» «Which are the conditions the architect women have to face in order to show their capabilities and to give their subscription of the world evolution, dominated by men!!!» «The architect women from an anonymous person to her consecration »	Under the high patronage of: Mr Renauld Donnedieu de Vabres, Minister of Culture et Communications, Mr Gilles de Robien, Minister of Equipment, Transport and Housing, International Union of Architects , U.I.A., Mr Jean François Susini, President of the High Council of Architects Chamber and President of the International Council of French Architects
2007 – 15th Congress U.I.F.A. in Bucharest, Romania, and international exhibition in, Bucharest, and exhibition of achievements of women in architecture and art works executed by women, realised by l' U.I.F.A. members.	«IDENTITY» (Preservation, Conservation, Valorisation and Rehabilitation of historical sites in order to preserve a cultural identity). «The identity in Architecture » (To preserve and to keep the characteristics in the Architecture of each Culture).	Under the high patronage and in the presence of Mr Traian Basescu –President of Romania
2010 – 16th Congress U.I.F.A. in Seoul, Korea Host: KIFA (Korean Institute of Female Architects (October4 -12, 2010) with exhibition of women in architectural and art works executed by women.	«Green Environment» 1.Tradition of Being Green 2.Living an Eco-Friendly Life 3.Woman-Friendly City and Urban Regeneration	Under the high patronage of MCST Ministry of Culture, Sports and Tourism. (with the participation of Women Architects from 75 countries).
2013 – 17th Congress U.I.F.A. in Ulaanbaatar city ( Mongolia) U M A -The Union of Mongolian Architects (1th to 7th September 2013). with exhibition of women in architectural and art works executed by Women Architects.	"Women Architects in the fight against global warming word "	Under the high support of "Ministry of Road, Transportation and Construction, Urban Planning" (with the participation of Women Architects from 90 countries).
2015 – 18th Congress U.I.F.A. in Washington DC & Blacksburg, Virginia, USA The IAWA seeks to commemorate its 30th anniversary; to connect and build a network of women in architecture and design. (26th to 31st July 2015). with exhibition of women in architectural and art works executed by Women Architects.	The Woman Architect and Her Field of Influence Contributing to the Constellation Architecture - Construction, Research, Education and Practice	Under the high support of FAIA, AIA, and Virginia Tech. Around 60 participants which comprised representatives from 15 countries on five continents.

注) 本表は、第 17 回ウランバートル世界大会の案内文とともに配布された UIFA からの資料をもとに、第 18 回ワシントン世界大会の項目を同大会のホームページ等への掲載記事から補完、一部年次誤謬修正を加えたものである。



---

## UIFA JAPON25 周年記念誌作成グループ

編集長 中島 明子  
石川彌栄子 稲垣 弘子 小池 和子 白井 正子 松川 淳子  
宮本 伸子 森田 美紀

翻訳 高柳 慶子

執筆者等 (五十音順)

寄稿 Solange d' Herbez de la Tour : UIFA 会長  
Donna Dunay : IAWA 委員長  
青木裕美子 阿部えみ子 大熊 喜昌 小山田サナエ 持田美沙子  
頼 あゆみ

会員 飯田 とわ 石川 和代 石川彌栄子 井関まい子 井出 幸子  
伊藤 京子 稲垣 弘子 井元美佐代 岩井 紘子 上田 壽子  
上野真城子 牛山 美緒 薄井 温子 大崎友記子 大高真紀子  
小川 信子 小野 全子 柏原 雪子 加部千賀子 神村真由美  
河原美津子 川口亜稀子 岸本 裕子 北本美江子 清本多恵子  
草野智恵子 栗山 揚子 小池 和子 小島 久寛 小林 純子  
小林 淑子 近藤万記子 定行まり子 佐藤由紀子 白井 正子  
杉原 尚子 鈴木 敦子 須永 俣子 田中美恵子 谷村 留都  
土田 旭 中島 明子 中村 晃子 橋本ゆかり 林屋 雅江  
板東みさ子 日高たか子 平野 啓子 平野 正秀 福井 綾子  
藤田 淑子 船津 貴子 細井 眞子 正宗 量子 松川 淳子  
三戸美代子 御船 杏里 宮崎 玲子 宮本 伸子 森田 美紀  
矢賀部雅子 安武 敦子 柳澤佐和子 山田規矩子 山本佳世子  
吉田 あこ 吉田 洋子 吉野 泰子 吉野 涼二 渡邊喜代美  
装丁 朝倉恵美子

---

## 平等で平和な美しい社会をつくるために

— 国際女性建築家会議日本支部 UIFA JAPON 25 周年記念誌 —

発行 2018 年 9 月

編集・発行者 UIFA JAPON (国際女性建築家会議日本支部)  
〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-5-4  
第2 押田ビル (株)生活構造研究所気付  
TEL:+81-(0) 3-5275-7861  
FAX:+81-(0) 3-5275-7866  
HP: <http://uifa-japon.com>

---



